

山梨県北巨摩郡大泉村

# 天 神 遺 跡

— 県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 —



1994. 3

山梨県教育委員会

山梨県北巨摩郡大泉村

# 天 神 遺 跡

1994. 3

口 紋



1 硬玉製大珠（第421号土壤出土）



2 彩文土器

## 序

本書は、県営圃場整備事業に先立ち山梨県教育委員会が実施した、山梨県北巨摩郡大泉村に所在する天神遺跡の発掘調査報告書であります。

10ヘクタールにおよぶ事業地区内の試掘調査により3ヶ所の地点から遺跡が確認され、それぞれ天神遺跡A地区、B地区、C地区と名づけられ調査がおこなわれました。

A地区は縄文中期曾利式期の集落跡、B地区は平安時代の集落跡、C地区は縄文前期の集落跡をそれぞれ中心としております。特に、C地区からは諸磯式期の住居が49軒も調査されました。これらの住居群は環状に並んでおりその内側には墓とみられる土壙が密集して発見されました。土壙は全部で488基を数えております。集落の全体が調査されたわけではありませんが、地形の様子や広い範囲の試掘調査の成果も加えると直径150メートル以上を測る環状集落であったと推測されます。住居や土壙内からは多くの土器・石器に加え、玦状耳飾りや硬玉製大珠それに漆で描かれた彩文土器の破片なども出土しております。特に硬玉製大珠は諸磯c式土器とともに土壙から出土したもので時期の分かる大珠としては国内でも最も古い部類に入るものと言えるものであります。

これらの成果が縄文文化研究の一助となれば幸いです。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜わった関係機関各位、ならびに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業に先立ち山梨県教育委員会文化課および山梨県埋蔵文化財センターが実施した北巨摩郡大泉村西井出字天神に所在する天神遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は1981年（昭和56年）10月19日から11月20日まで（文化課実施）と、1982年（昭和57年）5月18日から10月28日まで（埋蔵文化財センター実施）の2年度にわたり行われた。1981年度の調査地区をA・B地区、1982年度をC地区とした。
3. 本調査は、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受け実施したものである。
4. 本書の執筆・編集は、新津 錠、米田明訓が行った。執筆は第1章、第3章1節、2節の遺物に関する項目、第4章を新津、第2章および第3章2節遺構の項を米田が分担した。
5. 石器・石製品の石質鑑定については帝京大学山梨文化財研究所河西 学氏にお願いした。
6. 遺物実測・図面作成・トレース・図面整理・表作成については、五味信吾、名取洋子、内藤由紀子、高野真寿美、伊藤順子、野中はるみ、望月和佳子、山路宏美の諸氏の協力を得た。
7. C地区的現場写真は日本写真家协会会员塚原明生氏によるものである。
8. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
9. 発掘調査および報告書作成にあたっては、関係諸機関・地元・多くの研究者の方々からご指導・御協力を賜った。厚く感謝申し上げる。

## 凡　　例

1. 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。  
〔遺構〕全体図1/200、1/300、1/600、住居址1/60、土壤1/60、集石遺構1/60、埋甕1/40  
〔遺物〕土器実測図（縄文土器1/5、土師器1/4）、土器拓本1/4、土製品1/2、石器1/1.5、  
1/2、1/3、1/5
2. 遺構平面図の小穴中の数字は深さを表す。
3. 遺構内より出土した土器のうち実測図で表したものについては、遺構ごとの通し番号を付した。例えば、0101は1号住居の1号土器、S02103は21号土壤の3号土器を意味する。

# 目 次

## 序

### 例 言

## 第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 調査組織	3

## 第2章 環境と周辺の遺跡

## 第3章 発見された遺構・遺物

第1節 A地区、B地区的調査	6
1 住居址	6
2 埋甕	23
3 土壙	25
4 まとめ	28
第2節 C地区的調査	36
1 住居址	36
〔縄文時代前期後半の住居址〕	36
〔縄文時代中期初頭の住居址〕	92
〔平安時代の住居址〕	101
2 土壙	104
3 集石遺構	155
4 溝状遺構	164
5 土製品	174
6 石器	176
7 石製品	199

## 第4章 遺物と遺構の検討

1 天神遺跡の縄甕式土器について	227
2 集落の検討	234
3 イノシシ装飾の変化	242
4 打製石斧の形態と使用の一例	244

# 第1章 調査の経過と概要

## 第1節 調査に至る経過

天神遺跡は山梨県北巨摩郡大泉村西井出字天神に位置している。昭和56年9月、山梨県農務部耕地課から県教育委員会文化課に天神地区一帯の県営圃場整備事業計画についての事前協議がなされた。文化課で現地踏査したところ、一部に土器の散布が認められたもの多くが水田であったことから試掘の必要があったため、隣接地区で調査中であった城下遺跡の発掘終了後の11月から遺跡確認調査を実施した。その結果、工事計画区域内に3カ所の遺跡を認めることができた。この内C地区については縄文前期諸磯式期を中心とした大集落であることが推測され、この調査だけでも1年はかかると見なされたことから、工事による削平部分の少ない、小規模なA地区およびB地区を56年度内に実施することとなった。この調査は昭和56年10月19日から同年11月20日まで行われた。さらにC地区の調査は翌昭和57年5月18日から10月28日まで行われた。なお、調査実施機関については56年までが山梨県文化課、57年からは新設された山梨県埋蔵文化財センターである。

文化財保護法に基づく手続き

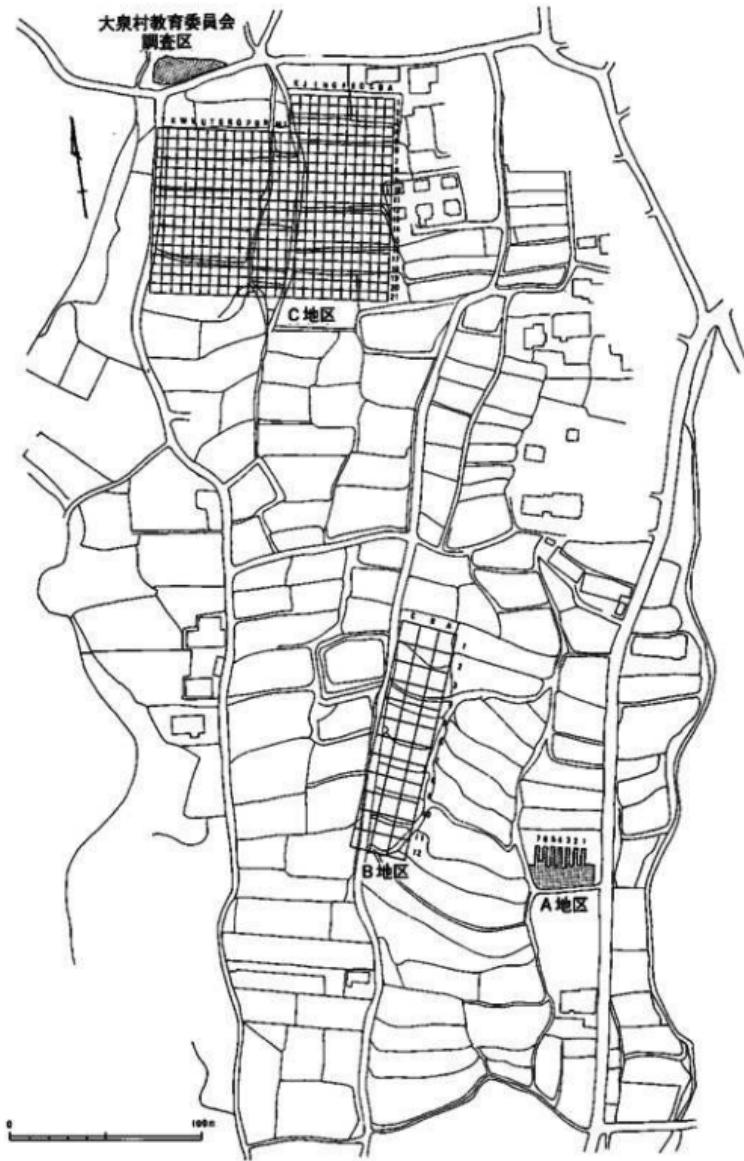
- ・昭和57年5月21日 文化庁長官宛発掘通知提出
- ・昭和57年7月12日 発掘通知の受理通知
- ・昭和57年12月24日 遺物発見届提出

## 第2節 発掘調査の概要（第1図）

【A地区】 3カ所の遺跡の中では最も東南に位置する。重機により表土除去後、対象面積約1,000m<sup>2</sup>内に幅2mのトレシチ7本を設定し調査を進めた。発見された遺構は、縄文中期曾利Ⅲ式からⅣ式の住居5軒、平安時代の住居1軒、土壙3基、埋甕5基。

【B地区】 A地区的北西約80mに位置する。調査対象面積が3,600m<sup>2</sup>と広いことから、重機により排土し、10mメッシュを設定し全面的に調査を行った。縄文中期五領ヶ台式期の住居3軒、平安時代の住居4軒、土壙13基が発見された。

【C地区】 B地区的北約200mに位置する。調査対象面積は約10,000m<sup>2</sup>。調査区のほぼ中央に水路が北から南に走っていることからこの部分はすでに削平されており、調査はできなかった。重機により表土を除去したのち、一辺が5mの方眼を全面に設定し全体に調査を進めた。発見された遺構は住居61軒および土壙488基である。住居の時期別内訳は、縄文前期諸磯b式期29軒、c式期10軒、b式ないし c式期10軒、中期五領ヶ台式期9軒、平安時代3軒である。特に諸磯b式とc式期の集落を中心とするが、これは中央墓塚型の直径150mを越える環状集落と見られる。遺物も多くの土器・石器に加え、土偶3（諸磯b式1、曾利式2）、硬玉製大珠1（諸磯c式）が出土している。



第1図 発掘区位置図 (1/3000)

### 第3節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 昭和56年度 文化課

昭和57年度 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 昭和56年度 新津 健（山梨県教育委員会文化課文化財主事）

八巻與志夫（ 〃 ）

昭和57年度 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

米田明訓（ 〃 ）

調査参加者 塚原明生、佐野勝広、五味信吾、荻間雅之、塚原佳津子、平井仁志、小池みさお、小池みどり、中島ねのえ、浅川光子、浅川美代、浅川米子、浅川洋子、浅川日出子、中島たね子、三井美佐子、浅川きよ美、浅川とくえ、藤森房子、千野光子、浅川久代、三井春子、浅川けさ子、三井禮子、細田茂登枝、浅川もとじ、浅川輝枝、浅川英三、浅川つた子、細田みぎわ、細田綱代、浅川満江、山口淑枝、秋山辰也、由井峯雄、三井圭吾、中村誠、井上義彦、岡田静明、佐竹晃、浅川晃治、浅川直司、浅川一郎、細田和哉、宮沢よしみ、道村美由紀、藤森なおみ、小林貴子、藤森浩、浅川尚美、深沢裕三、浅川喜子、藤原芳郎、石川貴子

協力者・機関 伊藤公明、山梨県農務部耕地課、同候北土地改良事務所、大泉村役場、大泉村教育委員会、大泉村土地改良区、大泉村天神地区、

## 第2章 環境と周辺の遺跡

北巨摩郡大泉村は、その北限で長野県と接し、その境界には標高2,899mの赤岳を主峰とする八ヶ岳が連なっている。この八ヶ岳は南北21kmにわたり赤岳をはじめ標高2,000m級の山々が列をなす複式火山であり、天狗岳を境として、それより南の南八ヶ岳火山群と北の北八ヶ岳火山群とに二分される。また八ヶ岳西南麓及び東麓は緩斜面の火山麓扇状地で、中期～後期更新世初頭にかけての礫層で形成されている。大泉村はこの八ヶ岳南麓緩斜面のはば中央に位置する。またこの緩斜面は大地溝帯が東西に走り、「七里岩」と呼ばれる比高100mに及ぶ急崖を形成している。この断層に沿って西を釜無川、東を塙川の支流である須玉川が流れおり、甲府盆地に突き出た半島状の台地が形成されている。八ヶ岳南麓には湧水が多く、その湧水による大小の河川が南北に流れ地形を開拓した。この湧水は標高1,000～1,500m付近に端を発しており、八ヶ岳南麓の地形はその開拓により形成された幾つもの細長い尾根状の台地、瘦せ尾根によって構成されており、これらの尾根上から先土器時代～中世・近世にまで至る時代の数多くの遺跡が発見されている。天神遺跡もその台地上に立地し、北に八ヶ岳、西に南アルプス、東に秩父山地、南に甲府盆地と富士山を望むことができる展望の良い場所に位置する。所在地は山梨県北巨摩郡大泉村谷戸字天神で標高は800～850mを測る。

八ヶ岳西南麓の遺跡といえば長野県富士見町の井戸戻遺跡周辺の遺跡群に代表されるように縄文時代中期の集落遺跡が古くから脚光を浴びてきた。本県でも過去それらに類似する縄文集落が幾つか発掘されてきたが、長野県原村の阿久遺跡という縄文時代前期の大集落の発見を契機として、中期以外の大集落の存在に注目があつた。天神遺跡の主体を成すのは時期的には丁度阿久遺跡が終焉を迎えた直後のものであることが注目される。また最近では、平安時代及び中世の優れた遺跡が数多く発見されつつある。縄文時代前期の遺跡としては大泉村御所遺跡・寺所遺跡・甲ヶ原遺跡・長坂町酒呑場遺跡などをあげることができ、天神遺跡との時期の共通性からお互いの存在意義に興味が引かれる。縄文中期になると遺跡の規模は更に拡大し、その数も増大する。小瀬沢町上平出遺跡・中原遺跡・長坂町頭無遺跡・柳坪遺跡・大泉村山崎遺跡・方城第1遺跡・甲ヶ原遺跡・姥神遺跡等があげられる。後・晩期の遺跡についても前期のものと同様に最近注目すべき遺跡が少なからず確認されて、数は中期よりは減少してはいるものの規模では決して劣らないものも発掘された。大泉村金生遺跡（国指定史跡）や高根町青木遺跡などの配石遺構の質の高さは驚くべきものがある。その他高根町石堂B遺跡や大泉村姥神遺跡などでも貴重な遺構が検出されて八ヶ岳南麓の縄文後・晩期の価値観を一変させた。

この八ヶ岳南麓で縄文時代以外の遺跡で際だっているのが平安～中世のものである。平安時代に八ヶ岳南麓は『巨摩郡速見郷』と推定され、北巨摩地方に存在していた三つの官牧（柏前・穂坂・真衣野）のうち、『柏前牧』が八ヶ岳南麓に置かれていた可能性が強く、それに関連した集落遺跡が多いものと考えられる。とくに高根町湯沢遺跡からは柵列を伴う遺構群が検出されて注目されている。その他長坂町柳坪遺跡・高根町東久保遺跡・青木北遺跡・大泉村城下遺跡・寺所遺跡・東原遺跡等多くの遺跡が発掘されている。これらの平安集落が母胎となって中

世の集落へと発展してゆくのであろう。そしてそれの中世集落の発展が長坂町深草館跡や大泉村谷戸城跡（国指定史跡）を代表とするこの地域の多くの城館跡をも生み出す原動力となつてゆくと思われる。

（米田 明訓）



- 1 天神遺跡 2 野添遺跡 3 石堂A遺跡 4 石堂B遺跡 5 東純神遺跡 6 純神遺跡 7 大和田第2遺跡 8 方城第1遺跡  
9 大和田遺跡 10 御所遺跡 11 芹屋敷遺跡 12 豆生田第3遺跡 13 金生遺跡 14 大八田原田遺跡 15 別當遺跡  
16 西原遺跡 17 柳坪遺跡 18 須無遺跡 19 長坂上条遺跡 20 東原遺跡 21 大和田第3遺跡 22 谷戸城跡 23 梶下遺跡  
24 寺所遺跡 25 原田遺跡 26 木ノ下・大坪遺跡 27 別当十三塚遺跡 28 甲ヶ原遺跡 29 山崎第4遺跡

第2図 周辺の遺跡

## 第3章 発見された遺構・遺物

### 第1節 A地区（第3図）、B地区（第4図）の調査

A地区およびB地区は継続して調査したことから、遺構は以下のとおり連続番号を付した。

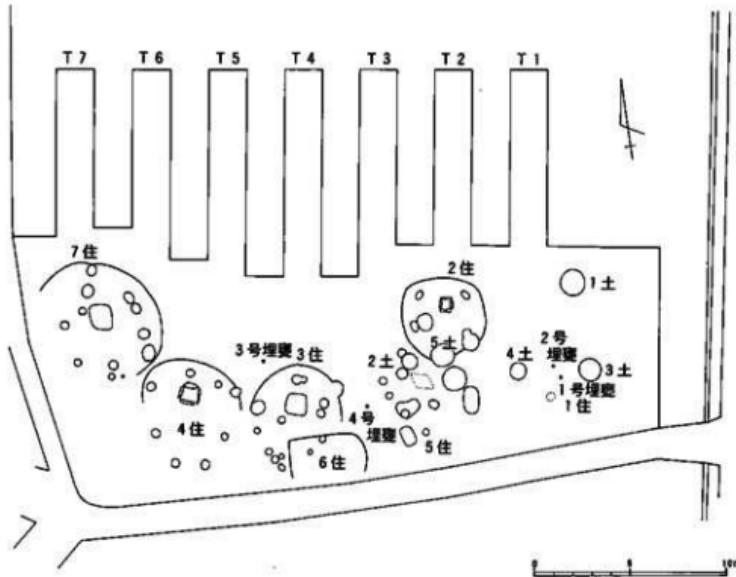
住居 （A地区）1号～7号、（B地区）8号～14号

埋甕 （A地区）1号～4号

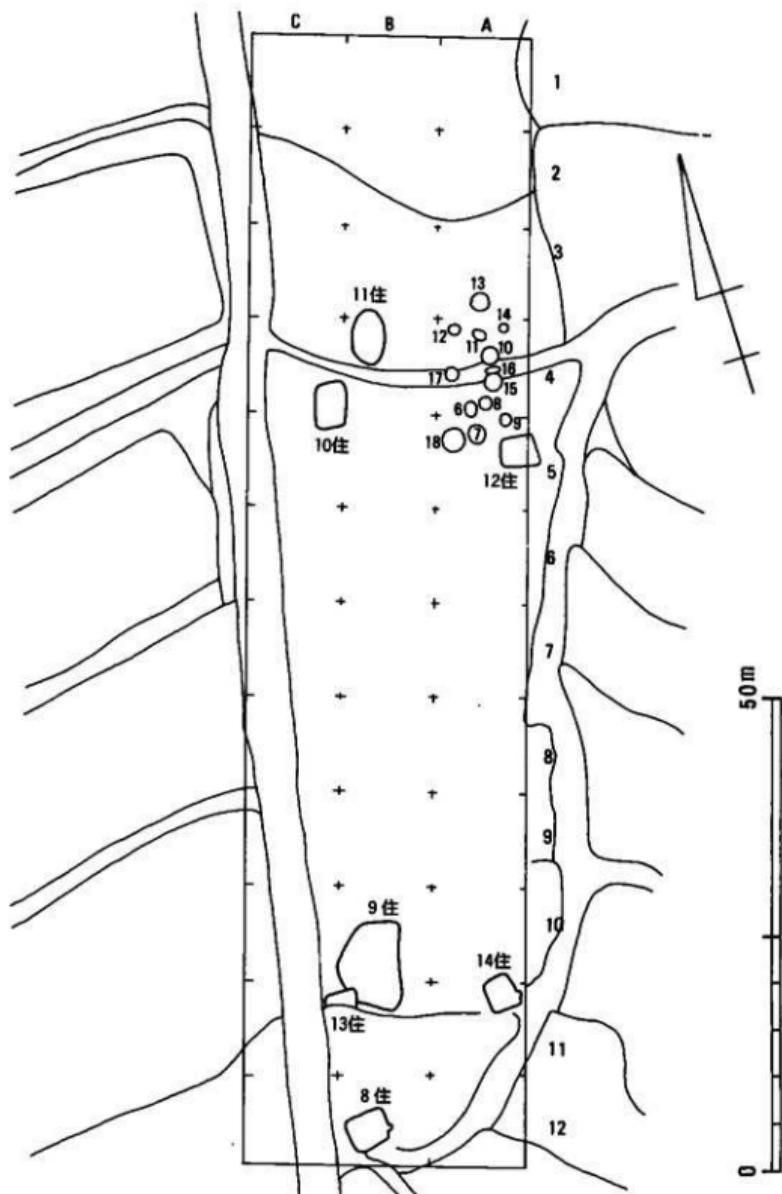
土壤 （A地区）1号～5号 （B地区）6号～18号

石器類については表1から表2にまとめてある。この表のうち打製石斧の型式は、I型—短冊形、II型—壺型、III型—斜刃型、IV型—尖頭型とした。さらにI型については幅や反り具合から①～④型に分類したがこの基準についてはC地区石器の項（181ページ）を参照。磨石についてはI型—長方形、II型—橢円形、III型—円形とし、さらに①（明瞭な凹）、②（敲打痕）、③（磨滅痕）を加えて分類した。これについても詳細はC地区石器の項（197ページ）を参照。

1 住居址 上記のとおり1号から14号まである。以下番号順に報告する。



第3図 天神遺跡A地区全体図 (1/300)



第4図 天神遺跡B地区全体図 (1/600)

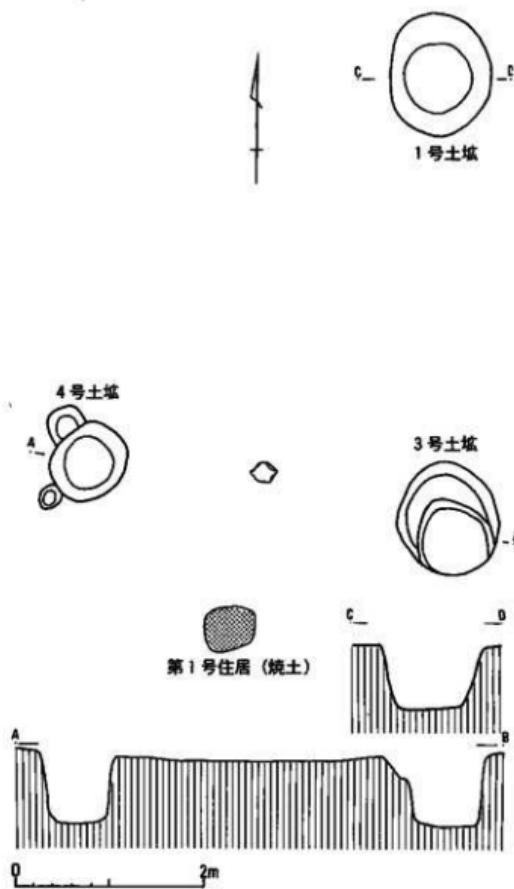
### 第1号住居址（第5図）

炉とみられる焼土と小穴が検出されたことから住居としたものであるが、削平が著しく、詳細は不明。焼土の範囲は52×44cmである。小穴は3個あるが、規模からみて柱穴ではなく、単独の土壤とした。焼土の北側には1号・2号埋甕がある。焼土付近から打製石斧2点（第30図）が出土しただけである。

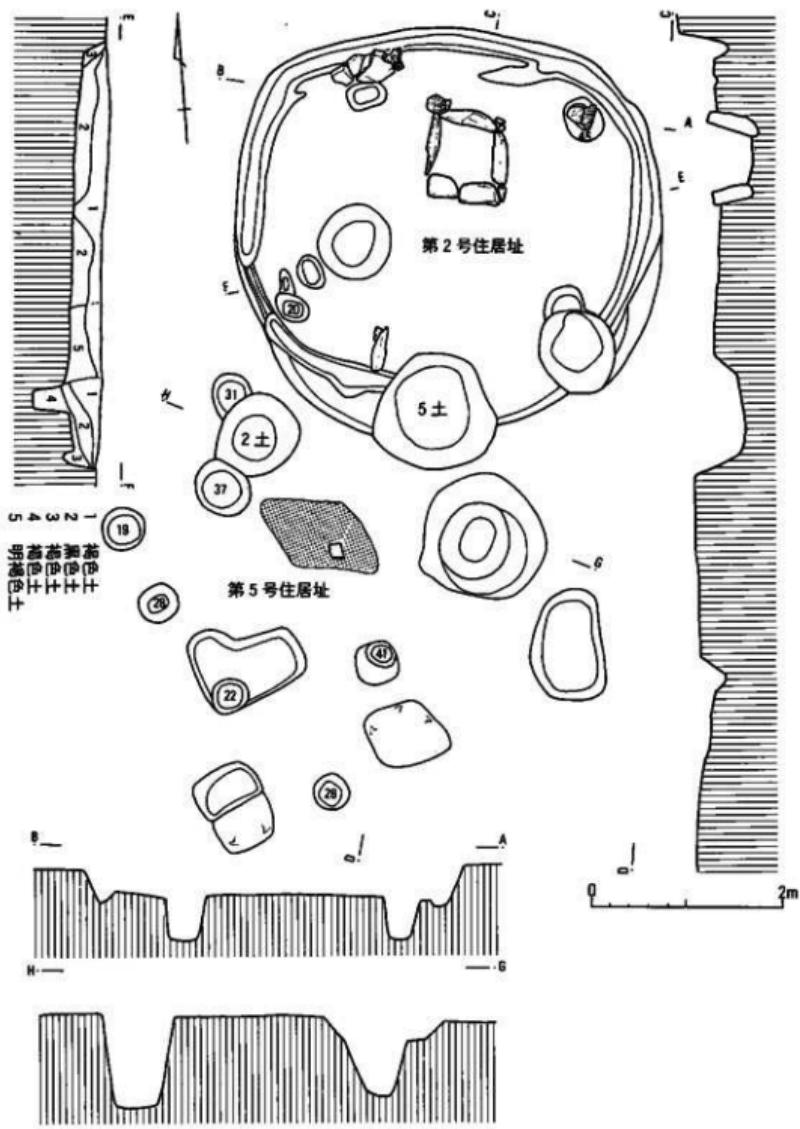
### 第2号住居址（第6図）

発掘区の中央やや東寄りに位置する。胴の張る五角形状で南北420cm、東西450cmを測る。南壁が5号土壤に切られ、さらに一部は第5号住居址と重複する。長軸上の北寄りに石圓い炉がある。4本主柱とみられる。周溝は南東の一部を除きほぼ全体に巡る。

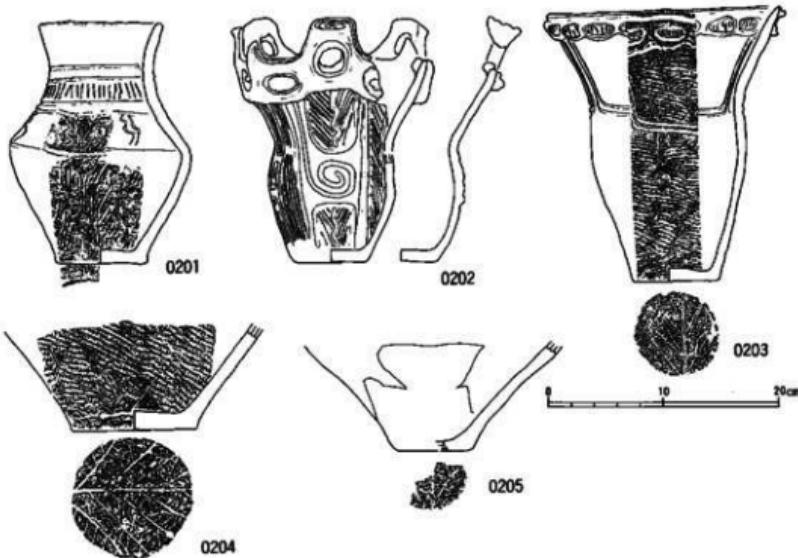
**出土遺物** 覆土中からの出土遺物は非常に少なかったが、床面から第7図に図示した完形土器3点が出土した。0201は炉際から横倒しの状態で出土した壺形土器。頸部に沈線が巡り、胴部は地文縞文で、平行沈線および蛇行沈線が付けられる。0202は奥壁下の石に倒れ掛かって出土した深鉢形土器。3単位把手の一つを欠く。0203も奥壁の東側柱穴上から出土した深鉢形土器。口縁のごく一部を欠くほかはほぼ完形である。口縁部に橢円区画が巡り、以下地文縞文に沈線区画が走る。底部木葉痕。これらは原位置を保ったものと見られる。0204、0205はともに覆土中出土の浅鉢形土器。石器は磨石3個である（第31図1・3・7）。



第5図 第1号住居址・1号・3号・4号土塙 (1/60)



第6図 第2号・5号住居址 (1/60)



第7図 第2号住居址出土土器実測図 (1/5)

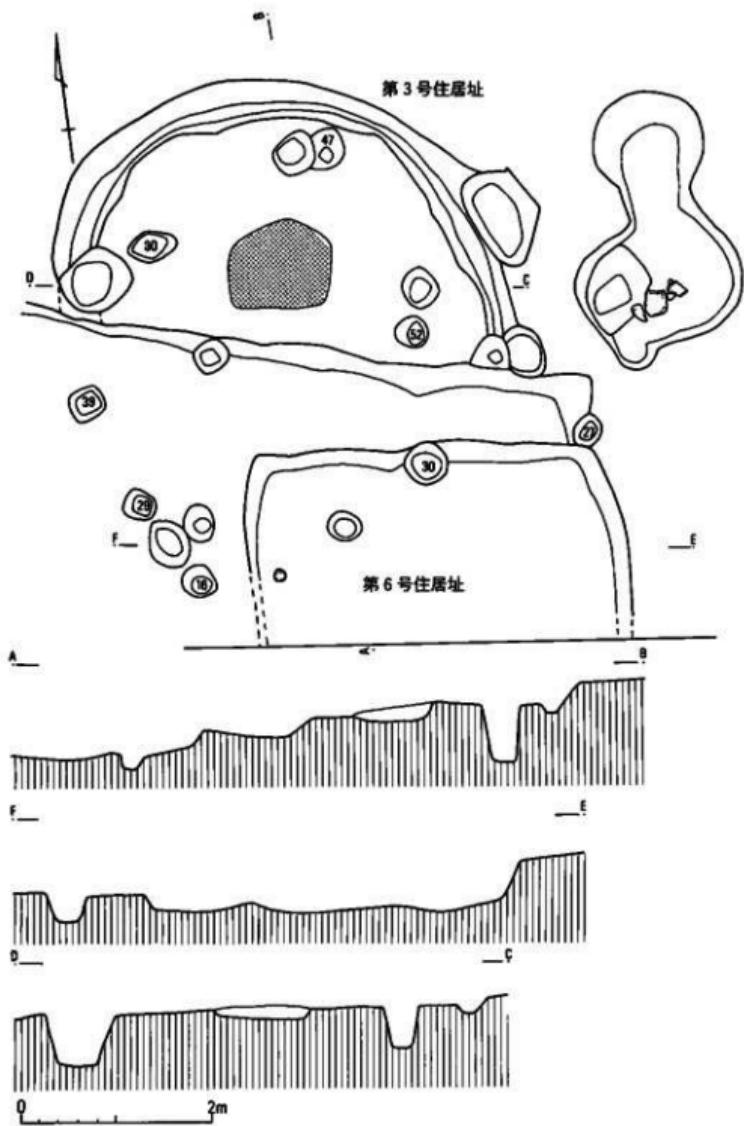
### 第3号住居址 (第8図)

4号住居と5号住居との間に位置する。4号との間隔は50cm程である。南壁の一部を平安時代の住居である6号に切られているとともに、南側半分は煙の段差のため、柱穴が確認されたにすぎない。南北540cm、東西490cm程の規模と推測される。長軸上の北寄りに炉があるが側石は除去されている。10数個の小穴が検出されたが、6ないし7個を基本とした主柱であろう。隣接する4号を参考にすると、入り口の対をなす2個を含め、7本主柱の可能性が高い。周溝が巡るが、南半は床とともに削平されてしまっている。

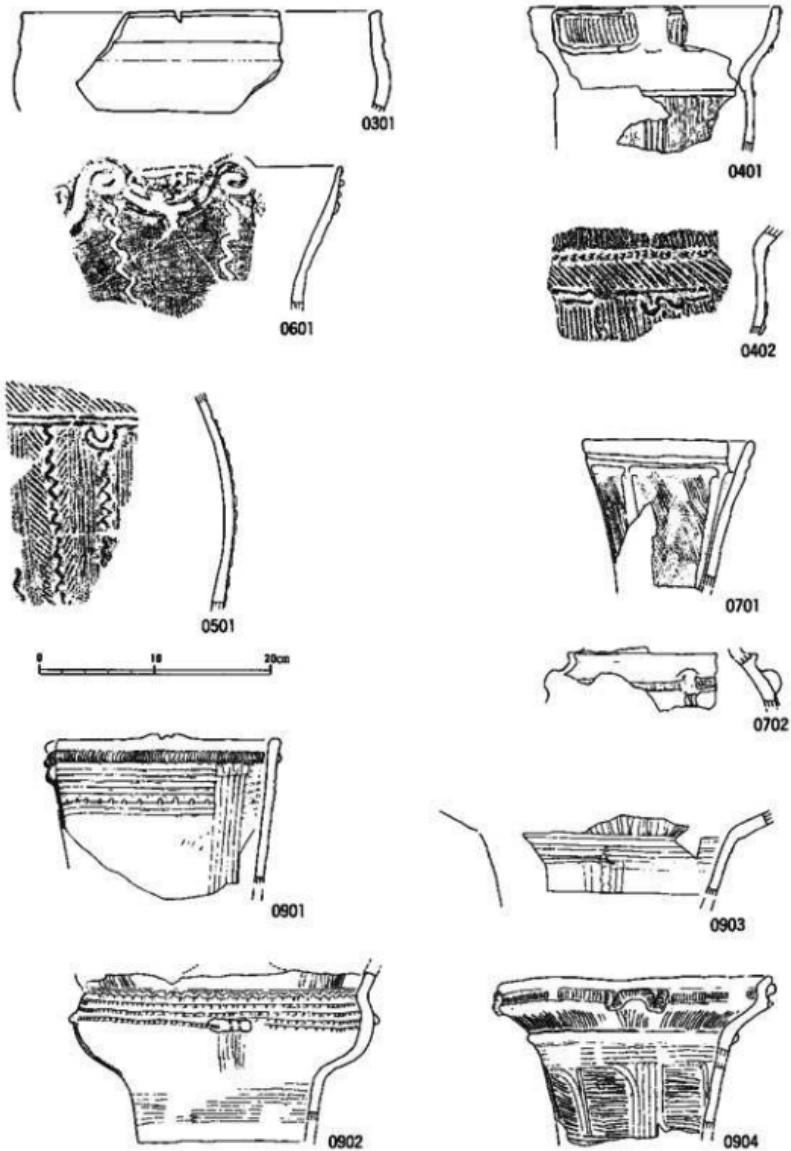
**出土遺物** 第9図0301無文の深鉢形土器。第10図1～3は覆土から出土したもの。石器には打製石斧4点 (第30図3～6)、磨石3点 (第31図8・10、第32図1) がある。

### 第4号住居址 (第11図)

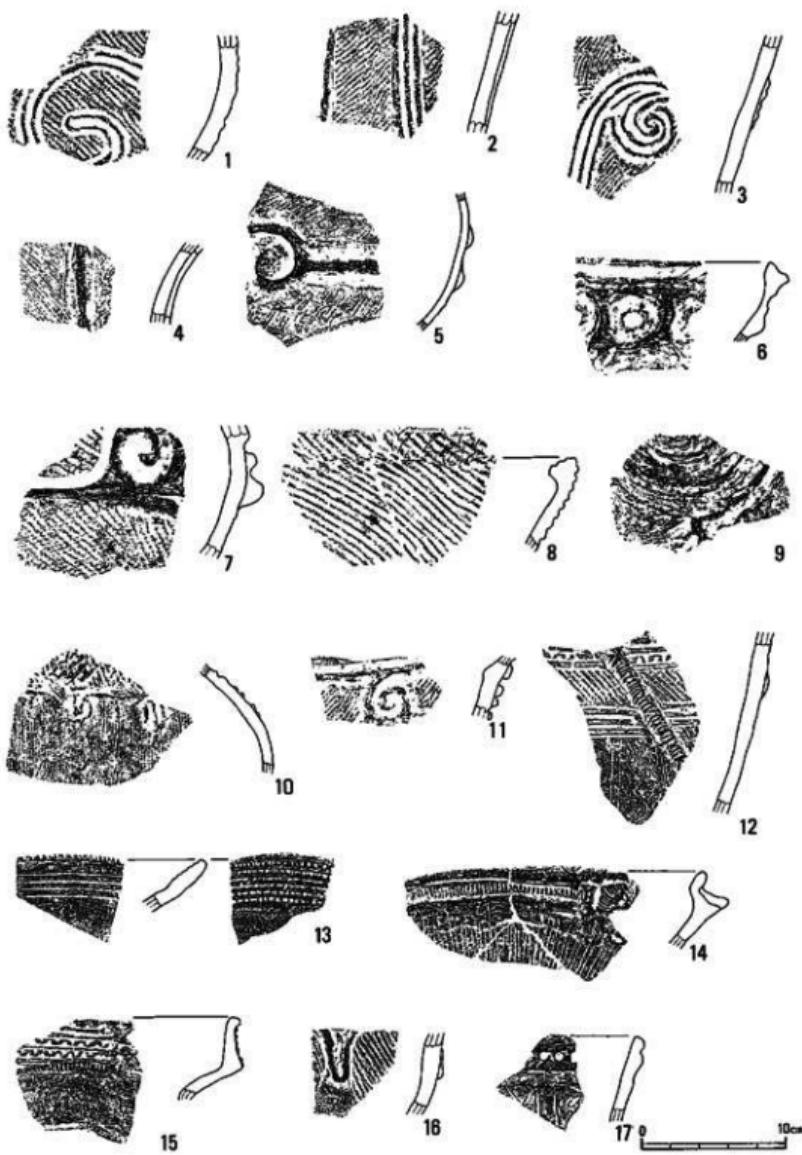
第3号住居と第7号住居との間に位置するが、それぞれとの間隔は50cm程である。第3号と同様に煙の境にあることから、南側半分は削平されてしまっており、柱穴が確認されただけである。柱穴の配置から7本主柱構造とみられる。炉の奥の柱穴を起点に、東西対に並ぶ規則的な配置で、南側2個の中間が入り口となろう。第3号住居もこれと同じ構造の可能性がある。住居の形状は橢円形で、南北600cm、東西530cmと推測される。炉は石囲み炉。周溝は全周していたと思われる。



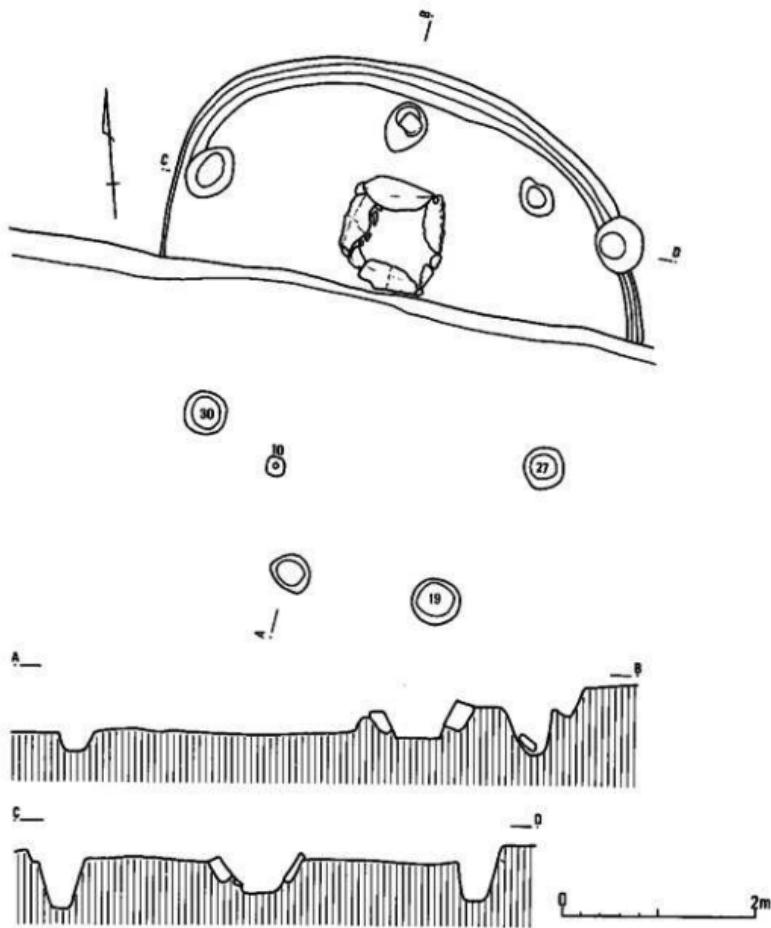
第8図 第3号・6号住居址 (1/60)



第9図 土器実測図（第3号～第7号・9号住居址）(1/5)



第10図 土器拓本（第3号・5号・7号・9号住居址、第2号土壤）(1/4)



第11図 第4号住居址 (1/60)

出土遺物 第9図0401は炉付近から出土した深鉢形土器破片である。0402は覆土からの出土。石器は磨石1点が出土したにすぎない(第31図6)。

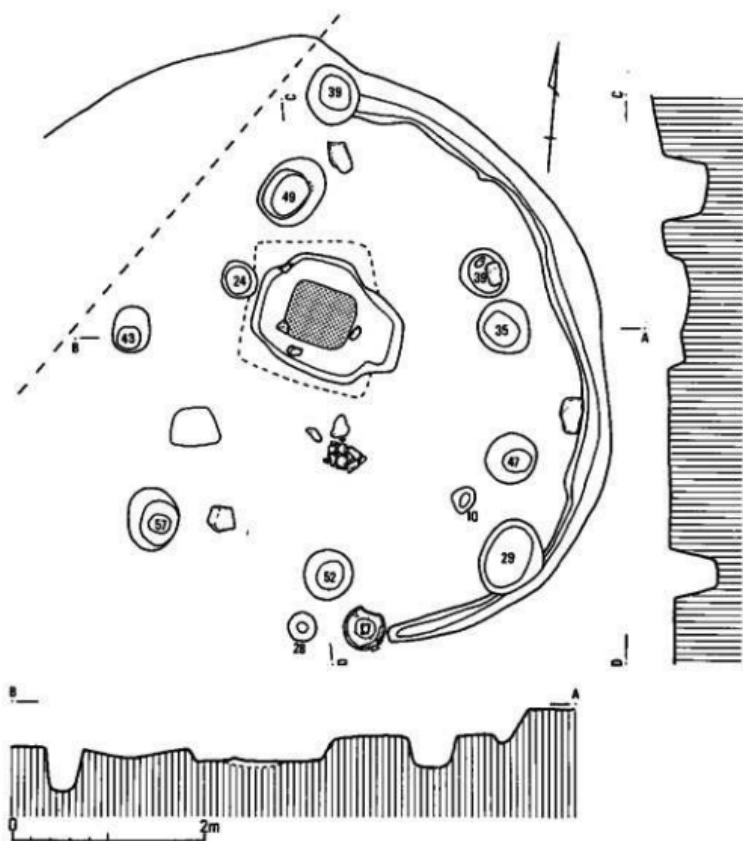
#### 第5号住居址(第6図)

第2号住居の南端と重複している。畝の段差のため削平されており、柱穴と炉跡とみられる焼土が確認されたにすぎない。直径4m程の円形の住居と推測される。炉石は抜き去られたと

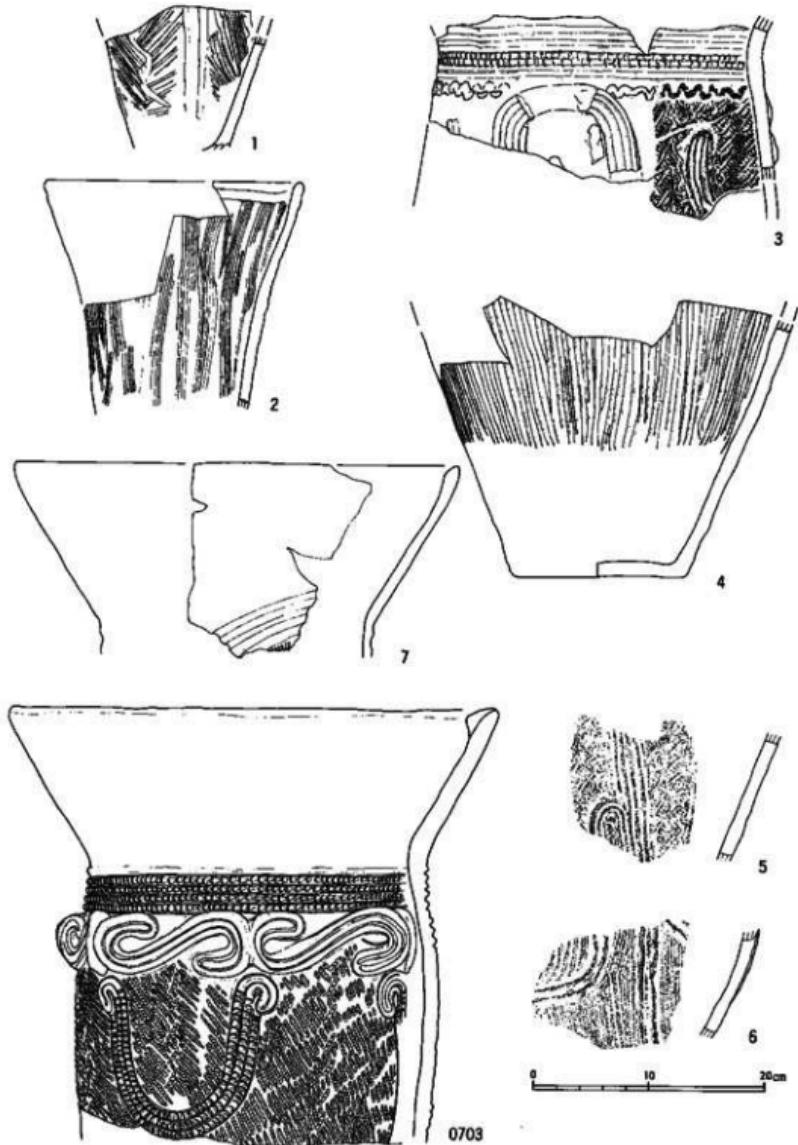
思われ、石は残っていない。深さ20~30cmの小穴が幾つか検出されたが、この内の4ないし6個が主柱穴とみられる。第5号土壤部分に柱があったとすれば6本主柱であったかもしれない。出土遺物 削平されていることから出土遺物は少ない。第9図0501は曾利II式の深鉢形土器破片。他に第10図5がある。第29図4は本址の南側から出土した石匙であるが、住居に伴うかは不明。

#### 第6号住居址（第8図）

縄文時代の第3号住居址と重複する平安時代の住居址。南側半分は地区外に延びているため



第12図 第7号住居址 (1/60)



第13図 土器実測図 (1/5)

詳細不明であるが、規模は東西400cmの方形プランの住居。全体に削平されていることから、本来の壁高や床の状態は定かではない。調査範囲内にはカマドは位置していない。A区での平安時代住居はこの1軒だけである。

出土遺物 削平されている割りに遺物は多く、第16図0601～0608の8点がある。0601～0603は土器器坏で、0603は内黒。0604は灰釉陶器の皿である。0605はクロ成形の小型甕。0606～0608は壺の口縁部を中心とした破片。他に第32図11・12に示した砥石も出土している。

#### 第7号住居址（第12図）

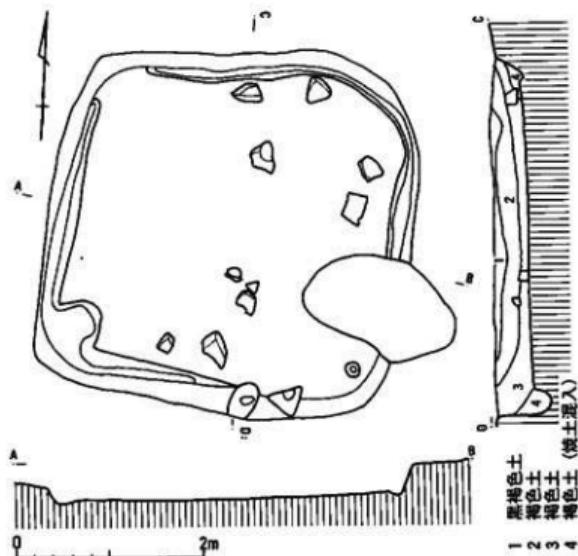
第4号住居址の北西に隣接する。南側から西側にかけては削平されている。規模は南北650cm、600cm程と推測される。南側の周溝が切れる箇所に埋甕（0703）がみられた。位置関係や時期からみて、本址に伴うものであろう。小穴は複数見られるが、6本主柱であろう。特に埋甕の北西の小穴を柱穴とすれば6本主柱となる。炉は本来石囲いであったと見られるが、側石は全て抜き去られている。炉の掘り込みは150×120cmと大きく、焼土の堆積範囲は70×60cmである。周溝も全周していたと見られるが、削平のため東側半分しか残っていない。

出土遺物 第9図0701は覆土上面から出土した深鉢形土器。0702は壺状の土器であろうか。第13図0703は住居南端から正位の状態で出土した埋甕。胴下半を欠く深鉢形土器。第10図6～11も本址から出土した破

片。石器にはスクレーパー（第29図6）、石錐（第29図7）、打製石斧4点（第30図7～10）、磨製石斧（第32図7）などがある。

#### 第8号住居址（第14図）

本址から14号住居址まではB区に位置する。本址は発掘区の最南端に発見された平安時代の住居。同じ時期の住居である13号までは約10m、14号までは約14m離れており、住居の分布はまばらである。一辺が4mほどの隅丸方形を呈し、壁高は20



第14図 第8号住居址 (1/60)

~40cmを測る。東壁の南寄りにカマドが設けられている。カマドは両袖に石を芯にしているが、天井石などが散乱している。周溝は北西および南東隅を除き確認された。柱穴はみられない。出土遺物 第16図0801~0808が本址から出土した遺物である。0801~0803は土師器壊。0804・0808は灰釉陶器。0805~0807は甕で、特に0805の底部には木葉痕がみられる。

#### 第9号住居址（第17図）

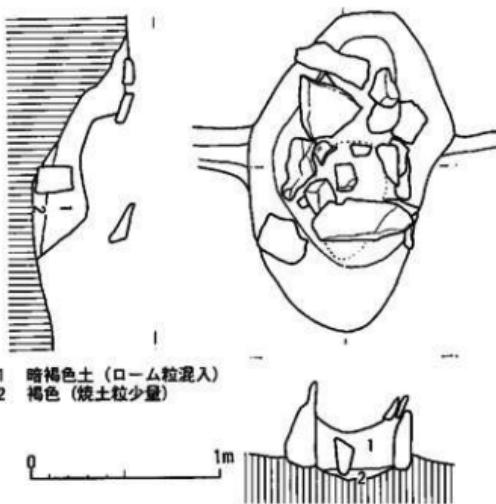
本址は縄文中期五領ヶ台式期の住居。南西壁の一部

が平安時代の第13号住居址により切りされている。南北9m、東西7mの不整形をなしており、炉とみられる埋甕が3個検出されていることから、複数の住居の切り合ったものと思われる。C地区の第22号・24号・28号とした一連の住居も複数の埋甕炉からなる複合住居であり、この時期に特徴的な在り方を示しているのかもしれない。埋甕炉0902と0904とはやや接近しているが、0901はそれぞれから3m以上離れており、少なくとも2戸の住居から構成されるのではないか。C区の事例も加えると、1戸に埋甕炉2個といったことも有り得ようか。床面はあまり堅くなく、壁の立上がりも明瞭ではない。柱穴の配置も不規則である。2戸以上とした時、4個ほどが0901を取り囲んでいる。仮に1戸とみると、7本主柱とすることも可能な配置も窺われる。

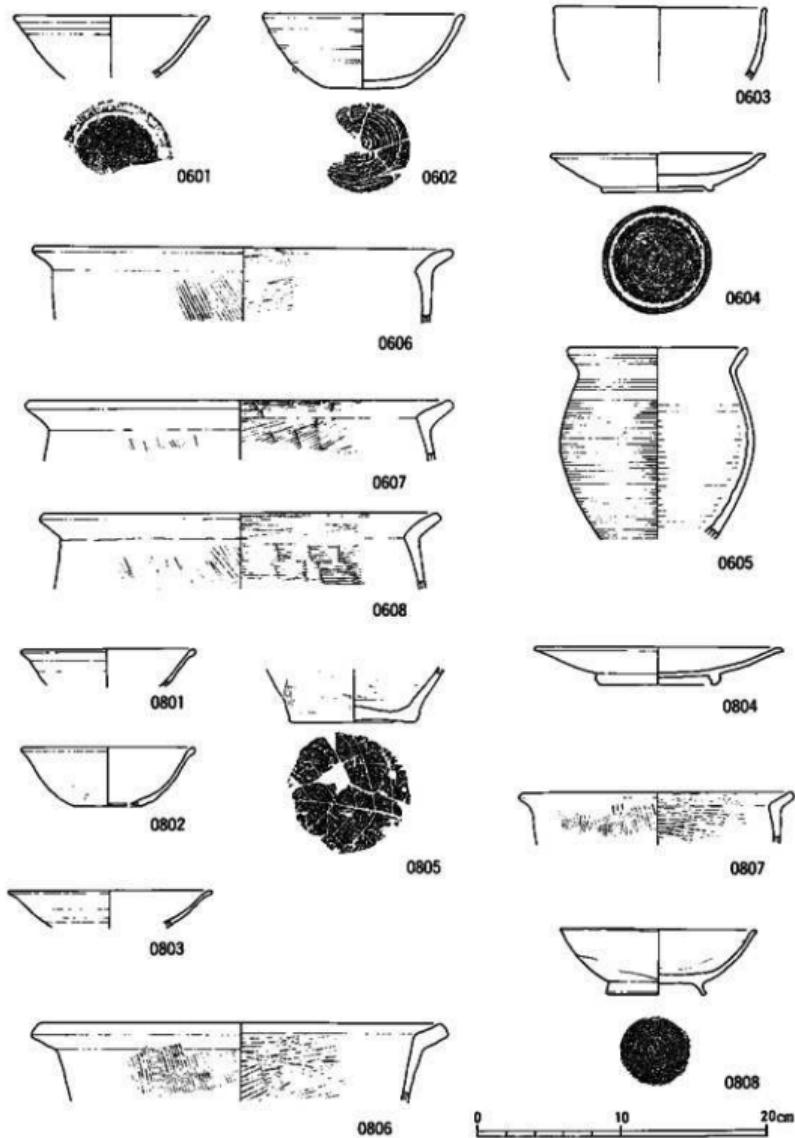
出土遺物 第9図0901、0902、0904が埋甕炉である。いずれも胴下半部を欠く深鉢形土器で火熱を受け、もろい部分がある。0903および第10図12~15は覆土から出土したもの。他に打製石斧3点（第30図14~16）、磨製石斧1点（第32図10）が覆土から出土した。

#### 第10号住居址（第18図）

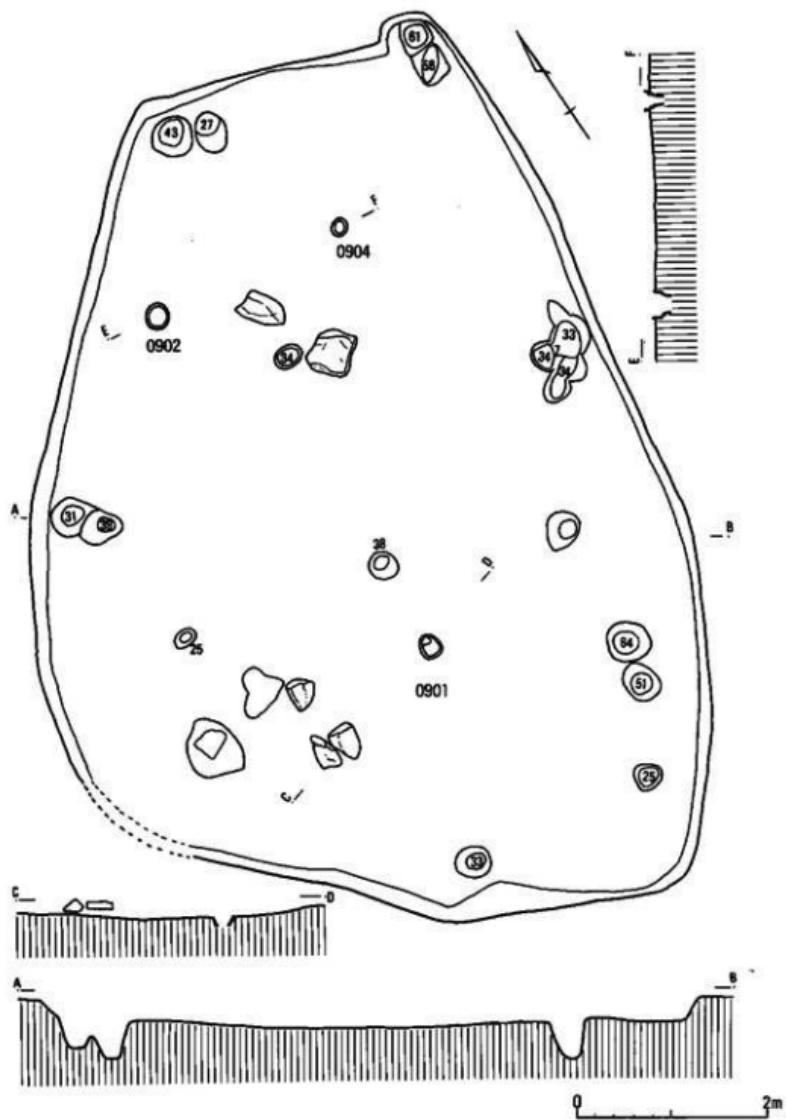
平安時代の住居で、南北470cm、東西350cmの長方形を呈する。全体に削平されており特に西壁は高さ10cm程である。カマドは東壁側の南隅寄りに位置するが、これも削平が著しく下部の掘り込みが確認された程度である。焚口から燃焼部にかけて焼土がわずかに残っていた。西壁下と東壁下には周溝が走る。柱穴は確認されなかった。カマドを中心に土師器が出土した。



第15図 第8号住居址カマド (1/30)



第16図 土器実測図（第6号・8号住居址）(1/4)

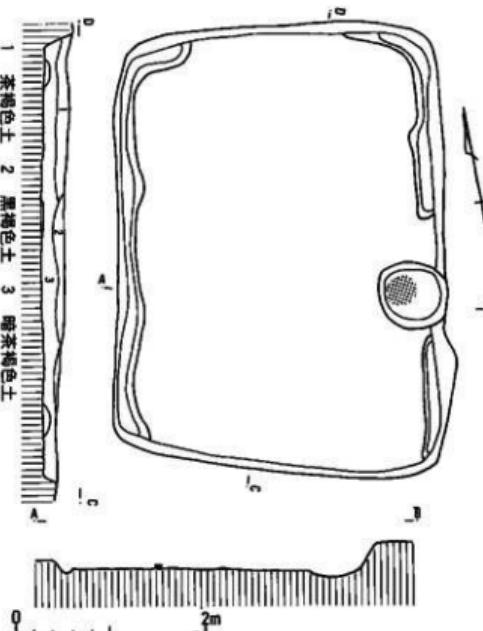


第17図 第9号住居址 (1/60)

出土遺物 第19図1001から1009が本址からの出土遺物。1003、1005、1006を除き全てカマドからの出土。1008は内面黒色土器。1009は胴下半部を欠く甕の破片。他に第30図19の打製石斧（カマド内）や第32図2の磨石（住居覆土）のような縄文時代の石器も出土した。

#### 第11号住居址（第20図）

発掘区内の遺構群の中では最も北側に位置する。縄文時代の住居としたが、削平されていることもあり、時期を決定する土器がなく詳細不明。600cm×410cmの橢円形状の平面形で、ほぼ中央部に石畳み状の配石がある。炉の可能性があるが、焼土は認められな



第18図 第10号住居址（1/60）

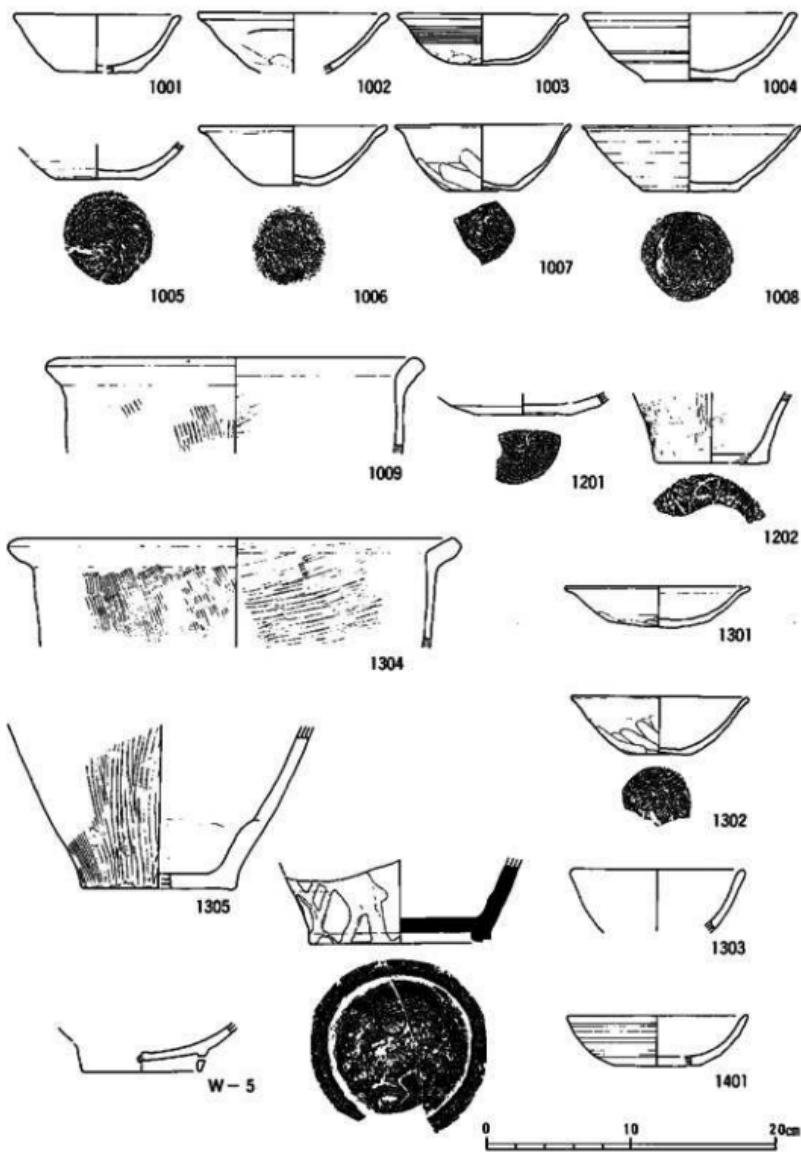
い。床面も平坦ではなく、特に北側部分は浅く窪んでいる。柱穴状の小穴も1個だけである。土器は出土しなかったが打製石斧3点、石鎌1点、石匙1点と石器が目立つ。通常の住居としてよいか断定はできない。

出土遺物 第30図11～13の打製石斧、第29図1の石鎌、同図5の石匙がある。

#### 第12号住居址（第21図）

平安時代の住居で、発掘区の中央部付近の東端に位置する。東壁は調査区外に延びていることから完掘はできなかった。東西440cmの方を基調とした住居。削平されてはいるが壁高は約3.5mを残す。周溝はほぼ全局するものと思われる。カマドは東壁の南隅寄りに位置すると見られるが、削平が著しく燃焼部が確認できた程度である。

出土遺物 第19図1201の壺底部破片、1202の甕底部破片が出土しただけである。

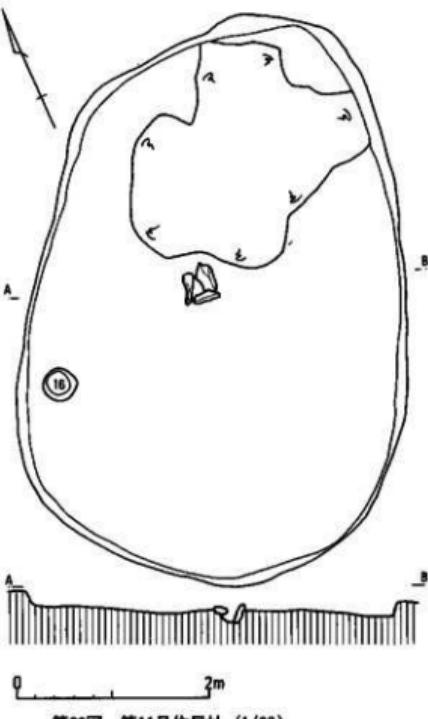


第19図 土器実測図（第10号・12号・13号・14号住居址、他）(1/4)

### 第13号住居址（第22図）

平安時代の住居址。縄文時代の第9号住居址の南西壁の一部を切っている。同じ平安時代の住居である8号の北10m、14号の西14mに位置する。本址の南北分は窓の段差のため残っていない。東西軸3.2m程度の小型の住居とみられる。全体に削平されており壁高も10~20cmである。部分的に周溝が認められる。

出土遺物 調査面積の割りには出土遺物が多い。第19図1301~1305がある。1301は東壁寄りの床面から出土した壺で、底部に墨書きの痕跡がある。1302は東壁直下から出土した壺。1303は覆土出土。1304は1302と同様に東壁直下から出土した甕の破片。1305は覆土出土の甕下部。



### 第14号住居址（第23図）

平安時代の住居址で、第13号住居址の東14mに位置する。東西軸3.3m、南北軸3.6mを測る長方形の住居。壁高は30~40cmあり、他の住居に比べ残りが良い。南壁の西側を除き周溝が巡る。カマドは東壁の南寄りに位置するが、残存状況は

よくなく、石が散乱する。柱穴とみられる小穴は全く検出できなかった。

出土遺物 第19図1401が出土したにすぎない。

第20図 第11号住居址 (1/60)

2 埋甕 A区にて4基が調査された。

#### 第1号埋甕（第13図1）

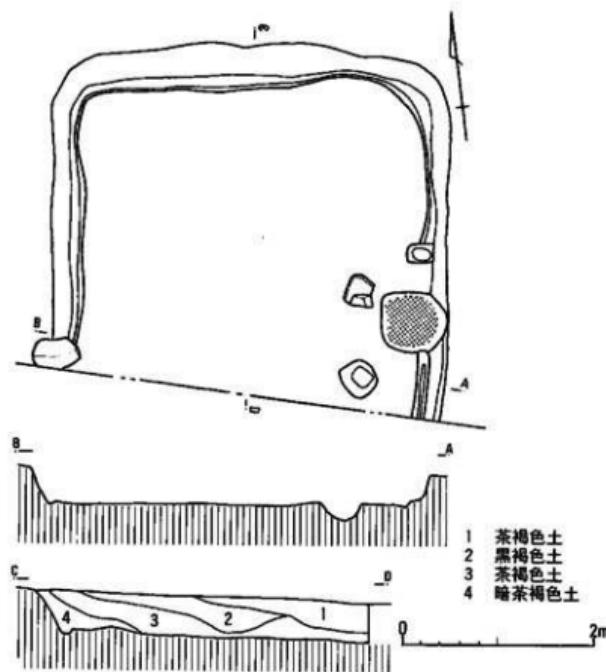
第1号住居址とした焼土の北東1mのところから正位の状態で出土した。底部と胴部上半を欠く。曾利IV式土器であろう。

#### 第2号埋甕（第13図2）

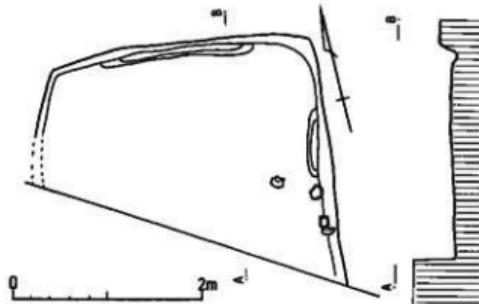
第1号埋甕の北約70cmに位置する。胴下半部を欠く深鉢形土器で、平石の上に載って正位の状態で発見された。口縁も一部しか残っていない。曾利IV~V式土器であろう。

#### 第3号埋甕（第13図4、第24図）

第3号住居址の北50cmに位置する。80×70cm、深さ35cm程の掘込み中に埋設されていた。正



第21圖 第12號住居址 (1/60)



第22圖 第13號住居址 (1/60)

位の状態で胴上半部を欠く。曾利III式土器であろう。なお第13図5・6も伴出。

#### 第4号埋甕（第13図7）

第3号住居址と第5号住居址との間に発見された。深鉢形土器の口縁部破片が正位の状態で出土したもの。曾利III式前後の土器であろう。

3 土壙 A区5基（第1号～第5号）、B区13基（第6号～第18号）が調査された。

第1号土壙（第5図） 第1号住居址とした焼土の北7mに位置する。1.27×1.05m深さ66cmの略円形土壙。出土遺物なし。

第2号土壙（第6図） 第5号住居址の北西隅に位置し、住居の柱穴の可能性も考えられたが規模からみて土壙としたもの。この土壙と切り合った小穴が柱穴とみられる。直径85cm、深さ1mの円形土壙。内部から土器片2点（第10図16・17）が出土。曾利後半期であろう。

第3号土壙（第5図） 第1号住居址とした焼土の北東2mに位置する。1.2×1.07m、深さ80cmの略円形土壙。出土遺物なし。

第4号土壙（第5図） 第3号土壙の西3mに位置する。85×73cm、深さ75cmの円形土壙。出土遺物なし。

第5号土壙（第6図） 第2号住居址の南壁を切っている。直径1.22m、深さ54cmの円形土壙。出土遺物なし。

第6号土壙（第25図） 第6号土壙から第18号土壙までの13基はB地区の第10号住居から第12

号住居に囲まれた地域に密集している。第6号は直径1.4m、深さ33cmの円形。

第7号土壙（第25図） 1.65×1.4m、深さ52cmを測り、底部付近で二段になる。

第8号土壤 (第25図)

1.45×1.1m、深さ28cm

の梢円形土壤。遺物なし。

第9号土壤 (第25図)

直径1.2m、深さ45cmの

円形土壤。遺物なし。

第10号土壤 (第27図)

1.85×1.7m、深さ47cm

の略円形。鍋底状をなし、

底面には石がみられた。

遺物なし。

第11号土壤 (第26図)

1.5×1.35m、深さ40cm

の略円形。底面に自然石

がある。

第12号土壤 (第26図)

1.35×1.3m、深さ40cm

の略円形。遺物なし。

第13号土壤 (第26図)

2.25×2.1m、深さ25cm

の不整形。遺物なし。

第14号土壤 (第26図)

1.8×1.65m、深さ55cm。

遺物なし。

第15号土壤 (第27図)

1.8×1.6m、深さ65cmの

略円形土壤。道路により

北壁側が削平されている。

遺物なし。

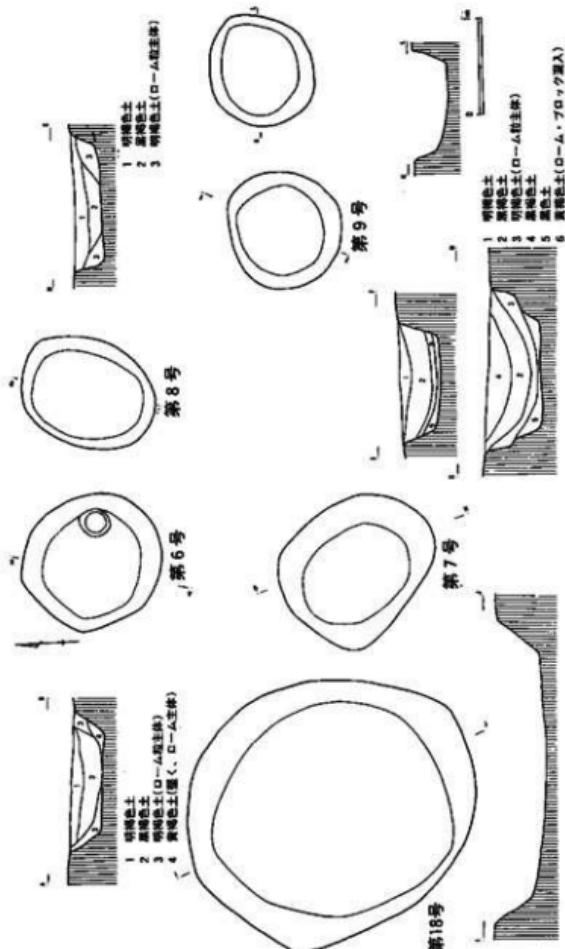
第16号土壤 (第27図)

長軸1.55m、短軸70cm、深さ65cmの長方形土壤。他の土壤の覆土が褐色土を中心としていたの

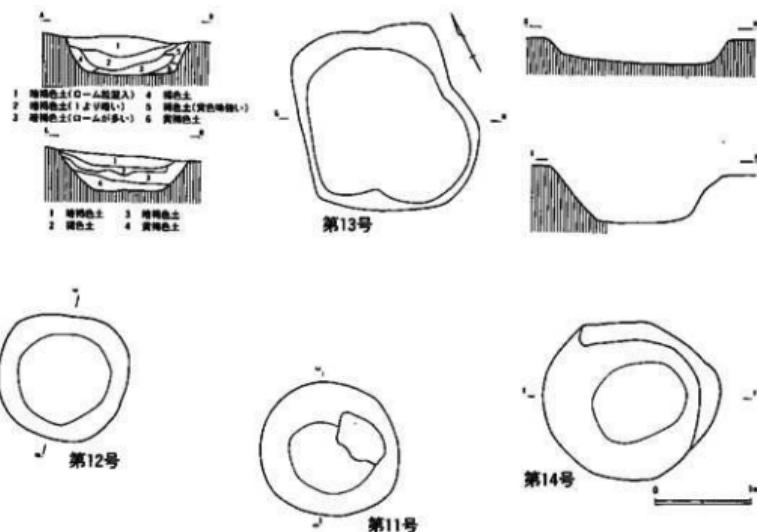
に対して、これは黒色を呈しており、形状とともに他とは異なっている。壁上部と底面とに石がみられる。遺物なし。

第17号土壤 (第28図) 1.25×1.15m、深さ34cmの略円形の土壤。内部に土器が埋設されている。

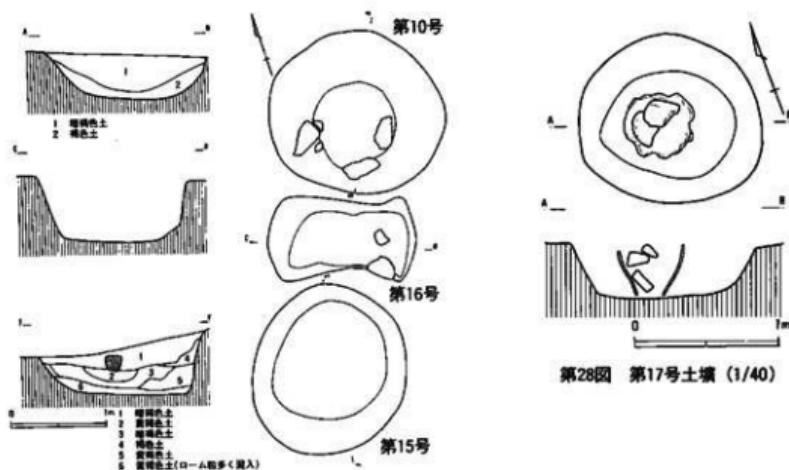
第18号土壤 (第25図) 3.15×2.15m、深さ50cmの大形の土壤。遺物なし。



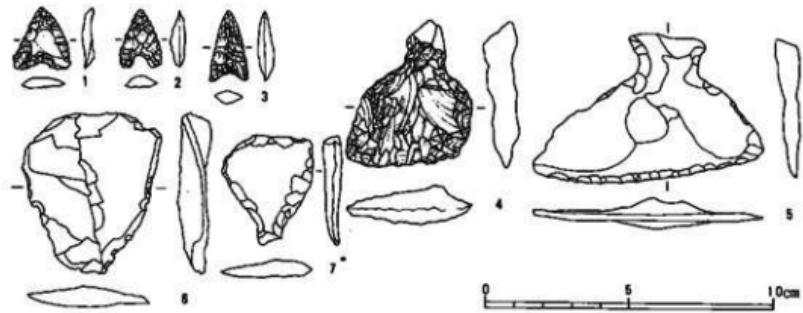
第25図 土壤実測図 (第6号～9号・18号) (1/60)



第26図 土壌実測図（第11号～14号）(1/60)



第27図 土壌実測図（第10号・15号・16号）(1/60)

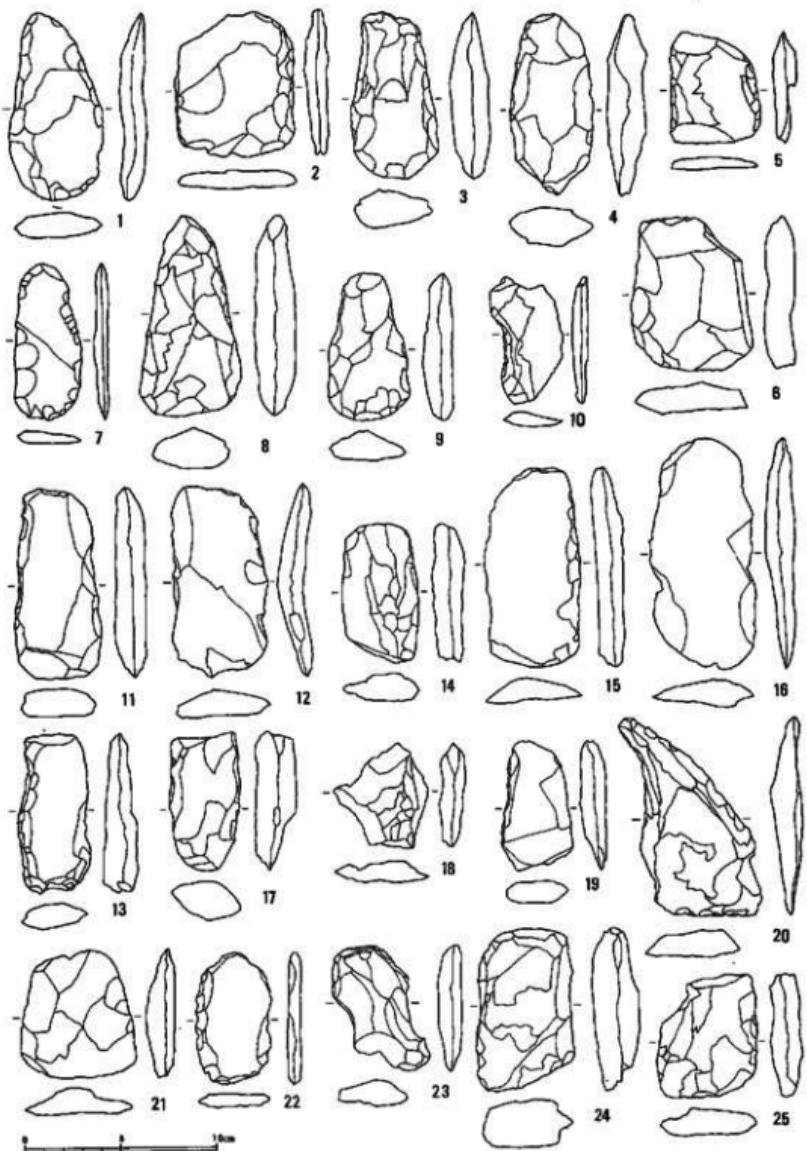


第29図 石器実測図 (1/2)

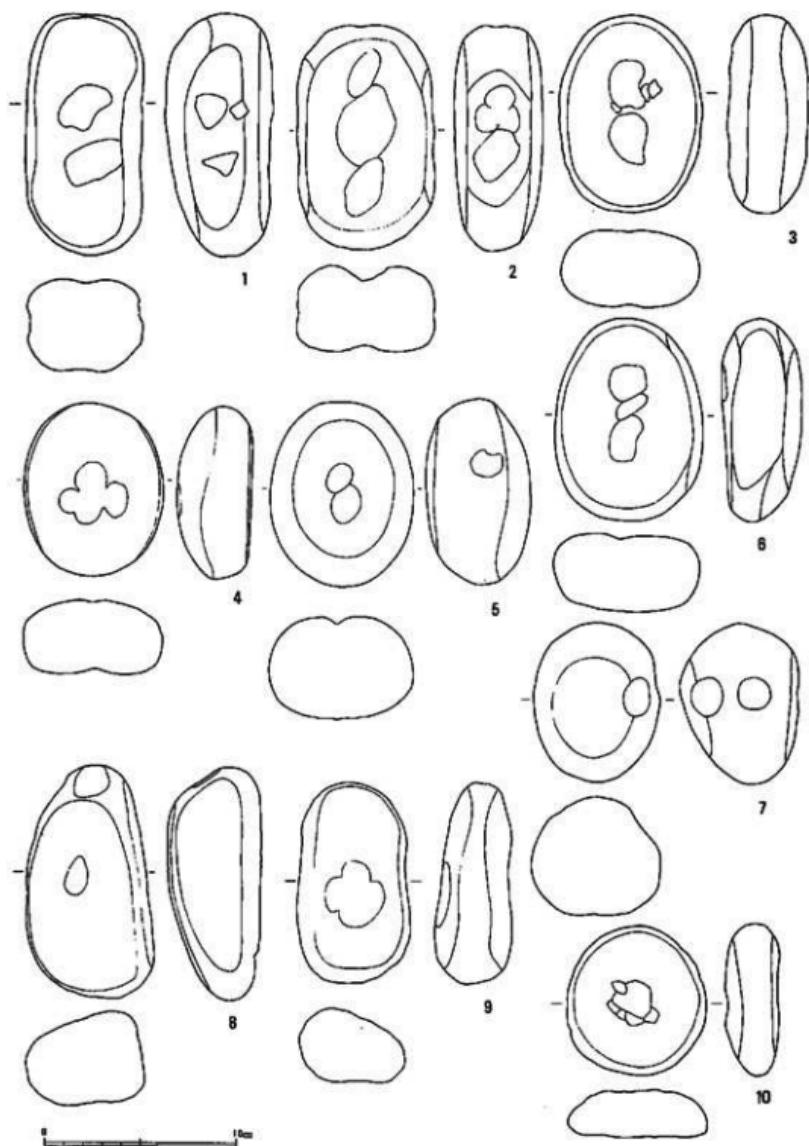
#### 4 まとめ

A地区からC地区は、八ヶ岳南麓の特有な北から南に傾斜する尾根上に位置する。尾根といつても、西側は明確な谷地形をなすものの東側は比高差の少ない幅広い地形である。このような地域の500m×200mといった面積の圃場整備事業に伴った発掘調査であったことから、結果として複数の遺跡を確認することができた。A地区は縄文中期曾利式期、B地区は平安時代を中心としながらも縄文中期五領ヶ台式期、C地区は縄文前期諸儀式期、といったそれぞれの集落であることがわかった。A・B地区については集落の僅かな一部を調査したにすぎないが、特に平安時代については各地区から住居が確認されており、活発なムラづくりが行われていたことがわかる。この八ヶ岳南麓地域の調査では平安時代の集落の調査例がきわめて多く、この時代におけるこの地域の開発と土地利用の在り方に大きな問題をなげかけている。今回の調査成果もこの問題に対する資料蓄積の一つとなろう。

僅かな範囲の調査ながらA地区では曾利式期集落の一端にふれることができた。不明な1号を除き5軒の住居が確認できたが、これらは弧状に並ぶとともに柱構造からみて一定の規則性を窺うことができる。柱構造には4本主柱（I型）、6本主柱（II型）、7本主柱（III型）の3種類が認められた（第33図）。I型では2号住居があり、これと隣接する5号住居もこの可能性がある。II型は7号住居。III型には4号住居が該当するが、これと隣接する3号住居もこの種の可能性がある。こうしてみると1軒の7号を除き、同じ型式の住居が隣接する傾向がみられる。しかもこの2軒のうち1軒は炉石を持ち、1軒には炉石がみられない。III型の4号と3号をみると、時期的には炉石のある4号が曾利III式期、炉石のない3号が曾利IIないしIII式期であり、3号→4号といった時期差を考えることもできる。この場合3号の炉石は移転しないし建替えの際に抜き取られ、再利用された可能性が高い。その行き先が4号なのか、あるいは別の場所の住居なのかは不明であるが、住居構造・隣接・時期差といった要素から3号と4号とは同一住人の動きの中で形成された居住跡と考えてみたい。I型とした2号と5号とでも同じことが考えられるが、5号の場合柱構造がやや不明瞭である。このような傾向からみると7号の隣にも同様の住居があったこともありうる。7号が曾利II式期と古段階の住居でありしかも



第30圖 打製石斧實測圖 (1/3)



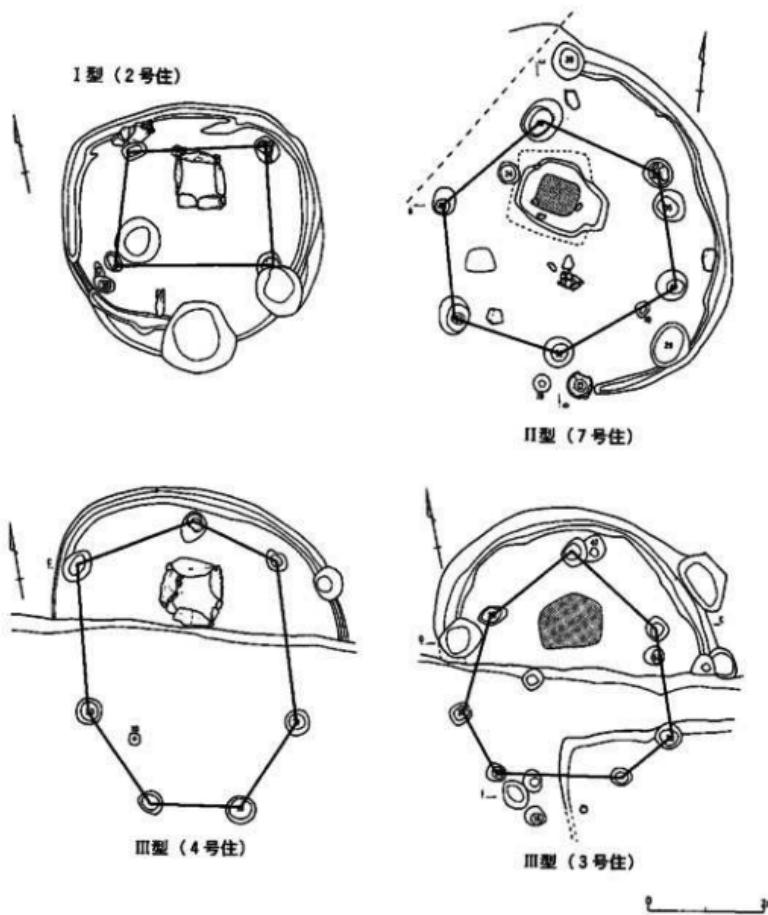
第31図 磨石実測図 (1/3)



第32図 石器実測図 (1/3、5と6は1/6)

炉石が抜き取られていることからも、II型に類する曾利新段階の住居が調査区外に隣接している可能性も考えられよう。

(新津 錠)



第33図 柱配列図 (1/100)

表1 石器一覧表 (A・B地区)

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
29	1	石鎌	完形	1.4	黒耀石	11号住居
	2	〃	〃	0.9	〃	A区表採
	3	〃	〃	0.9	〃	A区表採
	4	石匙	〃	17.8	〃	5号住南
	5	〃	〃	22.4	粘板岩	11号住居
	6	スクレーパー	〃	21.2	圭質頁岩	7号住居
	7	石錐	一部欠	7.3	粘板岩	7号住居

表2 打製石斧一覧表

図	番号	出土地点	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形式
30	1	1号住居	9.7	6.2	1.3	84	砂岩	I 4
	2	1号住居	7.6	6.1	1.2	78	粘板岩	破片
	3	3号住居	8.7	4.6	2.0	106	〃	I 1
	4	3号住居	9.4	4.4	2.1	102	〃	I 1
	5	3号住居	5.8	4.7	1.6	42	〃	破片
	6	3号住居	8.0	6.3	1.6	112	〃	破片
	7	7号住居	8.1	3.5	0.75	28	ホルソフェルス	I 2
	8	7号住居	10.4	5.3	2.1	137	砂岩	II
	9	7号住居	7.7	4.3	1.6	67	〃	I 3
	10	7号住居	6.6	3.8	0.8	20	粘板岩	破片
	11	11号住居	9.8	4.6	1.6	116	ホルソフェルス	I 1
	12	11号住居	9.9	5.0	1.3(1.8)	98	粘板岩	I 4
	13	11号住居	8.3	3.8	1.8	70	ホルソフェルス	I 2
	14	9号住居北	7.2	4.0	1.7	64	〃	破片
	15	9号住居	10.3	5.0	1.7	120	粘板岩	I 1
	16	9号住居北	12.0	5.5	1.5	114	ホルソフェルス	I 1
	17	12号住居	7.2	3.7	2.2	84	〃	破片
	18	14号住居	5.5	4.9	1.4	30	砂岩	破片
	19	10号カマド	6.7	3.7	0.75	42	ホルソフェルス	破片
	20	T-1	13.5	7.3	1.6	90	〃	破片(分銅)
	21	T-5	6.7	6.0	1.5	71	粘板岩	II
	22	T-5	6.8	3.9	0.7	32	〃	I 1
	23	T-5	6.6	5.15	1.2	44	〃	破片(分銅)
	24	T-3	8.5	5.0	2.4	145	ホルソフェルス	破片
	25	表採	4.6	5.1	1.7	72	粘板岩	破片

表3 石器一覧表

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
31	1	磨石I-①	完	500	輝石安山岩	2号住居
	2	" II-①	完	500	"	A区4トレ
	3	" II-①	完	440	"	2号住居
	4	" II-①	完	350	"	11号住居
	5	" II-①	完	560	"	"
	6	" II-①	完	510	"	4号住居
	7	" II-①	完	420	"	2号住居
	8	" II-②	完	560	"	3号住居
	9	" II-②	完	320	"	A区3トレ
	10	" II-②	完	280	"	3号住居
32	1	" II-②	完	800	"	3号住居
	2	" II-②	半欠	254	"	10号住居
	3	" II-③	完	115	"	A区1トレ
	4	磨石(燧石)	完	146	"	
	5	石棒	欠	5,500	デイサイト	試掘
	6	石皿	半欠	4,800	輝石安山岩	"
	7	磨製石斧	半欠	460	緑色岩	7号住居
	8	"	欠	202	緑色凝灰岩	6号西穴
	9	"	欠	162	緑色岩	A区1トレ
	10	"	欠	57	"	9住北
	11	砥石	欠	84	緑色凝灰岩	6号住居
	12	"	欠	55	"	6号住居
	13	"	欠	84	"	A区4トレ



第34図 C地区の発掘区 (1/1000)

## 第2節 C地区の調査（第34図）（付図1・2）

C地区からは住居址61軒、土壙488基、集石造構10基、溝3本が調査された。時期的には、住居は縄文前期諸式期49軒（b式期29軒、c式期10軒、b～c式期10軒）、中期五領ヶ台式期9軒、平安時代3軒、である。また土壙および集石造構の多くが諸式期であり、溝は平安時代のものと思われる。以下時期ごとの造構番号順に記述する。なお石器については表14～表15（P212・P219）に出土地点を明記してあり、各造構からの出土数や種類についてはこれを参照されたい。

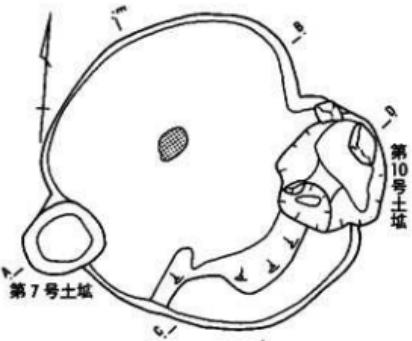
### 1 住居址

#### 〔縄文時代前期後半の住居址〕

##### 第1号住居址（第35図・図版11）

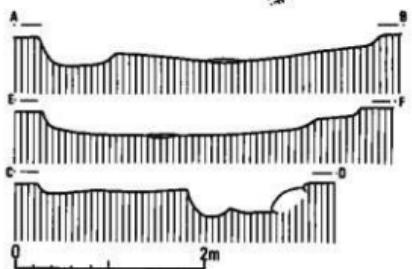
規模は340cm×300cmの楕円形プランの住居址である。第7号土壙と第10号土壙と重複している。炉は地床炉で焼けた範囲は40cm×25cmを割り大きくはない。床は水平ではなく中央が周囲より低くなっている。南東側では1段テラスが備わっているようである。壁高は10cm～20cmで掘り込みは浅い部類にはいる。柱穴は確認できなかった。遺物としては土器片と块状耳飾が出土している。

出土土器 土器片が中心であり、器形のわかるものは出土しなかった。第38図1は深鉢形土器の破片。諸式c式新段階の土器である。他に土製品では块状耳飾1、石製品では块状耳飾1が出土。



##### 第3号住居址（第36図・図版11）

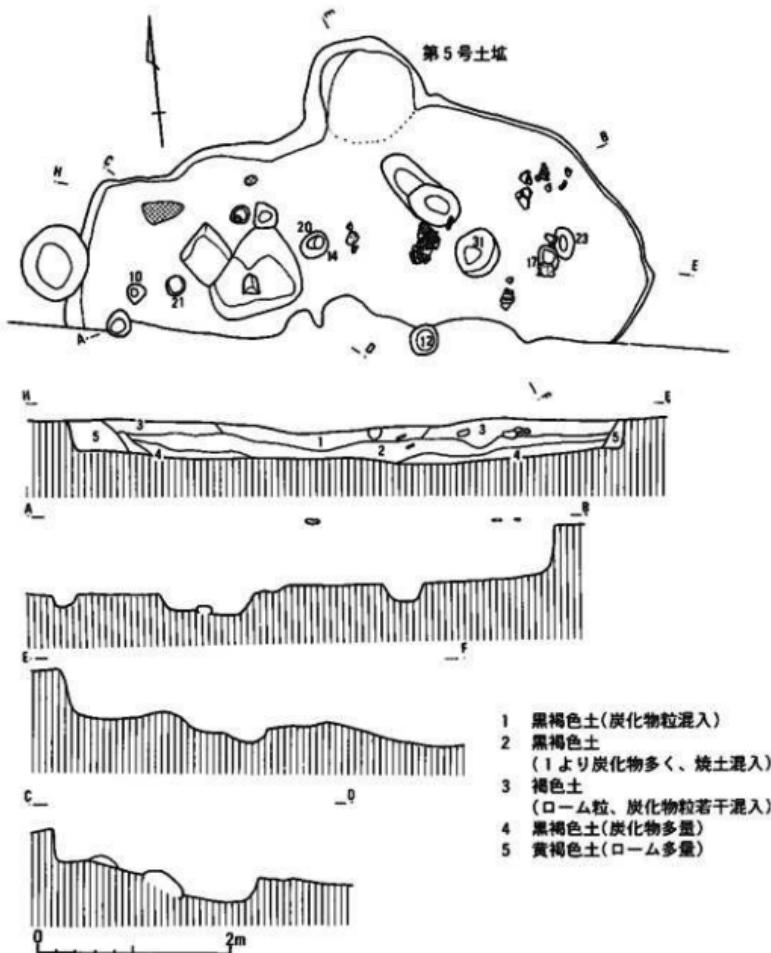
南半分を破壊されており、その規模とプランは不明である。しかし残存部分で径が600cmもあることから相当大きな住居址であったものと思われる。北側で第5号土壙と重複している。確実に炉跡といえるものは発見されていないが、北西隅の床で小さな焼土を見る事ができた。床は中央部分が少し窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がり30cm～50cmの高さである。深鉢形土器の一括



第35図 第1号住居址、第7・10号土壙 (1/60)

土器が出土している。

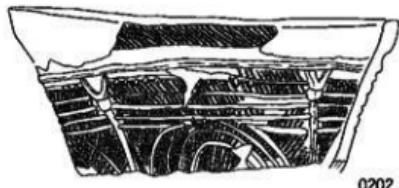
**出土土器**（第37図） 深鉢形土器と有孔土器（0306）がある。深鉢形土器には繩文系（0304）、浮線文系（0303）、沈線文系（0301, 0302, 0305）、刻目沈線文系（0307）がある。繩文系、沈線文系は波状口縁であり、特に沈線文系の0302では強く屈折する口縁部である。0307は口縁部と底部を欠くものであるが、頸部には円形竹管文が連続し、胴部全体には半截竹管による平行沈



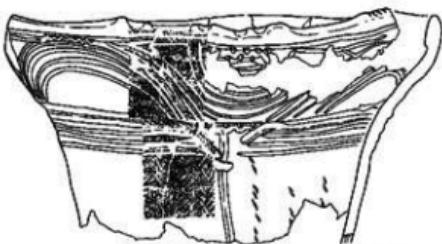
第36図 第3号住居址、第5号土塙 (1/60)



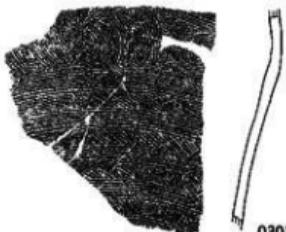
0201



0202



0203



0301



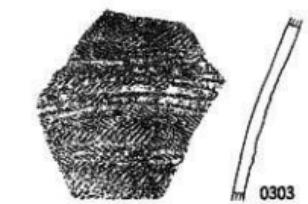
0302



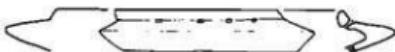
0304



0305

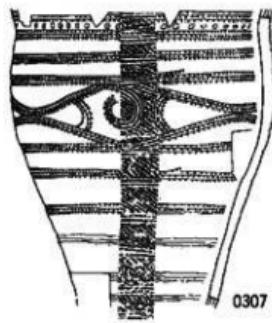


0303



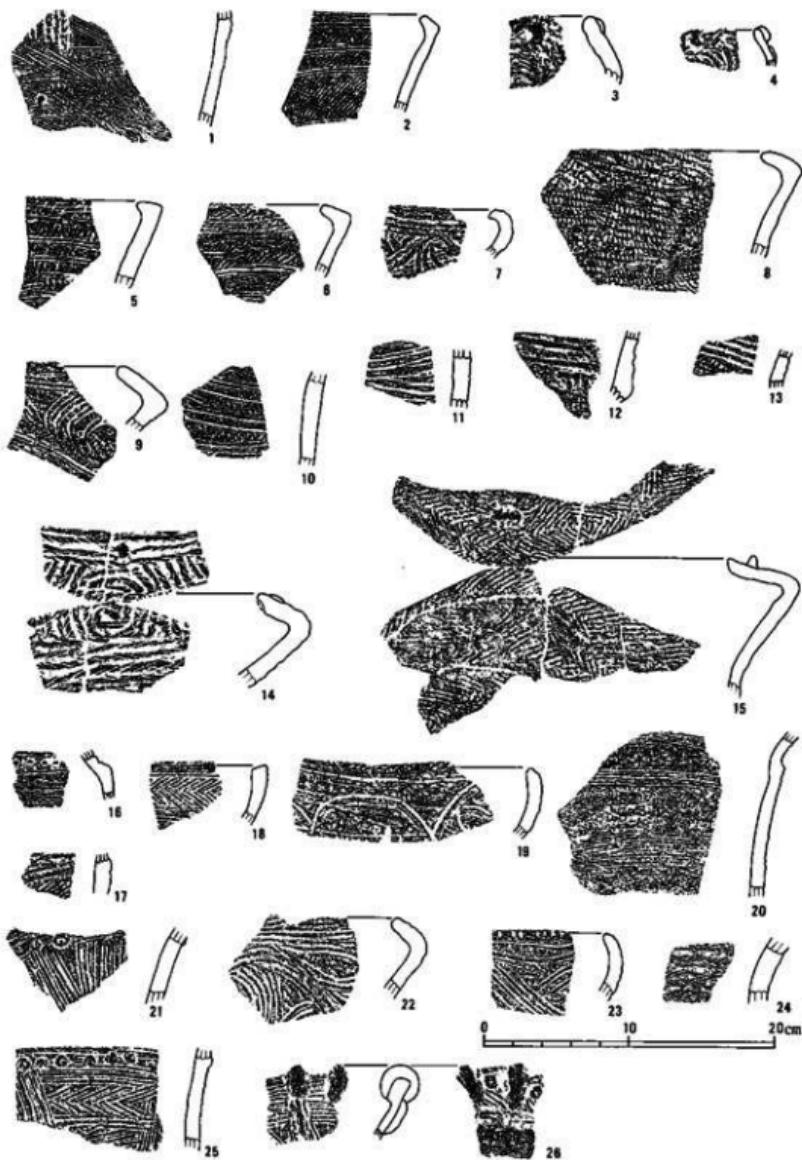
0306

0 10 20cm



0307

第37図 土器実測図（第2号・3号住居址）(1/5)



第38図 土器拓本（第1号・4号・9号・13号・14号・15号・20号・26号・27号・29号）（1/4）

線やループ状の沈線が施される土器。これらの沈線内には細い刺突具による刺突文が連続する。地文には縦文がある。ほぼ床面から出土。

また第91図1のような浅鉢形土器とみられる破片も出土している。頭部に爪形文がみられる。本址は0303や0307のような浮線文や竹管文を伴う古い様相の土器を含むものの、諸磯b式新段階の住居である。

#### 第4号住居址（第39図・図版12）

当初一軒の住居跡かと思われたが、発掘の過程でAとBの二つの住居跡が存在することが明らかになった。北側を4A号、南側を4B号とした。Bの方が新しい。

Aは北側の一部が調査区域外、南側の一部をBに切られているが、推定で直径約600cmの円形プランを呈する。炉跡と考えられる焼土は2カ所確認できたが、いずれも地床炉である。南側の炉跡は丁度Bとの境に位置する。床面は中央が最も低い掘り鉢状で壁と床の境は明確でない。柱穴と思われる竪穴は不規則に多数発見されている。深鉢形土器の一括土器をはじめ多くの土器片が出土している。

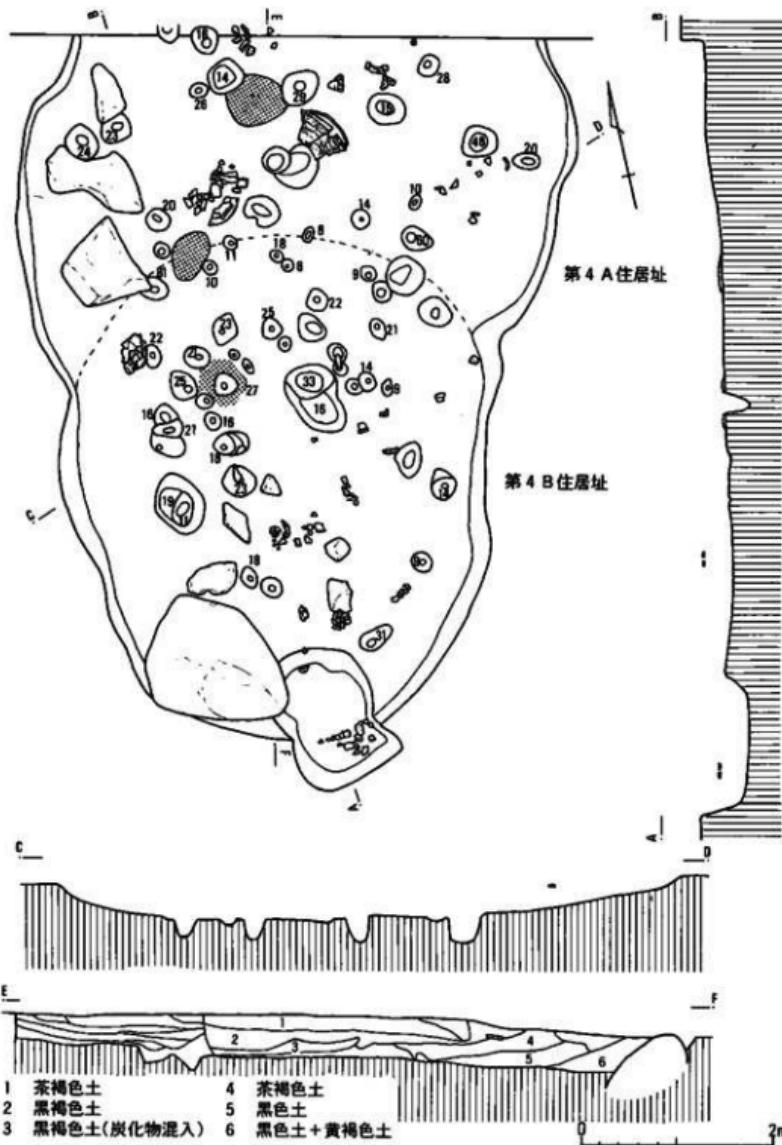
Bは450cm×520cmの梢円形プランを呈し、Aと床面の高さの差はなく、やはり掘り鉢状を呈する。南側で第45号土壤と重複している。土層断面の観察では北側の壁はほぼ垂直に立ち上がって45cmの高さを示している。地床炉と思われる焼土が住居址中央よりやや北西で認められるが真ん中に小竪穴が存在しドーナツ状の焼土となっている。柱穴も不規則で多数発見されている。この住居址からは本遺跡唯一の縦文時代前期の板状の土偶が出土している。土器も有孔土器の一括土器をはじめ多くの土器片が出土した。

出土土器（第40図）（第38図） 深鉢形土器と有孔土器がある。まず深鉢形土器では0401～0403, 0406, 0407があるが沈線文系が主体である。0401は底部を欠く以外全体の分かれる深鉢形土器で、頭部のくびれと「く」の字形に強く屈折する口縁部を特徴とする。ゆるい波状口縁の波頂部に円形貼付文がみられ、以下地文縦文で数条一組の平行沈線が走る。0402, 0403とともに口縁部破片。口縁部の湾曲は0401よりも弱く、頭部文様帯も明瞭である。0406は無文土器下半部。0407は沈線系の底部破片。0404, 0405, 0408, 0409は有孔土器。特に0405は口縁の一部を欠く以外ほぼ完形。丸底や胴上部の鉗状の張り出しが特徴的である。他は破片であるが0404はさらに肩が張っており、鉗の張り出しが強い。第38図2～4・8は深鉢形土器口縁部小破片。3・4は浮線文系の土器。

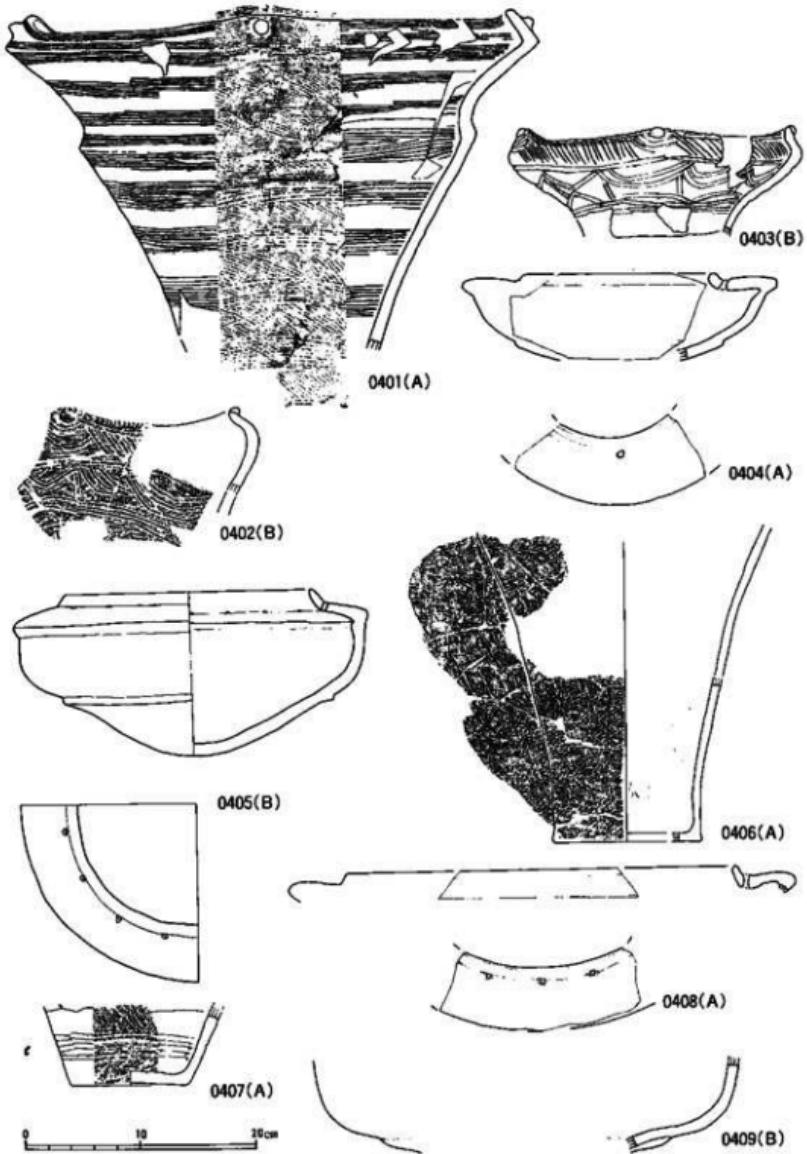
以上について0401, 0404, 0406～0408が4A住居、0402, 0403, 0405, 0409、第38図3・4が4B住居の出土。なお第91図2・3は4B住居から出土した浅鉢形土器とみられる破片。また4B住居からは土偶1点（第164図1）も出土している。石器類の出土も多く、特に石鏃・打製石斧・磨石などが目立っている。4A・4Bともに諸磯b式新段階の住居である。

#### 第5号住居址（第41図・図版12）

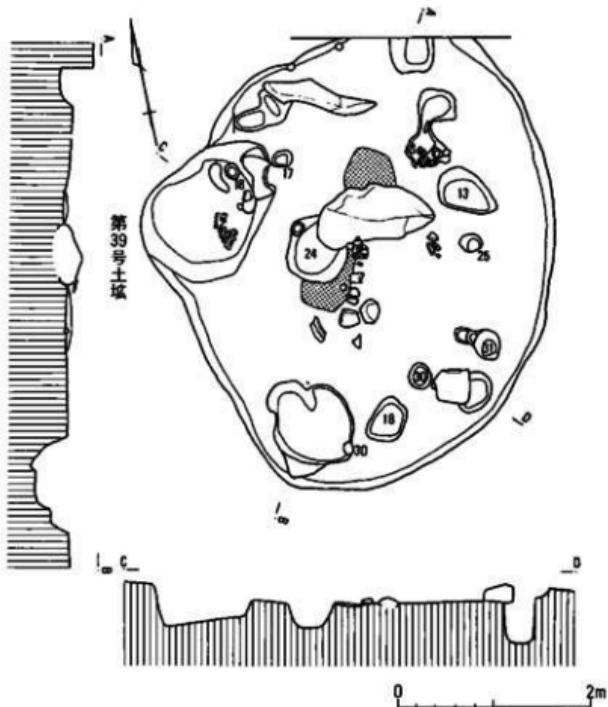
北側のごく一部が調査区域外ではあるが、500cm×400cmの梢円形プランを呈する住居址と考



第39圖 第4 A・4 B号住居址 (1/60)



第40図 土器実測図（第4A・4B号住居址）(1/5)



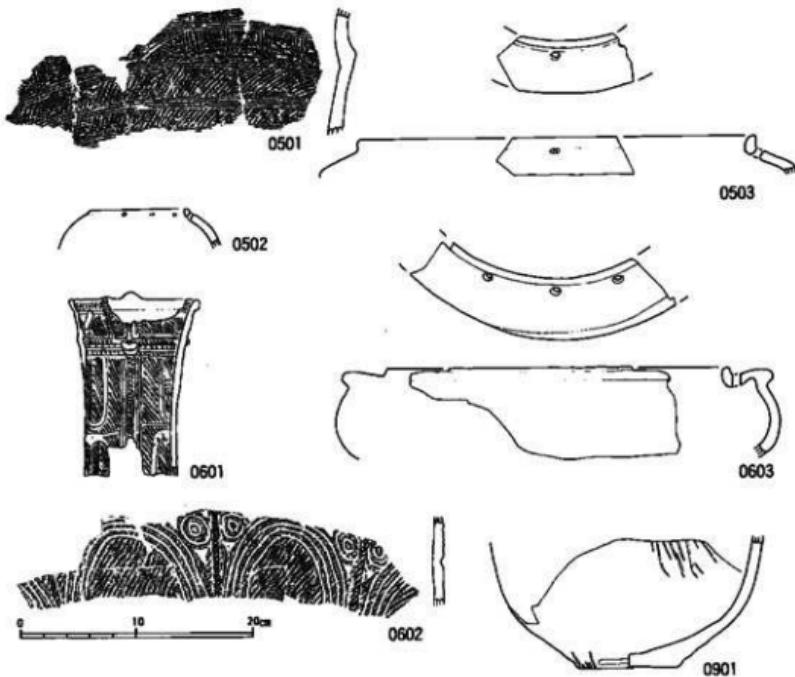
第41図 第5号住居址、第39号土壤 (1/60)

えて間違いないであろう。西側で39号土壤と重複している。床はほぼ水平で壁の立ち上がりは15cm前後である。住居址のはば中央で大きな自然石が露出しているが、その石の南北に2カ所地床炉が確認された。ともに石の脇で火を焚いたようであるが南側の焼土は小竪穴に切られている。柱穴は不規則に多数存在する。3個体ほどの一括土器を出土している。

**出土土器（第42図）**（第91図4） 0501は深鉢形土器の胴部破片。地文繩文に半截竹管文による沈線文系の土器。床面からの出土。0502, 0503、第91図4は有孔土器破片。4は有文で爪形文風の刻目が連続する。特に口縁直下の平行刻目文はヘラ切り浮線文を意識したものであろう。これらは諸磯b式新段階である。

#### 第9号住居址（第43図・図版13）

直径約400cmの円形プランを呈すると思われるが、細かく表現すれば胴張りの隅丸三角形とも言える形態である。南東側で平安時代の第8号住居址に切られている。また近世の溝と思



第42図 土器実測図（第5号・6号・9号住居址）(1/5)

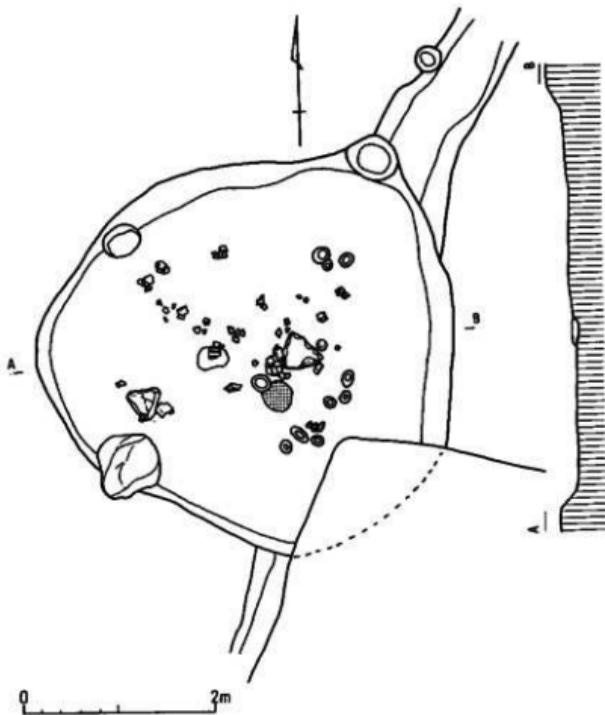
42

われる第1号溝跡が住居址東側を貫いて走っていたが浅いために住居址には大きな影響はなかった。床はほぼ水平で壁は緩やかに立ち上がり20cmの高さを測る。2カ所の地床炉を持つが焼土の規模は小さい。主柱穴と思われる豊穴の存在は明確ではない。床面には直徑20cmにも満たない小さな豊穴のみが多数集まって存在しており、それらが柱穴として機能していたかどうかは疑問である。繩文土器片を数多く出土している。

出土土器（第42図）（第38図） 0901は深鉢形土器下半部破片。斜め方向に沈線がいくぶん認められる。第38図5～7は口縁部破片。5・6は緩い波状口縁の谷部破片と思われ、短く「く」の字形に屈折する口縁部分。いずれも沈線文系。7は浮線文系。これらは諸磯b式新段階の土器。

#### 第10号住居址

壁はすでに削平されていて残っていないため正確な形状・規模は不明である。しかし柱穴と思われる豊穴の配置や残っている床面の範囲等から推測すると約400cm×約350cmほどの円形プランを呈する住居址と考えられる。4カ所にわたり焼土が散在しており、炉跡の形態は地床炉であろう。

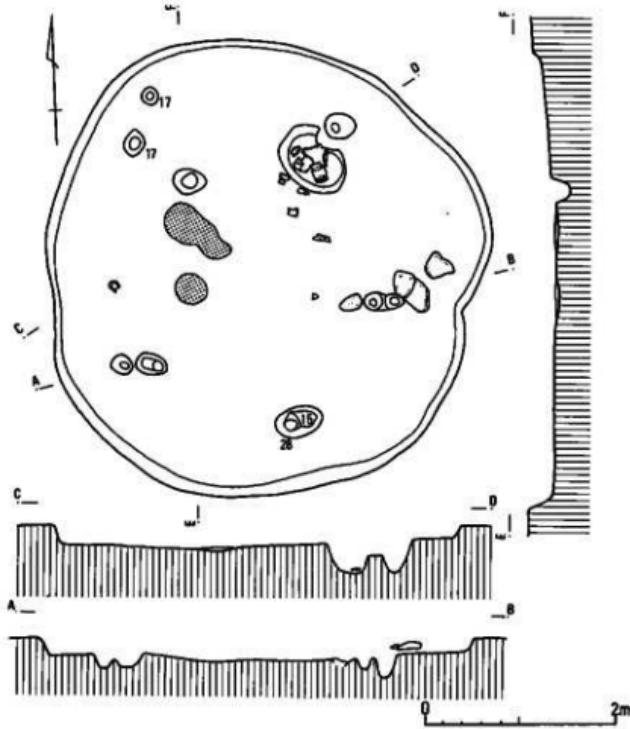


第43図 第9号住居址 (1/60)

#### 第11号住居址 (第44図・図版13)

直径約500cmの円形プランを呈する住居址である。第2号集石遺構が住居址の上面に存在しているが床面までは擾乱は及んでいなかった。床はほぼ水平で壁も垂直に近い角度で立ち上がり20cm前後の高さを示す。炉跡は2カ所の地床炉が存在するが北側の方が南側のものより倍ほど大きい。柱穴と考えられる竪穴が9本存在しているが、この遺跡の住居址には珍しく比較的規則正しく壁に沿って並んでいる。中心よりやや北側に径80cm×50cm深さ約40cmの小竪穴が見られ、中から深鉢形土器が出土した。

出土土器 (第46図) 1101は沈線文系の土器で、4単位の緩い波状口縁をなし、波頂部直下に円形貼付文がある。口縁部は「く」の字形に屈折する。住居内土壤から出土。地文繩文。1102は繩文の施された深鉢形土器下半部。第38図9も本址出土の口縁部破片。諸磯b式新段階の土器である。



第44図 第11号住居址 (1/60)

第12号住居址 (第45図・図版13)

南側の約3分の1が削平されているが直径約370cmの円形プランを呈すると思われる。床面はほぼ水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり20cm~40cmの高さを示す。柱穴に使用されたと考えられる竪穴は多数存在するが規則性はない。住居址のほぼ中心に地床炉が確認できた。住居址北西側の壁際に小竪穴が存在しており住居に伴うものと考えられる。この住居址からは多數の一括土器が出土した。

**出土土器 (第46図)** 1201は深鉢形土器の口縁部破片。強く開く器形で、口縁は短く「く」の字形に屈折する。地文繩文で半截竹管文による平行沈線がめぐるが、口縁部には曲線的な沈線もみられる。1202も沈線文系の深鉢形土器で、胴下部を欠く。強く開く器形は1201と同様であるが、頂部の高い波状口縁である。器壁が剥落していることもあり、胴部沈線はとぎれがちである。1203も沈線文系深鉢形土器の胴部。これらの土器は北壁側からまとめて出土。諸磲b式新段階。

### 第13号住居址（第47図・図版14）

直径約500cmの円形プランを呈する住居址である。南東側で第59号土壇と重複している。床面は水平で住居址の中心に地床炉が存在する。壁は緩やかに立ち上がっており床との境は明白ではない。柱穴と思われる竪穴は数多く存在するが深さ約30cmほどのものがほぼ等間隔で5つ並んでいるためそれらが主柱穴と思われる。

出土土器（第38図） 10は深鉢形土器の脚部小破片。沈線文系諸磯b式新段階の土器である。

### 第14号住居址（第48図・図版14）

450cm×400cmの横円形プランを呈する住居址で南側を第3号

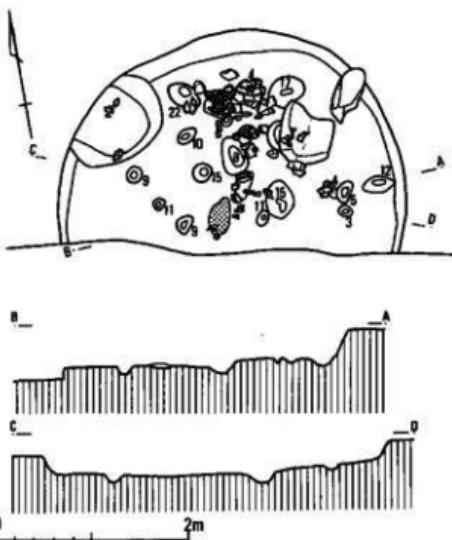
集石造構に切られ、北側で第15号住居址を切っている。床面はほぼ水平で南東側の壁は削られており床面しか存在しない。残っている壁もその高さは10cmほどしかない。柱穴は北側の第15号住居址との重複部分が広く所属が明確には把握できなかった。炉跡は住居址中心よりやや南西の位置に地床炉が確認された。この住居址からは灰状耳飾と一括土器が出土している。

出土土器（第38図） 14・15および第91図5が本址出土土器。14は浮線文系の深鉢形土器口縁部破片。緩い波状口縁をなすものと思われ、波頂部分に円形の貼付文がみられる。浮線には刻みが連続する、いわゆるヘラ切り浮線と呼ばれるものである。15は繩文系の深鉢形土器口縁部破片。器形や波頂部直下の貼付文などは14と共通する。第91図5は有孔土器の破片で、木葉文に繋がるような文様がみられる。以上諸磯b式新段階の土器であろう。

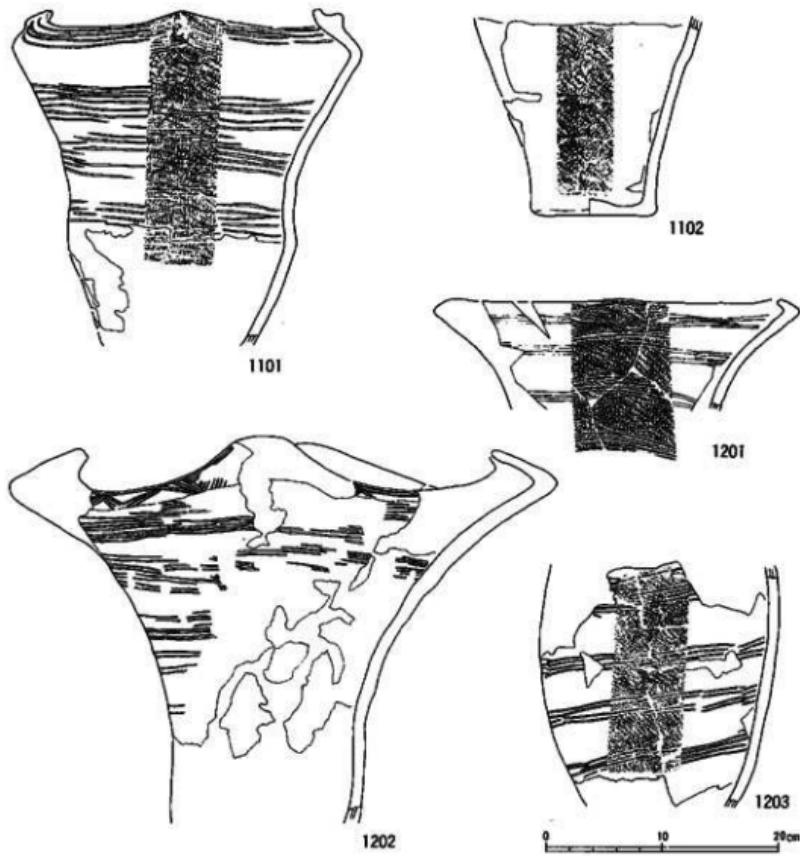
### 第15号住居址（第48図・図版14）

第14号住居址に南側半分を切られている。逆に北側では第16号住居址を切っている。床面はほぼ水平で住居址中心に地床炉が存在する。壁の高さは約10cmほどである。第14号住居址の場合と同様に柱穴の配置は正確には把握できないが、住居址の北東半分の範囲からは竪穴は一つも検出できなかった。

出土土器（第38図11～13） いずれも小破片であるが、11と13は沈線文系深鉢形土器とみられる。12は浮線文系土器の破片。浮線上には刻みはない。



第45図 第12号住居址 (1/60)



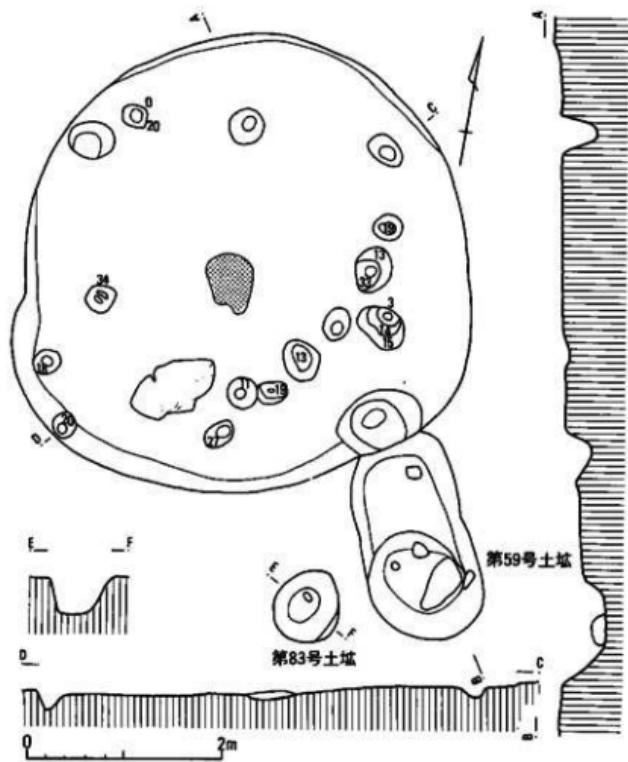
第46図 土器実測図（第11号・12号住居址）(1/5)

#### 第16号住居址（第49図・図版14）

直径約400cmの円形プランを呈する住居址である。南西側に壁を残すのみで南側の一部を第15号住居址に切られている。床面はほぼ水平で炉跡は住居址中心からやや西側に地床炉が発見された。柱穴は深さ20cm前後の堅穴が多数存在しており規則性は見られない。

#### 第17号住居址（第50図・図版16）

北側の一部で第97号土壤と重複しており南側の約半分を削平されていて正確な住居址プランを把握することはできないが、直径約350cmほどの円形プランではないかと考えられる。床面

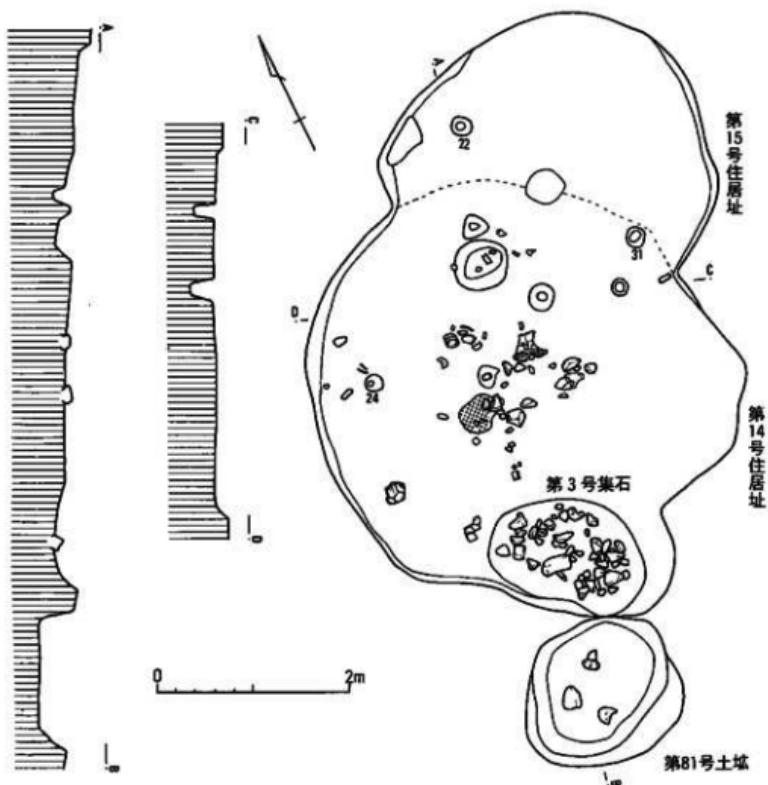


第47図 第13号住居址・第59・83号土塙 (1/60)

はほぼ水平で炉跡は確認できなかった。柱穴については深さ30cmほどの堅穴が1つと10cm前後のものが3つしか検出できず実体は不明である。壁は垂直に近い角度で立ち上がり高さ約20cmを測る。

#### 第18号住居址（第51図・図版16）

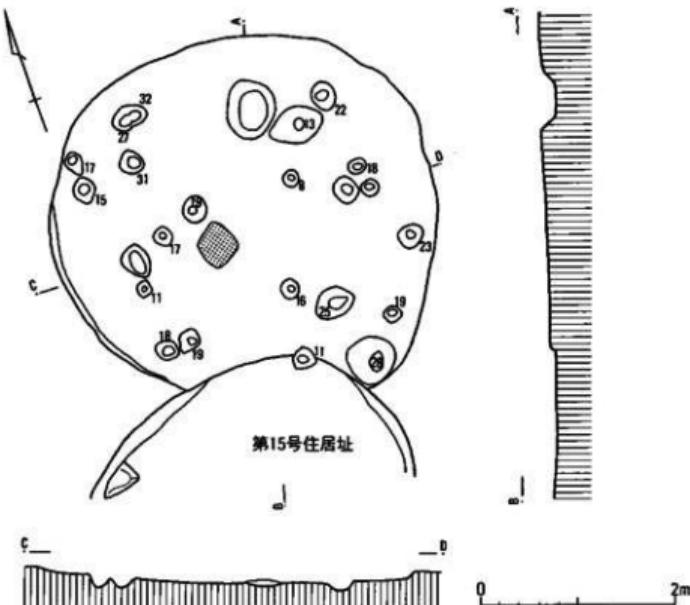
直径が420cmのうつくしい円形プランを呈する住居址である。西壁で中期の第100号土塙に切られているが破壊は床面までは及んではない。床面は水平に近いが中心部分がやや低くなっている。所々に自然石が露出したままになっている。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がり20cmほどの高さを示すが、はかは緩やかに立ち上がり床面との境は明白でない。炉跡は住居址中心より南西に大きな地床炉が存在するが、それ以外に北西の壁際に小さな焼土も存在する。柱穴については深さ30cm前後の堅穴が4～5本等間隔に掘られており、それらが主柱穴ではないかと



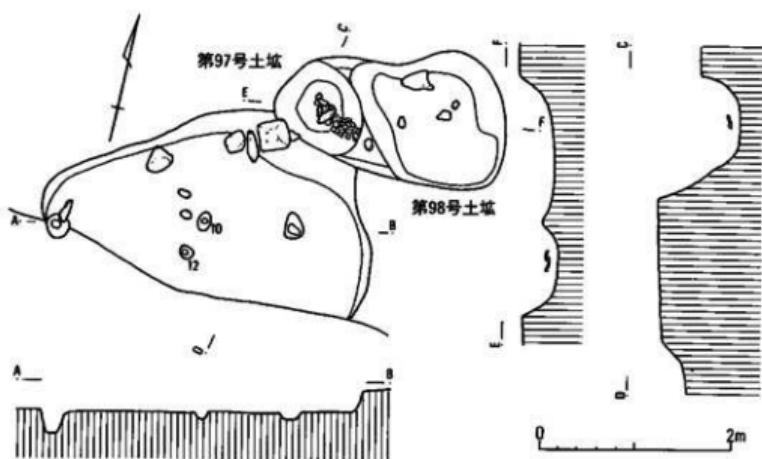
第48図 第14号・15号住居址、第81号土塙、第3号集石 (1/60)

考えられる。その他に小さな堅穴も数多く存在するが深さが10cm前後である。この住居址からは多量の一括土器や石器類が出土している。

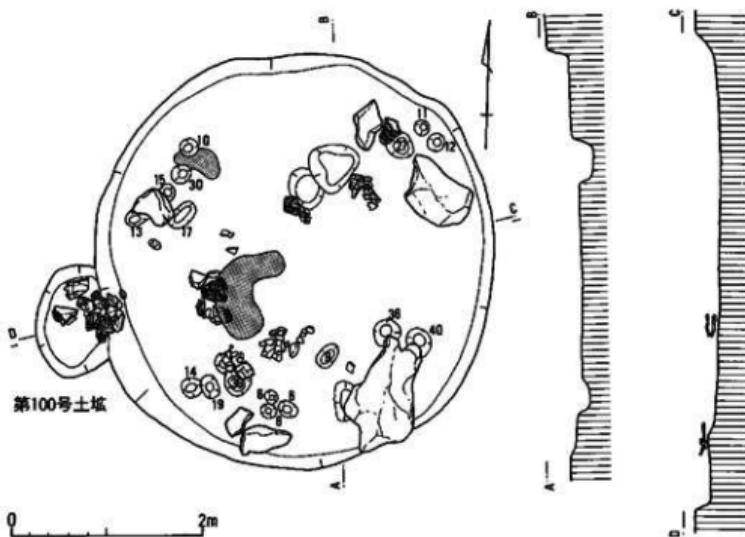
**出土土器（第54図）** 1801は沈線文系深鉢の破片で「く」の字形口縁。1802も同様の土器であるが口縁部の屈折はゆるやか。1803は浮線文系の深鉢形土器。地文は繩文で、浮線上の刻目は細く繊細ながら浮線は太い。口縁部を欠く。1804はほぼ完形の深鉢形土器。全面羽状繩文の土器であるが、胴部中位が膨らみ、キャリバー形が意識されている。1803、1804が床面出土。諸磯b式中段階の土器であろう。



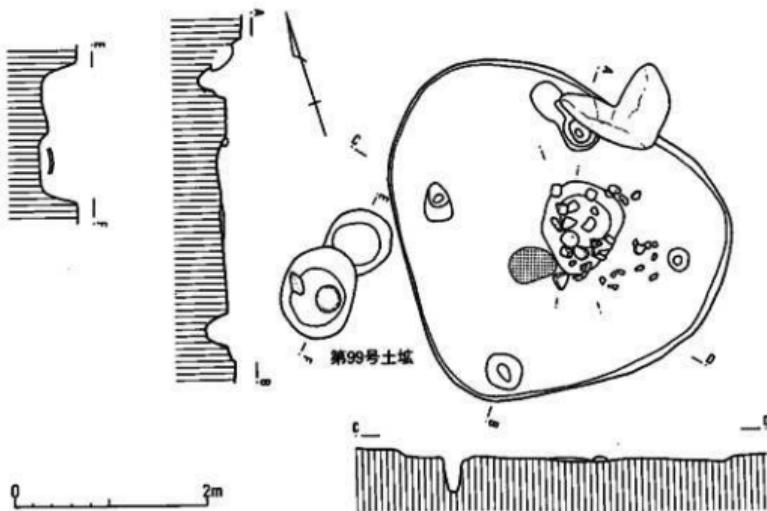
第49圖 第16號住居址 (1/60)



第50圖 第17號住居址、第97・98號土壤 (1/60)



第51図 第18号住居址、第100号土壤 (1/60)



第52図 第20号住居址、第99号土壤 (1/60)

### 第19号住居址（第53図・図版17）

この遺跡の縄文前期の住居址群の中でも最大級の大きさの住居址で750cm×650cmの橢円形プランを呈する。床面はほぼ水平であるが中心部分がやや低くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり20cm～50cmの高さを測る。炉跡は住居址中心より西側に地床炉が存在する。柱穴と考えられる竪穴は数多く存在するが深さ30cm前後のものが8個壁に沿って規則的に並んでいる傾向がみられ主柱穴の可能性がある。出土遺物の多くは土器片である。

**出土土器（第54図）** 1901と1903とは縄文系の深鉢形土器。いずれも口縁部は「く」の字形に強く屈折するキャリバー形であるが、特に1903は著しい。緩やかな波状口縁をなしている。1901では波頂部に円形の貼付文がみられる。1902と1904とは沈線文系の土器。1902は浅鉢形土器に近い小型土器。底部を欠く破片であるが、底は丸底風とみられる。口縁部は強く内湾する。1904は深鉢形土器の胴下半部。地文縄文で、沈線は整然とした単位ではなく雜に集合している。1903は床面に潰れた状態で出土。諸磯b式新段階の土器である。

### 第20号住居址（第52図・図版17）

380cm×340cmの不正円形プランであるが、第9号住居址と同じような隅丸胴張り三角形ともいえるような形状を呈する。床面は水平で壁は緩やかに立ち上がり高さは約10cmを測る。住居址のほぼ中央に第4号集石遺構がつくられていて床面の一部が破壊されている。その集石遺構のすぐ西側に地床炉が確認できた。柱穴は主柱穴と考えられるものが4つ存在している。

**出土土器（第38図16・17）** いずれも深鉢形土器の破片であろう。16は沈線文系の土器の頸部付近の破片と思われ、円形竹管文と半截竹管文とで装飾されている。地文には縄文がみられる。17は浮線文系の破片。

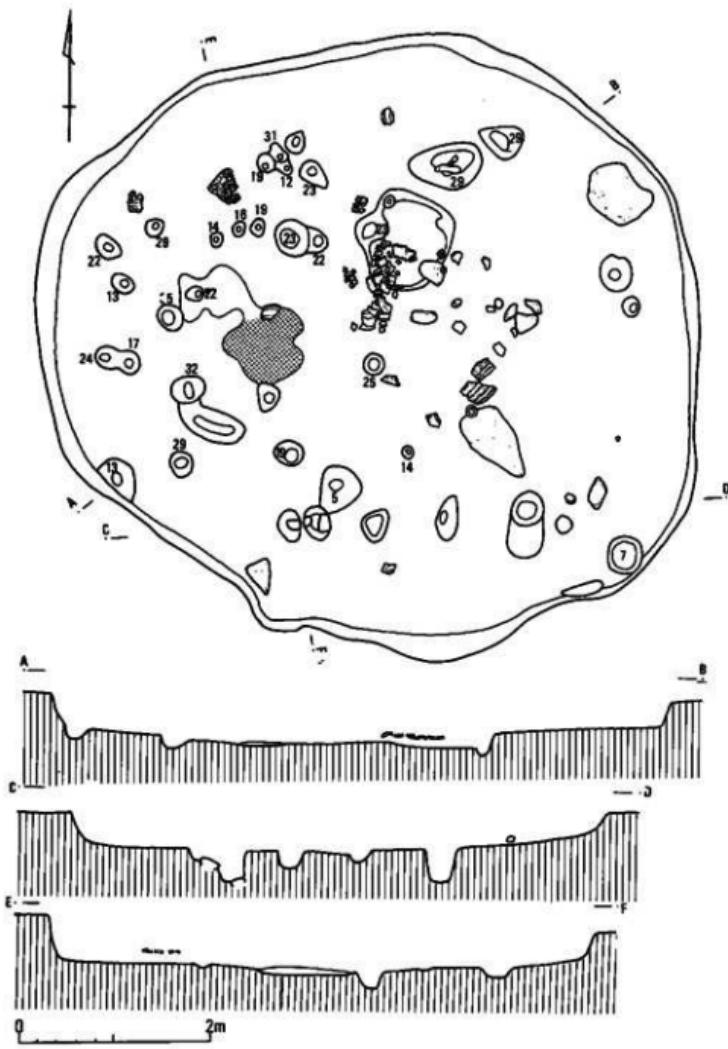
### 第21号住居址（第55図・図版18）

南側の一部を削平されて消失しているが、500cm×450cmほどの橢円形プランを呈する住居址と考えられる。床はほぼ水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり40cm～50cmの高さを測る。発掘された範囲のはとんどで壁際を周溝がめぐっている。幅は10cm～20cm、深さは5～6cmほどである。炉跡は住居址中心からやや西側に1カ所、それと壁との間にもう1カ所の2カ所に地床炉が存在する。柱穴の配置は、住居址の西半分に竪穴が全く確認できなかつたためよく解らない。自然石の露出が極めて多い住居址である。

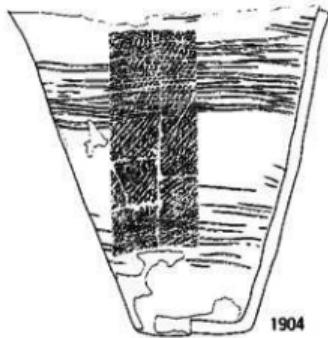
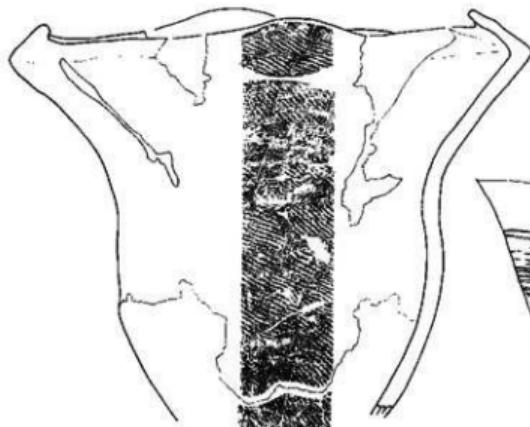
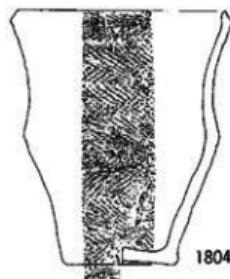
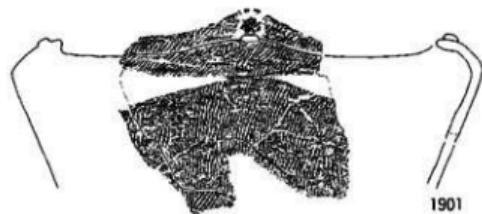
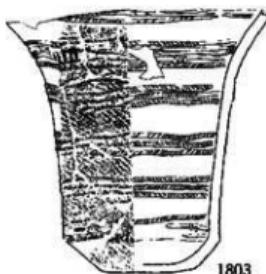
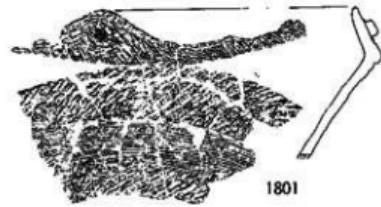
**出土土器（第57図）** 2101は小型の壹形風の土器。破片のため詳細は不明。2102は有孔土器とみられる破片。肩部が著しく張り、鉤状になっている。2103は縄文系の深鉢形土器上半部。緩やかな波状口縁部である。これらは諸磯b式土器である。なお本址からは石製の玦状耳飾1点（第189図2）が出土している。

### 第23号住居址（第56図・図版18）

南北軸430cm×東西軸380cmの隅丸胴張り長方形プランを呈する住居址である。北東隅で第

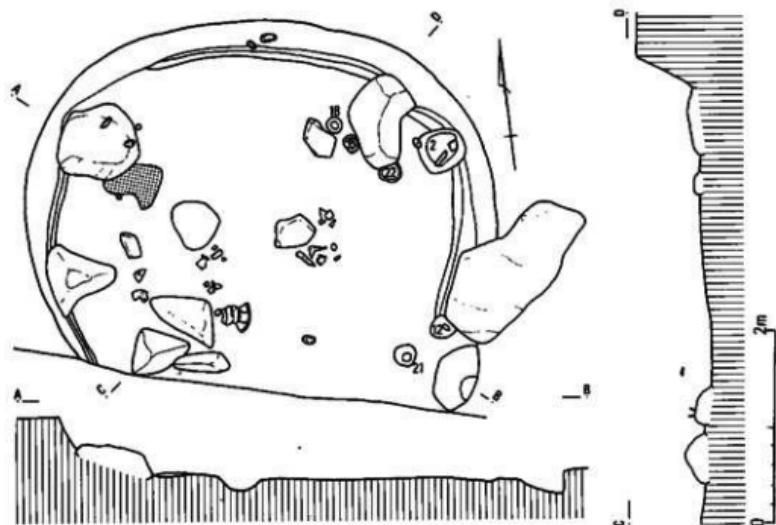


第53図 第19号住居址 (1/60)

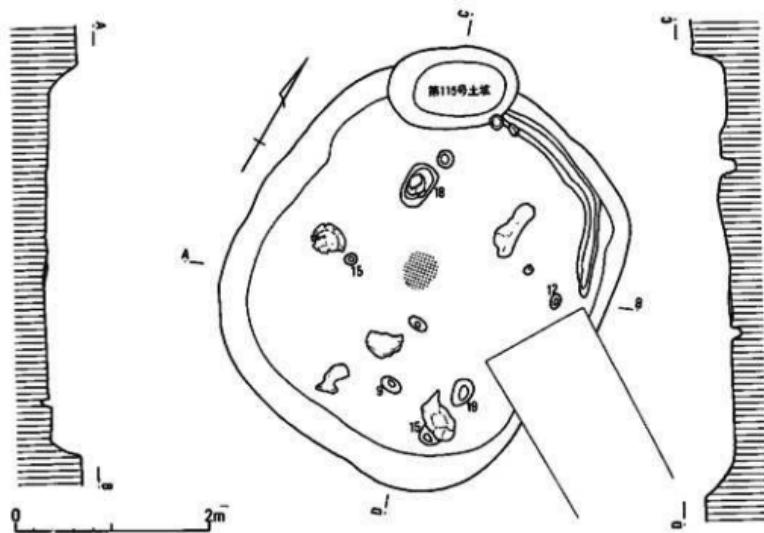


0 10 20cm

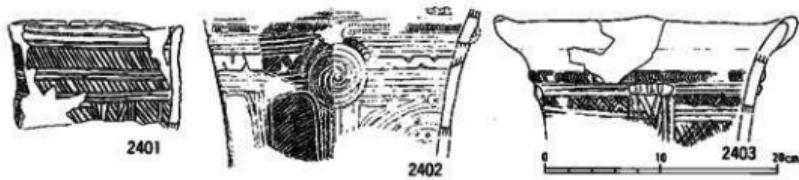
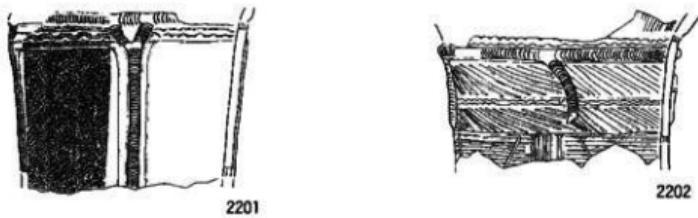
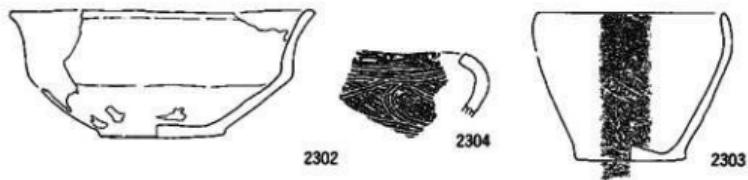
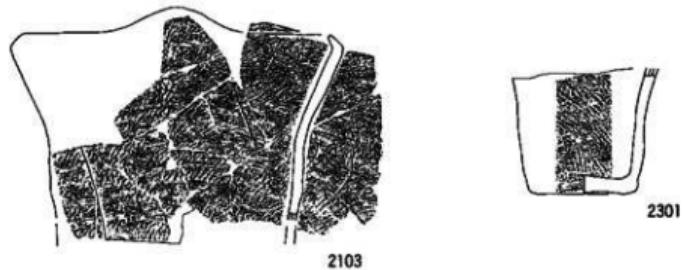
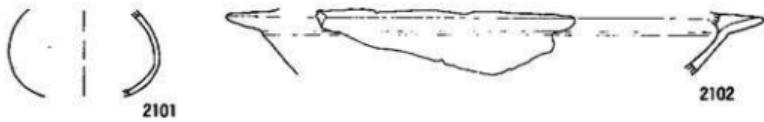
第54図 土器実測図（第18号・19号住居址）(1/5)



第55図 第21号住居址 (1/60)



第56図 第23号住居址、第115号土塁 (1/60)



第57図 土器実測図（第21号～24号住居址）(1/5)

115号土壙と重複している。また住居址の上を第2号溝跡が横切っており東壁の一部と床面が破壊されている。床は水平で壁はやや傾斜をもって立ち上がっており高さは30cm～40cmを測る。住居址北壁から北東隅あたりにかけて幅20cm×深さ10cmで周溝が存在している。炉跡は住居址のほぼ中心に地床炉が確認された。住居址の整然とした形態と比べて柱穴は貧弱で主柱穴と考えられるものは特定できない。

出土土器（第57図） 2301は縄文系の深鉢形土器下半部。2302は無文の浅鉢形土器。口縁の一部を欠く。胴部の綫や外反する口縁部など諸種a式以来の古い形態を残す。2303は小型の鉢形土器。全面縄文が施される。2304は沈線文系深鉢の破片。口縁は丸みを帯びて内湾する。以上は諸種b式土器中段階であろう。

#### 第25号住居址（第58図・図版19）

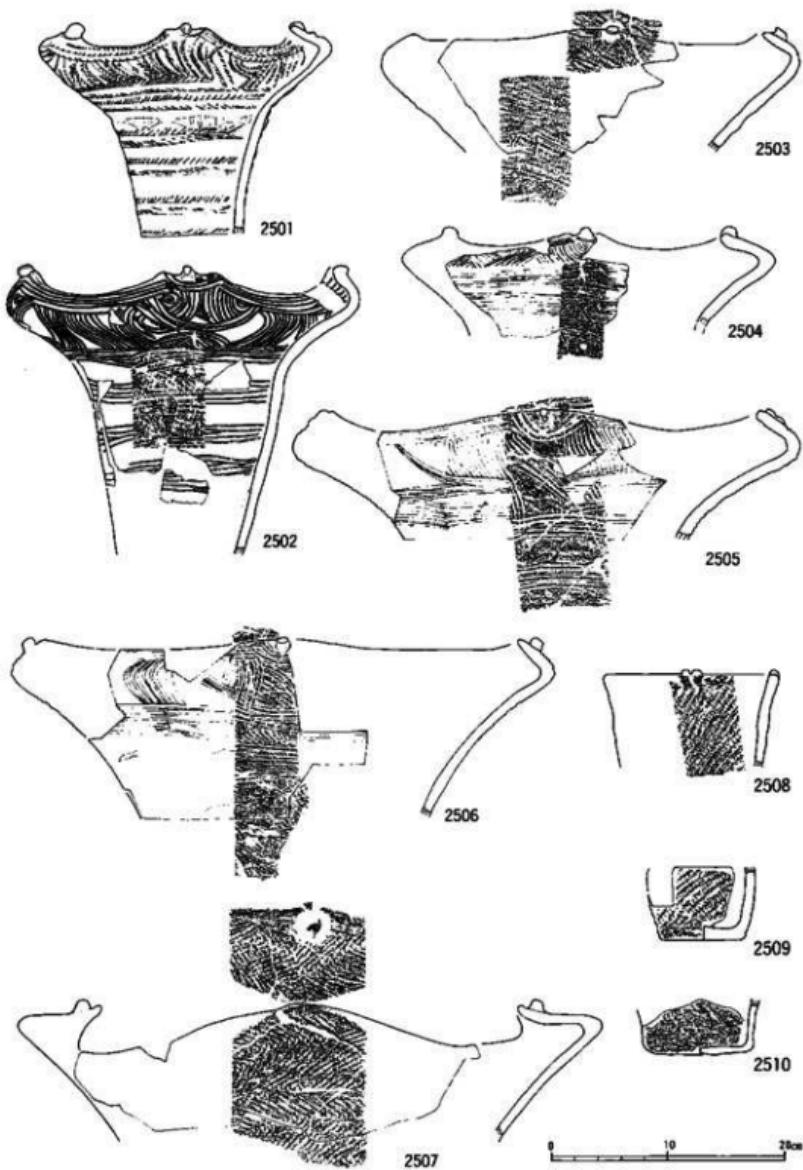
住居址の壁際で第107・117・118・119号土壙の4基の土壙と重複している。そのため確認されたプランは約直径400cmほどの不正円形としておく。床面はほぼ水平で所々に大小の自然石が露出している。壁はやや角度をつけて立ち上がり高さ40cmを測る。床面で確認できた竪穴は4基あるが皆浅いもので積極的に柱穴とは断定できない。炉跡も確認できなかった。しかし遺物は一括土器や石器などが大量に出土した。住居址を中心よりやや西側の拳大的礫の集まりは住居址とは別の集石遺構の可能性もある。

出土土器（第59図・第60図） 深鉢形土器・有孔土器・浅鉢形土器など多くの土器が出土。これらは床面から浮いた状態で出土しており一括廃棄の可能性が高く、従って時期的にも近いものと考えられるものである。

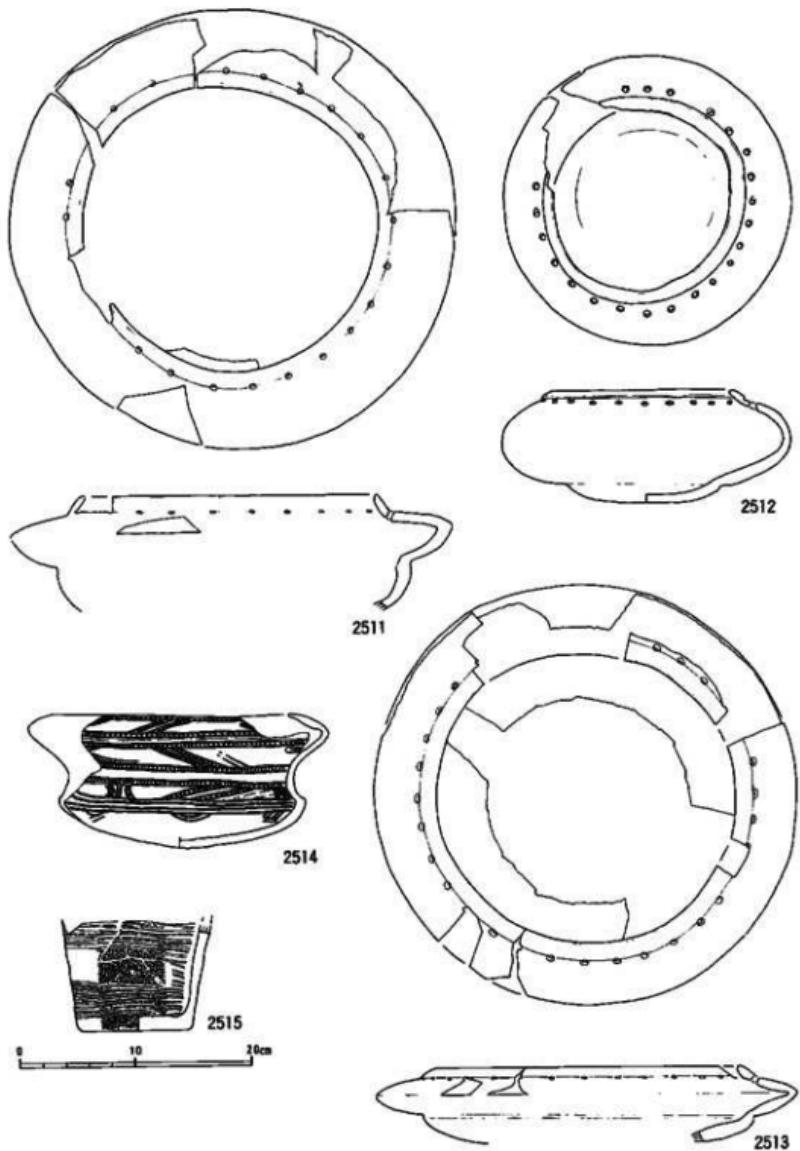
深鉢形土器では浮線文系・沈線文系・縄文系がある。



第58図 第25号住居址、第107・117・118・119号土壙 (1/60)



第59図 土器実測図（第25号住居址）(1/5)



第60圖 土器実測図（第25号住居址）(1/5)

(浮線文系) 2501 底部を欠く以外ほぼ完形。「く」の字形に強く屈折する4単位の波状口縁で、波頂部にはイノシシ把手が衰退したとみられる小突起が付く。口縁部文様帯は曲線浮線、胴部は平行浮線を主体とする。浮線上には細かい刻目が連続するが、胴部の縦浮線を伴う横浮線には刻目がみられない。

(沈線文系) 2502 胴下半部を欠くが器形の上からは浮線文系の2501とよく似る。口縁の屈折にやや丸味がある。文様構成も2501に類似しており、口縁部が曲線文、胴部が平行線文である。なお口縁部・胴部ともに地文として織文が施される。2504~2506は口縁部破片であるが、器形・文様構成など2502に類似する。ただし2504は口縁の屈折が強く、曲線文帯も屈折部から口縁までと幅が狭く、頸部以下平行沈線ないし集合沈線となる。2505・2506は大型の深鉢形土器で、口縁の波状もゆるやかである。波頂部の突起も円形貼付文となっている。いずれも地文織文であるが2506の胴部には結節織文がみられる。2515は胴下半部破片。

(織文系) 2503・2507が浮線文系や沈線文系の器形と類似している。いずれも緩やかな波状口縁をなし、波頂部に円形貼付文を持つ。2507の口縁部屈折は非常に強い。2503は斜織文、2507は羽状織文。2508はこれまでの器形とは異なった筒状の深鉢形土器。口縁部に小突起がある。2509・2510とともに底部付近の破片。

有孔土器 2511・2513は肩の屈折が強く鉗状に張り出した類似する器形のもの。短い口縁部は内傾して立ち上がる。いずれも底部を欠くが、丸底であろう。赤褐色を呈する焼成良好な土器。2512は口径16cmとやや小型。2511のように肩の屈折はなく、胴部全体に丸味のある器形。口縁は内傾するがやや肥厚した口縁部である。色調赤褐色焼成良好。口縁の一部を欠くもののはば完形。

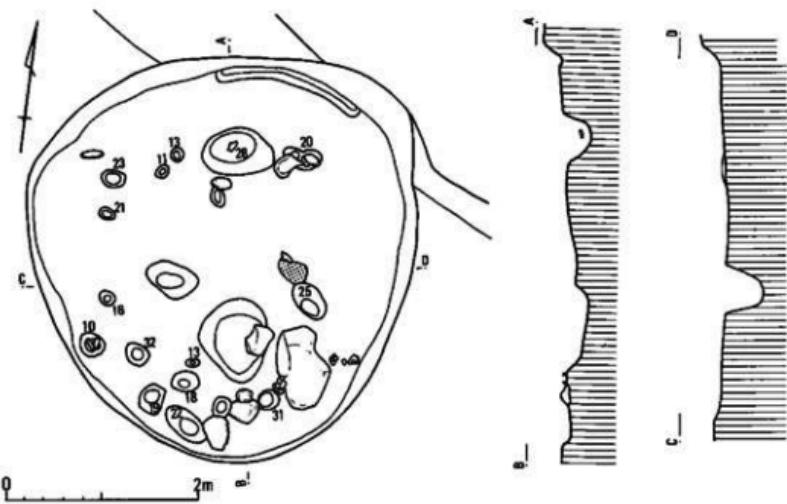
浅鉢形土器 2514 平行半截竹管文と爪形文とから構成される文様の土器。丸底で胴部がくびれる特徴的な器形。1902と共に通する器種である。色調は明るい茶色を呈する。半欠品。

以上諸磽 b 式の新段階の一括土器である。

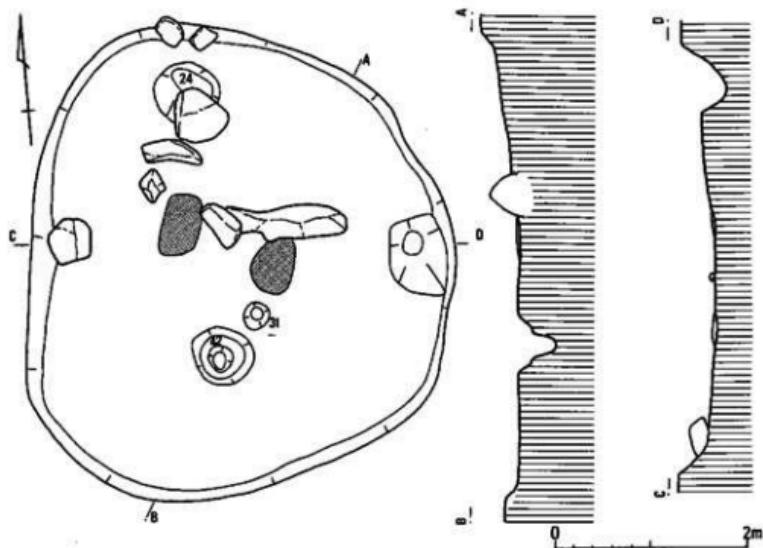
#### 第26号住居址（第61図・図版19）

直径約400cmの不正円形プランであるが、先にあげた第9号住居址や第20号住居址と同様に隅丸洞張り三角形とでも表現できる形である。北東を第2号溝跡が横切っているが床面までは破壊は達していない。床面はほぼ水平であるが住居址中心部分が若干低い。住居址北側に一部狭い範囲ではあるが周溝が存在し幅は10cm深さ5cmである。壁はやや傾斜をもって立ち上がり高さは5cm~20cmを測る。炉跡は住居址中心からやや東側に小さな地床炉が確認できた。本住居址からは大形の磨製石斧が出土している。

出土土器 第38図18~20がある。いずれも深鉢形土器破片。18は細かい沈線が羽状に入る口縁部破片。19はゆるく内湾する器形で沈線による曲線がみられる。地文織文の沈線文系の土器であろう。20も沈線文系土器の胴部破片。屈折部があり、第4号住居出土の0401に共通する土器であろう。18は諸磽 c 式古段階の土器、19・20は諸磽 b 式新段階の土器。



第61図 第26号住居址 (1/60)

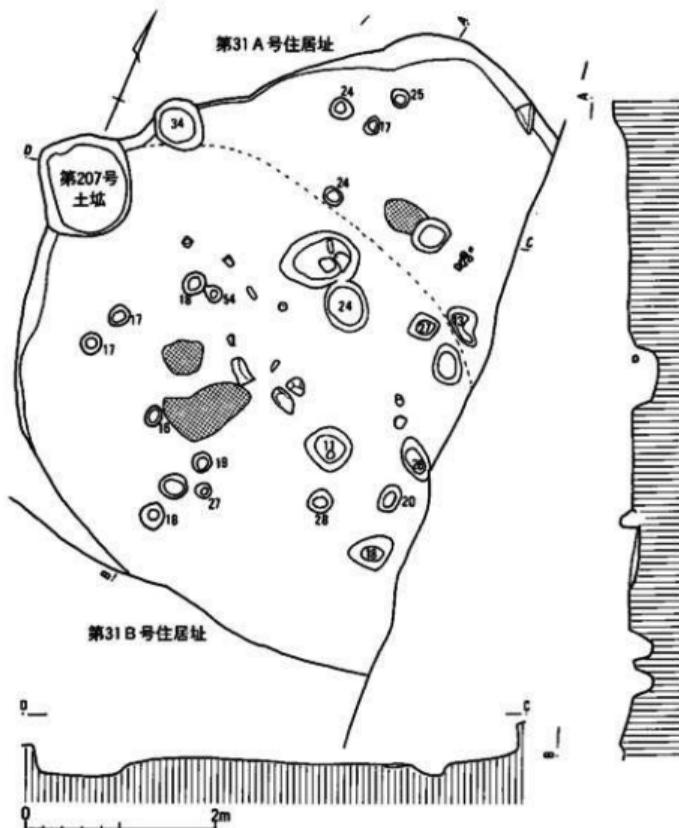


第62図 第27号住居址 (1/60)

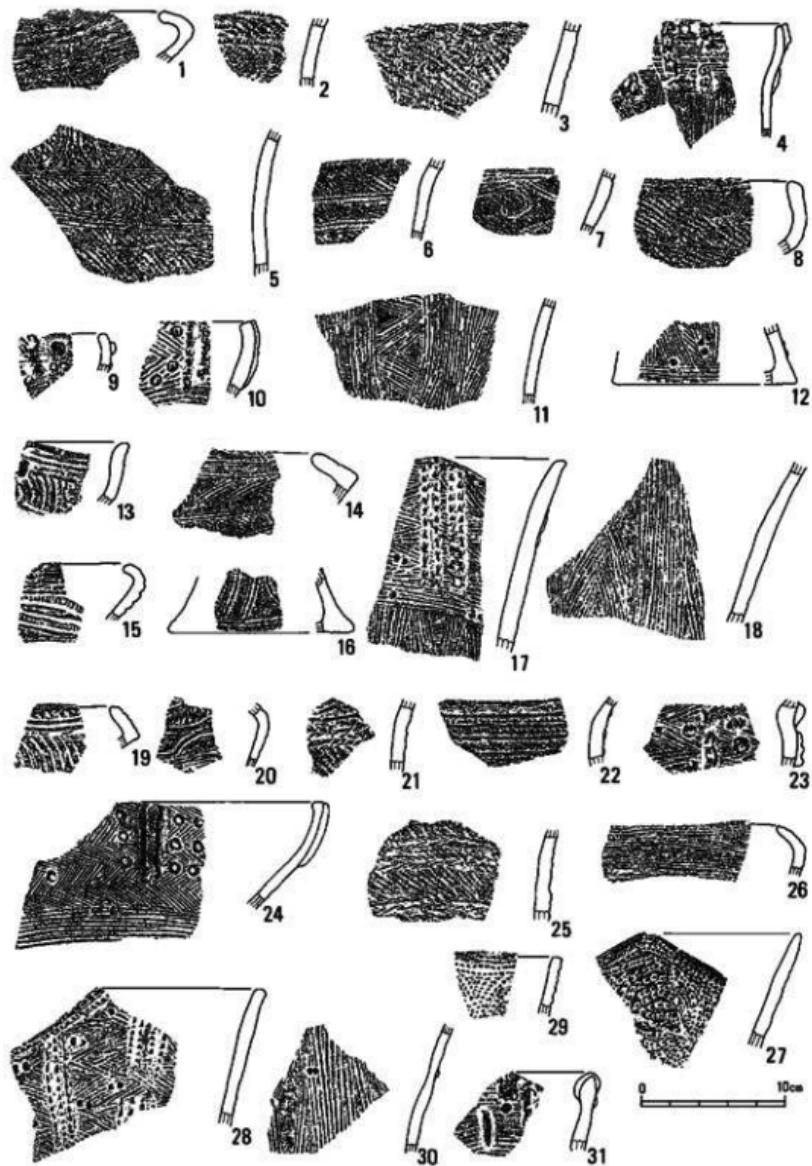
第27号住居址（第62図・図版20）

直径約500cmの不正円形プランを呈するが、前記の場合と同様に隅丸脚張り三角形とも言えなくはない。床面は中心部分より壁際がかなり高くなつておる、最も差が大きいところで30cmはある。壁はかなり緩やかに立ち上がって15cm~30cmの高さを測る。炉跡は住居址のほぼ中心に東西2カ所に地床炉が存在する。床に露出した自然石際で火を焚いた炉跡である。本住居址の床には竪穴が3カ所しかなく、その配置された場所から考えてもそれらが柱穴として利用されたと思われる。

出土土器（第38図21~25）。いずれも深鉢形土器破片。22・23は諸磯b式中~新段階の沈線系。24は同じく浮線文系土器。浮線は非常に低く、刻目は細かく密である。21・25ともに沈線を地文とした上に円形の貼付文が連続する。この貼付には刺突が加えられる。これらは諸磯c式古



第63図 第31A号・31B号住居址、第207号土堆 (1/60)



第64図 土器拓本 (第31・33・36・39・42・43・45号住居址) (1/4)

段階の土器。第91図7・8は有孔土器の破片。木葉文に通ずる竹管文が残る。

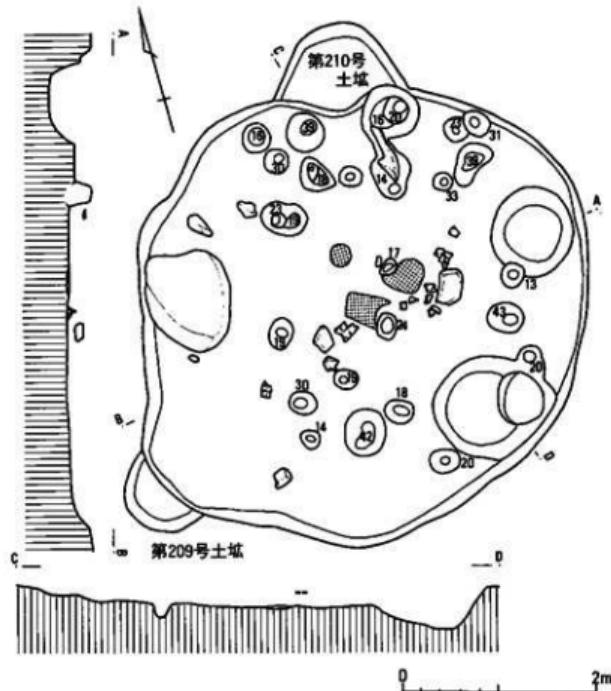
#### 第31号住居址（第63図・図版20）

当初一軒の住居址かと思われたが断面の観察で北側のAと南側のBの2軒の住居址が存在することが明らかになった。Bの方が新しい。

AはBに切られている部分と未発掘部分が広くプランは不明である。床面は水平で壁は緩やかに立ち上がり床面との境は明確ではない。壁高は約20cm前後を測る。炉跡については地床炉が一つ存在するが柱穴についてはその配置は把握できない。

Bは推定で430cm×600cmの橿円形プランを呈する住居址と考えられる。南側の一部を削平されているうえ北西で第209号土壤と重複している。床面はほぼ水平でAとレベル差はない。炉跡は中心よりやや西側に地床炉が2カ所存在している。床面には深さ20cm前後の豊穴が多数存在しており柱穴の特定は難しい。

出土土器（第64図1～4） 1・3は縄文系の深鉢形土器で、1は屈折の強い口縁部破片。2



第65図 第32号住居址、第209・210号土壤 (1/60)

は浮線文系の胸部破片。浮線の間隔がやや広く、浮線上には細かい刻目が連続する。4は地文沈線で、口縁部には棒状貼付文がある。1～3が諸磯b式、4がc式。3が第31B号住居址。

#### 第32号住居址（第65図・図版21）

520cm×470cmの不正円形プランを呈する住居址である。住居址南西で第209号土壇と北で第10号土壇と重複している。炉跡は住居址のはば中心に2ヵ所地床炉が確認された。床面はほぼ水平で壁は緩やかに立ち上がり10cm～15cmの高さを測る。柱穴に関しては深さ約40cmの豊穴が4基適当な間隔で並んでいることが注目されるが、住居址の西半分の壁際で豊穴が一つも見つかっていないことにも注意する必要があるだろう。

**出土土器（第66図）** 3201は深鉢形土器の口縁部破片。おそらく底部から口縁部へとゆるく外傾しながら立ち上がる器形であろう。口縁はゆるく内傾する。この部分にはいわゆる貝殻状文に通ずる三日月状に大きく発達した貼付文や円形瘤状の貼付文がみられる。3202は波状口縁の破片。棒状貼付文に半截竹管文による刻みをもつ、いわゆる結節浮線文が3～4本単位で縱に走る。その間には2個一組の円形浮文が加えられる。口縁には半截竹管によると思われる刻目が連続する。比較的大型の深鉢形土器であろう。3203も3202と同様の文様構成であるが器種は小型の深鉢形土器。口縁部にも結節浮線文が走る。3203が炉脇の床面から出土。他の2点は覆土中。以上3点とも諸磯c式土器であるが、3201が古段階、他は新段階。

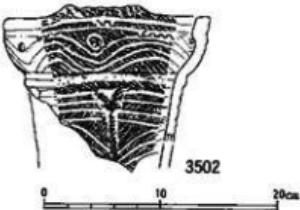
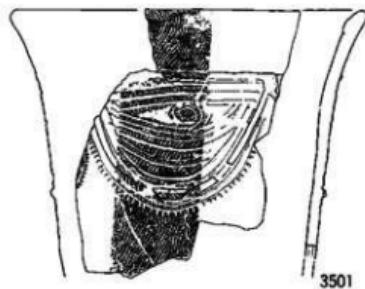
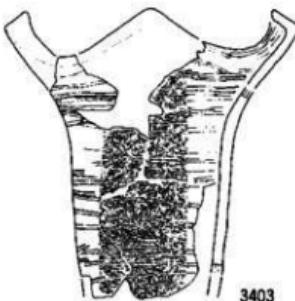
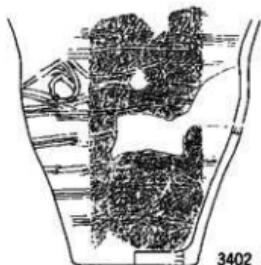
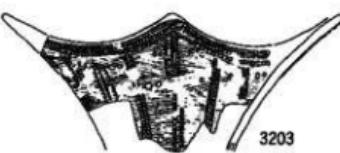
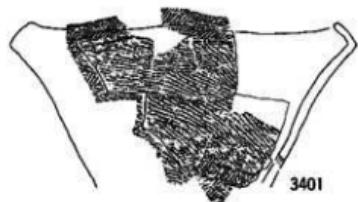
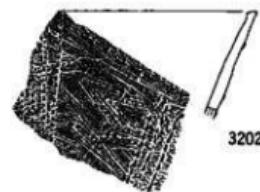
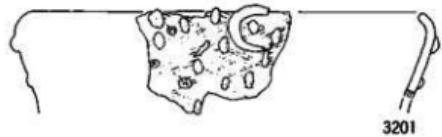
#### 第33号住居址（第67図・図版21）

第225号土壇・第472号土壇・第486号土壇の3つの土壇と重複しているうえ、南側で第51号住居址に一部を切られている。住居址プランは推定で430cm×320cmの橿円形プランと思われる。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり約20cmほどの高さを測る。炉跡は地床炉である。柱穴は深さ約20cm以下の浅い豊穴が数多く存在しており正確な配置はとらえきれない。

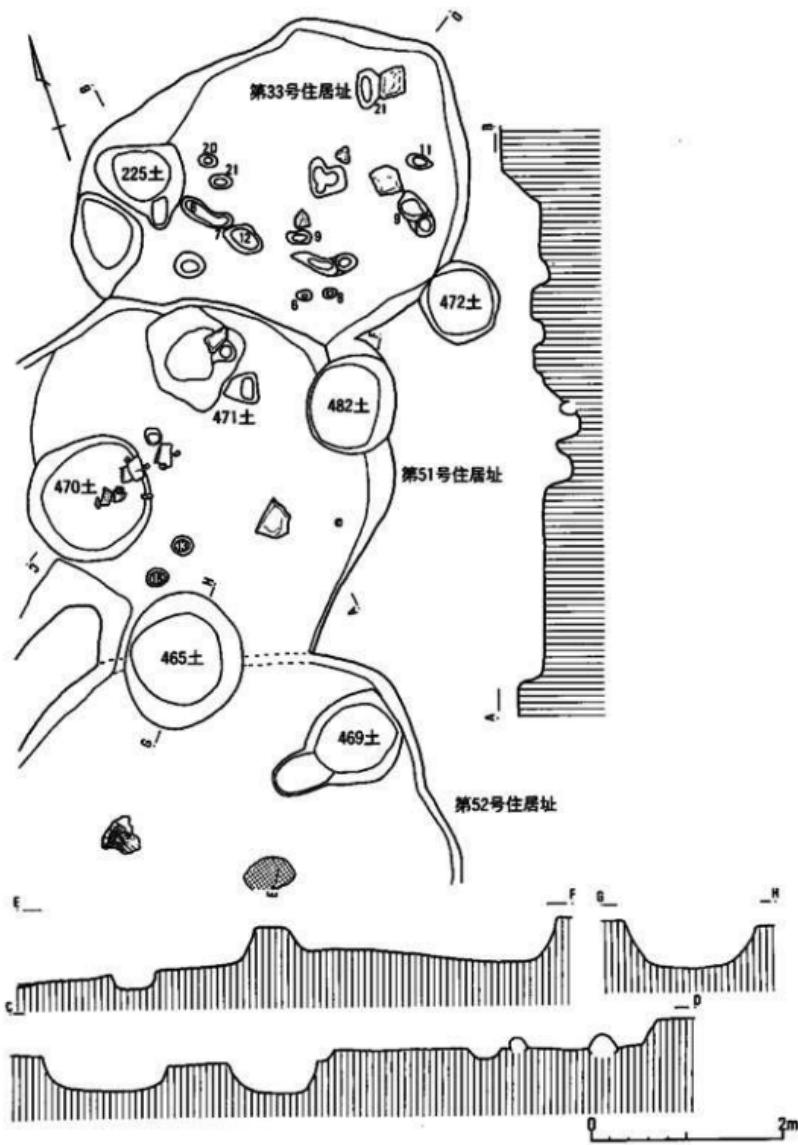
**出土土器（第64図5～12）** 諸磯b式土器では沈線文系（5）、浮線文系（6・7）、繩文系（8）の三種がある。6・7の浮線は微細なもので刻目も繊細。同一個体か。9～12は諸磯c式土器。9・10は口縁部破片で、棒状浮文と円形浮文とがある土器。10の棒状浮文には半截竹管文による結節がある。円形浮文では9・10ともに円形刺突がみられる。11は胸部破片で集合沈線が顕著。12は深鉢形土器の底部付近の破片。集合沈線上に2個一組の小円形貼付文が加えられる。9・10が古段階、12が新段階の土器であろう。

#### 第34号住居址（第68図・図版21）

直径約400cmの円形プランを呈する住居址であるが、隅丸方形プランとも見ることは可能である。床面はほぼ水平であるが中心部分が若干低い。壁は垂直に近い角度で立ち上がり10cmから40cmの高さを測る。炉跡は住居址中心からやや南のところに地床炉が1基存在する。柱穴は深さ約20cmほどの豊穴が4基等間隔に並んでおり主柱穴である可能性が高い。一括の深鉢形土器が1点出土している。



第66図 土器実測図（第29号・32号・34号住居址）(1/5)



第67図 第33号・51号・52号住居址、第225・465・469・470～472・482号土壤 (1/60)

出土土器（第66図） 3401は縄文系の深鉢形土器口縁部破片。口縁は「く」の字形に強く屈折するが短い。3402は沈線文系深鉢形土器。地文縄文で、胸部はやや膨らむ。3403も沈線文系の深鉢形土器。波高のある波状口縁で胸部は直線的。口縁の屈折は強く、この部分にも平行沈線だけの施文である。いずれも諸磯b式新段階の土器。

#### 第36号住居址（第69図・図版22）

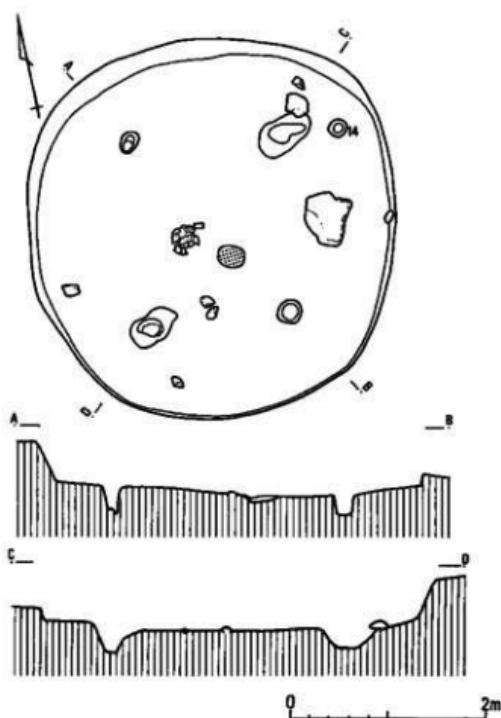
当初一つの大形住居址かと考えられていたが、AとBの2基が存在することが明らかになった。Bの方が新しい。

Aは北側で縄文時代中期の第35号住居址により壁の一部を削られており、南側でBにかなり広い範囲の床を削られている。そのため正確な規模・形状は不明だが、残存している部分から推定すれば400cm×350cmほどの

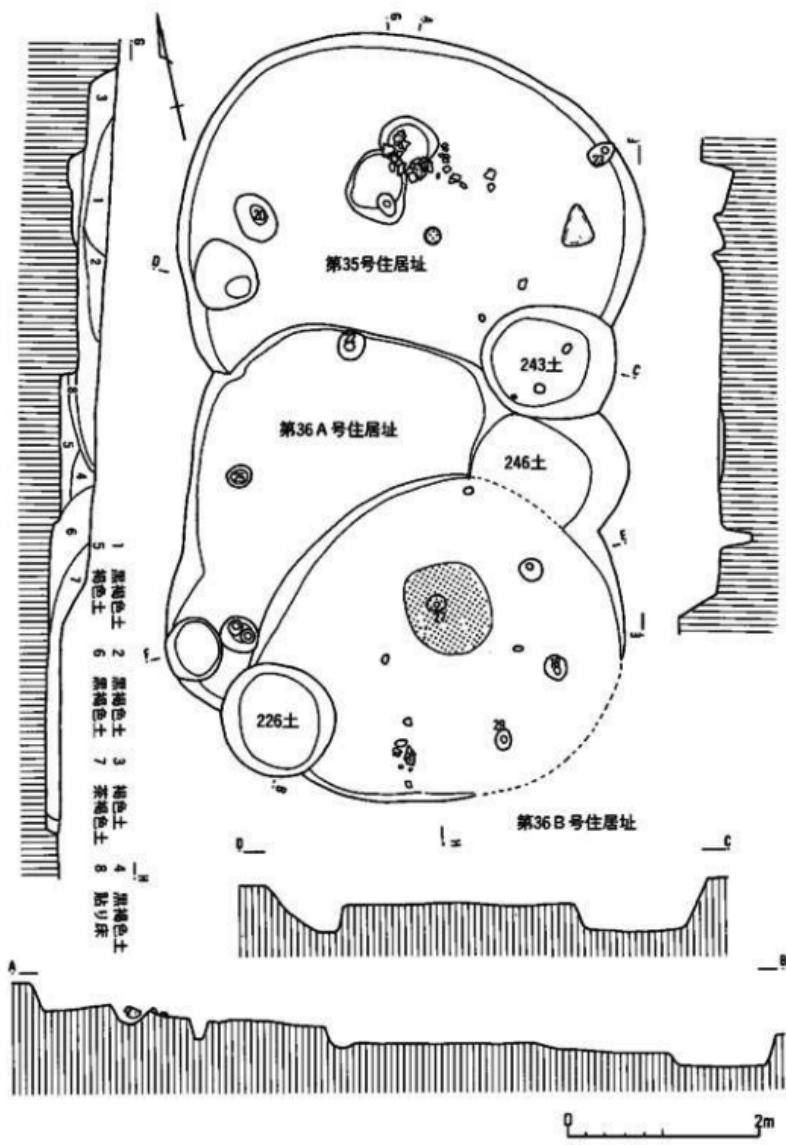
椭円形プランを呈するようである。残っている部分の床面はほぼ水平である。また壁高は15cmほどである。柱穴の配列は不明であり、炉跡も調査範囲からは確認できなかった。

Bは南西部分の壁が一部消失しているものの400cm×320cmほどの椭円形プランを呈するものと思われる。床面は水平で、柱穴と思われる豊穴は20cm～30cmほどの深さのものが3カ所検出されたが少々数が少なすぎる。炉跡は住居址のはば中に地床炉が存在する。炉跡の中に深さ約30cmの豊穴が確認された。壁高は10cm～20cmほどを測る。

出土土器（第64図13～18） 13は浮線文系の破片。波状口縁で波頂部に円形貼付がある。14は沈線文系の口縁部破片。強く屈折する。15は漫鉢形土器ないし有孔土器の破片。口縁部直下に刻目のある浮線があり、以下爪形状の沈線がみられる。16は結節浮線文のある底部付近の破片。17は波状口縁深鉢形土器で、太めの結節浮線文、2個一単位の円形貼付文、集合沈線などが特徴である。18は胸部破片で集合沈線がみられる。13・14が第36A号住居で諸磯b式新段階、15～18が第36B号住居で15を除き諸磯c式新段階である。なお36A号からは第91図9の有孔土器



第68図 第34号住居址 (1/60)



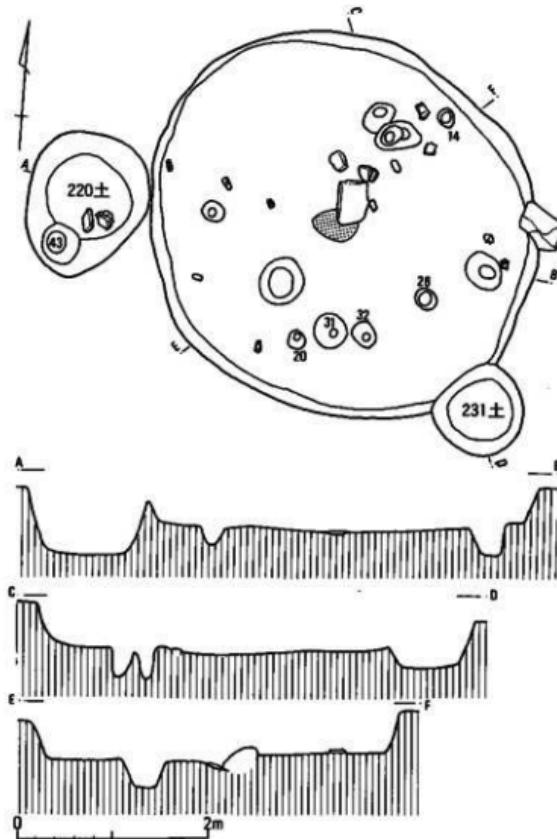
第69図 第35号・36 A号・36 B号住居址、第226・243・246号土壤 (1/60)

も出土している。

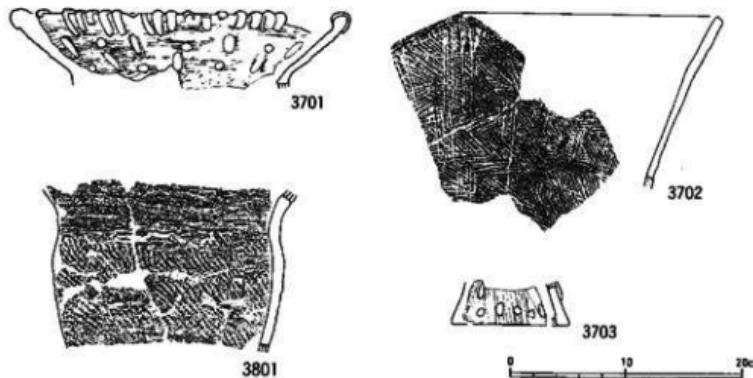
#### 第37号住居址（第70図・図版22）

440cm×400cmの梢円形プランを呈する住居址である。南東で第231号土壤と重複している。床面は水平で壁高は約40cmを測る。炉跡は住居址のはば中心に地床炉が存在するが自然石に接して火が焚かれている。床面には深さ30cm前後の竪穴が壁に沿って数多く並んでおり、多くが柱穴として使用されたものと思われる。本住居址からは磨石がまとまって出土しており注目される。

出土土器（第71図） 3701は深鉢形土器の口縁部破片。強く外傾する器形の土器で、口縁の外側から内面にかけて棒状貼付文が連続する。頸部から上の破片であるが外面全体にも棒状や円



第70図 第37号住居址、第220・231号土壤 (1/60)



第71図 土器実測図（第37号・第38号住居址）(1/5)

形の貼付文がみられる。地文は沈線。3703は底部付近の破片であるが、3701と同様な貼付文の付けられた土器。3702は波状口縁の深鉢形土器。集合沈線は羽状をなし、その上に結節浮線文（結節沈線文）が見られる。以上は諸磯c式土器であるが3702が新段階、他は古段階。

#### 第38号住居址（第72図・図版23）

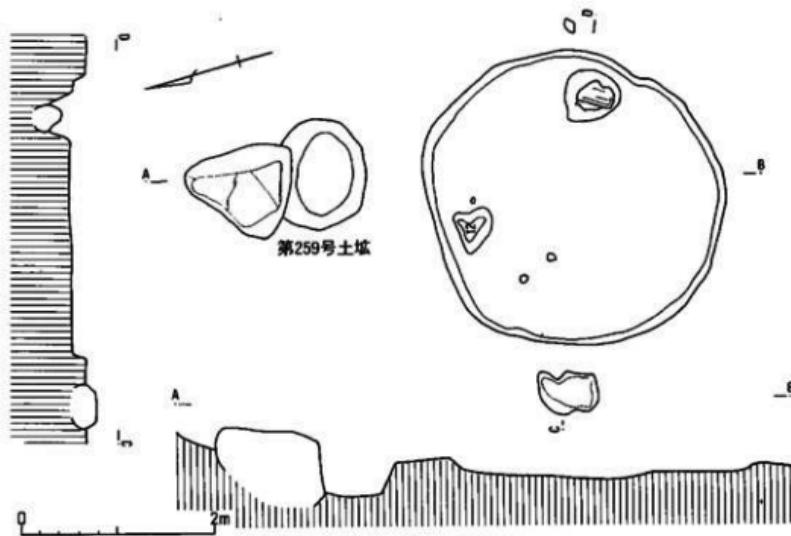
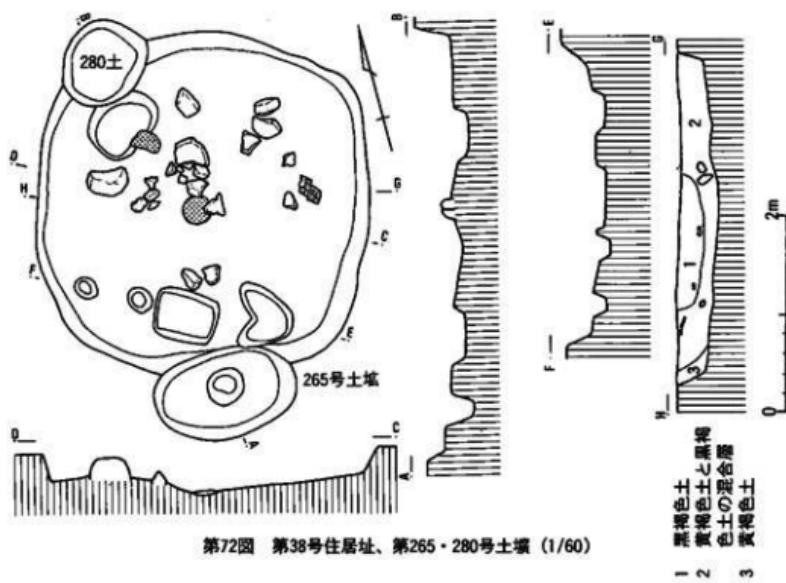
径が360cm×340cmの胴張り隅丸方形プランを呈する住居址である。北側で第280号土壤、南側で第265号土壤と重複している。壁は緩い傾斜で立ち上がり壁高は20cm～30cmを測る。床面は中央部分がもっとも低く窪んでおり浅い掘り鉢状の床である。炉跡は住居址の中心に地床炉が存在する以外に、その北西に1カ所焼土が確認されている。柱穴に関しては、住居址北半分では少し大きめの竪穴が一つしか存在していない点など配列を把握することは難しい。

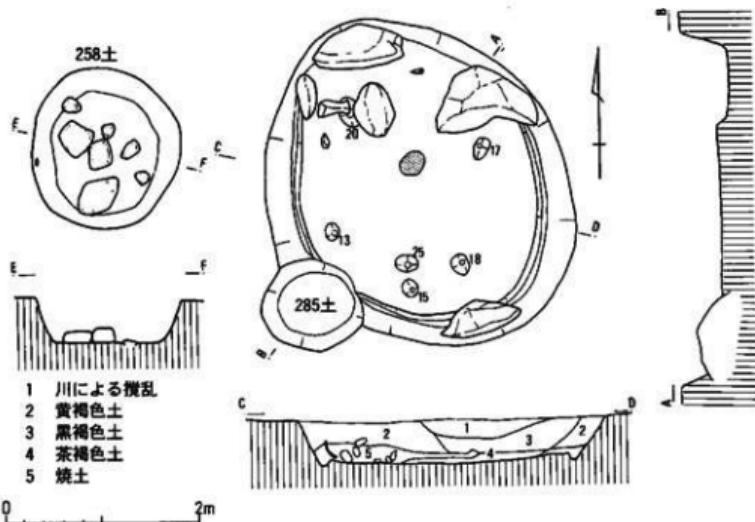
出土土器（第71図） 3801は深鉢形土器の胴部。東壁よりの覆土上部からの出土。繩文の土器であるがややくびれる頸部は無文。諸磯b式土器であろう。

#### 第39号住居址（第73図・図版23）

直径約300cmの円形プランを呈する住居址である。床面はほぼ水平で壁高は10cm～15cmほどしかない。炉跡については確認できなかった。柱穴についても竪穴が北と東の2カ所にしか存在しておらず配置は不明である。

出土土器（第64図19～23） 19・20は沈線文系深鉢形土器の口縁部あるいはその付近の破片。地文繩文に曲線文がみられる。21・22は浮線文系深鉢形土器破片。いずれも頸部付近と思われ、22では密集した浮線間に円形刺突文が連続する。23は羽状の集合沈線上に棒状と円形の貼付文がある。棒状貼付文上には半截竹管の刻目、円形貼付文上には円形竹管の刺突がある。23が諸磯c式古段階、他はb式新段階であろう。



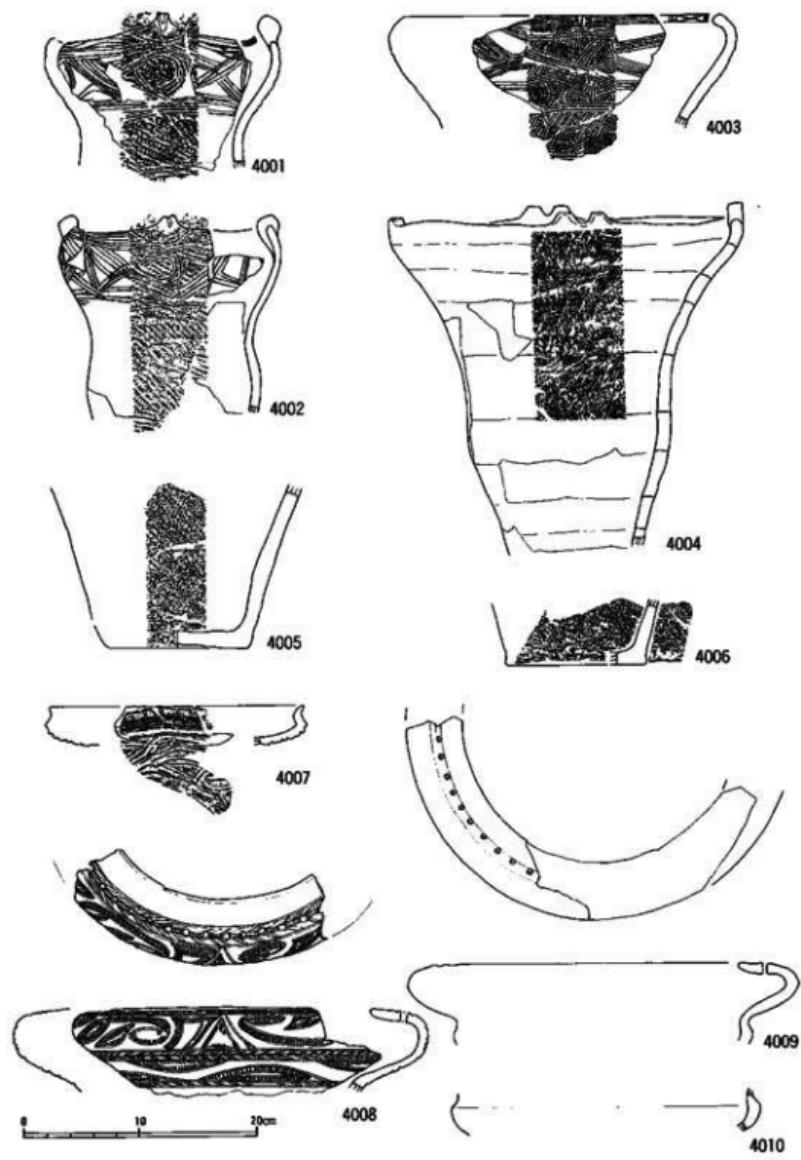


第74図 第40号住居址、第258・285号土壤 (1/60)

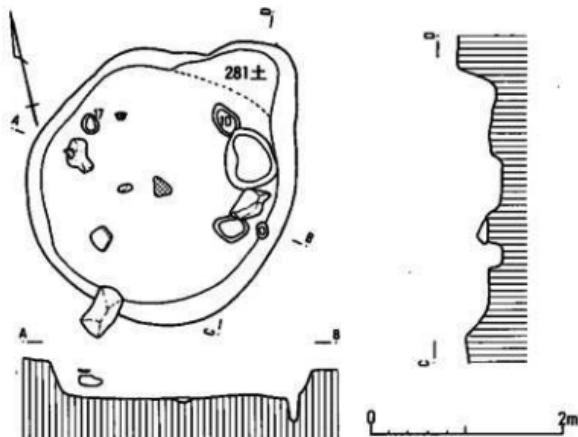
#### 第40号住居址（第74図・図版23）

320cm × 360cmの橢円形プランを呈する住居址である。自然石の露出が所々で見られ、南西隅で第285号土壤と重複している。床面は水平で壁際の大部分に幅・深さ共に10cmほどの周溝があげらされている。壁高は40cmもあり竪穴住居址としては深い部類であるが、立ち上がりは緩く傾斜している。床面には合計6つの竪穴が適当な間隔で掘られておりすべて柱穴として利用されたと考えられる。炉跡は住居址のほぼ中心に地床炉が確認された。本住居址からは多量の一括土器が出土している。

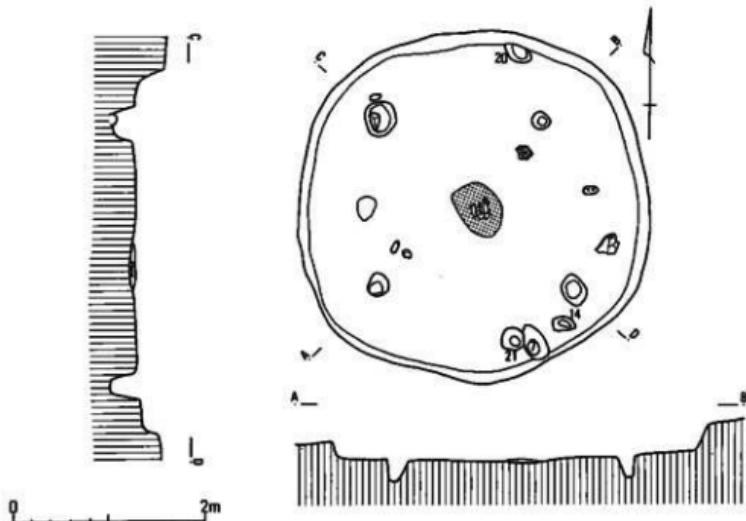
**出土土器（第75図）** 4001～4003は沈線文様系深鉢形土器。4001と4002とは類似した器形・文様構成で、胴部沈線の有無があるものの同一個体かもしれない。頸部から口縁部にかけては丸味をおびて内湾し、この部分に口縁部文様帯として地文繩文に曲線文が施される。以下胴部は繩文となるが4001では平行沈線も認められる。口縁部はゆるやかな波状をなし、波頂部にイノシシ文が退化した突起がある。4001では口唇部にも刻目がある。4003も内湾する口縁部であるが4001程ではない。4004は繩文系の深鉢形土器。キャリバー形をなすが口縁部の丸味は4001よりも4003に似る。平口縁だが2個一単位の突起が4単位ある。輪積み痕が顯著。4005・4006は下半部の破片。4007は浅鉢形土器破片。有孔土器4008と同様の入組木葉文に類似した沈線と爪形文がみられる。4008では孔の部分と最大径部分に刻目浮線状の文様があげらる。赤褐色をした焼成の良い土器。4009も有孔土器。無文であるが口縁部の形状は4008と類似する。4010も有孔土器の下半部破片であろう。以上諸種b式中段階の土器。



第75図 土器実測図 (第40号住居址) (1/5)



第76圖 第41号住居址、第281号土壤 (1/60)



第77圖 第42号住居址 (1/60)

#### 第41号住居址（第76図・図版24）

直径280cmの円形プランを呈する住居址である。北東で第281号土壤と重複している。床面は水平で、壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は約30cmを測る。炉跡は住居址の中央に小さな地床炉が確認された。住居址の北東半分に深さ10cm～20cmの竪穴が5カ所掘られており柱穴に利用されたものであろう。

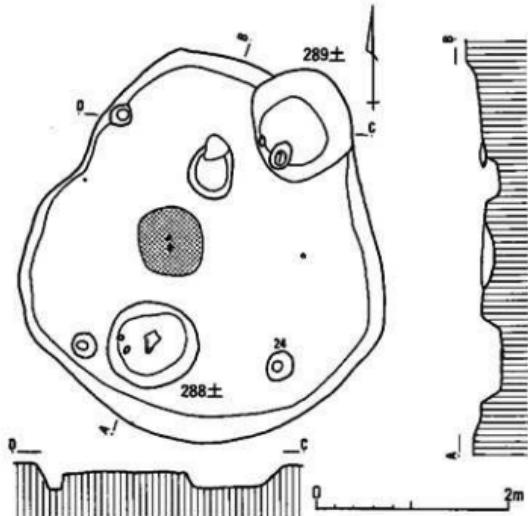
出土土器（第79図） 4101は全面繩文の深鉢形土器。外傾しながら立ち上がる器形。4102も繩文系深鉢の破片。口縁の屈折は強い。諸磯b式新段階の土器。

#### 第42号住居址（第77図・図版24）

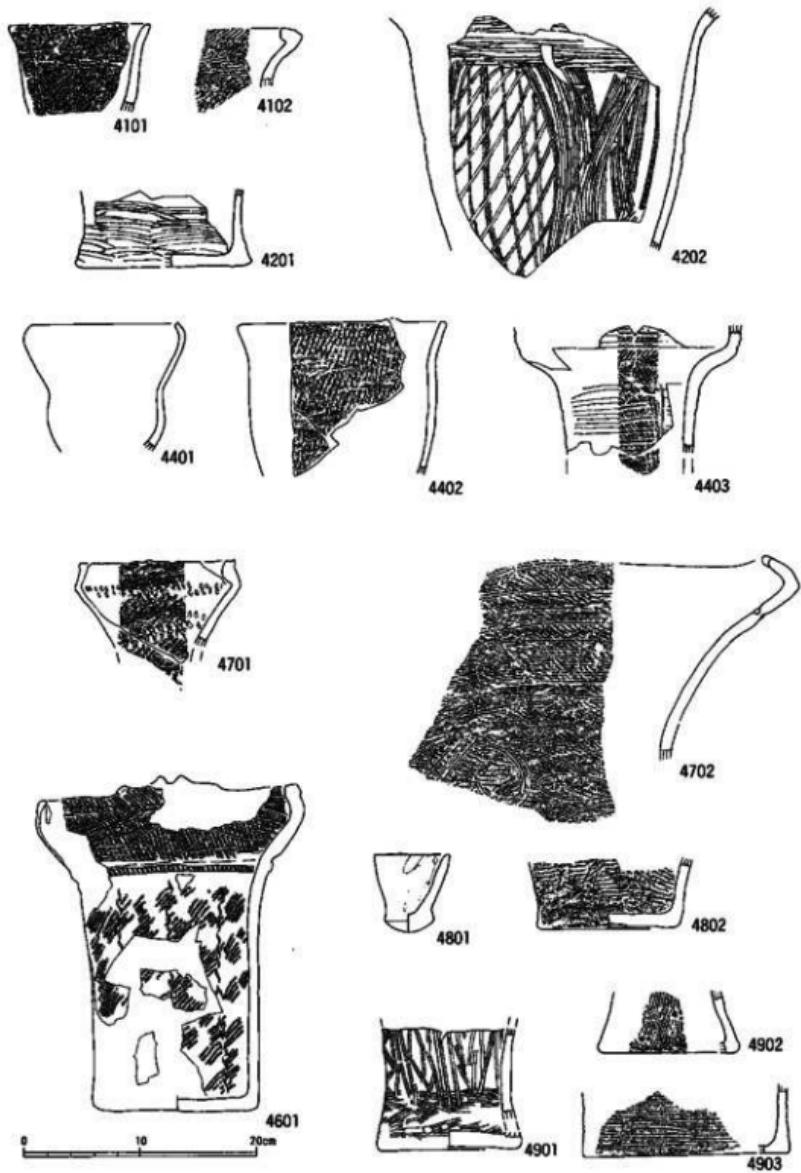
直径約400cmの円形プランを呈する住居址である。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がって壁高は15cm～30cmを測る。炉跡は住居址の中央に地床炉が存在する。4基の竪穴が壁から適当な距離を隔てて掘られており主柱穴と思われる。

出土土器（第79図）（第64図24） 4201は集合沈線のみられる底部付近。4202は胴部破片であるが、外反口縁をもった深鉢形土器であろう。集合沈線により曲線や格子目文が構成される。頸部は平行沈線であり、口縁部には押圧文ないし貼付文が連続するものと思われる。第64図24も深鉢形土器とみられる口縁部破片。羽状沈線上に棒状貼付文と円形貼付文とがつけられる。以上は諸磯c式の古段階の土器であろう。

#### 第43号住居址（第78図・図版24）



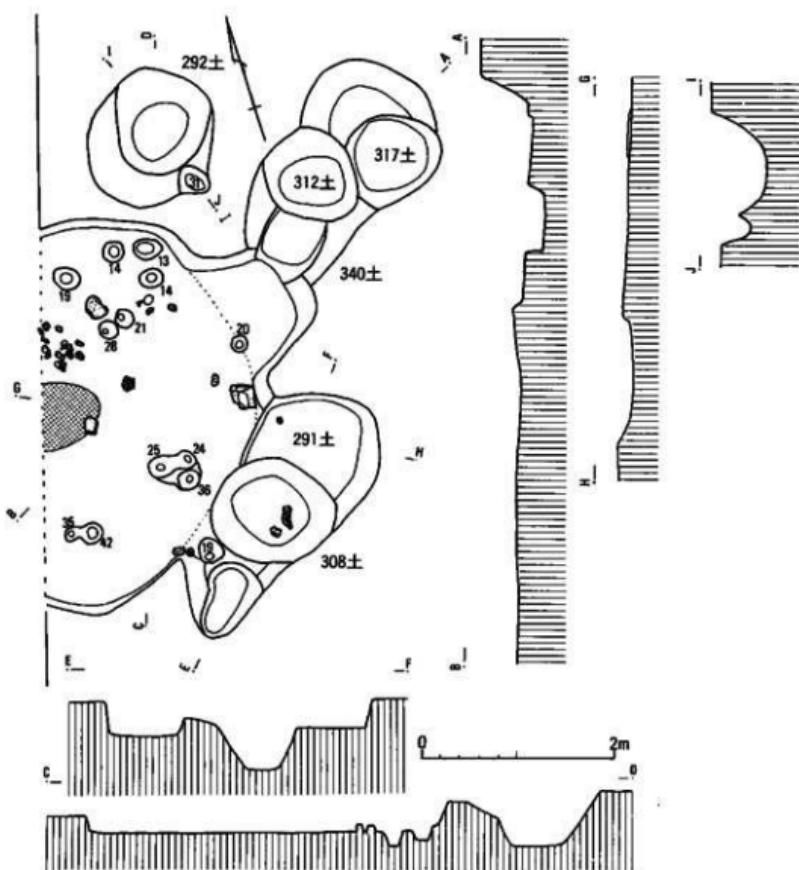
第78図 第43号住居址、第288・289号土壤 (1/60)



第79図 土器実測図（第41号・42号・44号・46～49号住居址）(1/5)

400cm×360cmの不正梢円形プランを呈する住居址である。南西で第288号土壤、北東で第289号土壤と重複している。床面は中心部分が周囲より若干低い。壁は緩い角度で立ち上がり床面との境が明白でない。壁高は約10cmを測る。炉跡は住居址中心よりやや西側に大きな地床炉が確認された。第289号土壤の中の竪穴も含め4基の竪穴が適当な間隔で配置されており主柱穴と思われる。

出土土器（第64図25～27） 25は浮線文系深鉢形土器の胴部破片。26は沈線文系深鉢形土器の口縁部破片。半截竹管による平行沈線が走る。27は渦巻き状結節浮線文の土器。25・26が諸説b式新段階、27がc式新段階の土器である。



第80図 第45号住居址、第291・292・308・312・317・340号土壤 (1/60)



第81図 第47号・52号・57号住居址、第465号・469号土壤 (1/60)

#### 第45号住居址（第80図・図版25）

西側のおよそ半分が調査区域外であるが直径約400cmの円形プラン、もしくは同等規模の隅丸方形プランを呈するものと考えられる。東側の壁沿いで北から第340号土壌、第291号土壌、第308号土壌の順に重複している。床面は水平で壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は10cm～20cmを測る。炉跡は住居址のはば中央に地床炉が確認された。柱穴に利用されたと考えられる竪穴が多数存在しているが未発掘部分の面積が広く配列は不明である。

出土土器（第64図28～31） 28・29は結節浮線文がみられる。いずれも波状口縁の深鉢形土器破片。結節浮線については28が棒状、29が渦巻き状をなす。30は下半部の破片であろう。2個一対の小円形貼付文がある。31は太く短い棒状貼付文や大きめの円形貼付文が付けられる。31が諸磯c式古段階、28～30がc式新段階。

#### 第47号住居址（第81図・図版26）

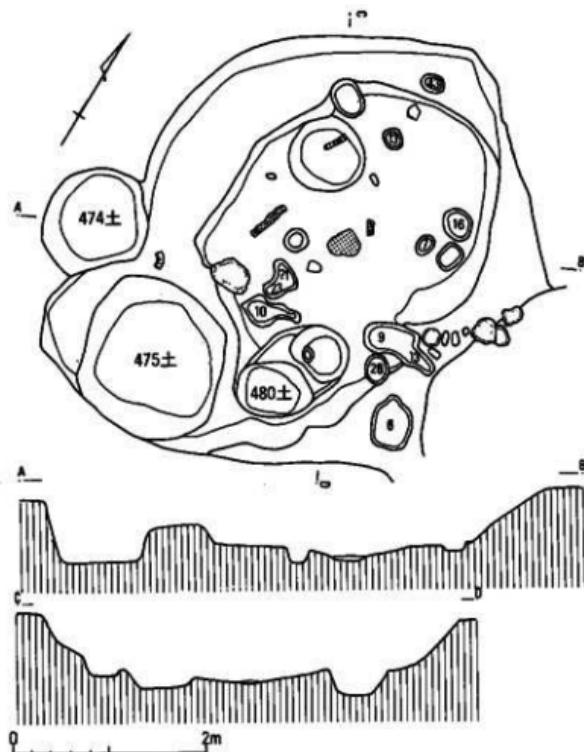
北側では第52号住居址が上に構築され、西側では第57号住居址を切っている。住居址内北側では第467号土壌と重複している。床面は水平で壁は緩やかに湾曲して立ち上がり壁高は60cm前後でかなり深い竪穴である。本住居址は一度拡張が行われたようで住居址東側で古い段階の壁がわずかの段差で確認できた。床面には4カ所で焼土が確認され特にもっとも東側のものが大きく主たる炉跡と考えられる。柱穴に用いられたと思われる竪穴は無数に存在し主柱穴は特定できない。

出土土器（第79図）（第91図11・12） 4701は口縁部の4分の1程の破片であり、全体はよく分からぬが小型の鉢形ないし深鉢形土器であろう。平口縁ながらゆるやかな小突起が波状につき、「く」の字形に屈折する。最大径部や胴部・口唇部に爪形文が乱雜につけられている。胎土中には長石や石英粒が多くみられ、色調黒褐色をなす。4702は大型の深鉢形土器破片。朝顔状に強く開き、短く「く」の字形に屈折する口縁部が特徴。ゆるやかな波状口縁をなす。沈線文系の土器で、口縁部や頸部に曲線文がみられる。第91図11・12は有孔土器の一部であろう。以上は諸磯b式新段階である。

#### 第48号住居址（第82図・図版27）

直径400cmほどの円形プランを呈する住居址である。南側で第470号土壌、第474号土壌、第475号土壌、第480号土壌と重複している。住居址全体が壊り鉢のようで中心部分がもっとも低く壁に近づくにつれて徐々に高くなり壁と床面との境が不明確である。炉跡はもっとも低い中心部分に地床炉が確認された。床面からわずかに木炭が出土している。柱穴については発見された竪穴に規則性がなく配列が把握できない。

出土土器（第79図）（第90図1） 4801は小型土器。突出した丸底をなす。4802は深鉢底部附近。第90図1は深鉢の口縁部破片。外面繩文であるが口縁の内面にかけても低いながら貼付文がみられる。この貼付文の中心は沈線状になっており、4001や4002などにみられる突起から変化したものかもしれない。覆土中からは諸磯b式新段階からc式古段階までの破片が出土して



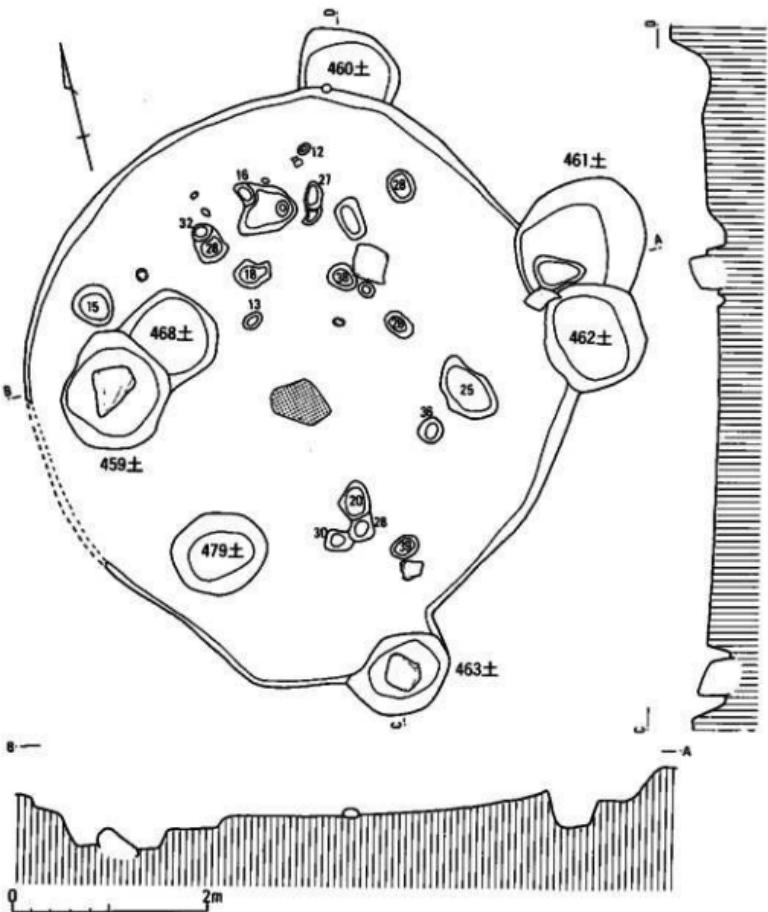
第82図 第48号住居址、第474・475・480号土壙 (1/60)

いるが、図示したものから諸磯b式の新段階とできようか。

#### 第49号住居址（第83図・図版25）

径が600cm × 560cmという大形の橢円形プランを呈する住居址である。西側で第50号住居址と接しており、住居址内で第459号土壙、第468号土壙、第479号土壙と重複し、東側半分の壁で北から第460号土壙、第461号土壙、第462号土壙、第463号土壙と重複している。床面は住居址中心がやや周囲より低く、壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。住居址の中央に住居址の大きさの割には小さな地床炉が確認されている。柱穴の配列も住居址の大きさと比較すると規則性がなく深さも怪しまばらである。

出土土器（第79図）（第90図2）（第91図13） 4901～4903は下半部破片。いずれも集合沈線を地文とする土器で、4903を除き円形貼付文がある。第90図2は結節浮線文（沈線）の口縁部破

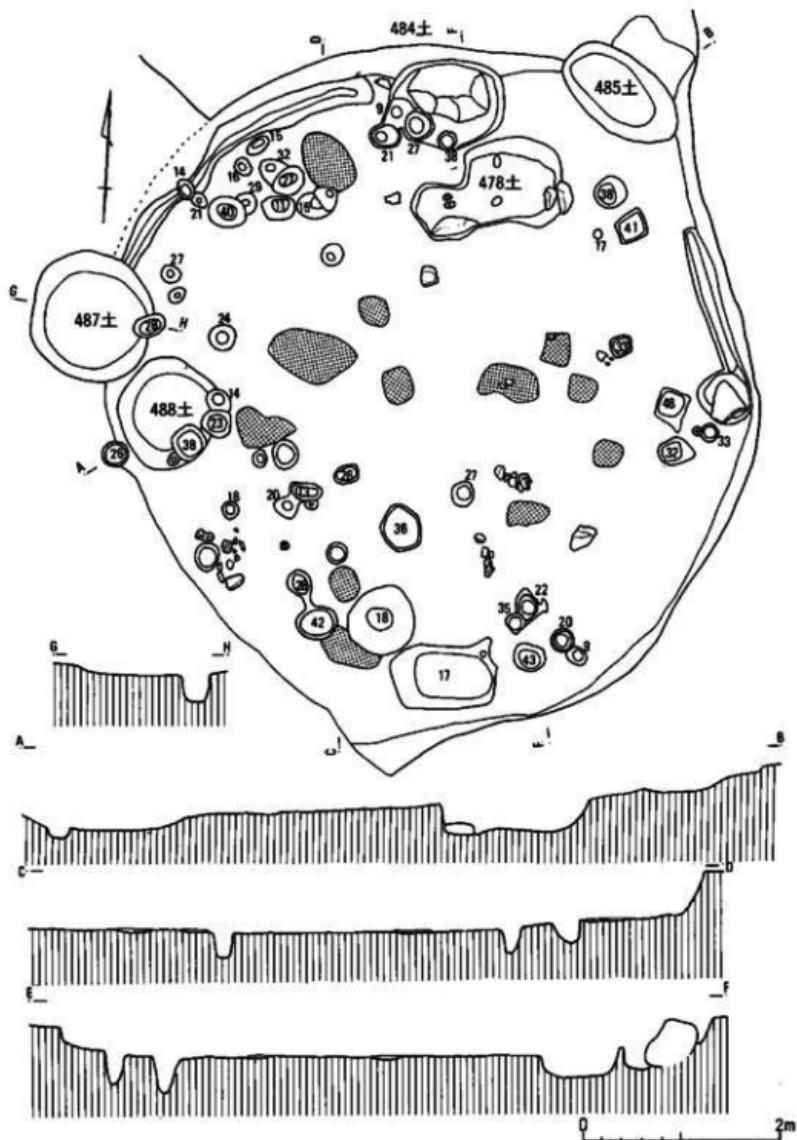


第83図 第49号住居址、第459・460~463・468・479号土壤 (1/60)

片。大きな波状口縁の深鉢形土器で、羽状集合沈線と2個一対の円形貼付文とで装飾される。  
以上諸磯c式新段階。なお第91図13は有孔土器破片である。これは諸磯b式であろう。

#### 第50号住居址（第84図・図版29）

径が650cm×700cmの構円形プランを量する住居址である。西側で第55号住居址が、南側で第56号住居址が上に構築されている。また住居址内で第478号土壤、第484号土壤と壁際で第485号土壤、第487号土壤と重複している。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。

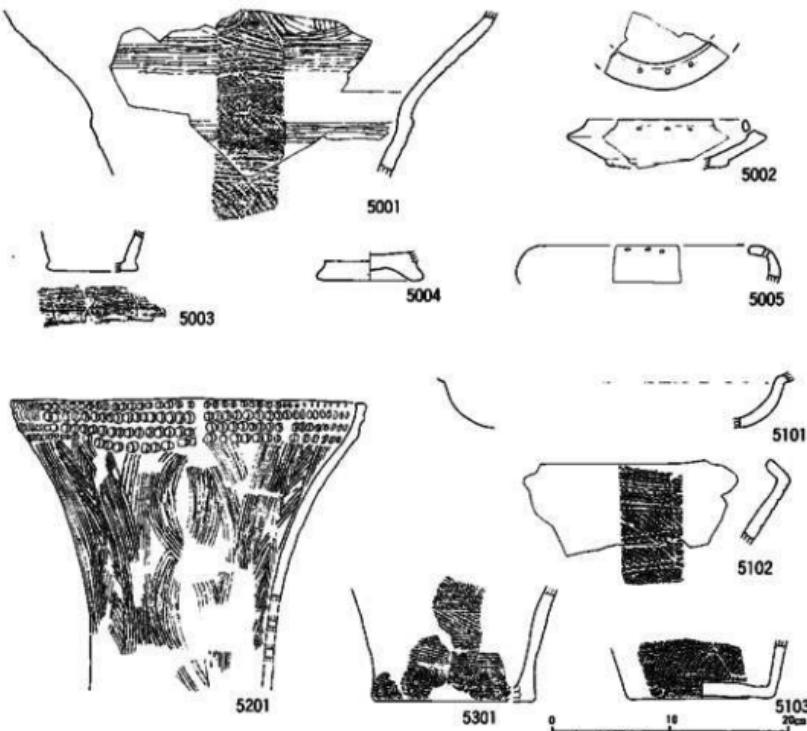


第84図 第50号住居址、第478・484・485号・487・488号土塙 (1/60)

南西側では壁はほとんど高さを失っているが北側では高さ50cmを測る。住居址の北側および東側の壁際の一部で周溝が確認でき、幅は15cm～25cmで深さは15cmほどである。本住居址はその広い床面の中、12カ所に焼土が形成されており、通常使用されていた炉跡を特定できない。しかし住居址の中央部分は焼土の密度がもっとも濃く、また柱穴も存在しないために、この部分の焼土が日々の生活に直結していたのであろう。

出土土器（第85図）（第90図3～5）（第91図14～18、20、22） 5001は深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片。地文繩文の沈線文系で、0401と同様に頸部がくびれる器形であるが文様についてはそれとは異なり、口縁部文様帶に曲線文が認められる。第90図3も沈線文系の深鉢形土器。口縁は丸味を帯びて内湾し、曲線文で飾られる。波頂部に円形貼付文がある。4・5は浮線文系の深鉢形土器。いずれもキャリバー形の器形であろう。4では口縁は短く内湾する。一部曲線の浮線文も見られ、浮線上には刻目が連続するが、下方の浮線には繩文が付けられている。5の浮線はやや太目。5003、5004は底部破片。

5002、5005、第91図14～18、20、22は有孔土器。5002、5005は小型の無文。第91図では20を



第85図 土器実測図（第50号～53号住居址）(1/5)

除き沈線と爪形ないし刻目の連続する文様。以上は諸磯 b 式新段階の土器群であろう。

#### 第51号住居址（第67図・図版27）

直径約380cmの不正円形プランを呈する住居址と思われるが、北で第33号住居址を切り、南で第52号住居址に切られている。壁際で第452号土壙、第465号土壙、第470号土壙と重複している。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は20cmを測る。炉跡は精査したが確認できなかった。

出土土器（第85図）（第90図6） 5101は有孔土器の胴下半部破片。5102は浮線文系の深鉢形土器破片。「く」の字形に屈折する口縁部で、やや波状をなすか。浮線は細く3本を単位として横走し、浮線上には細かい刻目が連続する。第90図6は沈線文系深鉢形土器破片。短く「く」の字形に屈折する口縁部で、5102に似た器形。これらは諸磯 b 式新段階の土器。

#### 第52号住居址（第67・81図・図版26）

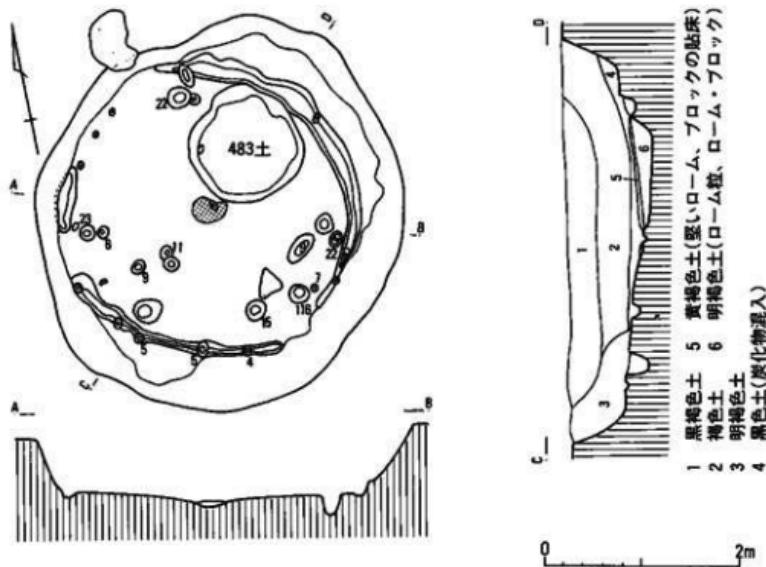
直径が460cmほどの円形プランを呈する住居址であると思われる。北側で第51号住居址を切り南で第47号住居址に張り床していたはずであるが確認できなかった。他に第465号土壙、第469号土壙と重複している。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は約20cmを測る。炉跡は住居址中心と考えられる場所からやや東側に地床炉が存在している。柱穴らしい堅穴は発見できなかった。本住居址からは一括土器が2個体出土している。

出土土器（第85図）（第90図7） 5201は床面から出土した底部を欠く深鉢形土器。口縁部はゆるやかな湾曲をなす。この部分の文様帶は爪形状の連続文であるが、これは棒状の工具を斜めに押し付けたものと思われる。胴部には直線、弧状、羽状などの集合沈線がつけられている。器壁はザラつきやや脆い土器。第90図7は口縁部付近の破片で、第42号住居出土の第64図24に類似する。口縁部文様帶は羽状沈線の上に棒状と円形の貼付文がみられる。頸部は横平行沈線、胴部は縱および羽状沈線。ゆるやかに湾曲する口縁の深鉢形土器と思われる。以上2点とも諸磯 c 式古段階の土器であろう。

#### 第53号住居址（第86図・図版26）

径が400cm×360cmの梢円形プランを呈する住居址である。住居址内で第483号土壙と重複している。床面はほぼ水平であるが中心部分がやや低い。壁に沿って周溝が掘られており幅は30cm以下深さは10cm以下である。炉跡は住居址の中心に地床炉が存在する。柱穴に関しては周溝内や周溝に沿って堅穴が並んでおり、それらが利用されたものと考えられる。

出土土器（第85図） 5301は深鉢形土器の底部付近の破片。沈線文系の土器で、地文繩文に平行沈線が走る。諸磯 b 式新段階の土器。



第86図 第53号住居址、第483号土壤 (1/60)

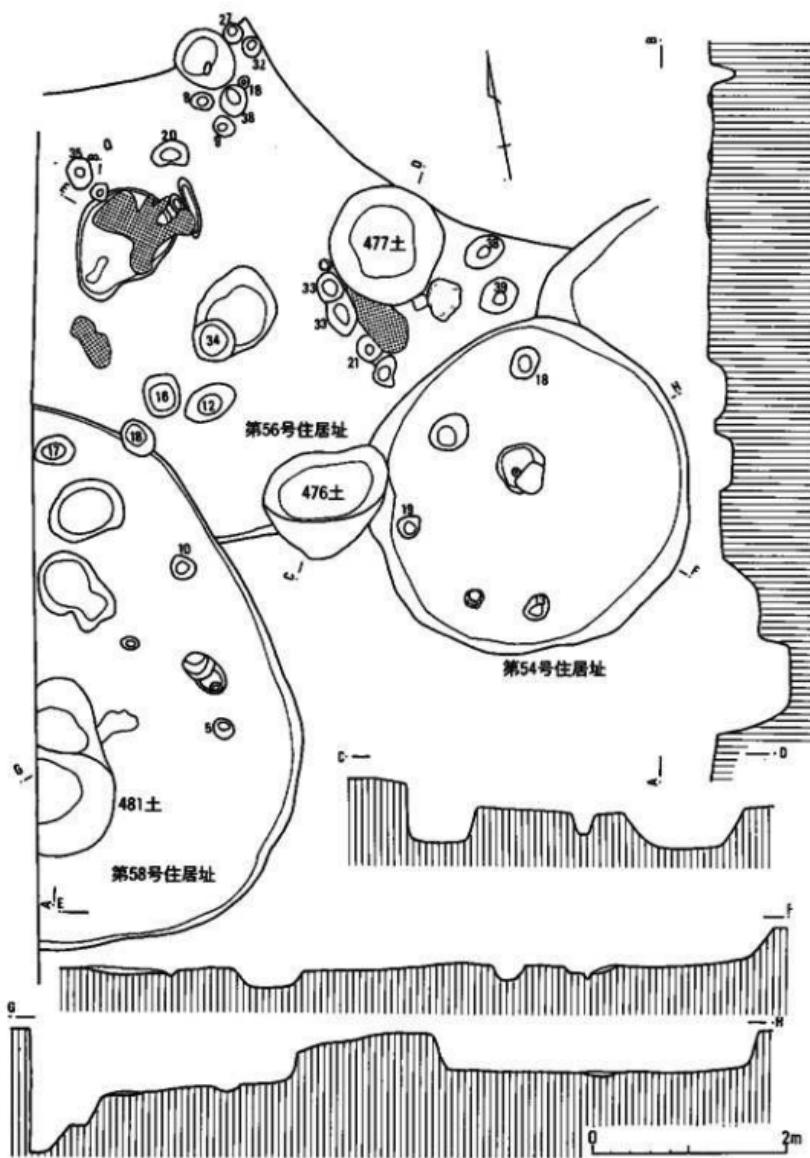
#### 第54号住居址 (第87図・図版29)

直径330cmの円形プランを呈する住居址である。北西で第56号住居址と西で第476号土壤と重複しており、第56号住居址は本住居址より新しい。床面はほぼ水平で壁は緩い傾斜で立ち上り壁高は約30cmを測る。炉跡は住居址の中心に浅い窪みに接して地床炉が確認された。住居址の西半分に柱穴と思われる堅穴が4基掘られている。

**出土土器 (第89図)** 5401は浮線文系の口縁部破片。大型の深鉢形土器で、口縁部は強く内湾する。いくらか波状。浮線は曲線をなし非常に密で刻目もある。5402は無文。5403は沈線文系で、口縁部文様帯だけ沈線で以下は繩文。ゆるやかな波状口縁。5404・5405は底部付近。とくに5405は集合沈線がみられ、器形からも他の土器よりは新しいものであろう。この5405を除き諸磯b式新段階。

#### 第55号住居址 (第88図・図版29)

西側の約半分が発掘調査区域外のため正確な形状・規模は把握できないが、直径約500cmの円形プランを呈する住居址と思われる。南側で第56号住居址を切り、東側で第50号住居址に貼り床していたと思われるが確認できなかった。その他第487号土壤、第488号土壤と重複している。床面は住居址中心部分がもっとも低い壊り鉢状で壁も緩い傾斜で立ち上がる。壁高は30cmを測る。炉跡に関しては発掘範囲が狭いため、住居址南側に2ヵ所小規模な焼土を確認できた



第87图 第54·56·58号住居址、第476·477·481号土壤 (1/60)

だけである。柱穴と思われる竪穴も数多く存在している。

#### 出土土器（第89図）（第91図19・21）

5501は集合沈線を主体とした深鉢形土器。焼成良好で堅い焼きの土器。口縁部は段がつき外反する。この段と口縁に爪形状の押圧が連続する。この文様は5201（第85図）に類似することから棒状工具によるものと思われる。5502は底部破片。第91図19・21は有孔土器破片。19・21は諸磯b式、5501、5502は諸磯c式古段階の土器であろう。

#### 第56号住居址（第87図・図版28）

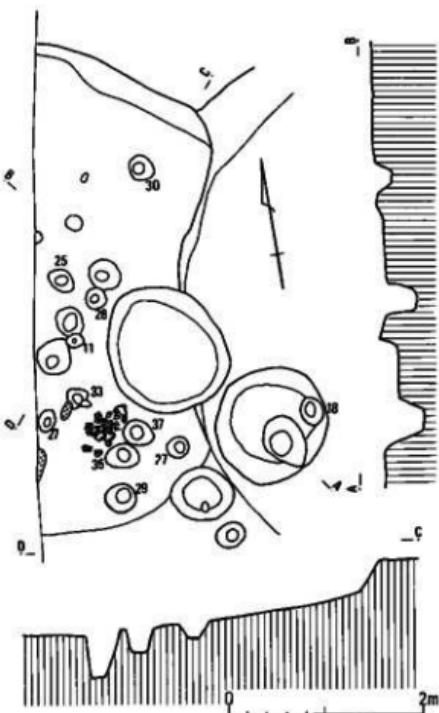
重複が激しく正確な形状・規模は不明である。出土土器の分析では第50号住居址、第54号住居址よりは新しいが貼床等は確認できなかった。第55号住居址、第58号住居址には切られている。また第476号土壤、第477号土壤とも重複している。残っている範囲では床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がりしている。焼土も3カ所に散在している。

出土土器（第89図）（第90図8） 5601は有孔土器。口縁がやや立ってくる。8は沈線文系深鉢形土器の破片。口縁部は短く「く」の字形に屈折する。諸磯b式新段階の土器。

#### 第57号住居址（第81図・図版28）

第47号住居址と重複しており出土土器の分析では本住居址出土土器の方が新しいことが確認されているが貼床は検出できなかったし断面観察では第47号住居址の方が新しい。発掘された範囲はきわめて狭く住居址の形状・規模は正確には把握できない。残っている壁の描く曲線から推測すれば直徑400cm前後の円形プランを呈する住居址ではないかと思われる。炉跡と思われる焼土もわずかに残るのみである。

出土土器（第90図9） 破片が出土したにすぎない。9は沈線文系の深鉢形土器口縁部破片。短く「く」の字形に屈折する口縁部で、地文繩文に半截竹管による平行沈線の土器。諸磯b式新段階。

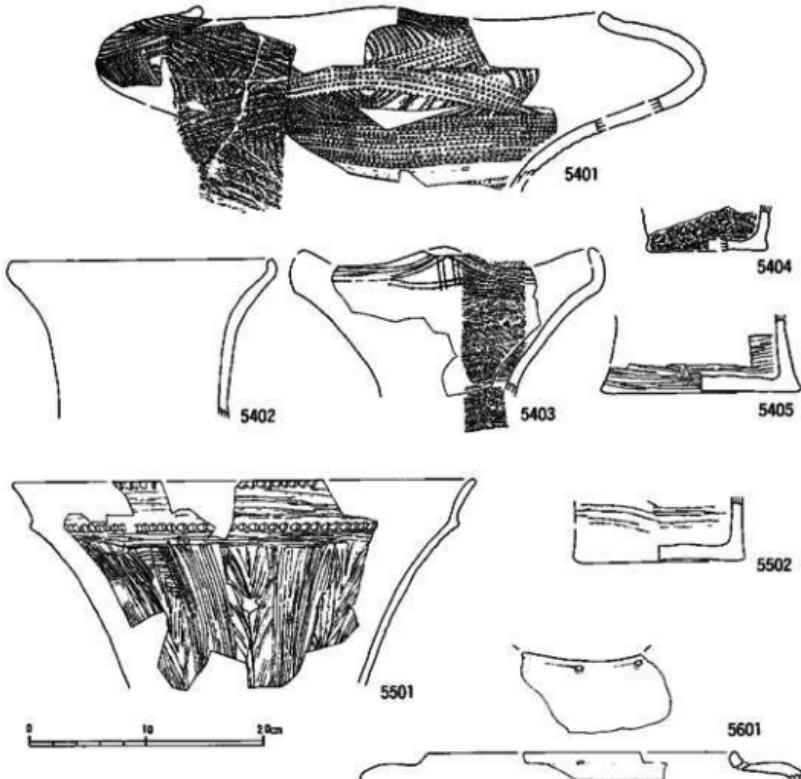


第88図 第55号住居址 (1/60)

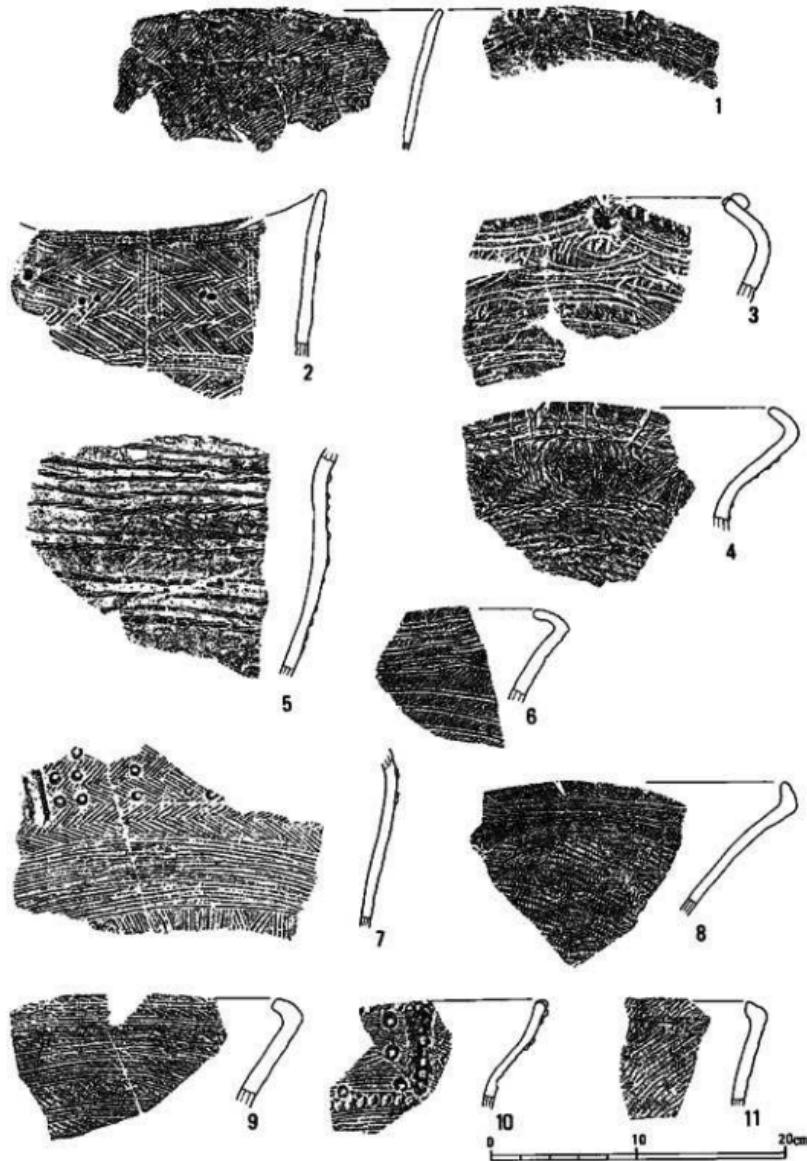
第58号住居址（第87図・図版28）

西側半分が調査区域外のため正確な形状・規模は不明である。推定では径が約580cm×約480cmほどの橢円形プランを呈する住居址と思われる。第56号住居址を切っており、また第481号土壇と重複している。床面は水平で壁高は2cm～30cmを測る。炉跡と思われる焼土が1ヵ所だけ確認されている。

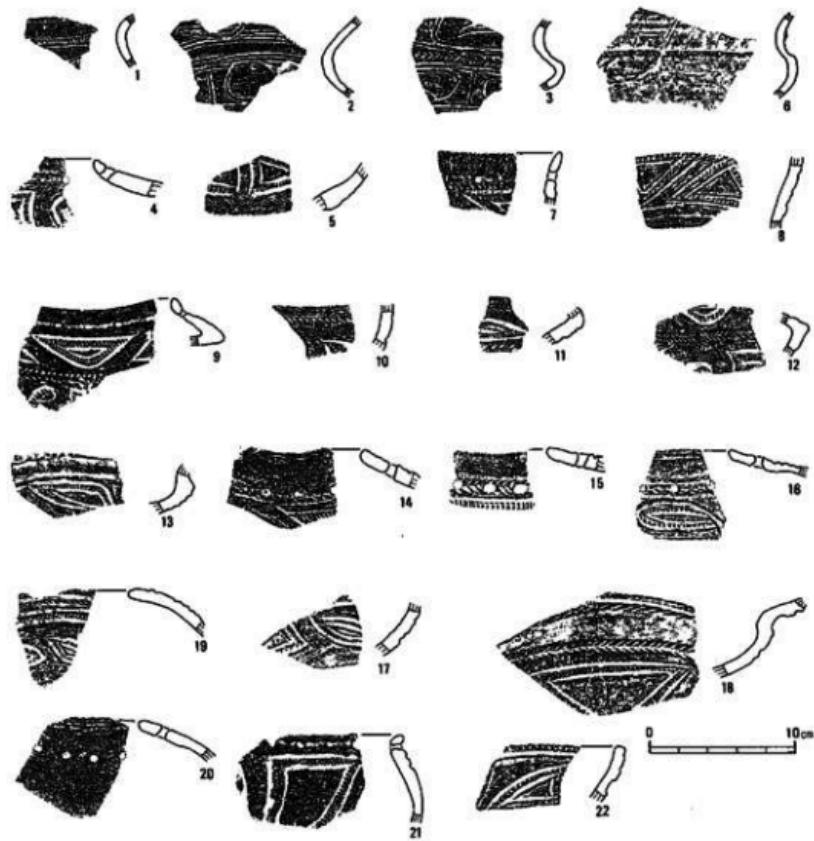
出土土器（第90図10・11） 10は平口縁の深鉢形土器破片。沈線を地文に棒状と円形の貼付文がみられる。棒状貼付文上には押圧が、円形貼付文には刺突がそれぞれ加えられる。括れ部には押圧文がめぐるがこれは5201や5501の土器のものと共通する。11は縄文の付けられた深鉢形土器の口縁部破片。10が諸磯c式古段階、11がb式新段階の土器。



第89図 土器実測図（第54号～56号住居址）(1/5)



第90図 土器拓本 (第48号~52号・56号~58号住居址 (1/4))



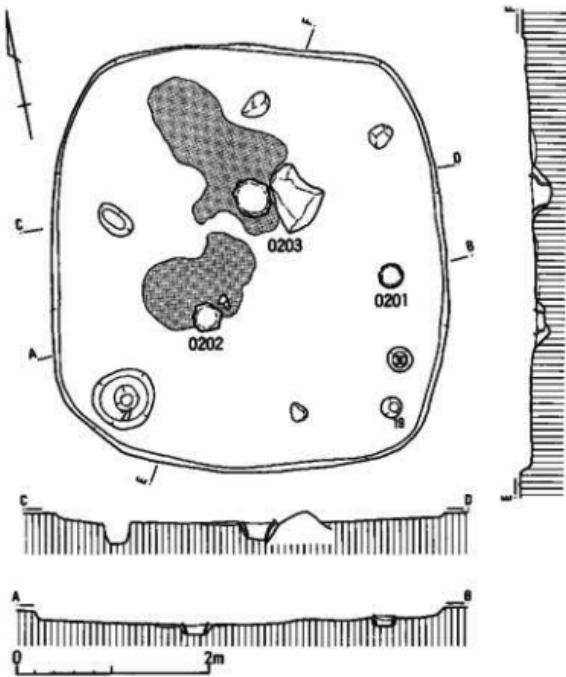
第91図 浅鉢・有孔土器拓本 (1/4)

〔縄文時代中期初頭の住居址〕

第2号住居址（第92図・図版30）

長軸440cm×短軸410cmの胴張り隅丸長方形プランを呈する住居址である。床面はほぼ水平で壁高は10cm未満である。本住居址は東壁から40cmほどの床面に剥離上半部のみの深鉢形土器が埋設されていた。これは縄文中期後半に顕著に見られる埋甕の形態に酷似している。この埋設土器が埋甕と同じ意味を持つとすれば極めて古い段階の珍しい例と言えるであろう。炉跡は住居址の中心に2カ所埋甕炉が存在しまわりには焼土が広く形成されている。土器の中には焼土そのものではなく焼土粒子が混ざった土が含まれていた。

出土土器（第37図） 0201は東南壁際の床面に埋設されていた土器。下半部を欠く。色調明褐



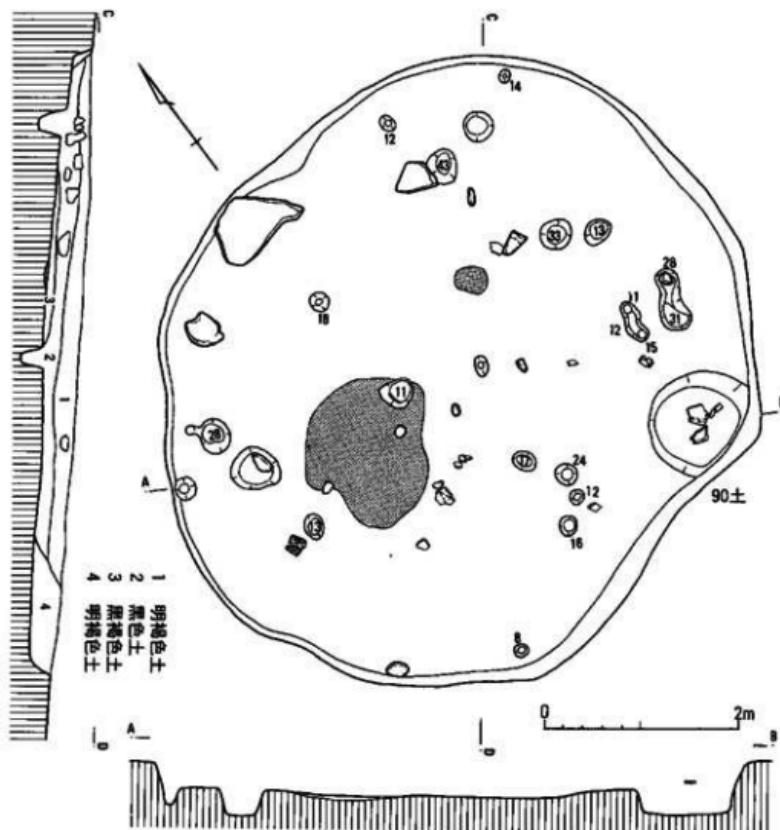
第92図 第2号住居址 (1/60)

色を呈し、連続押引文で装飾されるが地文は繩文である。0202、0203は大型の深鉢形土器で、いずれも下半部を欠く。ともに赤褐色をし胎土中に金色の雲母が入る。埋甕炉として用いられた土器で熱を受け強い。いずれも床面中央付近に埋設されているが、0202が南西側にある。五頭ヶ台式の範疇に入るるものである。石器では石鏃1点、打製石斧4点が出土。

#### 第6号住居址（第93図・図版32）

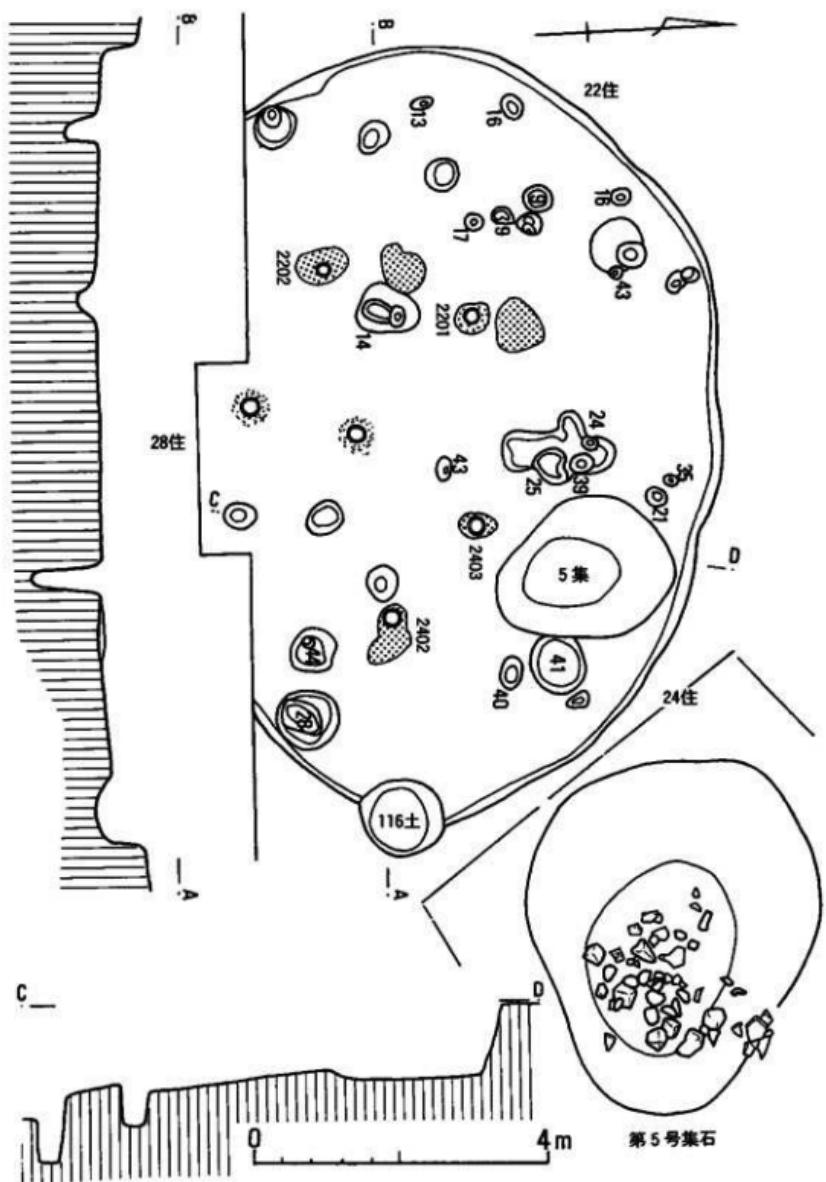
径が $660\text{cm} \times 570\text{cm}$ の梢円形プランを呈する住居址である。南東で第90号土壤と重複している。床面は北東から南西に向かって緩く傾斜している。壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は15cm~20cmを測る。炉跡は住居址中心からやや西よりに径が100cm以上の大きな地床炉が存在する。この炉跡から東へ1mほどの所にも小さな焼土が確認されている。柱穴の配置は整然とはしておらず径も深さもまちまちである。

出土土器（第42図）（第98図） 0601は覆土から出土した小型の深鉢形土器。底部を欠くが隆



第93図 第6号住居址、第90号土壤 (1/60)

帶および沈線による繊細な区画文により装飾される。平口縁ながら小突起が認められる。色調赤褐色。0602は深鉢形土器の腹部破片。地文網文で隆帯と沈線で装飾される。隆帯の両側には縦方向の玉抱三叉文がみられる。第98図1～3は口縁部破片。いずれも波状口縁で波頂部には刻目のある突起があり、その直下に玉抱三叉文が施文される。1では内面にも同様な文様がみられる。これらは五領ヶ台式土器であるが、0603は覆土中から出土した諸磧c式とみられる有孔土器破片。

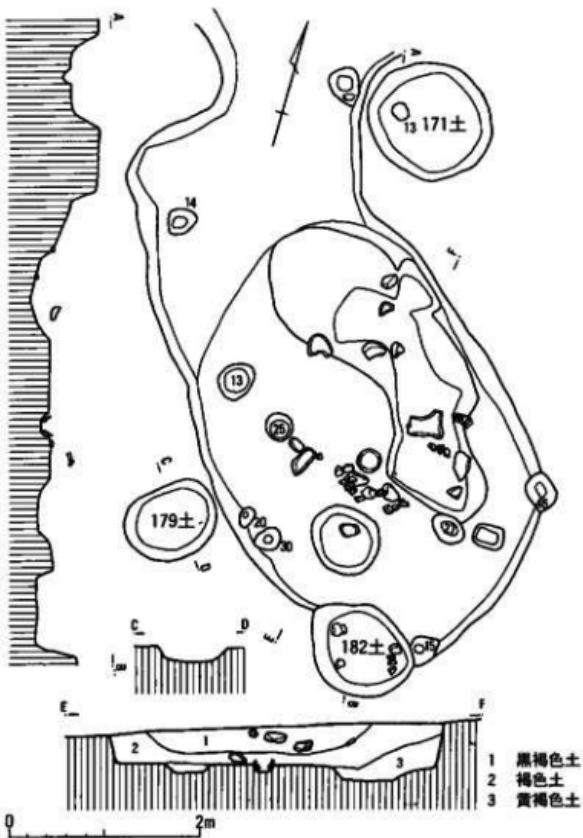


第94図 第22・24・28号住居址、第116号土壤 (1/80)、第5号集石 (1/40)

第22・24・28号住居址（第94図・図版31）

およそ西半分の範囲を第22号住居址、東半分を第24号住居址、南よりの範囲を第28号住居址と3基の住居址を想定して発掘を進めた。第5号集石遺構と第116号土壙と重複している。それぞれが2基づつの埋甕炉を有する3基の住居址と理解していたが、整理作業を進める中で3基存在することを積極的に主張できる根拠が希薄になってきたために一応3基一括して扱うこととなった。床面は南に向かって緩く傾斜しており、全体に凹凸が激しい。発掘した範囲は東西約11m南北約7mで、壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は約40cmを計る。

出土土器（第57図） 2201, 2202ともに炉として用いられた埋設土器。2201は住居ほぼ中央に埋設されたもので、口縁および胴下半部を欠く。結節のある繩文を地文とした隆起による継位



第95図 第29号住居址、第171・179・182号土壙 (1/60)

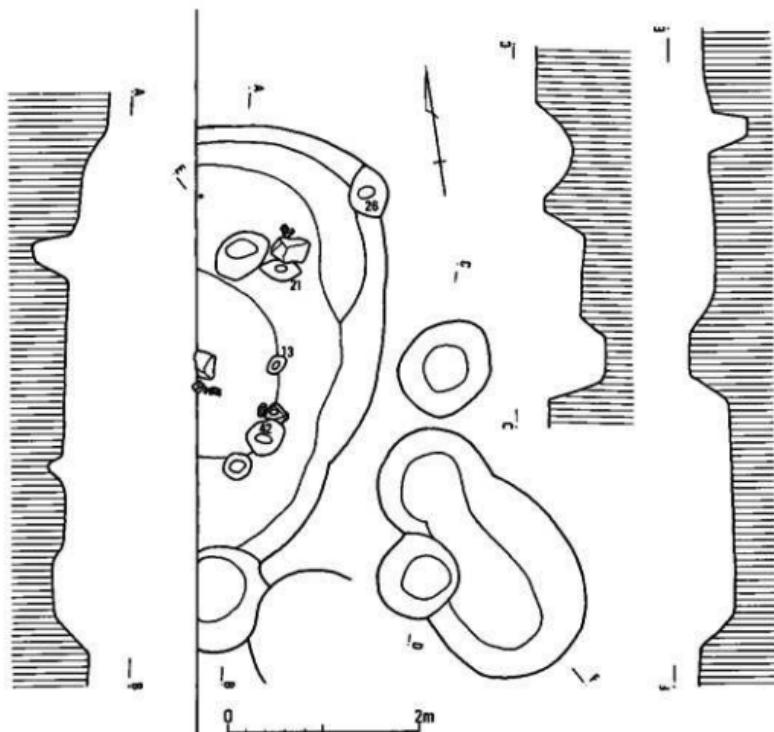
区画の土器。2202は2201よりも南側に埋設された上下を欠く深鉢形土器。斜行沈線を地文としている。第98図4～9も第22号住居の土器。4・5は深鉢形土器破片。6～9は同一個体の可能性ある浅鉢形土器破片。口縁部内面に爪形文による同心円や平行文が走る。

第57図2401は胴下半部を欠く口縁のあまり開かない小型の深鉢形土器。2402は炉の埋設土器。口縁と下半部を欠く。地文繩文。2403も埋設土器であるが2402の北西約2mの住居ほぼ中央にある。口縁部を部分的に欠く。第98図10は第24号住居出土の浅鉢形土器破片。口縁部内面に爪形文による装飾がある。五領ヶ台式土器。

なお22号からは土製円盤1点（第165図2）が出土。

#### 第29号住居址（第95図・図版32）

径が470cm×320cmの橢円形プランを呈する住居址である。北側で第181号土壤、南側で第182号土壤と重複している。壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は30cm～50cmを測る。床面は水



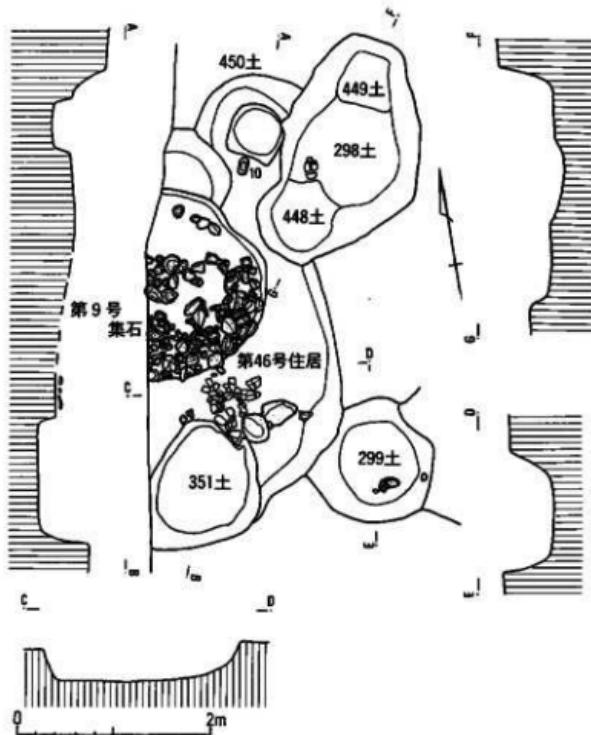
第96図 第44号住居址 (1/60)

平であるが北側から東側にかけて長さ350cm幅100cm、深さ10cm～20cmほどの浅く大きな落ち込みが存在する。炉跡は住居址の中心に埋甕炉が確認された。

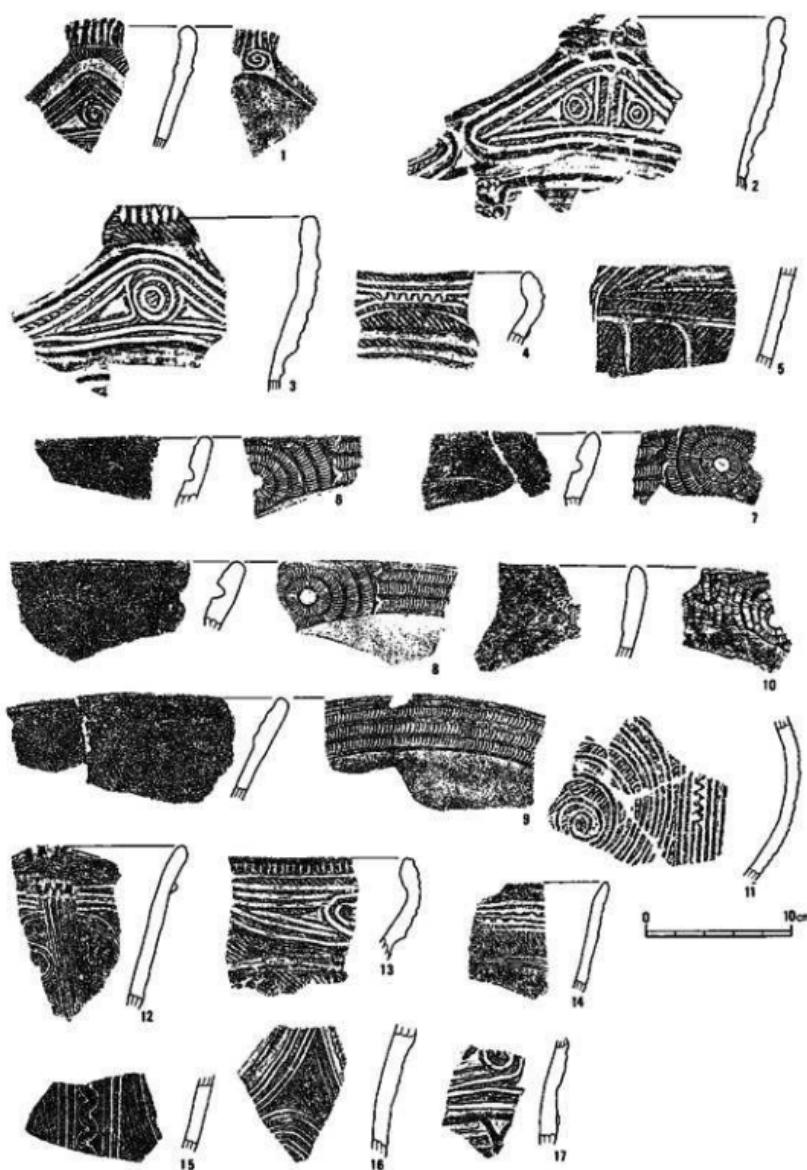
出土土器（第66図、第98図11～14、第38図26） 2901は炉の埋設土器。小突起のある深鉢形土器で、地文繩文に沈線や刻目、隆帯などで装飾される。なお同心円やその周囲の沈線文は玉抱三叉文を意識させる。頸部以下を欠く。2902は底部付近の破片。結節繩文と爪形文のある隆帯がみられる。第98図11～14はいずれも深鉢形土器破片。第38図26は諸磯c式古段階の土器。深鉢形土器で口縁部には内面から外面にかけて縦長の貼付文が連続し、さらに地文沈線の上に円形貼付文がみられる。本住居址の時期は五領ヶ台式土器の時期である。

#### 第35号住居址（第69図・図版22）

直径500cmほどの円形プランを呈する住居址である。南東で第243号土壤、第246号土壤と重複している。南側の繩文前期の第36A号住居址の上に貼床が存在するはずであったが確認できなかった。床面は南側へ緩く傾斜している。炉跡は住居址中心からやや東寄りに埋甕炉が1基



第97図 第46号住居址・第298・299・351・448～450号土壤・第9号集石 (1/60)



第98圖 土器拓本（第6号・22号・24号・29号・35号住居址）(1/4)

存在する。整然とした柱穴の配列は見られない。

出土土器（第66図）（第98図） 3501は小穴隙から出土した深鉢破片。筒形に近い器形で、地文繩文に沈線と隆帯で施文される。頸部の玉抱三叉文を中心とした文様構成。3502は炉の埋設土器。胴下半部を欠く。口縁部には小突起が認められる。第98図15～17も本址出土の破片。以上五領ヶ台式土器。

#### 第44号住居址（第96図・図版30）

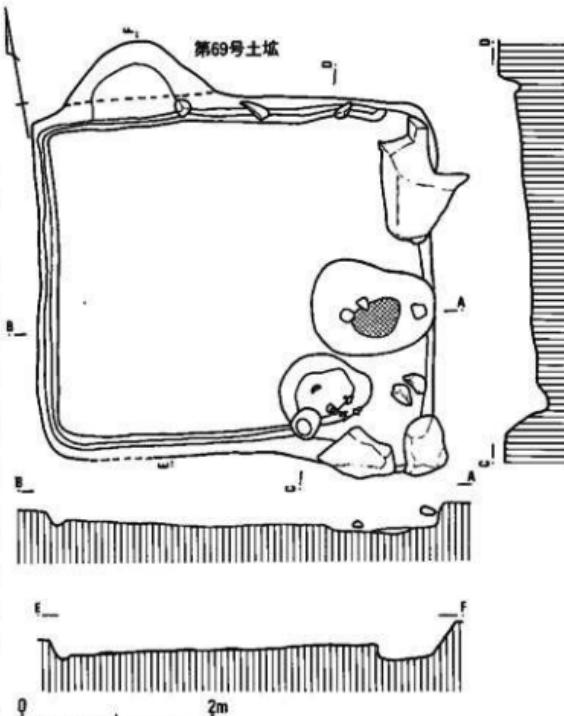
住居址の西側大半が調査区域外のため正確な規模・形状は不明である。南側で第378号土壌と重複している。床面は掘り鉢状で住居址中心部分が周囲よりやや低い。壁も緩い傾斜で立ち上がり床面との境が明らかでない。本住居址の炉跡は巨大な地床炉で西半分は調査区域外ではあるが直径100cm以上の規模で焼土が形成されているようである。

出土土器（第79図） 4401は無文の深鉢形土器。全体に指頭痕が残る。4402は全面繩文で平口縁ながら小突起がみられる。4403は口縁部と底部を欠く深鉢形土器。地文繩文で竹管による沈線がみられる。五領ヶ台式土器。

#### 第46号住居址

（第97図）

西側半分が調査区域外である上に周囲で第298号土壌、第299号土壌、第351号土壌、第448号土壌、第449号土壌、第450号土壌と重複、そして住居址の中に第9号集石遺構が掘り込まれているため正確な形状・規模は不明である。残っている壁の状況から直径約400cmほどの円形プランを呈する住居址と思われる。床面はほぼ水平で壁は緩やかな傾斜で立ち上がり床面との境が明白でない。炉跡と柱穴は確認されていない。



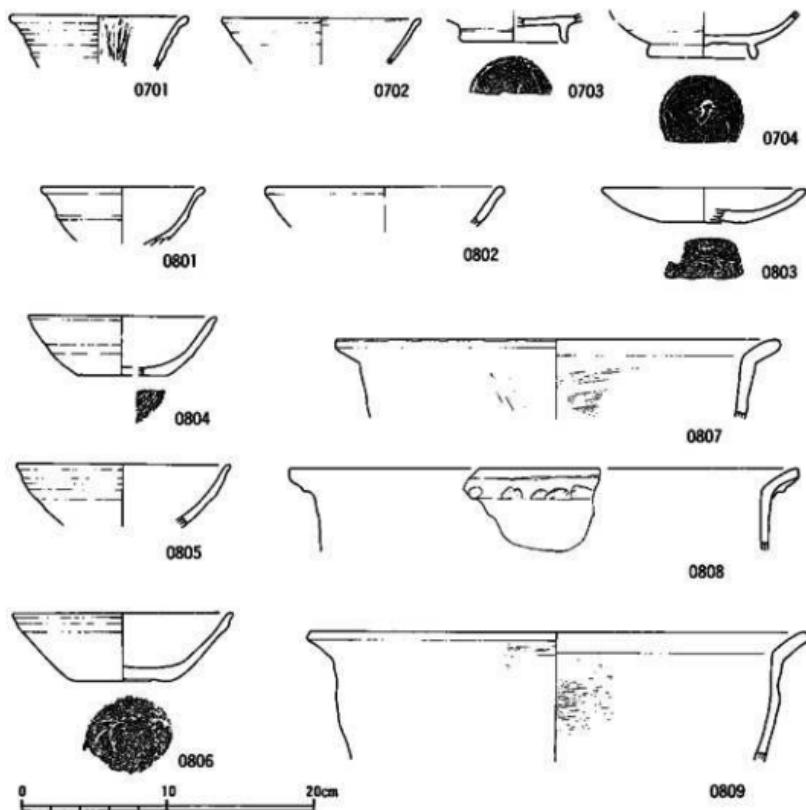
第99図 第7号住居址、第69号土壌 (1/60)

出土土器（第79図） 4601は床面から出土した深鉢形土器。平口縁ながら小突起がつけられるものであろう。頸部に繩文のある隆帯がめぐり、口縁部文様は地文繩文に沈線を主とする。胴部は繩文で結節がみられる。五領ヶ台式土器。

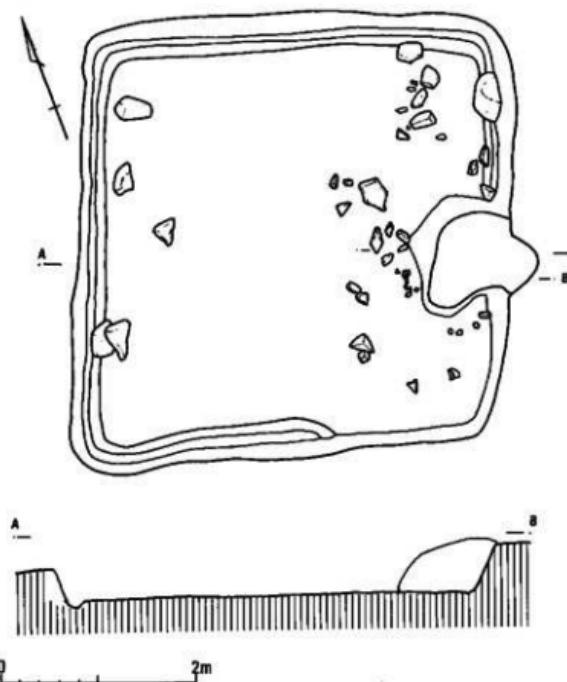
〔平安時代の住居址〕

第7号住居址（第99図・図版33）

南北360cm、東西420cmの隅丸長方形プランを呈する住居址である。北壁が第69号土壙を切っている。東壁以外の壁に沿って周溝が掘られている。幅は約15cm深さ10cmほどである。床面は凹凸がなく平らであるが南東隅に向かって緩く傾斜している。カマドは東壁の中央からやや南寄りに設けられているが掘り込みしか残っておらず底面にわずかに焼土が確認できただけであ



第100図 土器実測図（第7号・8号住居址）(1/4)



第101図 第8号住居址 (1/60)

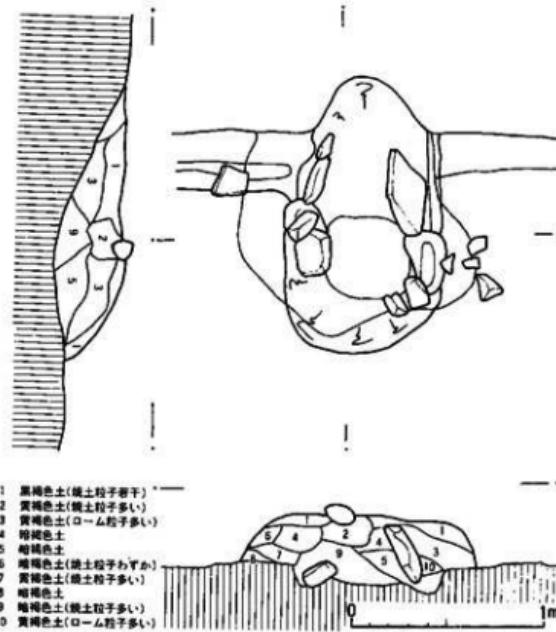
る。カマドの南に小堅穴が存在し土師器がまとまって出土している。

**出土土器 (第100図)** 0701, 0702は土師器壊破片。0703, 0704は灰釉陶器破片。

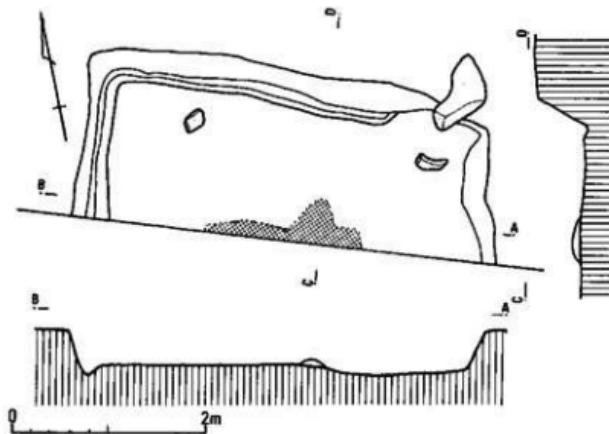
#### 第8号住居址 (第101図・図版33)

一辺が約450cmの隅丸方形プランの住居址である。南東隅の部分を除いて壁に沿って周溝が掘られている。幅は約15cm深さは2~5cmほどである。床面は水平で壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は約45cmを測る。カマドは石組みで袖石がわずかに残る程度である(第102図)。

**出土土器 (第100図)** 0801~0806は土師器壊。0807~0809は甕破片。0804, 0806, 0808, 0809はカマドからの出土。



第102図 第8号住居址カマド (1/30)

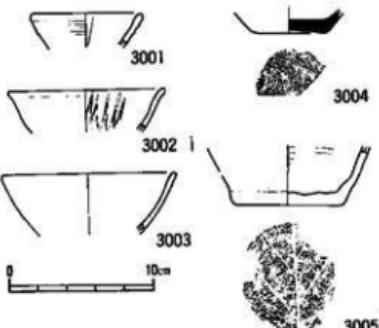


第103図 第30号住居址 (1/60)

### 第30号住居址（第103図・図版33）

南側半分が削平されているが一辺約400cmの隅丸方形プランを呈する住居址と思われる。周溝は北壁と西壁に沿って掘られており幅深さともに約15cmである。床面はほぼ水平だが東側が若干窪んでいる。壁は垂直に近い角度で立ち上がり壁高は約40cmを測る。住居址の中央部分に焼土の固まりが存在していた。

出土土器（第104図） 3001～3003は土師器坏。3004は須恵器底部破片。3005は土師器の壺底部。



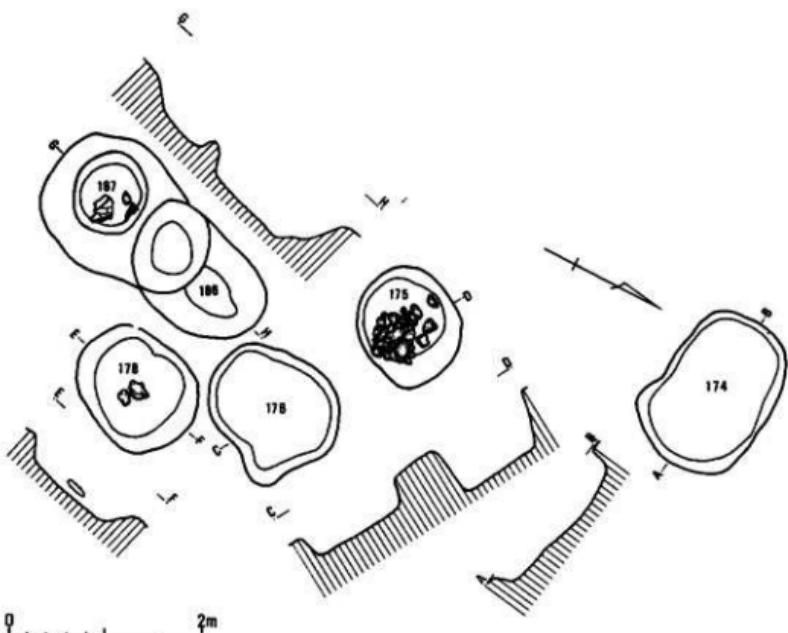
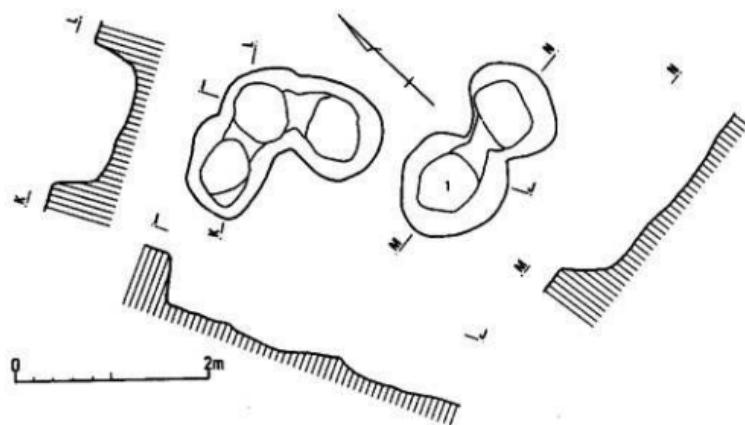
第104図 土器実測図（第30号住居址）(1/4)

### 2 土壙（第105～152図・図版34～37・表4）

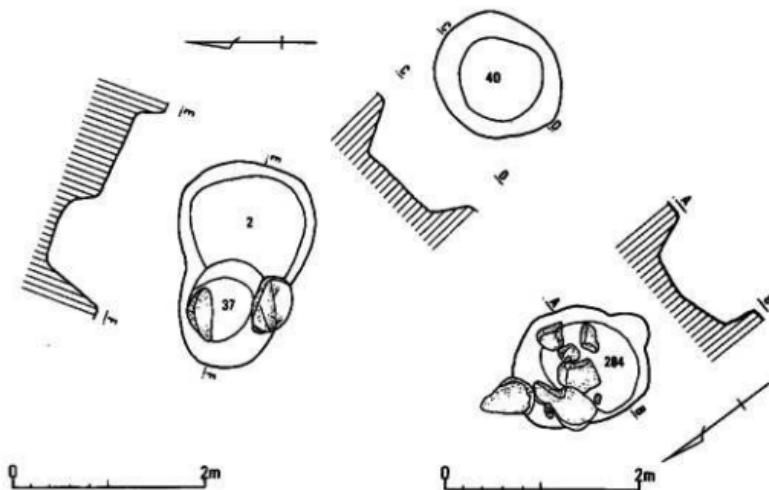
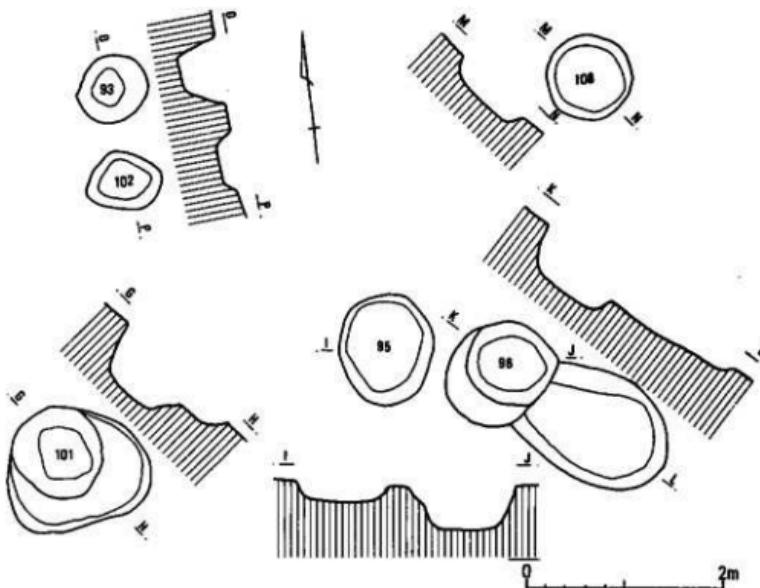
本遺跡では488基の土壙が発見された。それぞれの時期は出土土器、遺構の重複関係等から決定されるものであるが、中にはそのいずれの情報も得られない例も存在している。しかし土壙群全体の状況から推測すればほとんどの土壙が縄文時代前期後半に属するものと考えて差し支えないであろう。縄文時代中期初頭の土壙では確認されているものは6基のみである。

本遺跡はもちろん集落としてのすべての範囲を発掘調査したわけではないため、正確な全貌は把握しきれてない。しかし調査区西側と東側では土壙群の様相は明らかに異なっている。すなわち簡単に表現すれば、西側とくに西側の北半分の地区が土壙の密集地域で住居址の存在が希薄なのに対して、東側の地区は土壙の密度も薄く住居址群の展開が目立つ。西側の土壙群は何らかの共通した意識のもとで形成されたものと考えられる。その共通の意識とは、大形の深鉢形土器を伏せて埋納した第338号土壙、翡翠の大珠と共に甕被り葬を連想させる深鉢形土器を出土した第421号土壙、有孔土器を出土している第136・160・355号土壙、深鉢形土器を出土している第149・170・247・251・400号土壙などの状況から推測すると、西側の土壙群は墓域と認識された可能性が強いものと考えられる。これに対して東側の土壙群は、浅鉢形土器や有孔土器を出土している第45・73号土壙、人頭大の石が入れられた深鉢形土器が出土した第41号土壙、深鉢形土器が埋納されていた第90号土壙など墓壙と考えられるものも存在するが、全体とすれば西側のような特定の目的意識のもとで形成された土壙群ではなく、必要時にその目的にそってつくられたものが多いと考えられる。

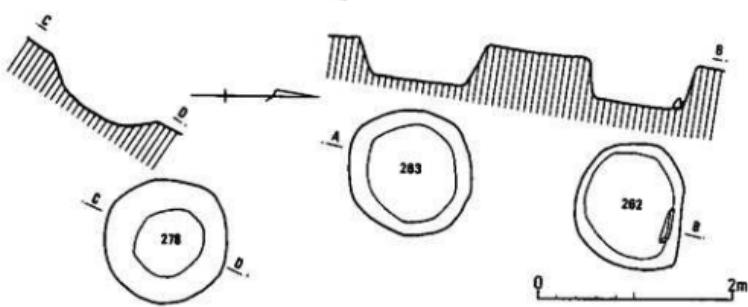
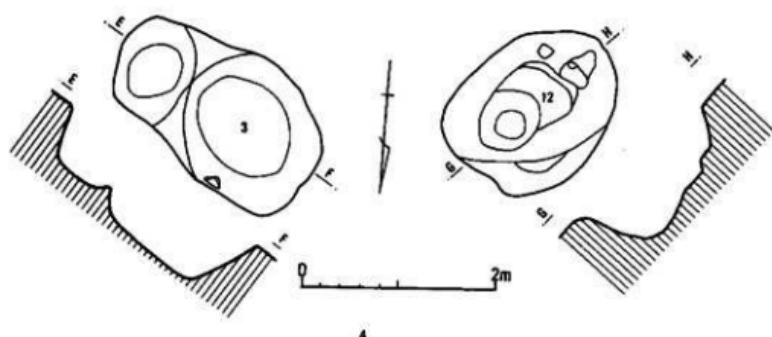
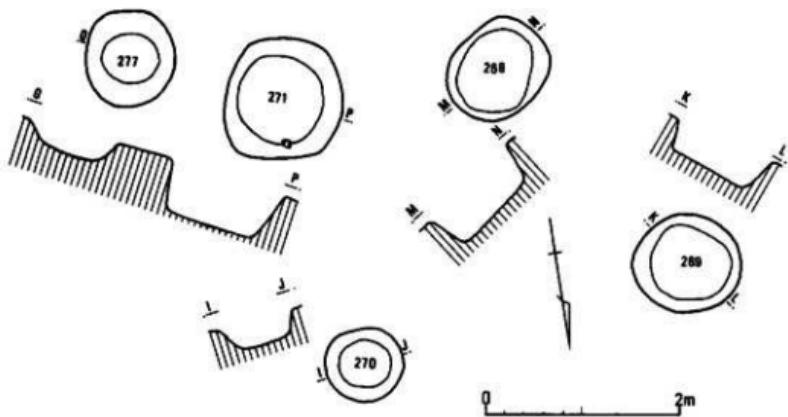
これら土壙488基については表4（P166～P173）にまとめた。出土遺物の説明は、土器については土壙の図に統いて行い、土器以外の土製品や石器・石製品については6項（土製品）・7項（石器）・8項（石製品）で行う。なお土壙一覧表記載の時期については図示できなかつた破片も参考にしている。



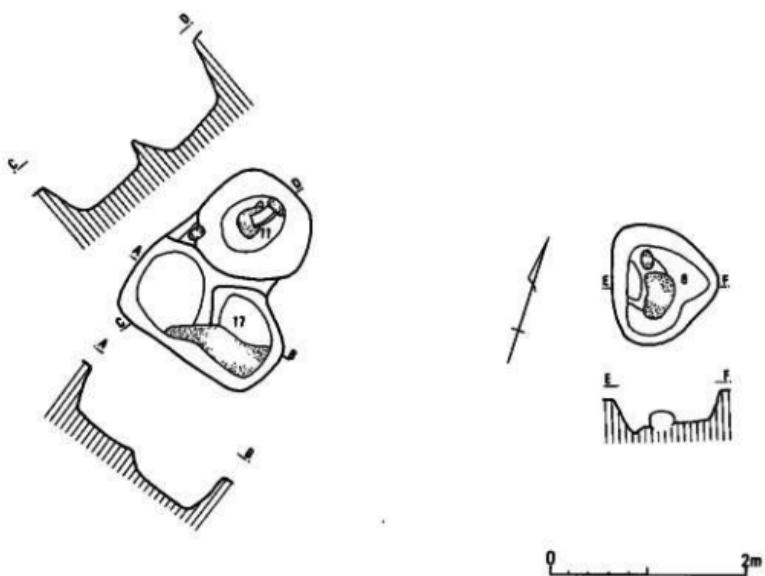
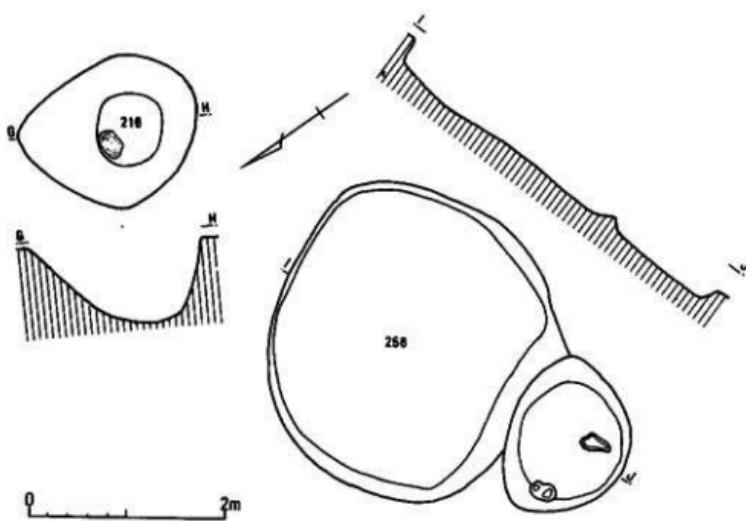
第105図 土壌（第1・174~176・178・186・187号）(1/60)



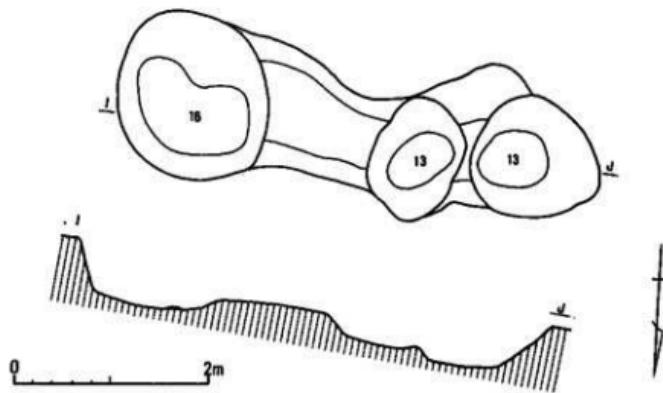
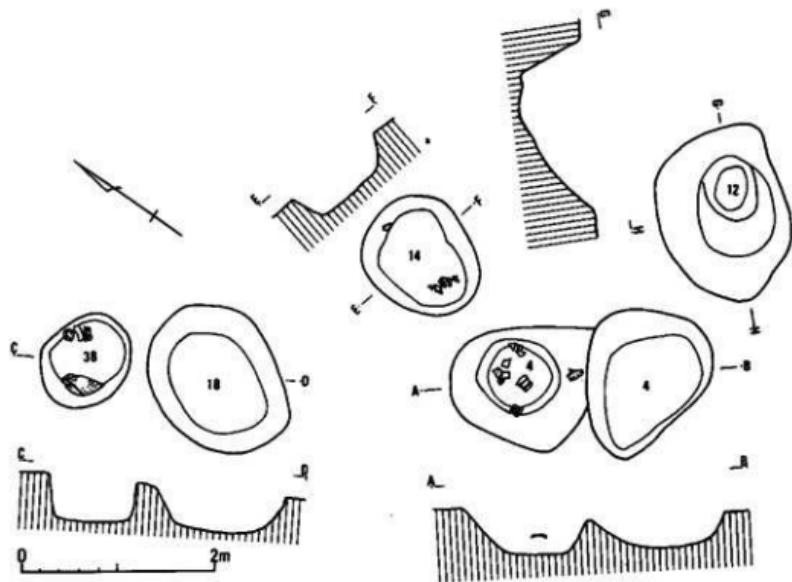
第106図 土壌（第2・37・40・93・95・96・101・102・108・284号）(1/60)



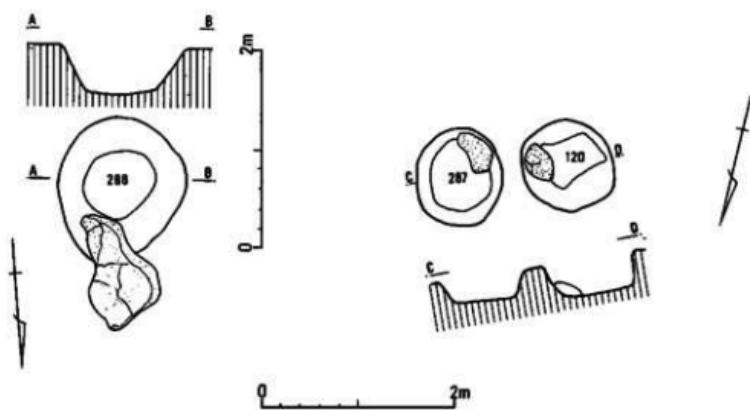
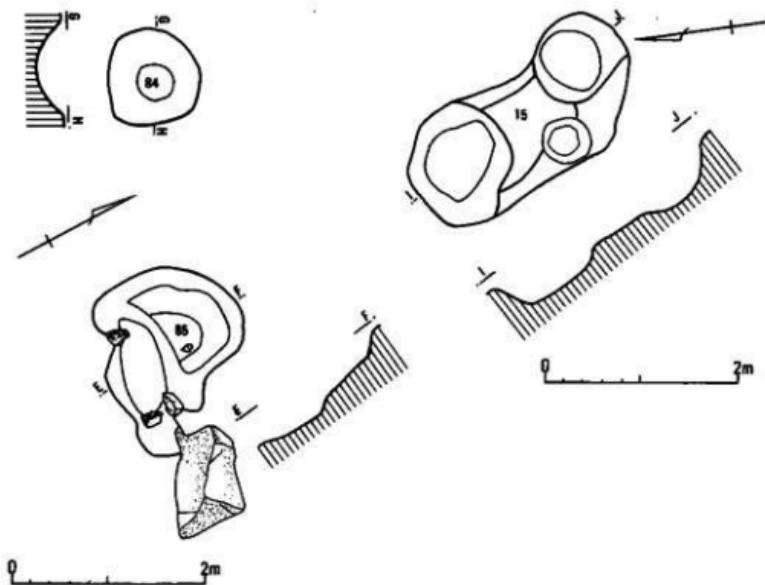
第107図 土壌（第3・12・262・263・268～271・277・278号）(1/60)



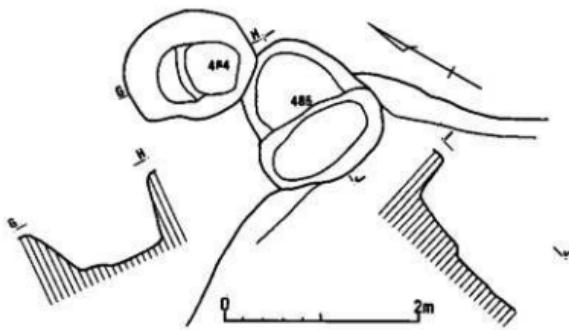
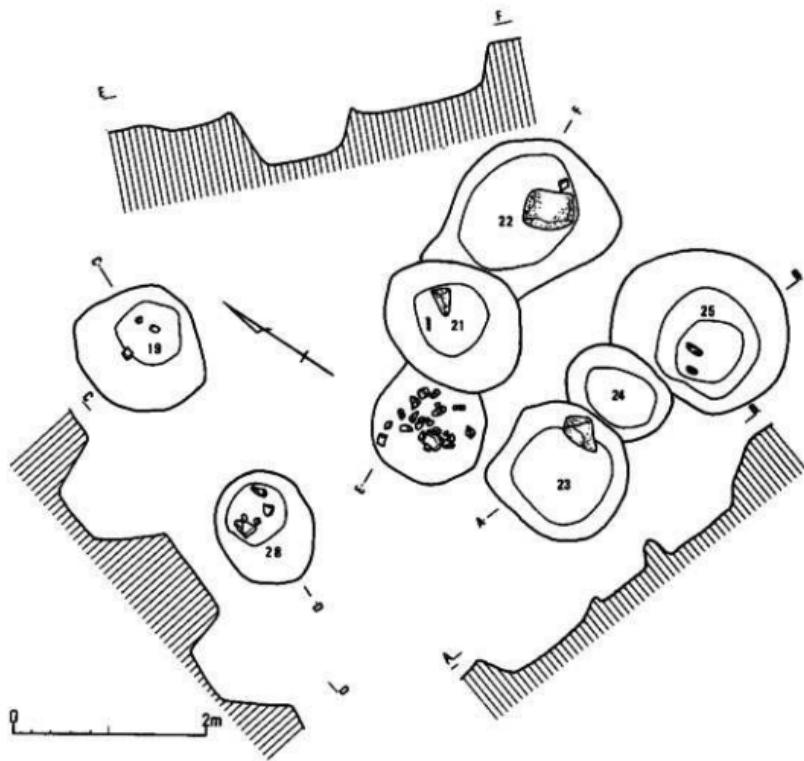
第108図 土壌（第6・11・17・216・256号）(1/60)



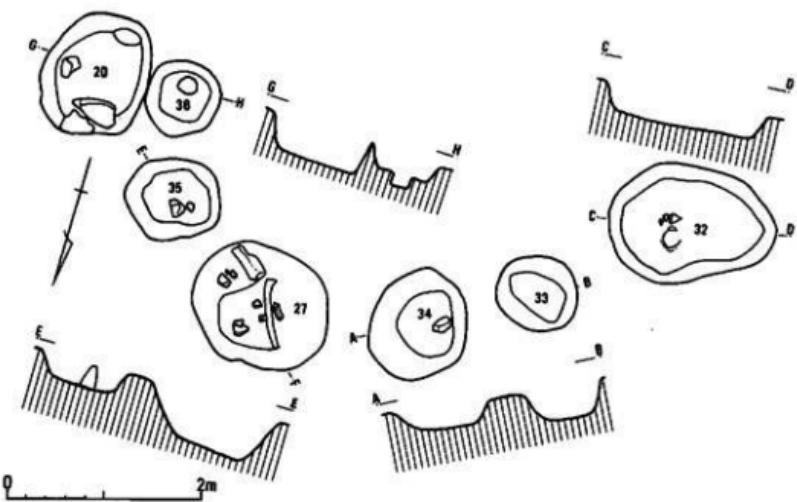
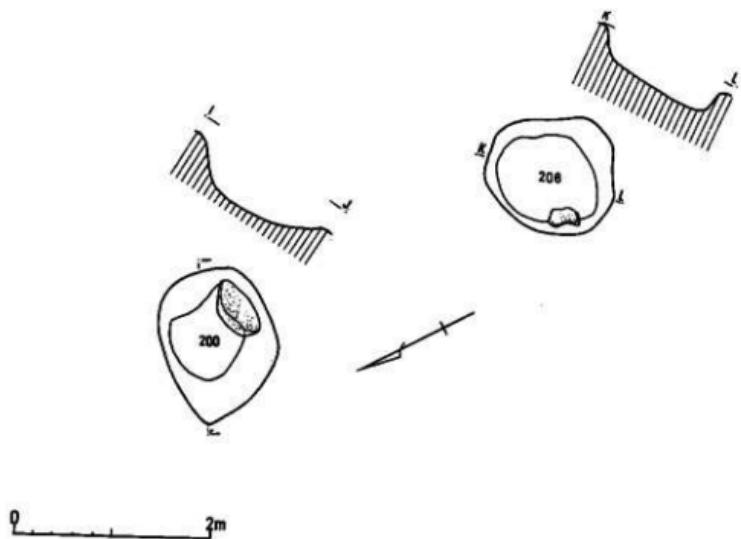
第109図 土壌 (第4・12~14・16・18・38号) (1/60)



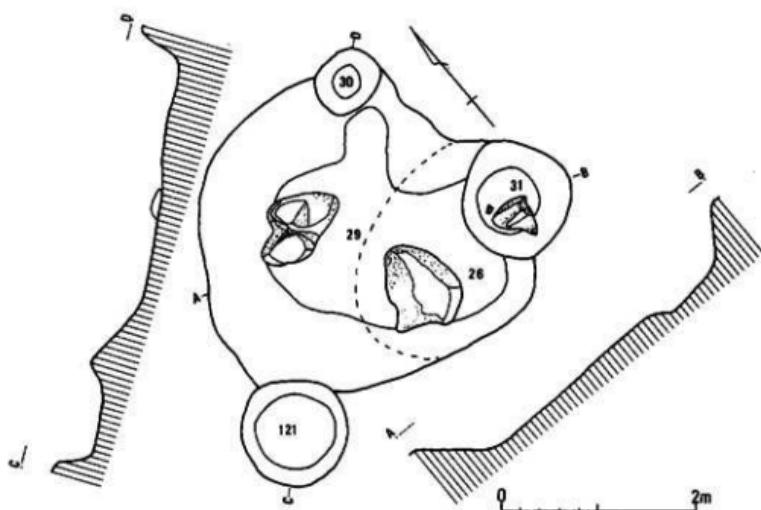
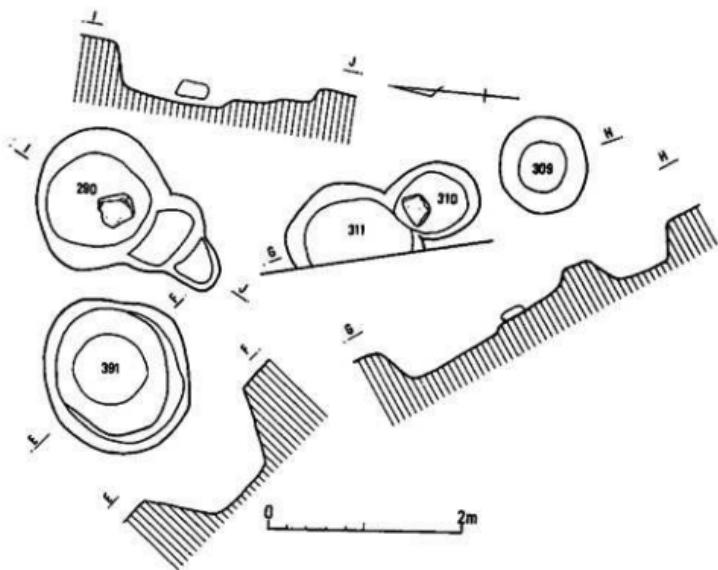
第110圖 土壤 (第15・84・85・120・286・287号) (1/60)



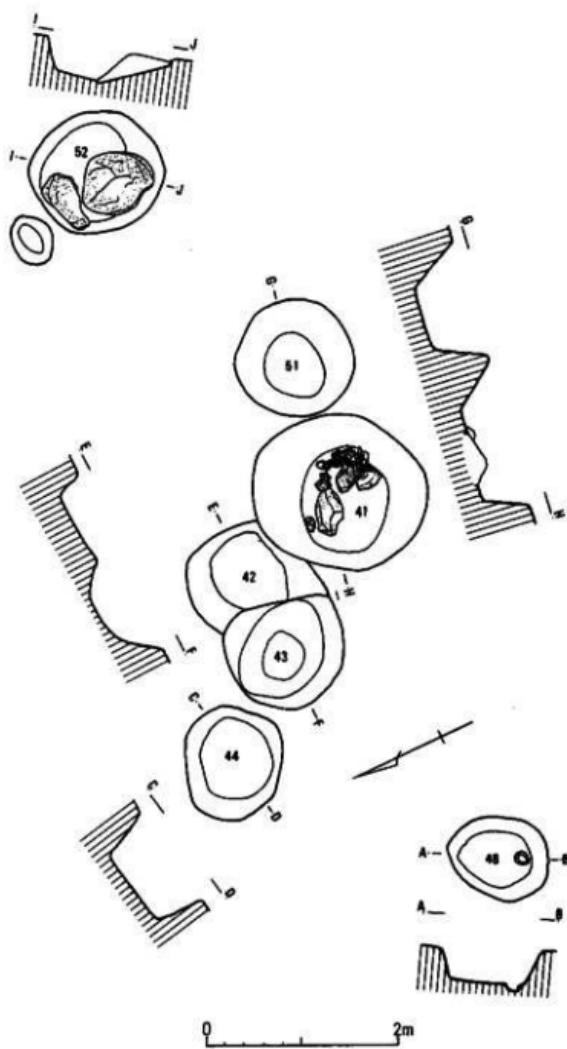
第111圖 第1号集石、土壤（第19·21~25·28·464·485号）(1/60)



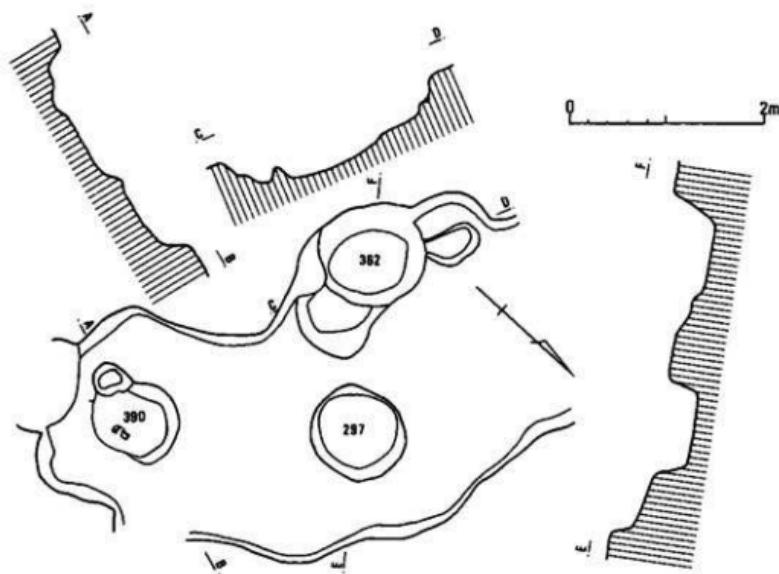
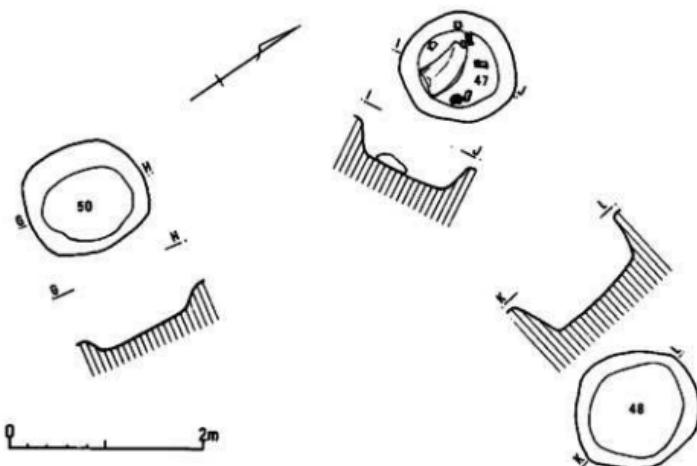
第112図 土壌（第20・27・32~36・200・206号）(1/60)



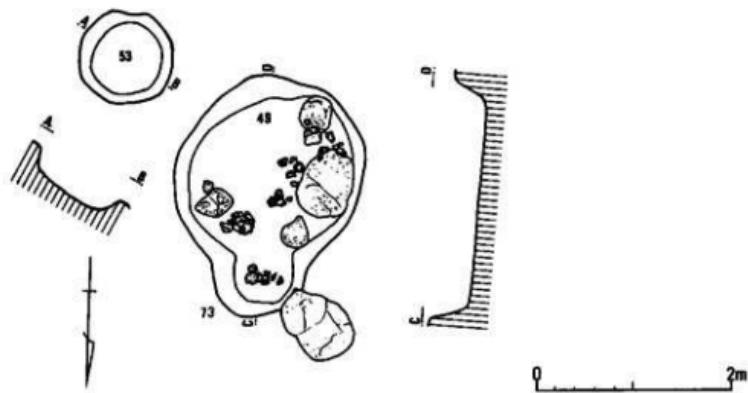
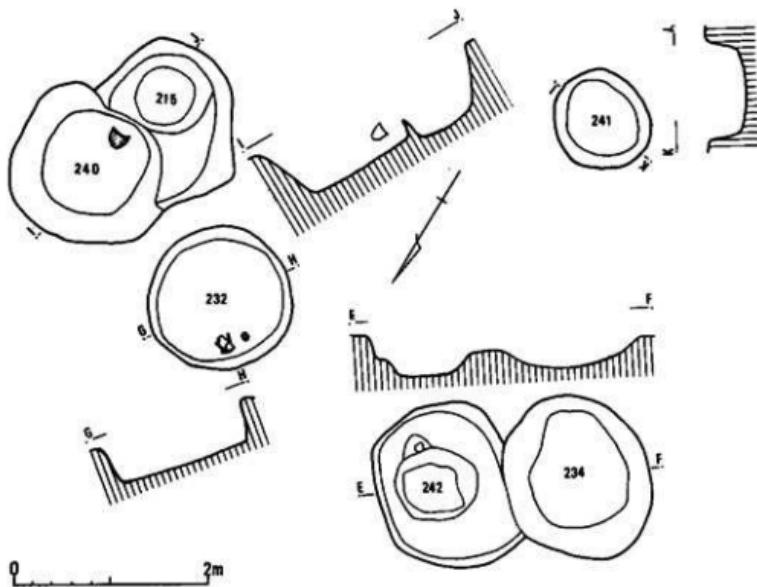
第113図 土壌（第26・29～31・121・290・309～311・391号）(1/60)



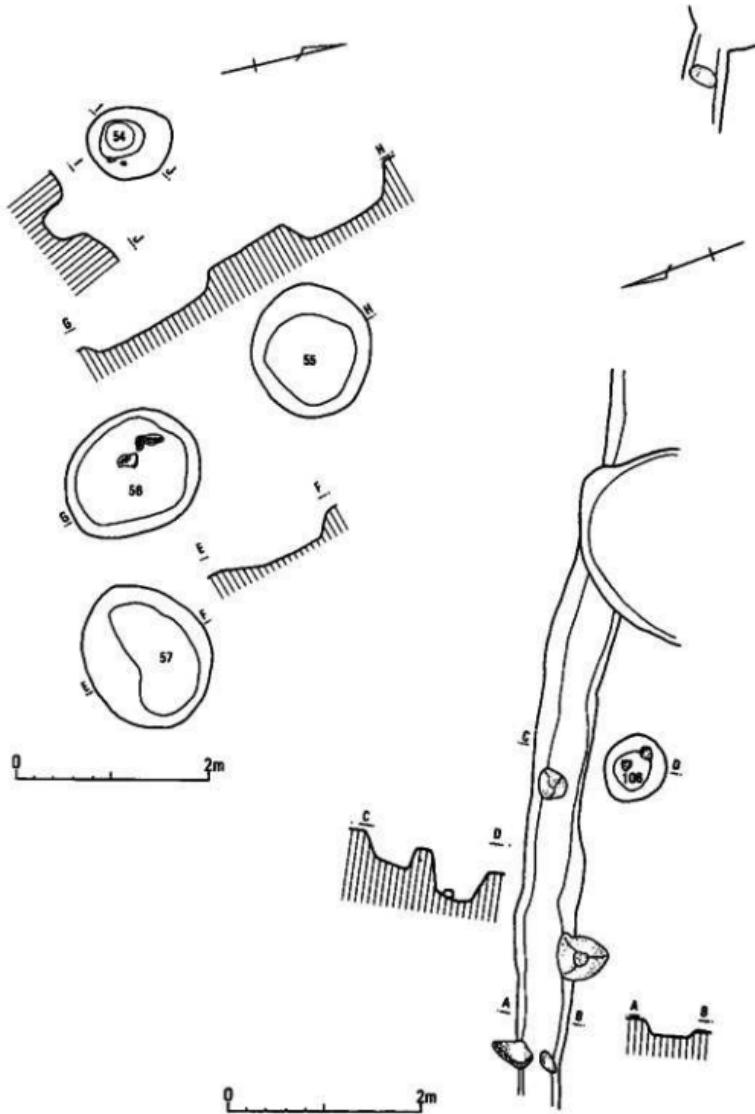
第114図 土壌（第41～44・46・51・52号）(1/60)



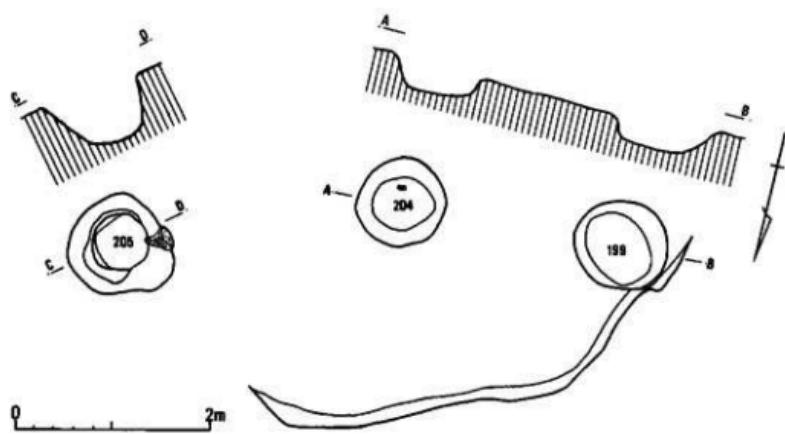
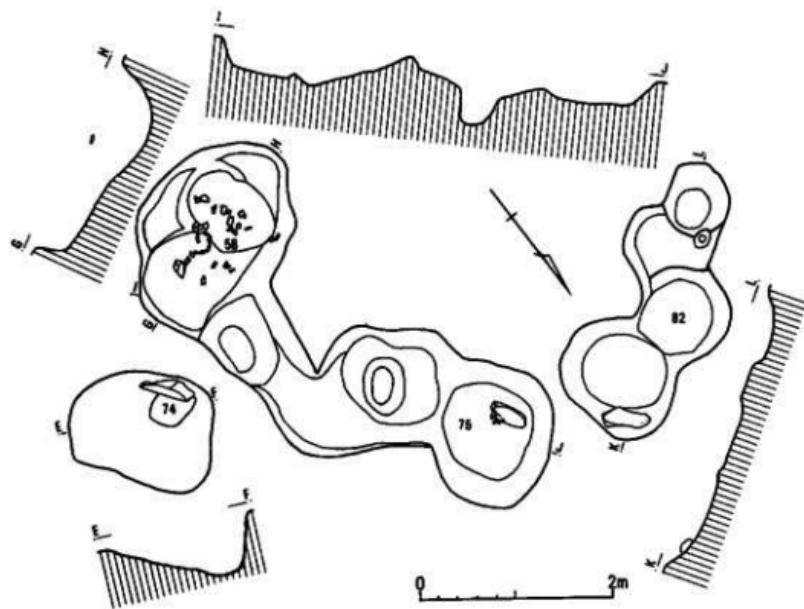
第115図 土壌 (第47・48・50・297・362・390号) (1/60)



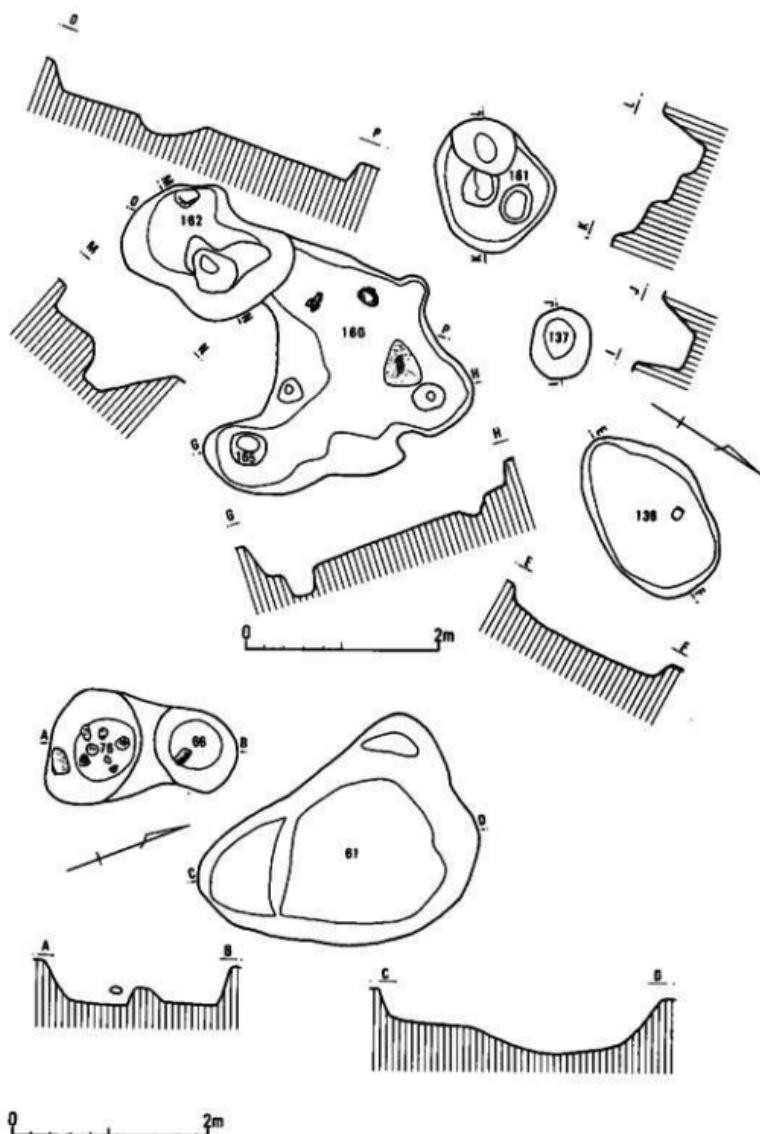
第116図 土壌 (第49・53・73・215・232・234・240～242号) (1/60)



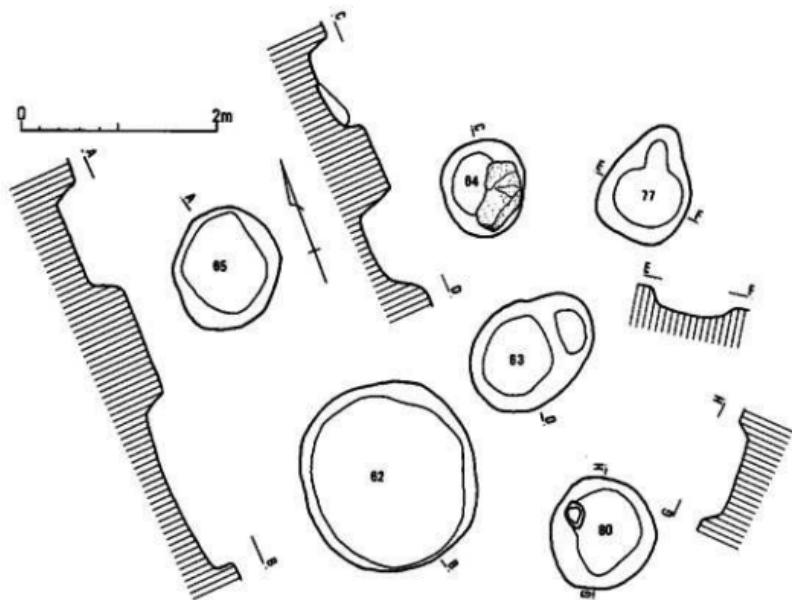
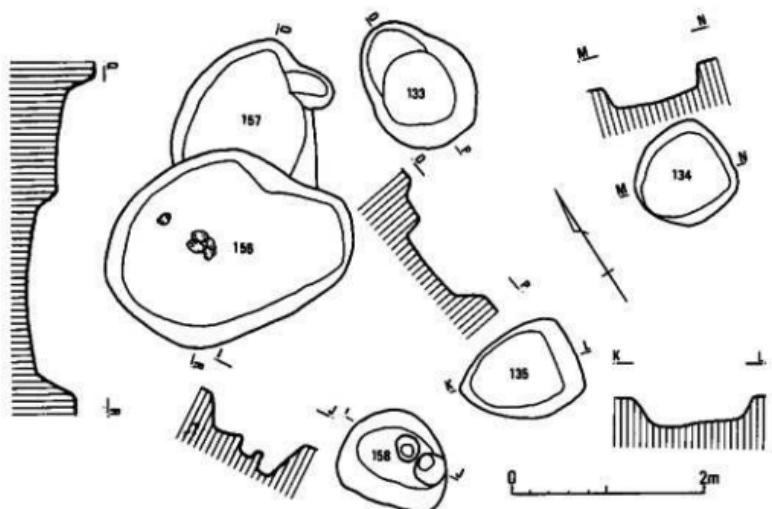
第117図 土壌（第54～57・106号）(1/60)



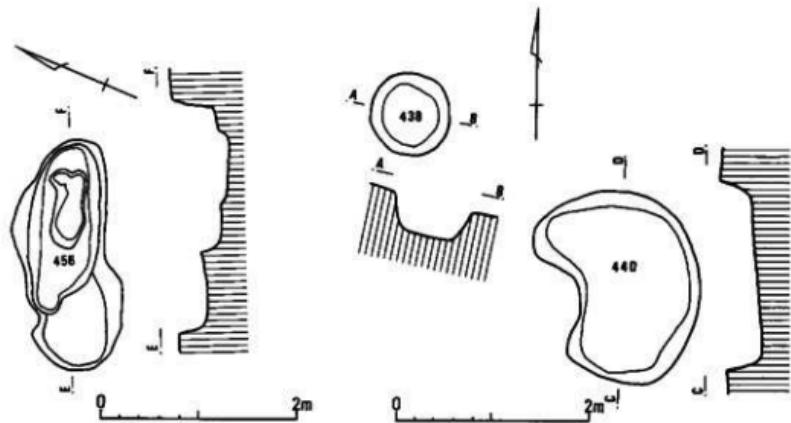
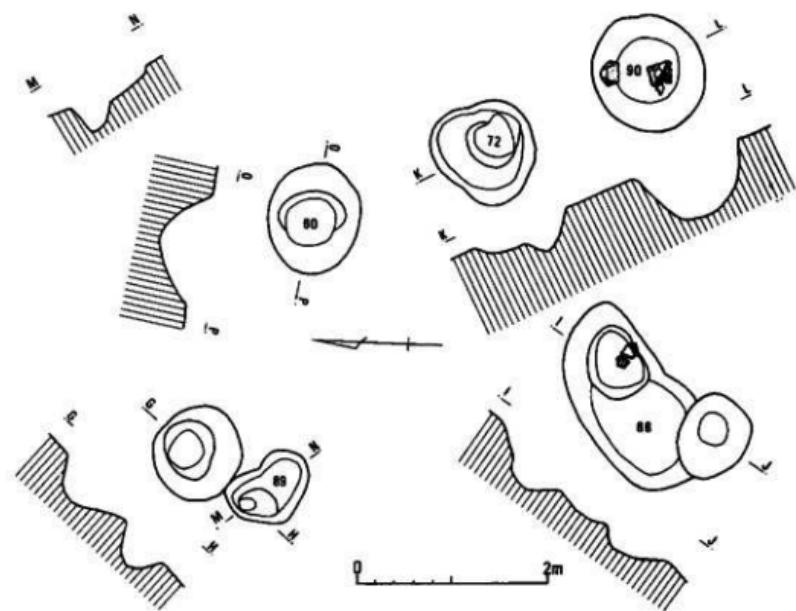
第118図 土壌（第58・74・75・82・199・204・205号）（1/60）



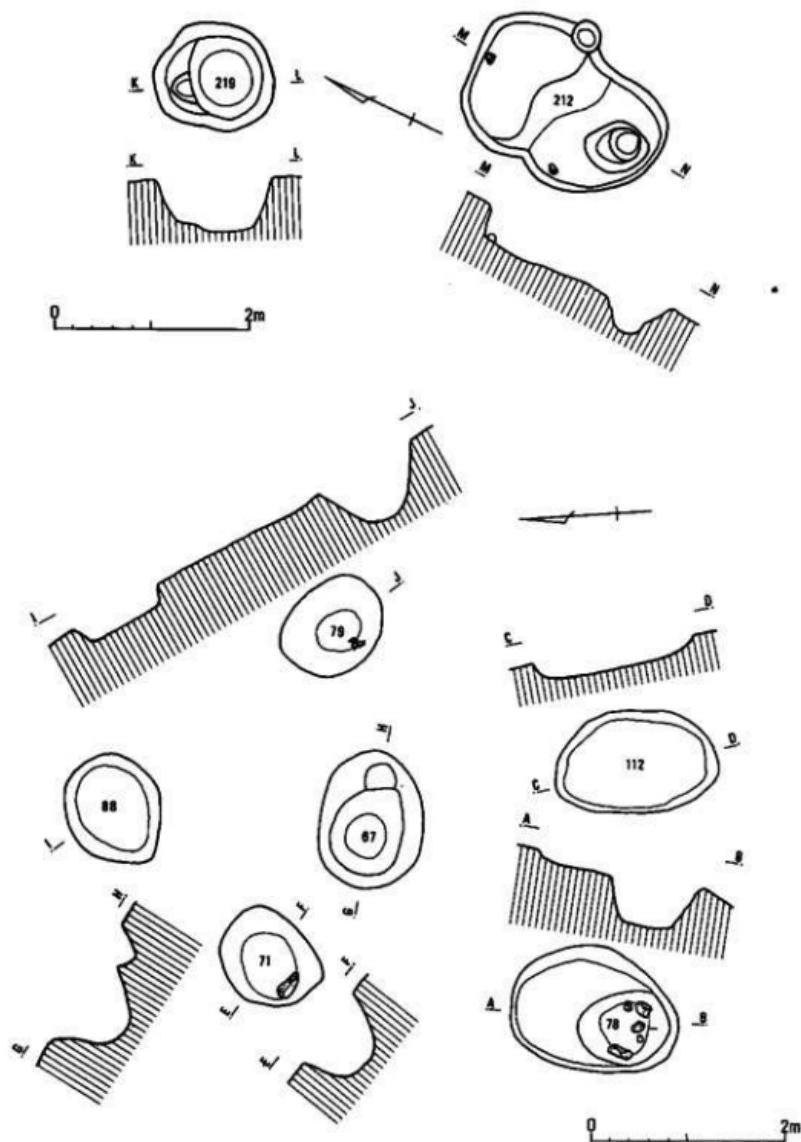
第119図 土壌（第61・66・76・136・137・160～162・165号）(1/60)



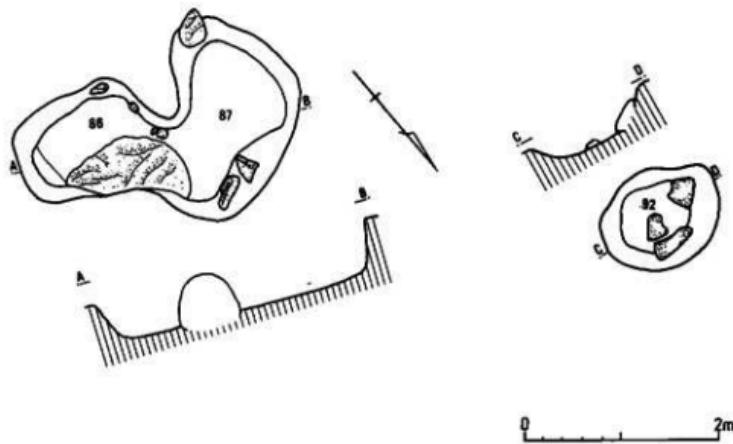
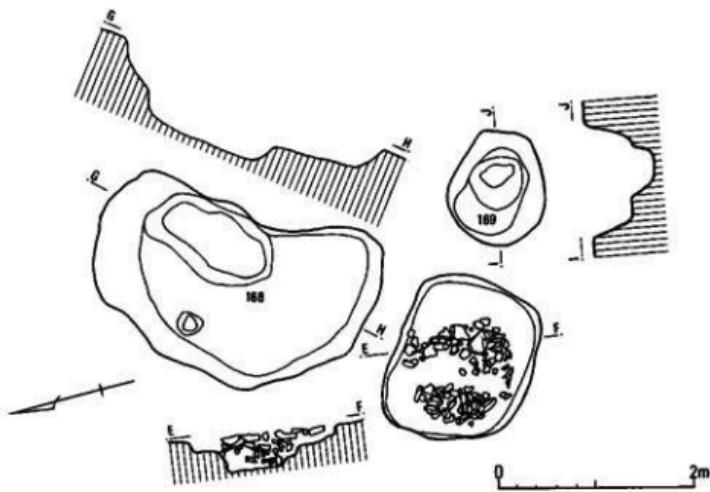
第120図 土壌（第62～65・77・80・133～135・156～158号）(1/60)



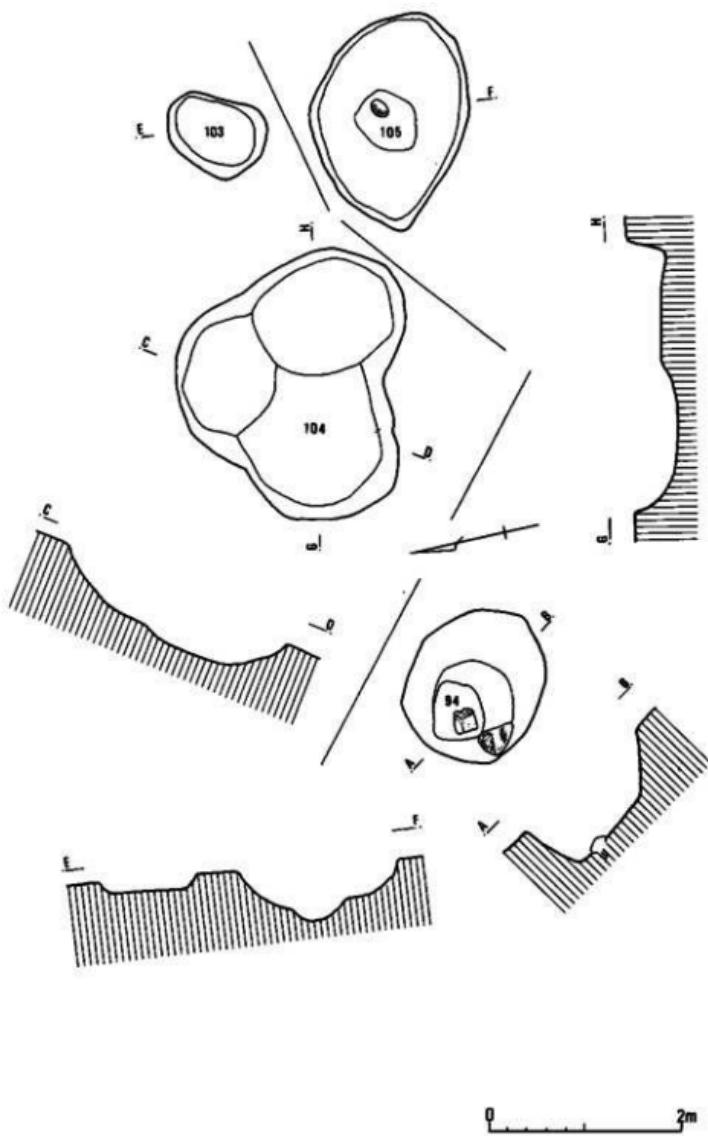
第121図 土壙（第60・68・70・72・89・438・440・456号）(1/60)



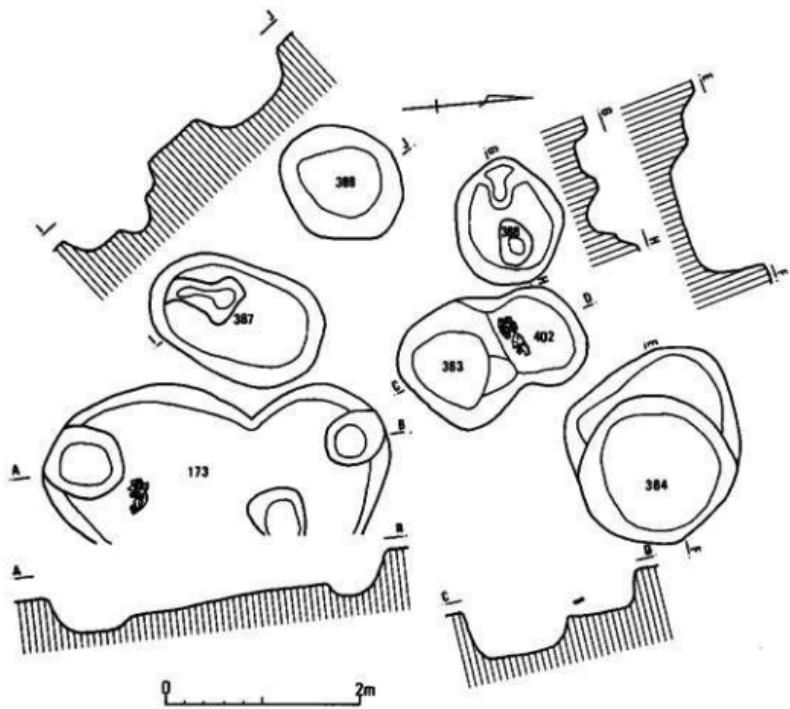
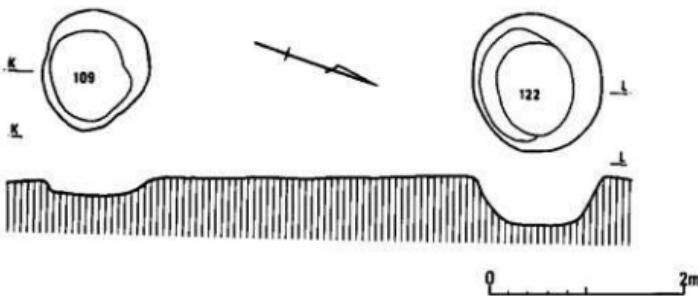
第122図 土壌（第67・71・78・79・88・212・219号）(1/60)



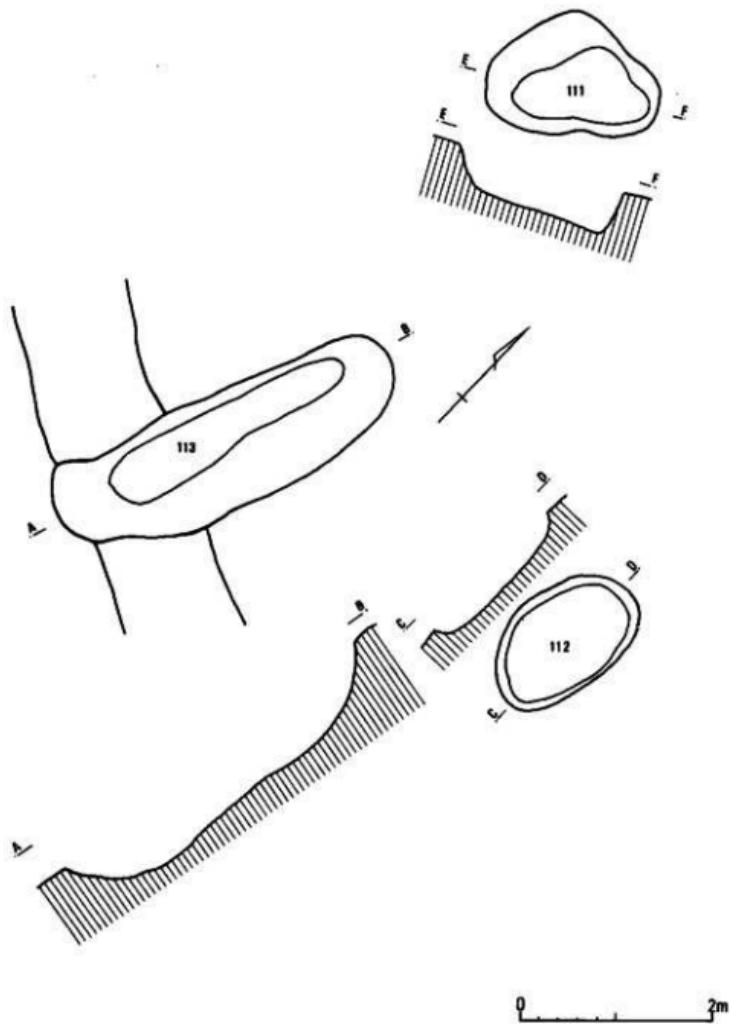
第123図 土壙（第86・87・92・168・169号）(1/60)



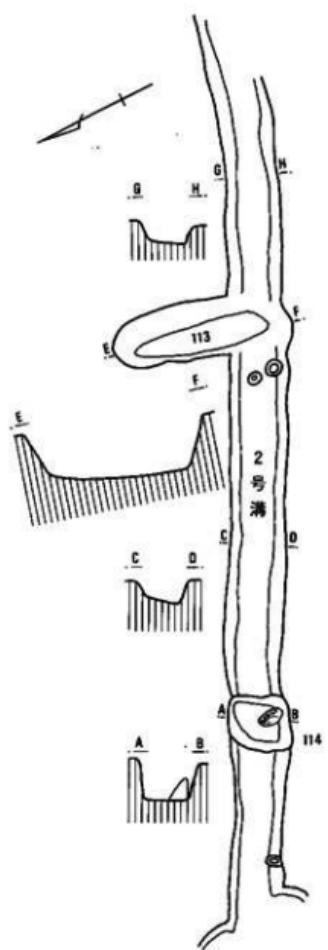
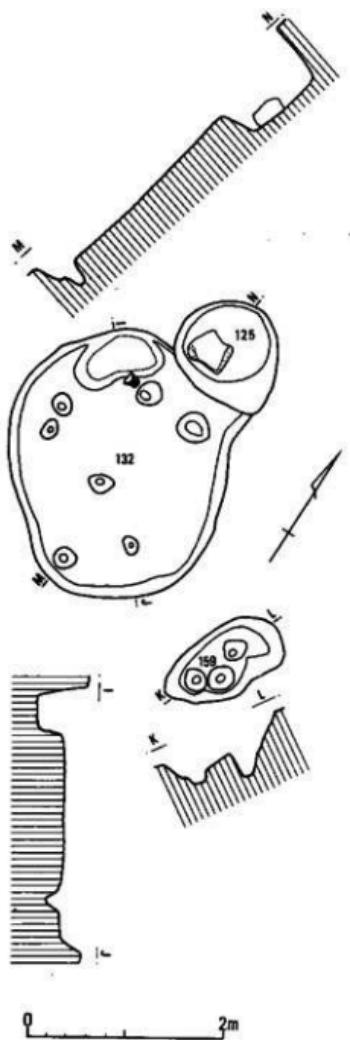
第124図 土壙（第94・103～105号）(1/60)



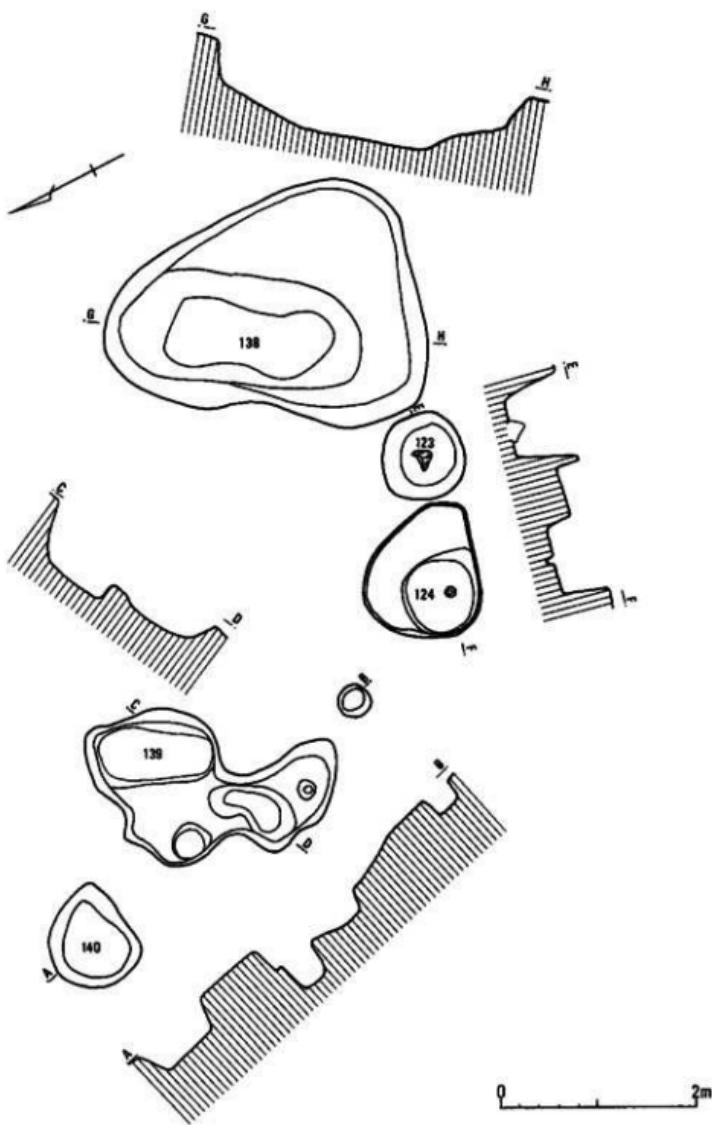
第125図 土壙（第109・122・173・363・364・386～388・402号）(1/60)



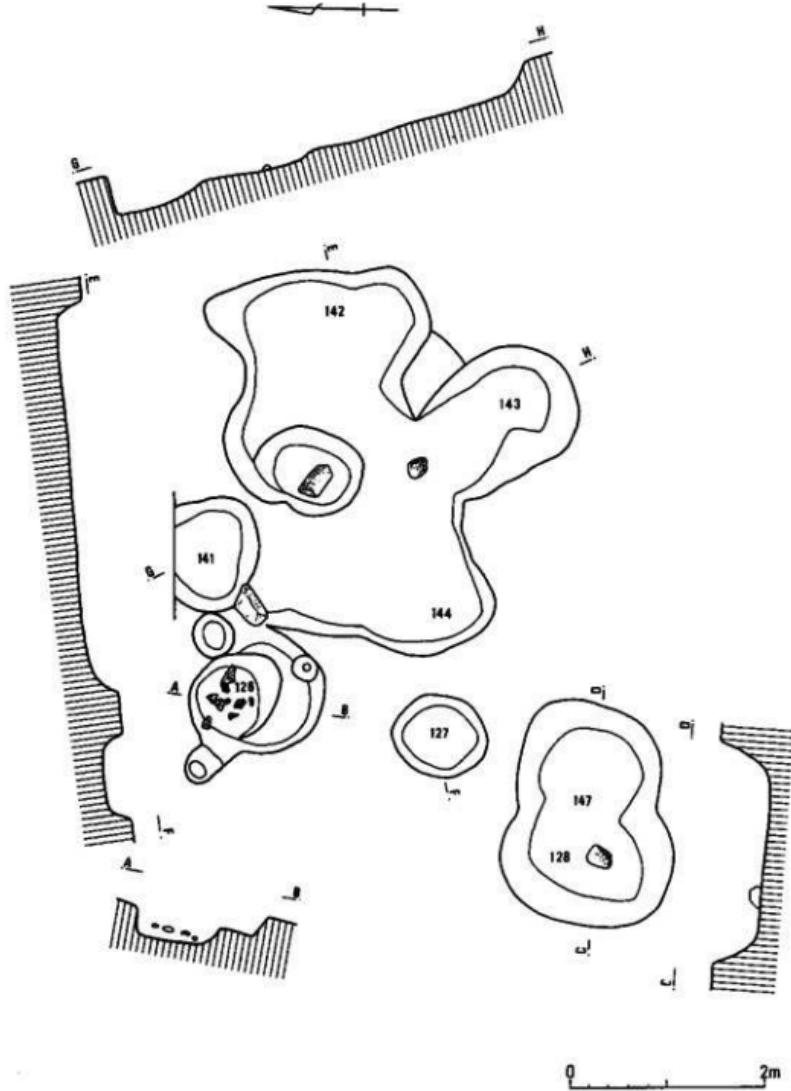
第126図 土塁（第111～113号）(1/60)



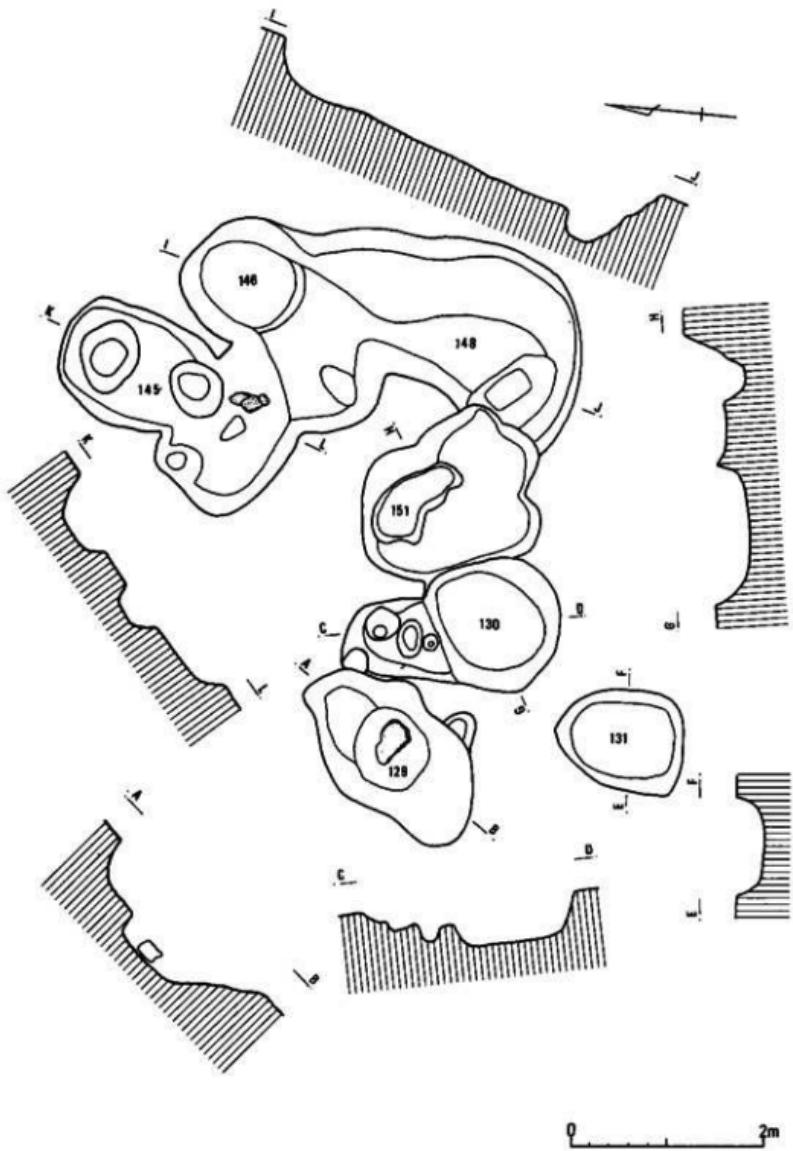
第127図 第2号溝、土壤（第113-114-125-132-159号）(1/60-1/80)



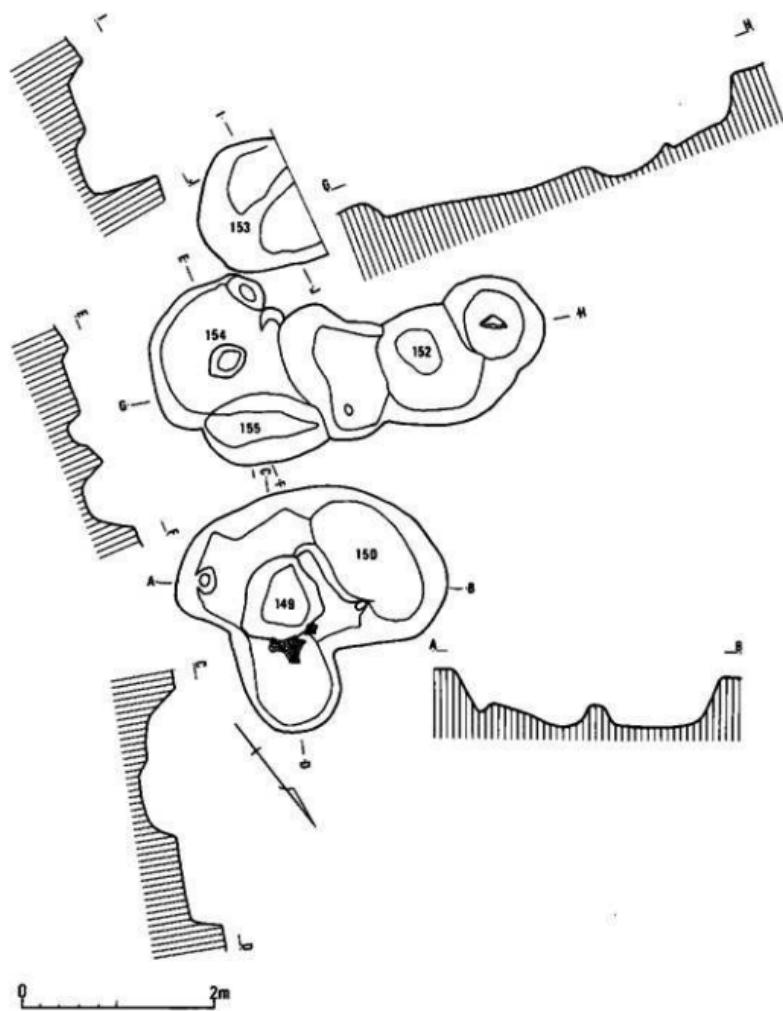
第128図 土壙（第123・124・138・139・140号）(1/60)



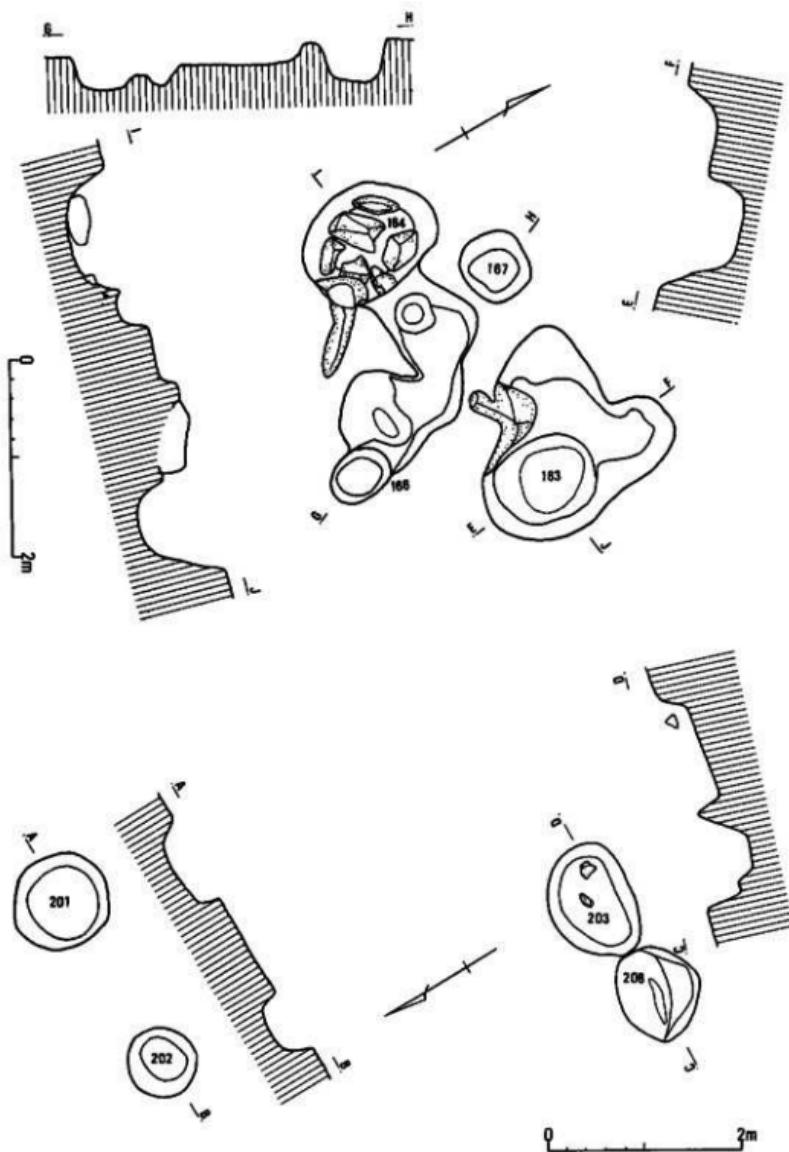
第129図 土塚（第126～128・144・147号）(1/60)



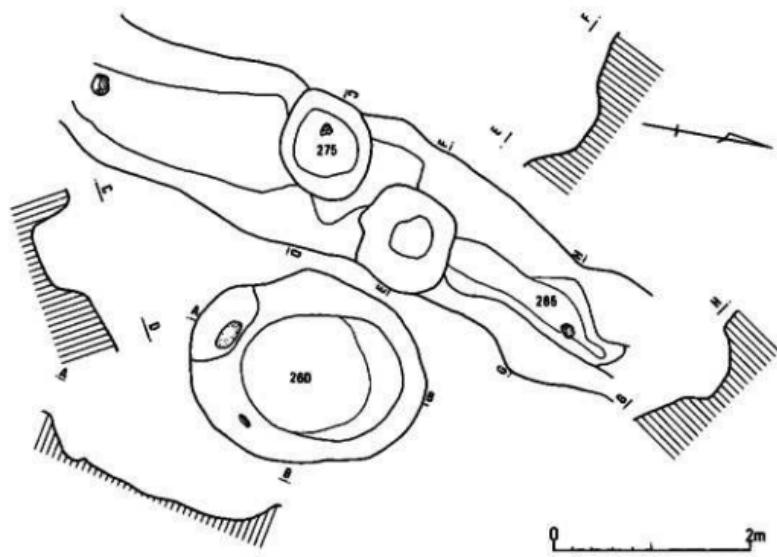
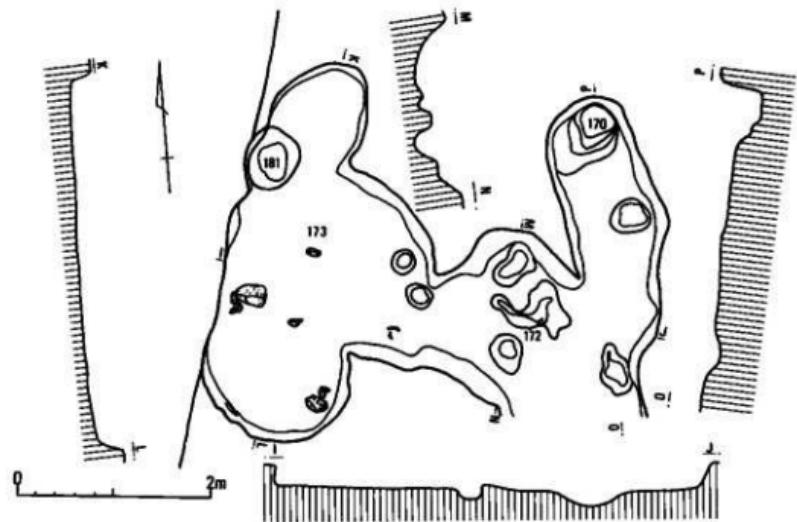
第130図 土壙（第129～131・145・146・148・151号）(1/60)



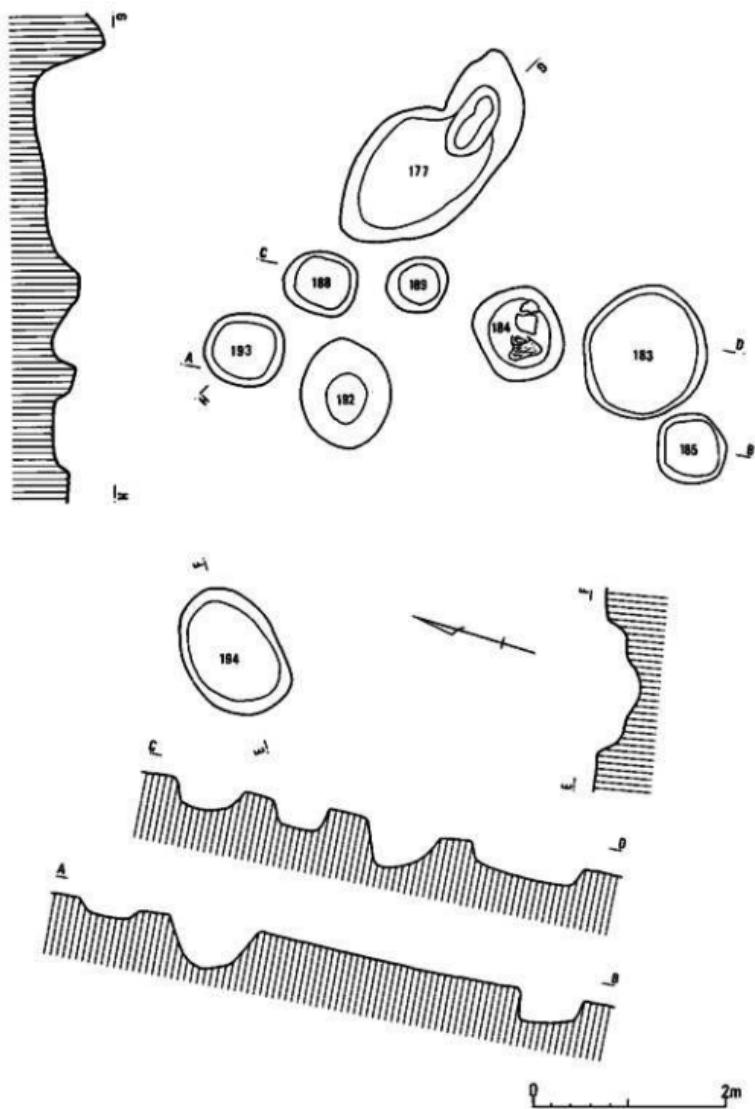
第131図 土壌（第149・150・152～155号）(1/60)



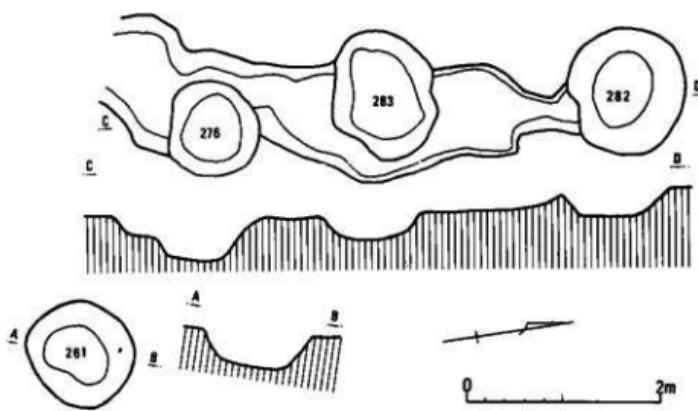
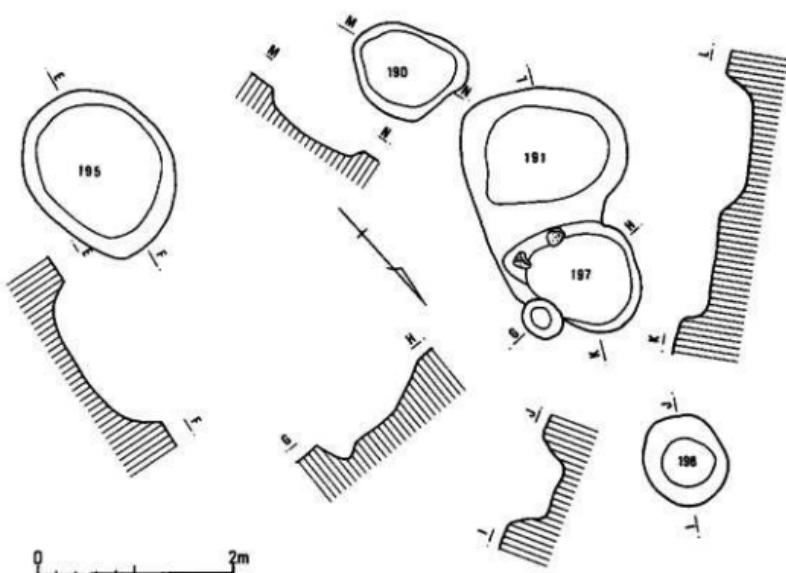
第132図 土塁（第163・164・166・167・201～203・208号）(1/60)



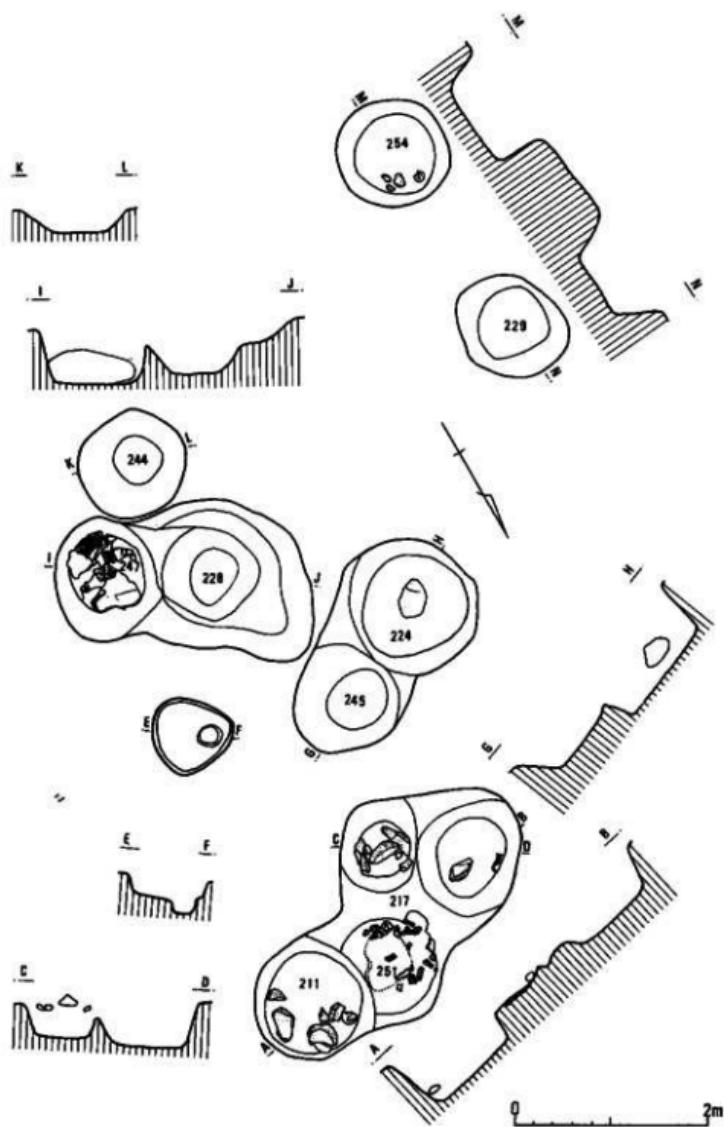
第133図 土壌 (第170・172・173・181・260・265・275号) (1/60)



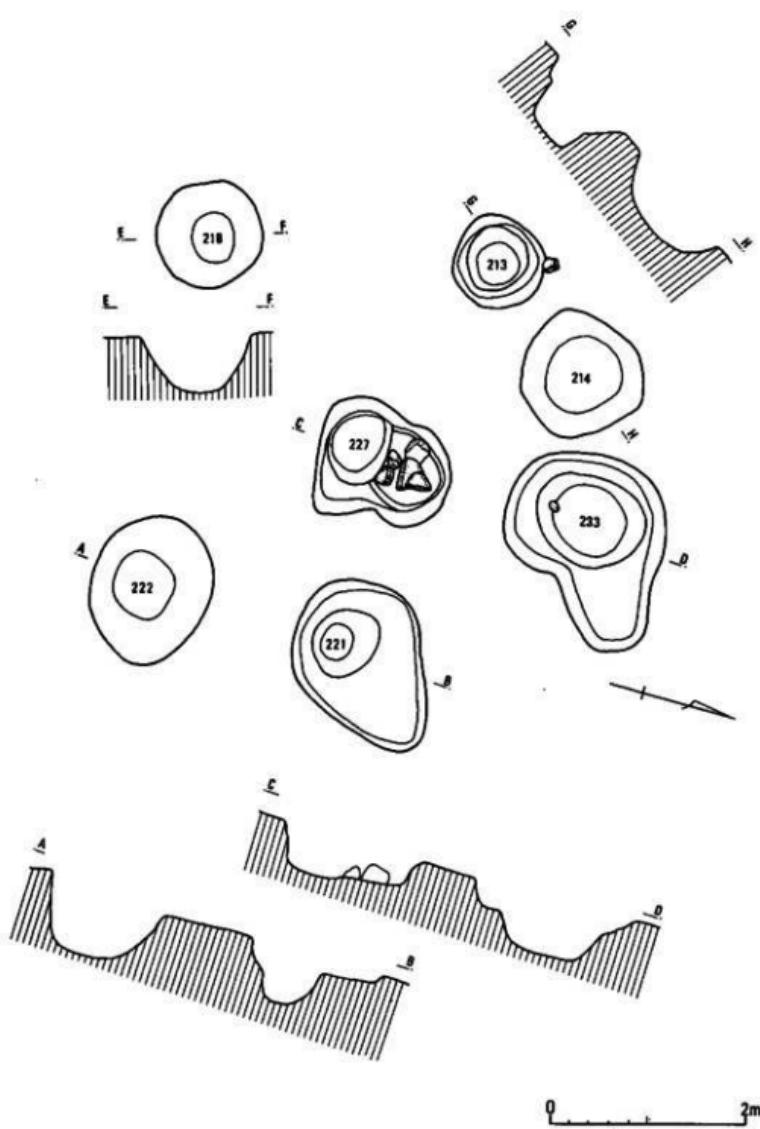
第134図 土壌（第177・183～185・188・189・192～194号）(1/60)



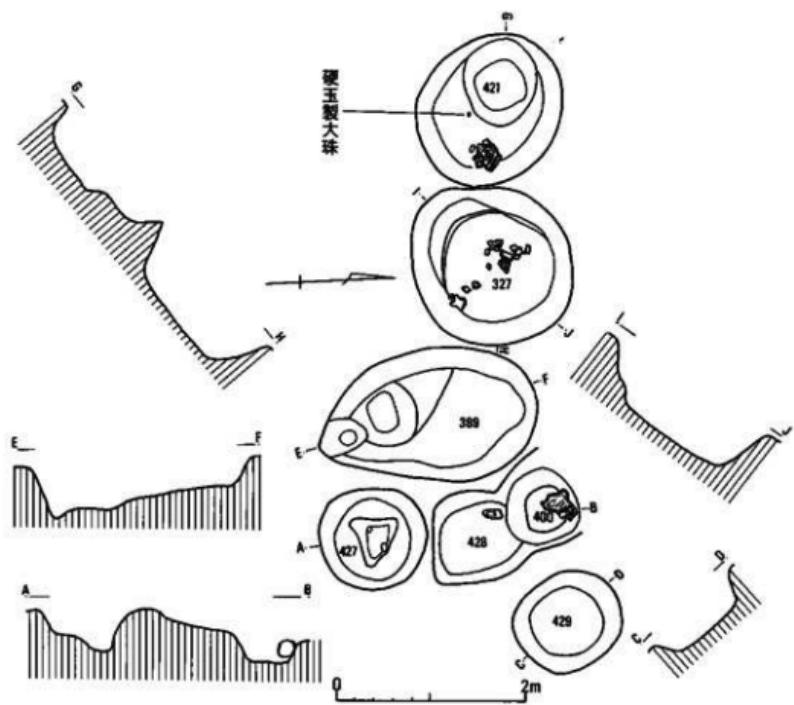
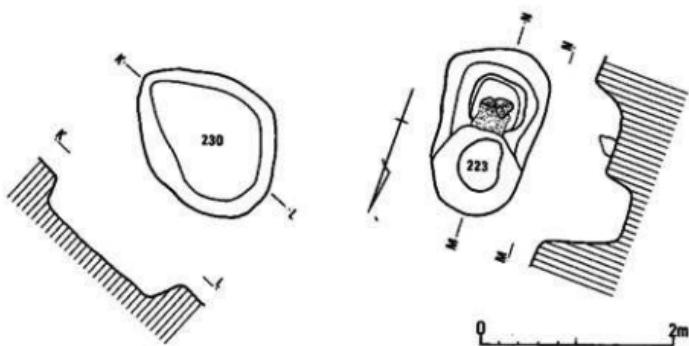
第135図 土壠（第190・191・195～197・261・276・282・283号）(1/60)



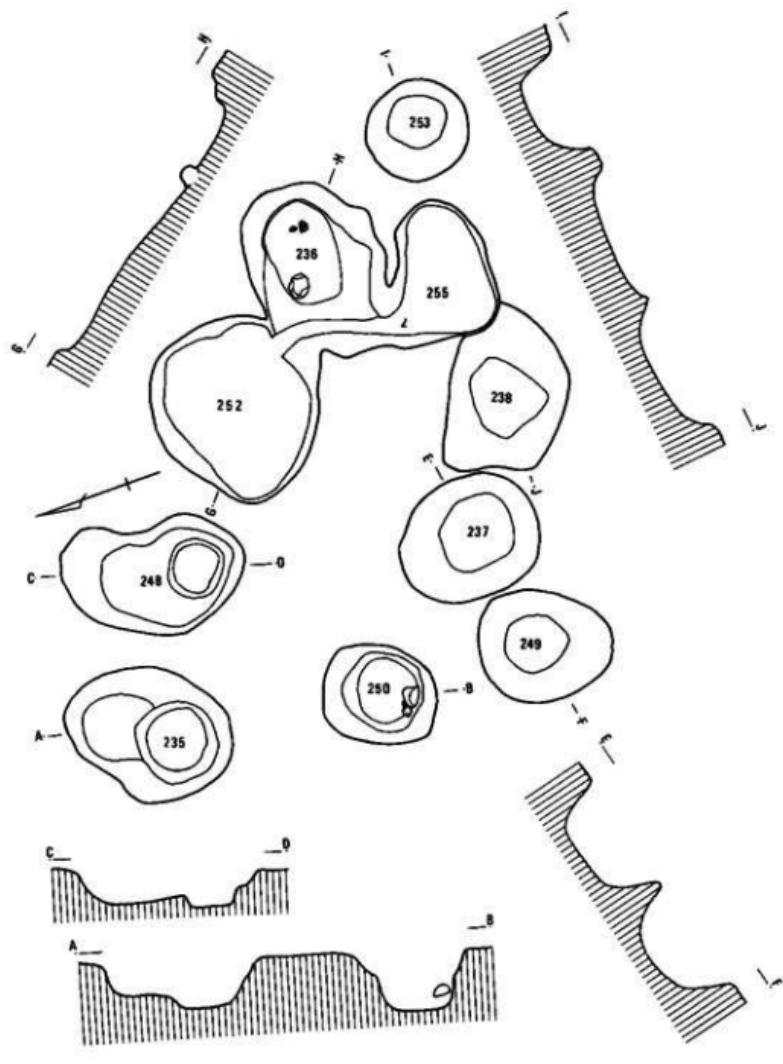
第136図 土壌（第211・217・224・228・229・244・245・251・254号）(1/60)



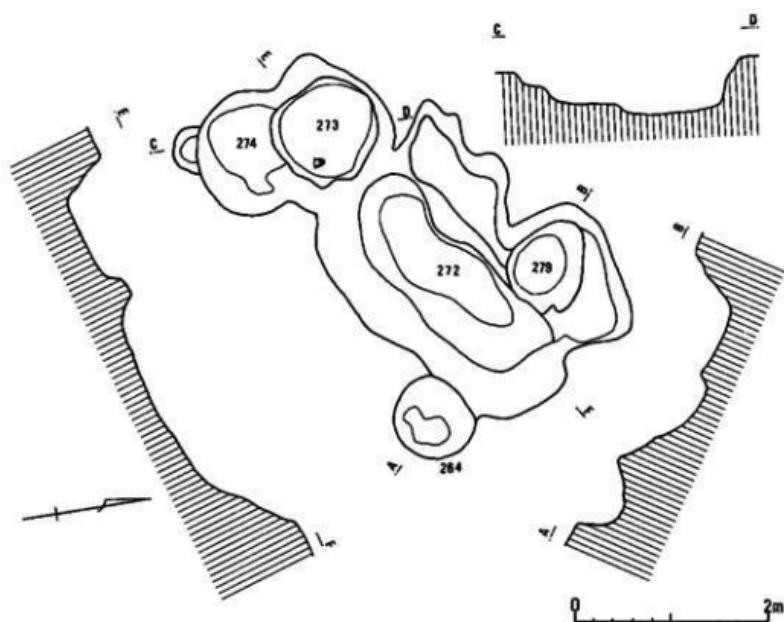
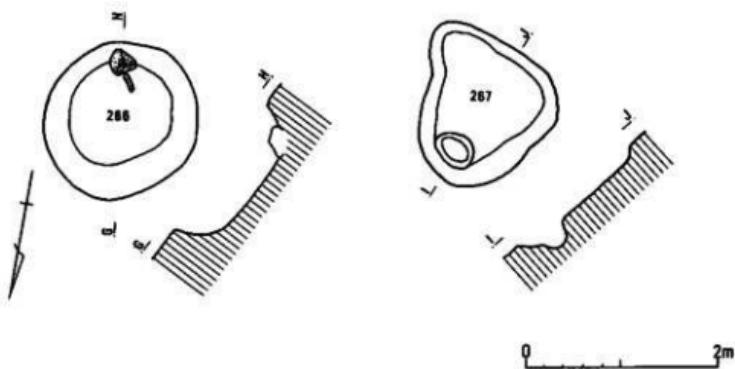
第137図 土壌（第213・214・218・221・222・227・233号）(1/60)



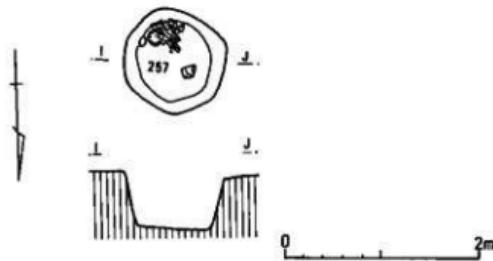
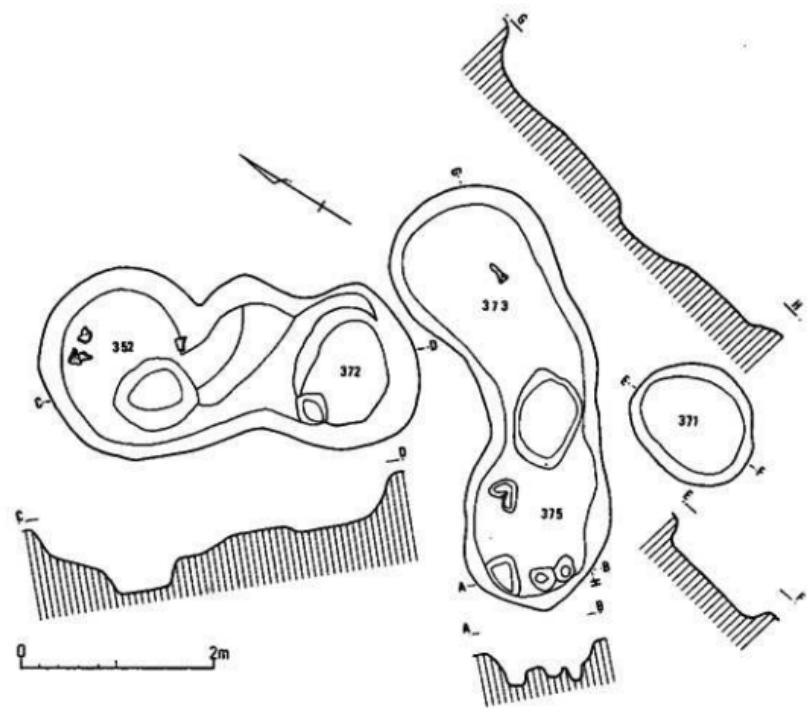
第138図 土塼（第223・230・327・389・400・421・427～429号）(1/60)



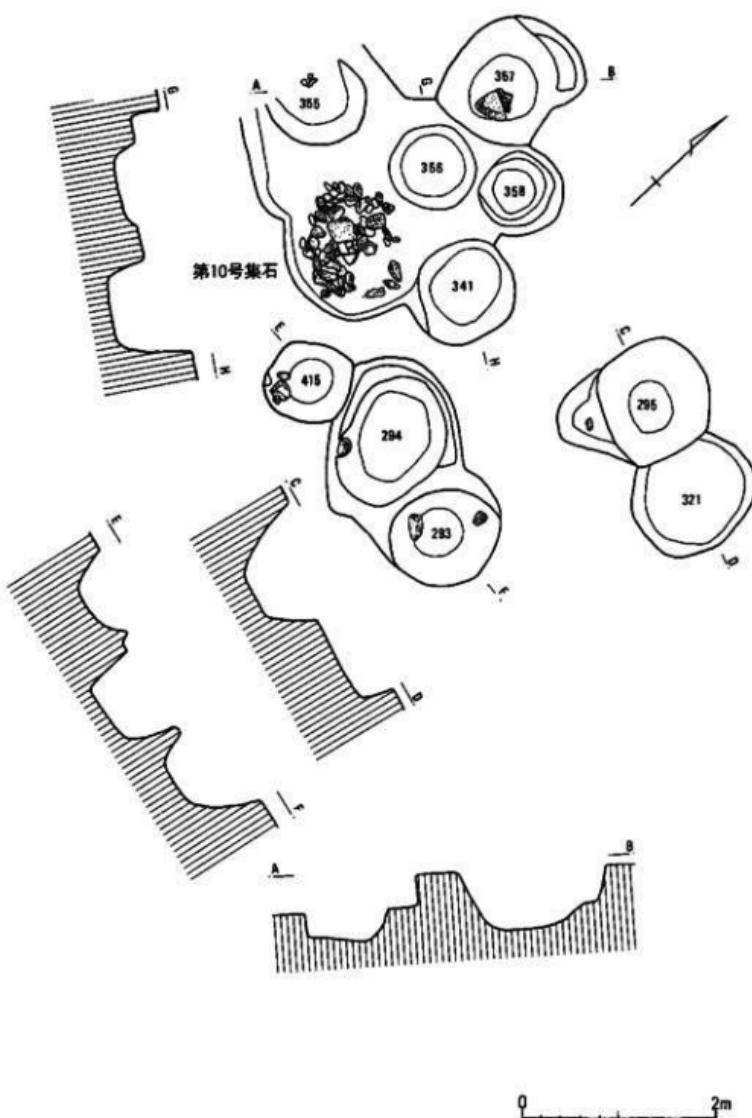
第139圖 土壤（第235~238・248~250・252・253・255号）(1/60)



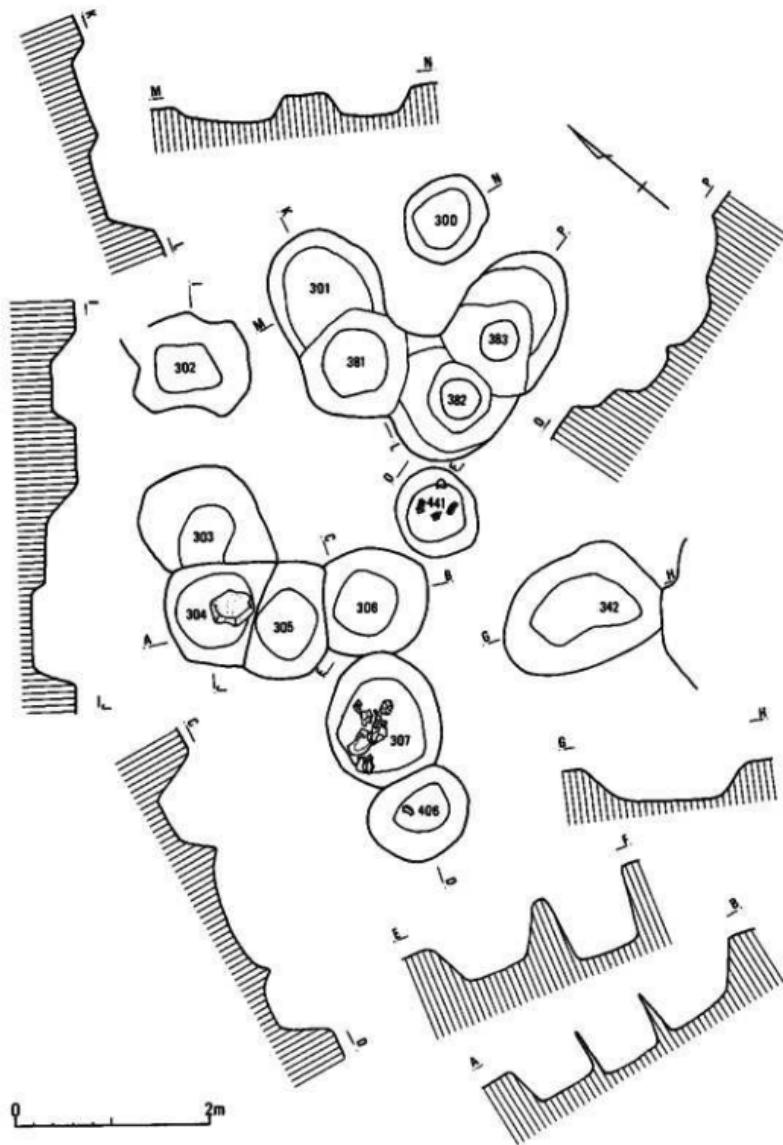
第140図 土壌（第264・266・267・272～274・279号）（1/60）



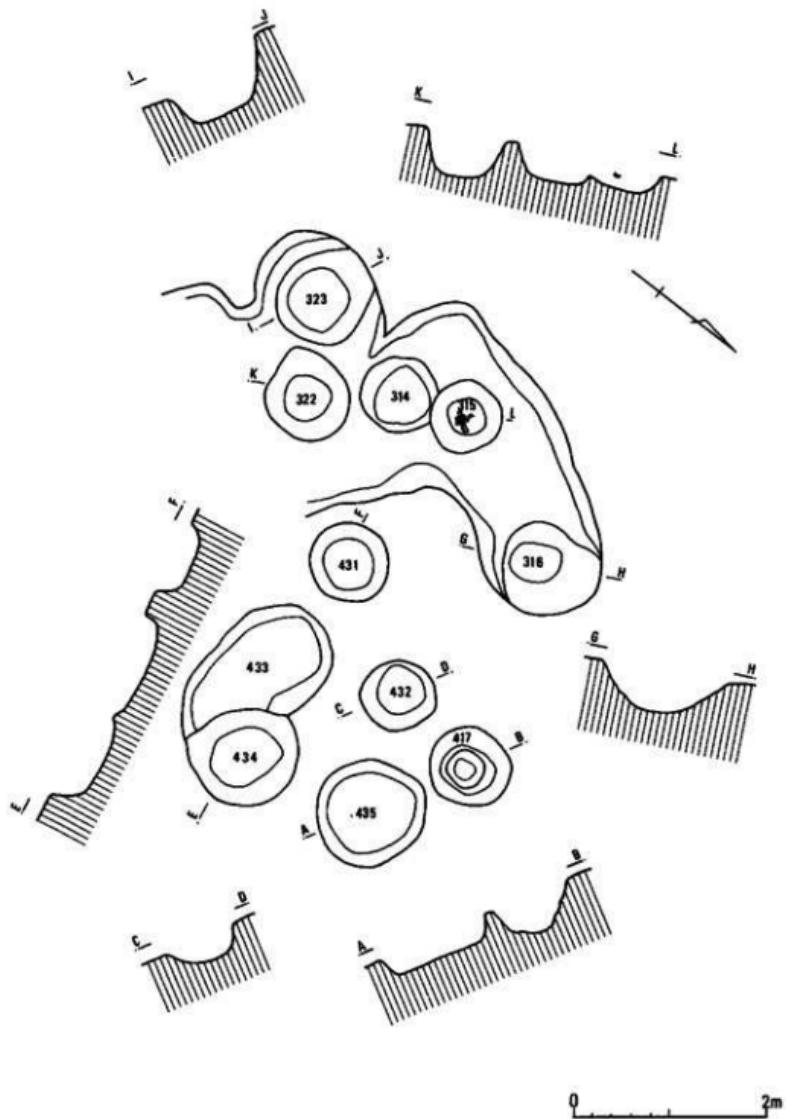
第141図 土壌 (第257・352・371~373・375号) (1/60)



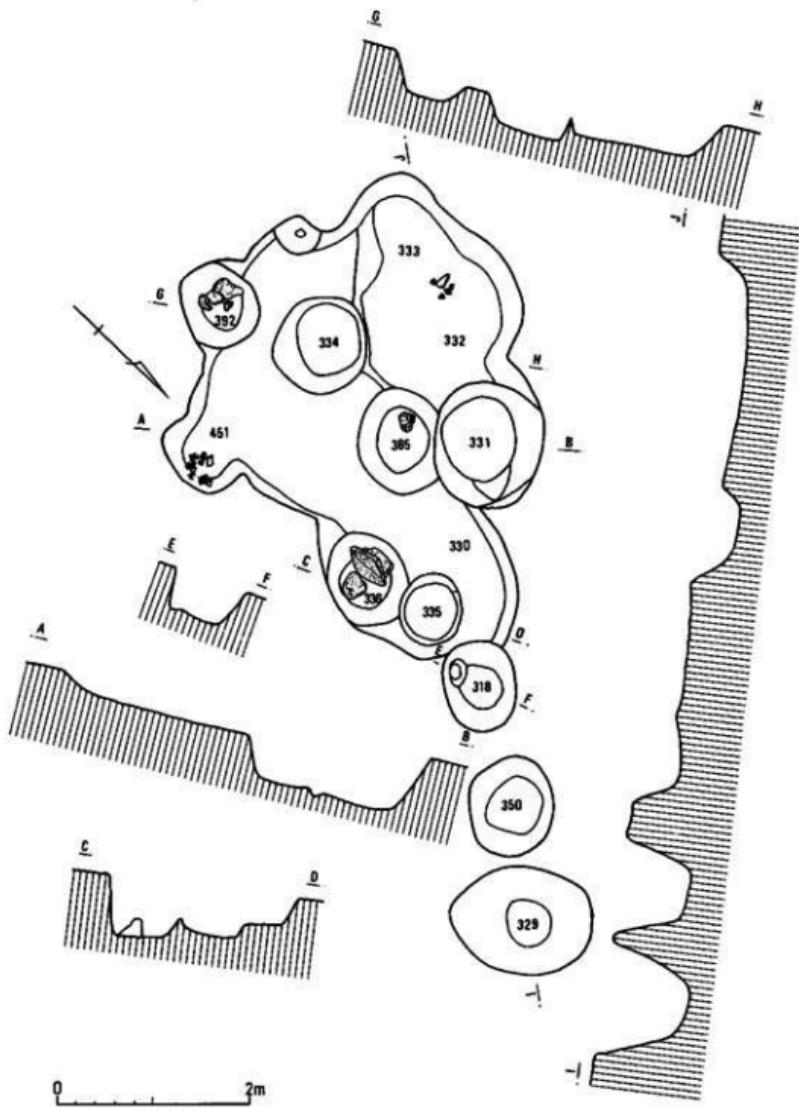
第142図 第10号集石、土壤（第293～295・321・341・355～358・415号）（1/60）



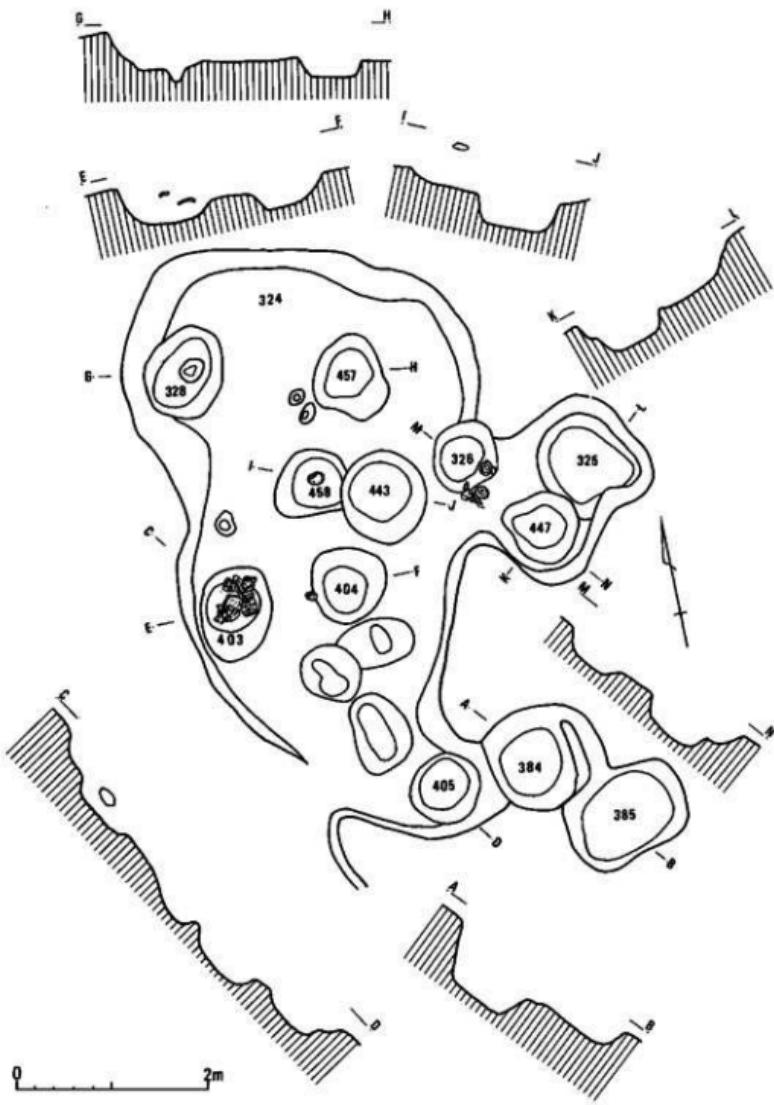
第143図 土壌 (第300~307・342・381~383・406・441号) (1/60)



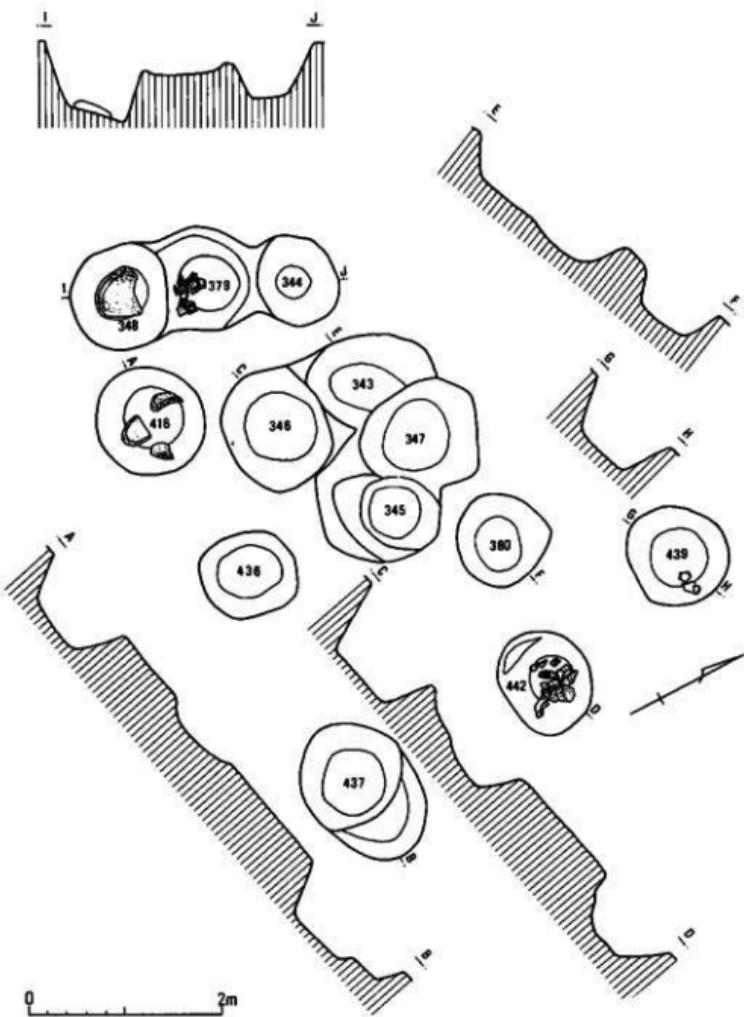
第144図 土壠（第314～316・322・323・417・431～435号）(1/60)



第145図 土壌 (第318・329・330~336・365・392・451号) (1/60)



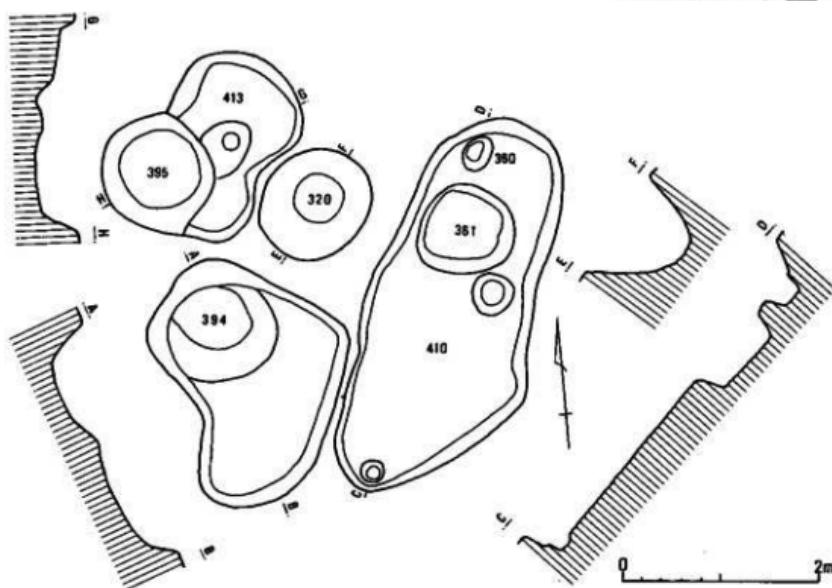
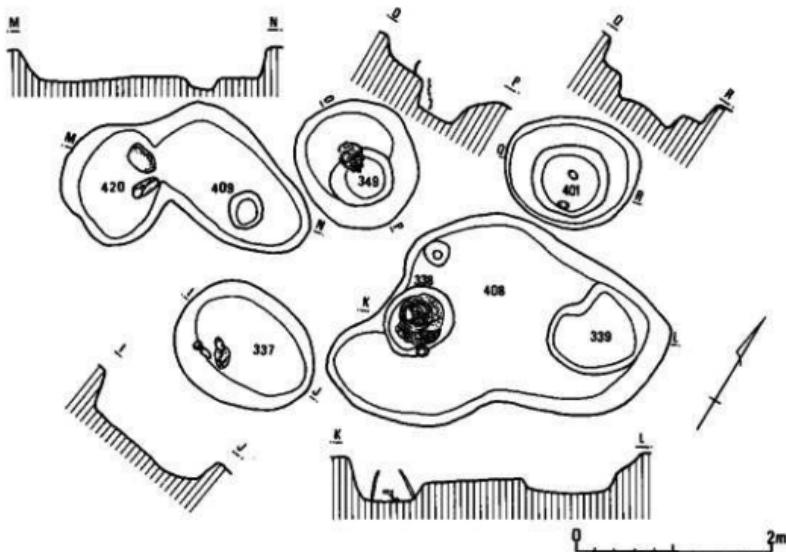
第146図 土壌（第324～326・328・384・385・403～405・443・447・457・458号）(1/60)



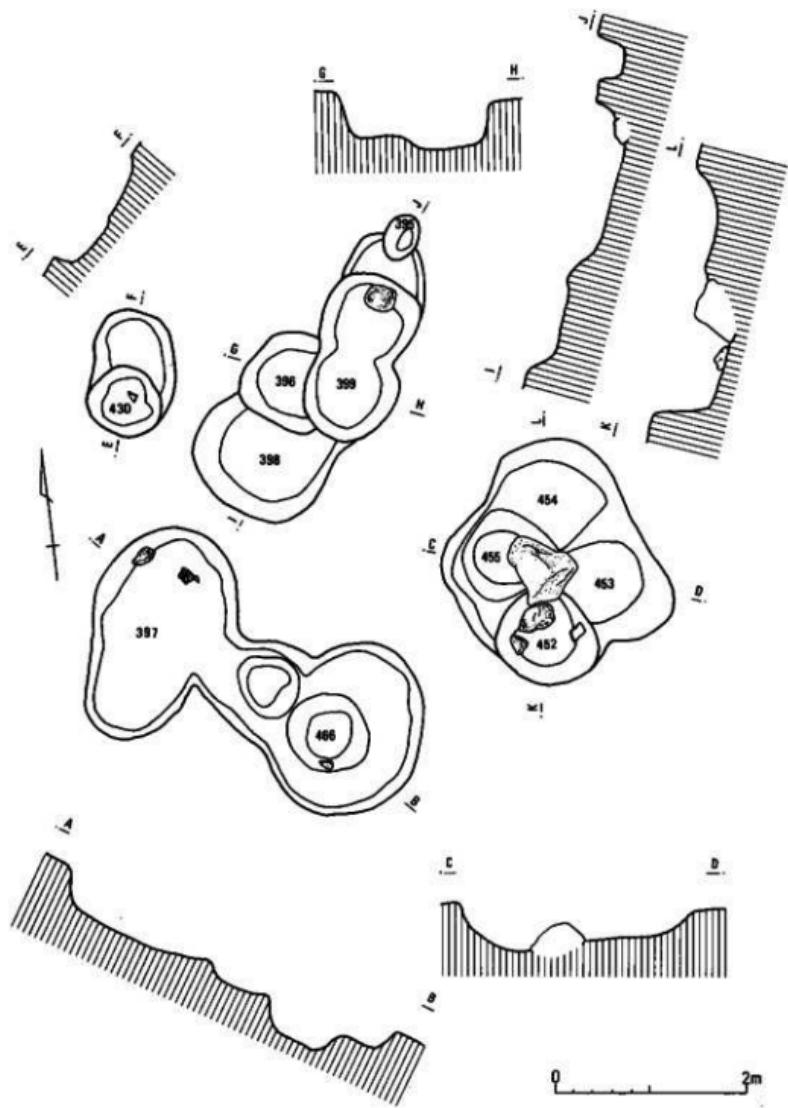
第147図 土壌（第343～348・379・380・416・436・437・439・442号）(1/60)



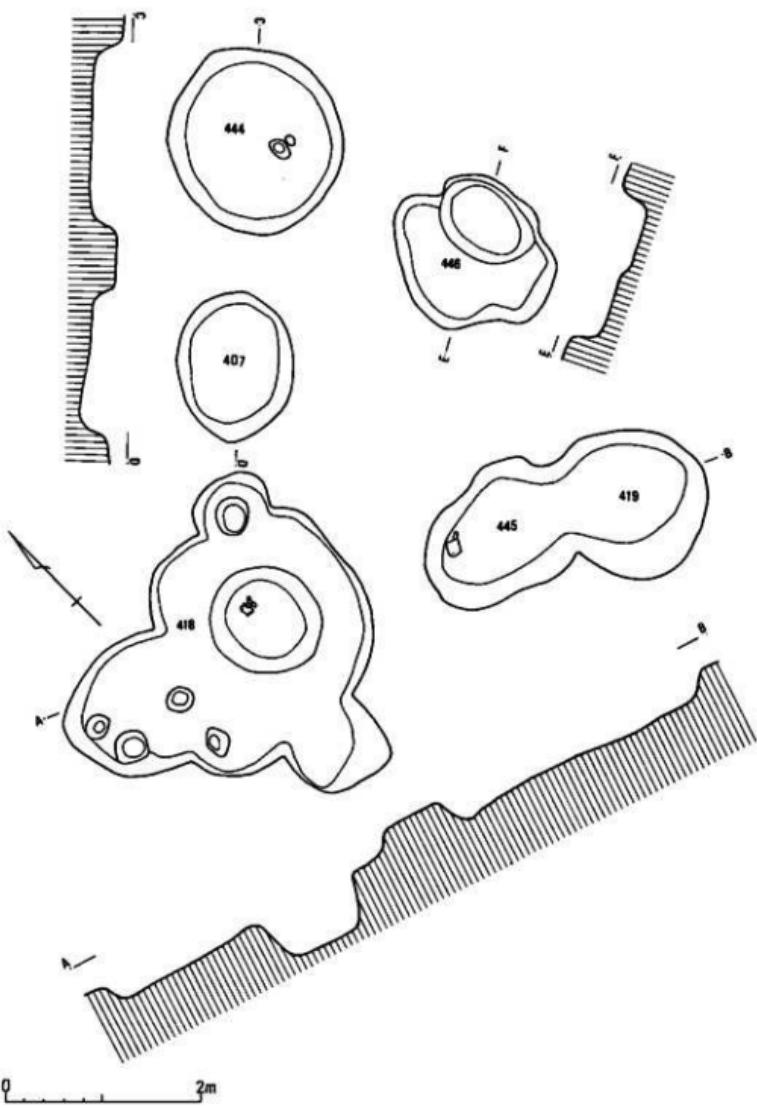
第148図 土壙（第353・354・366～370・411・412・422～426号）(1/60)



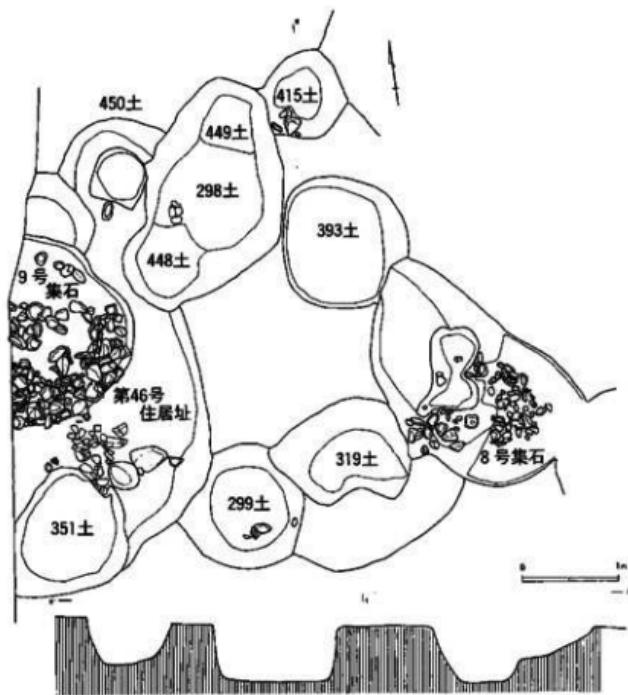
第149図 土壌 (第320・337~339・349・360・361・394・395・401・408~410・413・420号) (1/60)



第150図 土壌（第395～399・430・452～455・466号）(1/60)



第151図 土壌（第407・418・419・444～446号）（1/60）



第152図 第8・9号集石、土壤群（第298・299・319・351・393・415・448～450号）(1/60)

#### 出土土器

第153図 S 00601 第6号土壤から出土した深鉢形土器の底部付近。横走する集合沈線や、底部から一旦内傾して立ち上がる器形などから諸磯c式新段階の土器とみられる。S 01101は第11号土壤から出土した有孔土器破片。肩部が「く」の字形に強く屈折し、あたかも鉗のような形状をなす。底部を欠くものの全体に偏平な器形。口縁の立ち上がりはやや強い。S 03201、S 03202ともに第32号土壤から出土した深鉢形土器の底部付近の破片。S 03201には2個一対の円形貼付文がある。S 03202は繩文のみ。S 03901は第39号土壤から出土した深鉢形土器破片。いわゆる貝殻状とも言われる大型の貼付文がつけられる土器。横走あるいは羽状の集合沈線上に棒状や円形の貼付文も加えられる。諸磯c式古段階の土器。S 04101は第41号土壤の底面から、内部に石を抱き込むかたちで出土した深鉢形土器。胴下半部と底部とが直接接合しないが推定復元したもの。全体に結節繩文が施される。口縁はゆるやかな波状をなしている。諸磯b式新段階の土器であろう。S 04401は第44号土壤出土の深鉢形土器。波状口縁で結節浮線文や2個一対の円形貼付文がみられる諸磯c式新段階の土器。S 04501～S 04503は第45号土壤出土。

S04501は口縁の一部を欠く浅鉢形土器。胴中位が膨らみ段が付く小型土器で、口縁部には連続短線が充填する、沈線による横長区画文がみられる。この文様は有文の有孔土器にみられる、木葉文を遡源とする文様の最終段階のものと思われる。S04502は有孔土器の小破片。肩の張りが強く、口縁部は内傾する。S04503は上部を欠く深鉢形土器。全面縄文が施される。これら第45号土壙の土器は諸磯b式新段階のものであろう。S07001は第70号土壙出土の深鉢形土器胴部破片。全面縄文。

第154図 S04901, 02は第49号土壙から出土した土器。S04901は土壙底面に逆位の状態で潰れて出土した浅鉢形土器。胎土は白味があるが、部分的に赤彩が残る。器壁は2~3mmと薄い部分がある。突出した底部から立ち上がり、丸味をもって内湾し口縁にいたる器形。口縁に2条、最大径部および底部近くの括れ部にそれぞれ1条づつの浮線文がめぐる。浮線上には刻みがある。S04902は覆土中位から出土した沈線文系の深鉢形土器。口縁と底部とも欠くが口縁にむけての広がりが強い器形。これらは諸磯b式新段階の土器であろう。

S09001は第90号土壙出土の深鉢形土器破片。沈線文系で、口縁部の屈折は強いが丸味を帯び、曲線文が口縁部文様帯を構成している。口縁の波頂部には円形の貼付がみられる。諸磯b式新段階の土器。S09901は第99号土壙出土の有孔土器底部破片。S10001は第100号土壙の底面から潰れた状態で出土した深鉢形土器。地文(結節)縄文に隆帯や沈線による区画文が発達する。五領ヶ台式土器。S13201は第132号土壙出土の深鉢形土器下半部。集合沈線を地文とした結節浮線文の土器で、2個一対の小円貼付文もある。おそらくS14901と同様の諸磯c式新段階と思われる土器であろう。S14901は第149号土壙の底面に横倒しになっていた深鉢形土器。口縁の一部を欠くがほぼ完形。沈線を地文としその上に結節浮線文が展開。胴中位に横走する浮線文を境として上部に渦巻ないし同心円状の結節浮線文が発達する。この渦巻文は向き合った2個を一単位とする。全面に2個一対の小円貼付文がみられる。口縁は頂部の尖った4単位の波状をなす。底部から口縁部にいたるラインも繊細で、全体に優雅で整った形状をなす。S14902は有孔土器の破片。S17301は第173号土壙出土の深鉢形土器破片。全面縄文。

第155図 S13601は第136号土壙の覆土中位から横倒しになって出土した小型の有孔土器。この種の土器の多くが浅い形状をなすのに対してこれは深鉢状である。口縁部に貫通する孔が10個あり、その下に刻みのある浮線文がめぐる。底部は高台状になっておりこの部分にも貫通孔2個が開く。S16001は第160号土壙出土の有孔土器。ほぼ完全の赤褐色を呈する堅い焼きの土器。肩の張りは強いが丸味があり、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。土壙壁際の底面から壁の傾斜に沿った状態で出土したもの。S29101(第291号土壙)も有孔土器の破片。S16001と比べ肩の屈折が強く、口縁も短い。

S21101(第211号土壙)、S23201(第232号土壙)は全面縄文の深鉢形土器。S21501(第215号土壙)は沈線文系の深鉢形土器。これら3点は諸磯b式であろう。S24701は第247号土壙の底面に敷きつめられたような状態で出土した深鉢形土器。底部を欠く。羽状の集合沈線を地に、結節浮線文と2個一対の小円貼付文で飾られる平口縁の大型土器。諸磯c式新段階。S30701, 02は第307号土壙出土の深鉢下部。特にS30701は諸磯b式新段階とみられる沈線文系土

器。

第156図 S 30801とS 30802は第308号土壙から出土した有孔土器破片。いずれも肩の部分が強く張り、鉗状になっている。口縁部は短いながらやや立ち上がる。諸磯c式土器。S 31901(第319号土壙)は無文の鉢形土器。S 32601(第326号土壙)は沈線文系深鉢の下半部。S 32701(第327号土壙)は結節浮線文と円形貼付文とからなる口縁部破片。S 33201は有孔土器の底部破片か。S 35201(第352号土壙)は諸磯b式沈線文系深鉢。地文繩文に半截竹管による平行沈線が走る。口縁部は短く平口縁である。S 34901(第349号土壙)とS 35701(第357号土壙)とは諸磯b式の繩文系深鉢形土器。S 37901は第379号土壙出土の深鉢形土器。沈線文系で口縁部は丸味を持ちながら内湾する。波状口縁の波頂部にはイノシシ突起の残存とみられる小突起が貼付する。諸磯b式中段階であろう。

第157図 S 35501は第355号土壙から出土した有孔土器。底部中央を欠く。非常に偏平な器形。肩が強く張り、口縁が立つ。孔をつなぐかのように沈線がめぐる。S 41801も有孔土器であるが、S 35501と比べ丸味のあるズングリとした器形。肩の部分にいくらか下がり気味の鉗状張り出しがめぐる。S 33801は器高46cm程の大型の深鉢形土器。第338号土壙の底面から倒立して出土。胴下部を一部欠き胴部と底部とが直接接合しないが推定で復元した。「く」の字形に屈折する波状口縁で、波頂部直下に貼付文がみられる。沈線文系で口縁部文様帶は曲線文。S 34401(第344号土壙)は底部破片。

第158図 S 40001は第400号土壙の覆土中位から横倒しで出土した、口縁を一部欠く深鉢形土器。口縁の屈折は弱く、内湾気味である。波状口縁でこの部分の文様帶には曲線文のみられる沈線文系の土器。S 40301(第403号)も同じく沈線文系の土器であるが、口縁の屈折が強く波状の程度はゆるいことから口縁部文様帶が狭い。墾際の底面から出土。共に諸磯b式新段階の土器であるが、S 40301の方が後出的である。S 40201は第402号土壙出土の五領ヶ台式土器。上半分を中心とした破片。S 40501(第405号)も隆帯と結節繩文からなる同時期の土器。第412号土壙からは大破片が2点出土している。S 41201は結節浮線文と円形貼付文のみられる波状口縁の深鉢形土器。S 41202は胴部破片であるが、S 24701に類似した器形。文様構成のものと思われる。大きさもそれに近い。いずれも諸磯c式新段階である。S 42101とS 42102とはともに第421号土壙の壁近くの覆土上位から一緒に出土した深鉢形土器。この土壙の中央部床面上からは硬玉製大珠が出土しており、ともに埋葬にかかわる遺物と思われる。S 42101は波状口縁の2個一対の円形貼付文がみられる。口縁には結節文がめぐる。倒立した状況で出土。S 42102はやや大きいが、同種の土器の底部と思われる。諸磯c式新段階。S 45201(第452号)は浮線文系の深鉢。ゆるい波状口縁で、3本一組の浮線がめぐる。浮線上には細かい刻みが連続する。S 45202も同じ土壙から出土したもので、無文ながら口縁部に内外を結ぶように貼付文がつけられている。いずれも諸磯b式土器。

#### 〔土壙出土の破片資料〕

前述した復元可能土器以外にも各土壙からは破片も出土している。これらを全て図示するこ

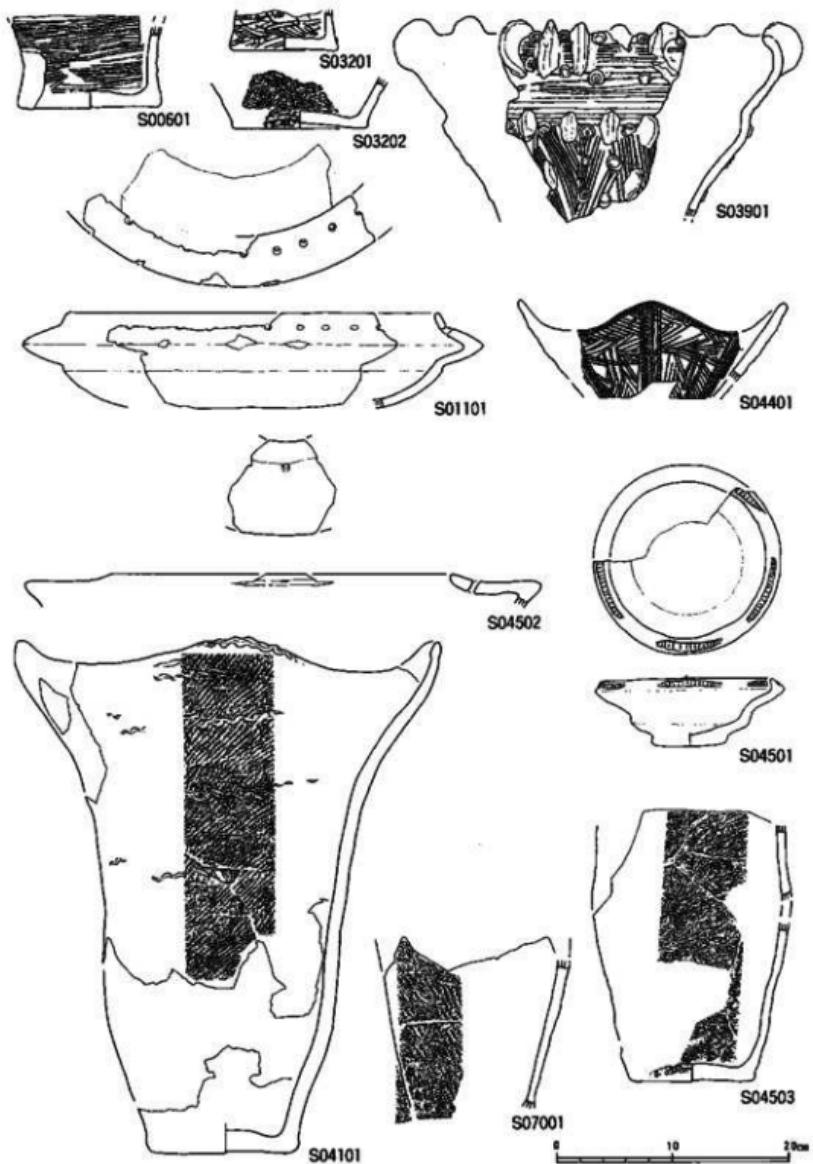
とは紙面の都合から不可能であることから以下に主な資料を図示する。これらは遺構ごとではなく時期別に取り扱った。遺構番号は( )で示してある。

第159図 諸磯b式土器を一括した。1～5は沈線文系深鉢形土器。4が外反する口縁である他「く」の字形口縁。1から5へと屈折が強くなり、しかも5は口縁部の幅が狭く曲線文が無くなってくる。b式の中段階(1)から最新段階(5)への展開をみることができる。6～12は浮線文系深鉢形土器。沈線文系と同様に屈折部の状況から型式的段階がとらえられる。8や11が古く、7や10が後出であろう。浮線自体も8は密で、ヘラ切り沈線(刻目)も長い。9は沈線による渦巻き文。13～16は繩文系深鉢形土器。特に16は平口縁の深鉢で諸磯a式の流れを汲むものとみられ、b式でも古い段階であろうか。17は浅鉢形土器、18～20は古い段階の有孔土器破片。

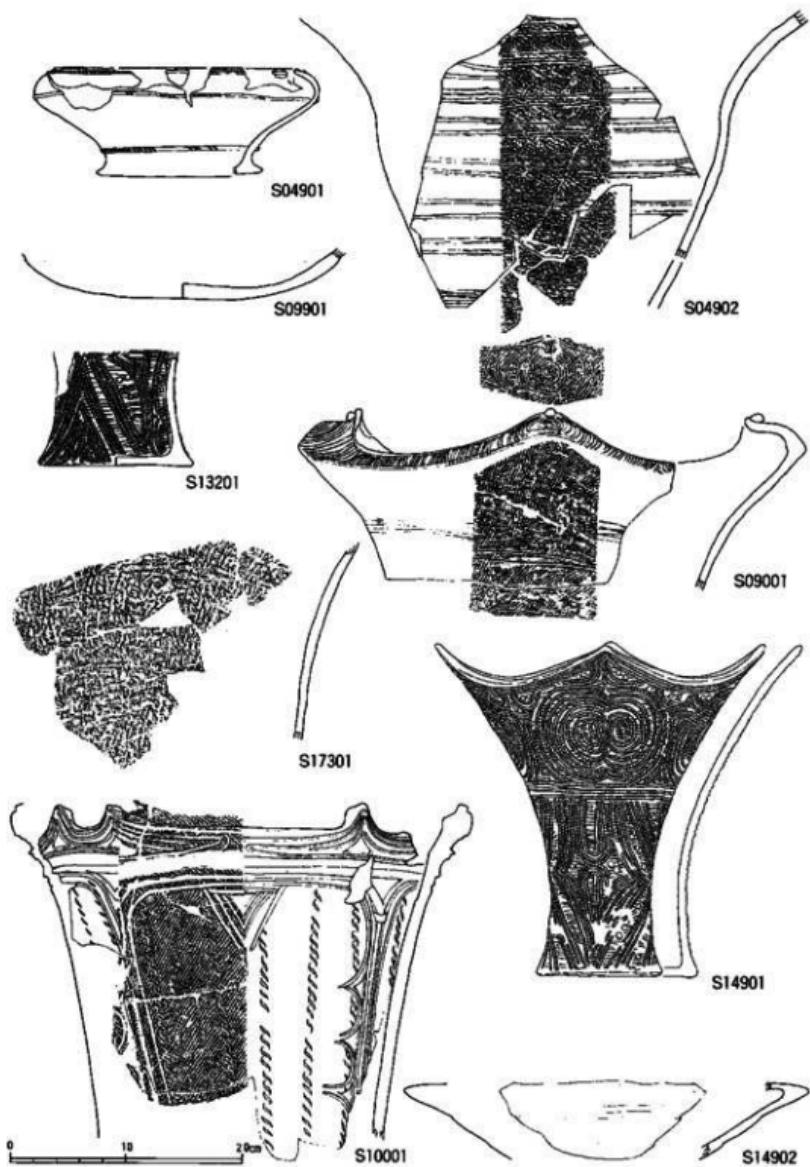
第160図 諸磯c式土器を一括した。1～4は太い棒状貼付文や円形貼付文の土器。5～8では棒状貼付文が細く長くなり、8を除き貼付文に刻目が加わる。5にはさらに格子状沈線がみられる。このような格子状沈線は第79図4202に共通するものであろう。6の口縁には押圧により盛り上がりの強い、深い刻目が連続する。7では同じ位置に結節浮線状の文様がめぐる。10、11では円形貼付文がやや小さめで、12、13と共に共通してくる。同時に11、12では棒状貼付文が2～3本単位となっており、口縁部も波状になってくる。14でも円形貼付文はないものの棒状貼付文は太く、刻目の様子もこれらに類似する。15～17は波状口縁、2個一対の円形貼付文、結節浮線文、という点で共通している。18～26は結節浮線文の土器で、特に胴上部には渦巻き状結節浮線文が装飾される。22・23は同一個体か。以上から1～4、5・6、7～9、10～14、15～17、18～26といった6段階に分類できようか。27～29は十三菩提式土器。特に27・28は長野県篠山遺跡や荒神山遺跡のいわゆるトロフィー形土器の口縁部にあたる部分の破片。

### 3 集石遺構

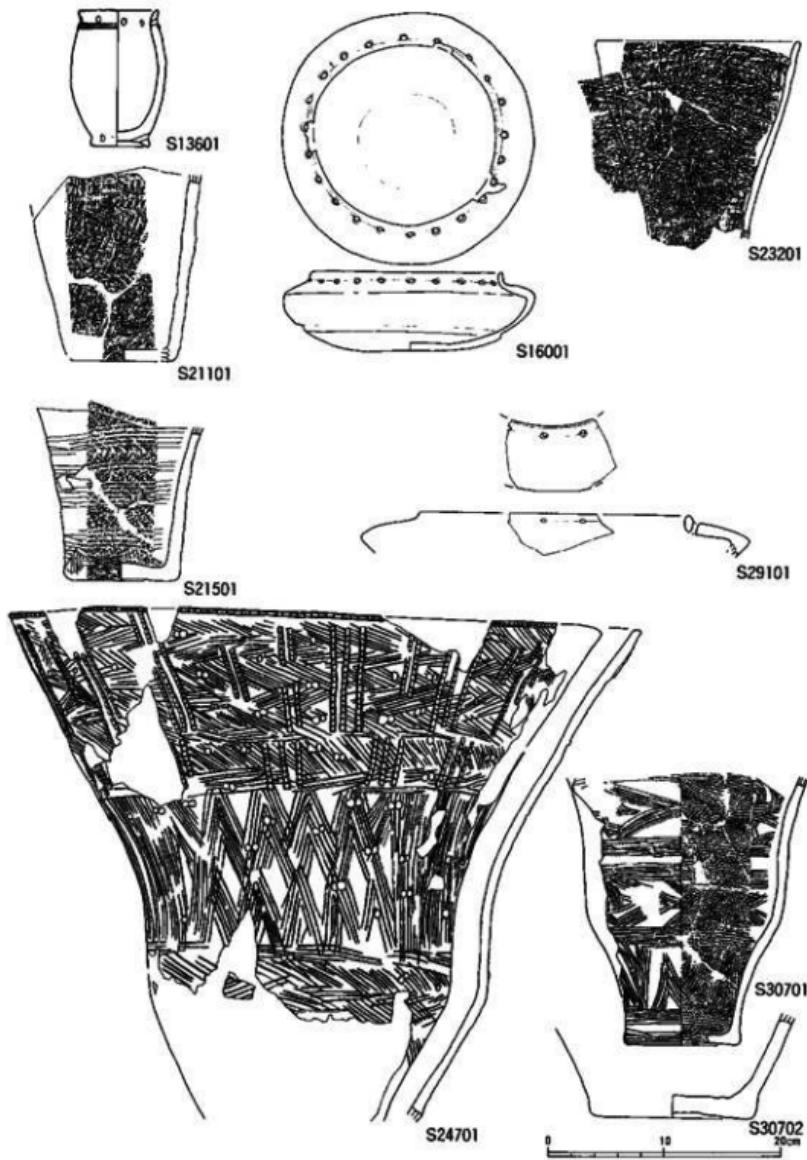
小豊穴に拳大の石を礫群状に集めたものを集石遺構とした。本遺跡では10基の集石遺構が発見されているが、その性格や時期については不明な点が多い。他の遺構と重複していないのは第6号集石(第162図)だけで、その6号は唯一礫が焼けている上に覆土から拂土・木炭が出でている。しかし土器は出土しておらず時期の特定はできない。しかし他の集石遺構は土器は出土しているものの、その出土土器がその遺構の時期の決め手となると言えばそうでもない。第1号集石(第111図)は第21号土壙(繩文前期後半)を切っており同時期の土器を出土している。第2号集石(第161図)は諸磯b式期の第11号住居址を切っている。第3号集石(第48図)も諸磯b式期の第14号住居址を切っている。第4号集石(第52図)は諸磯b式期の第20号住居址を切っており同時期の土器を出土している。第5号集石(第94図)は五領ヶ台式期の第24号住居址を切っており同時期の土器を出土している。第7号集石(第123図)は諸磯b式期の第364号土壙を切っており同時期の土器を出土している。第8号集石(第152図)は諸磯b式期の第319号土壙を切っている。第9号集石(第97図)は五領ヶ台式期の第46号住居址を切っており諸磯式期～五領ヶ台式期の土器を出土している。第10号集石(第142図)は周囲



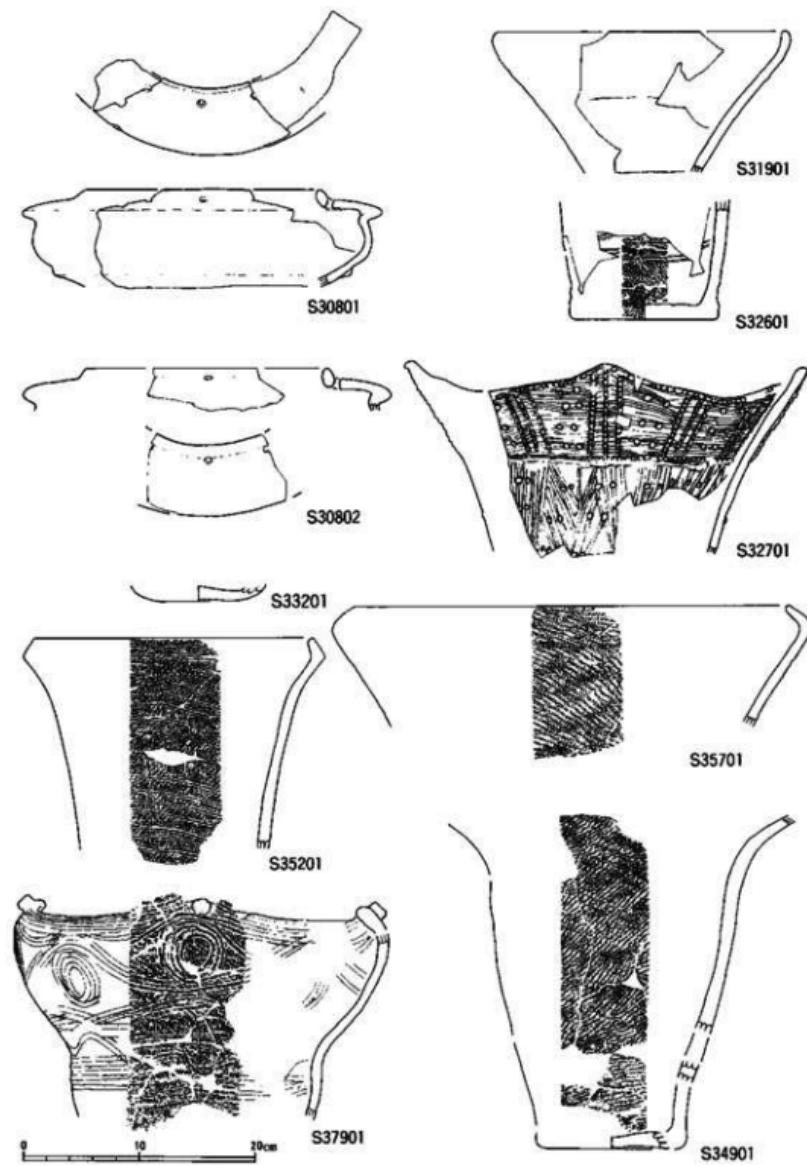
第153図 土器実測図（土器出土）(1/5)



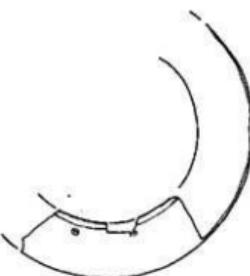
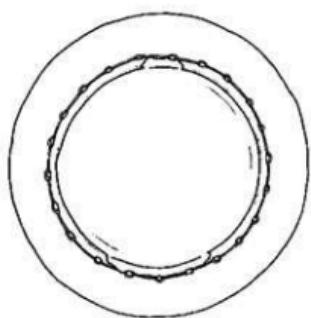
第154図 土器実測図（土壤出土）(1/5)



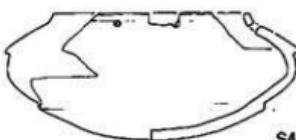
第155図 土器実測図（土壤出土）(1/5)



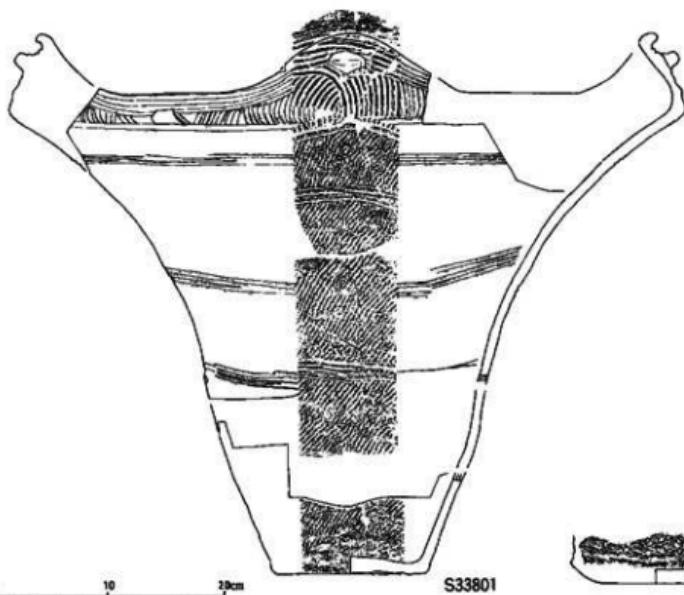
第156図 土器実測図（土壤出土）(1/5)



S35501



S41801

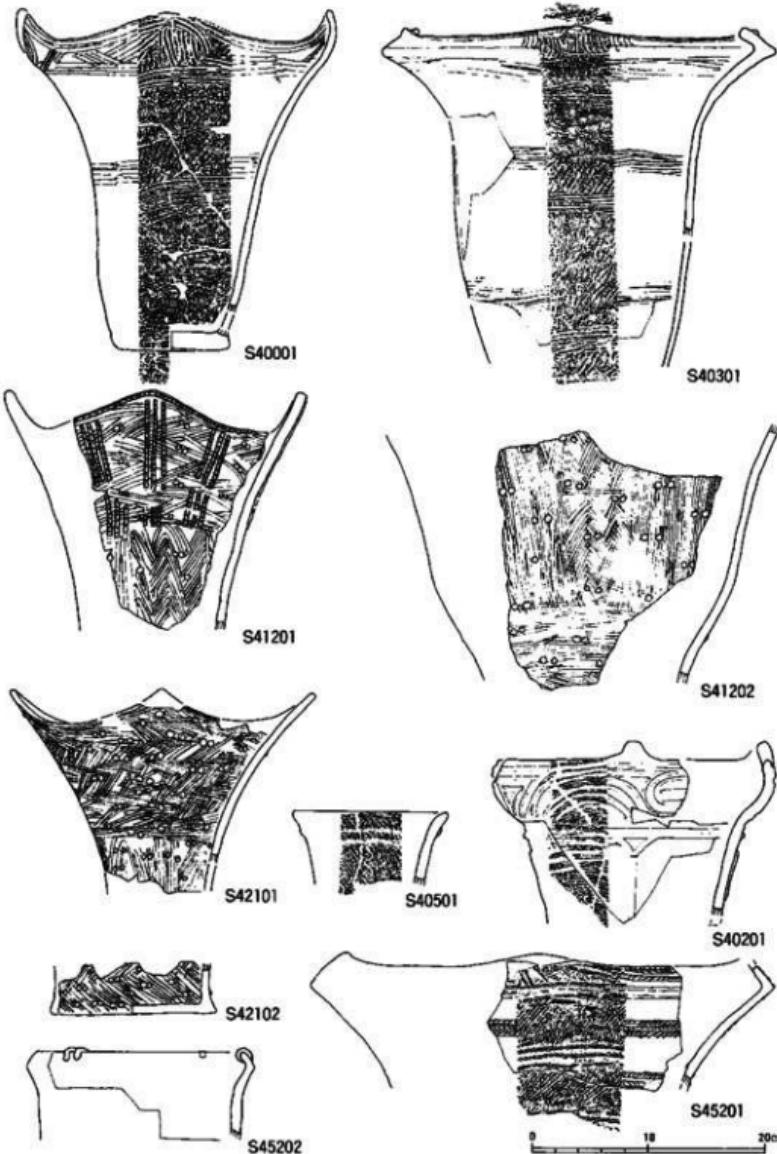


S33801

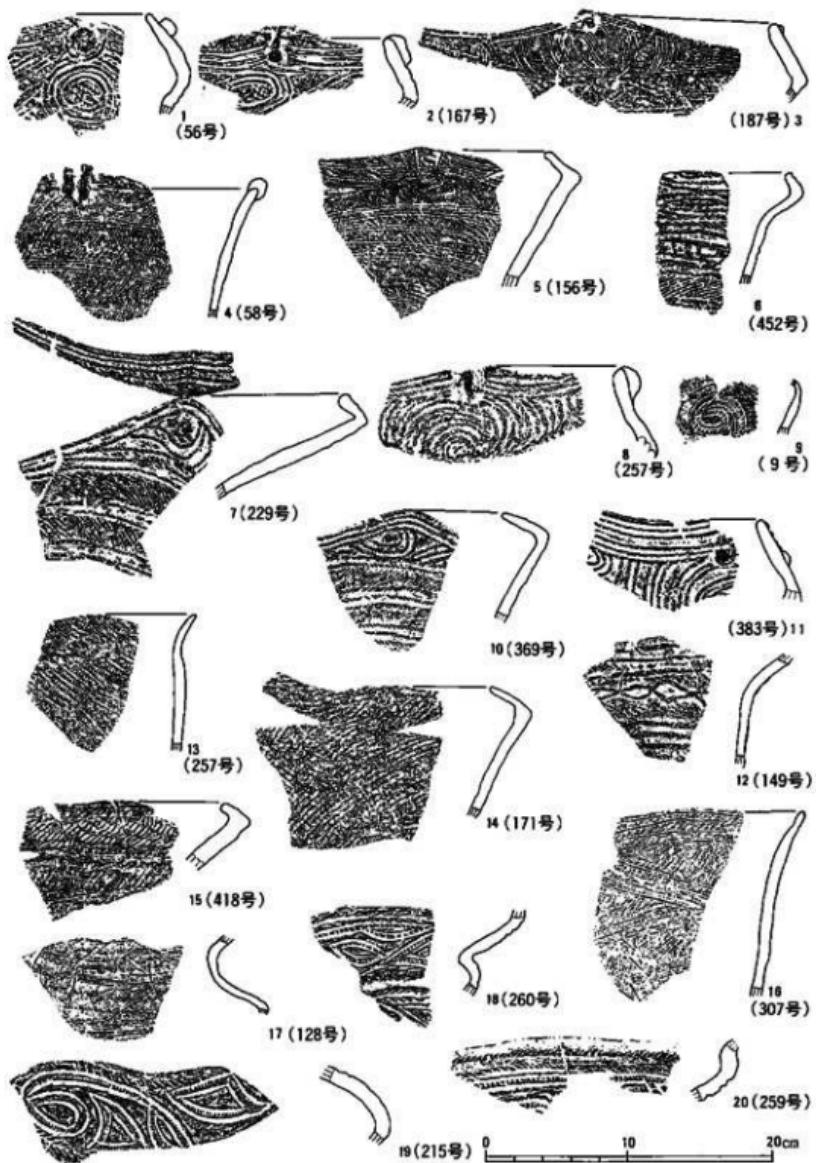


S34401

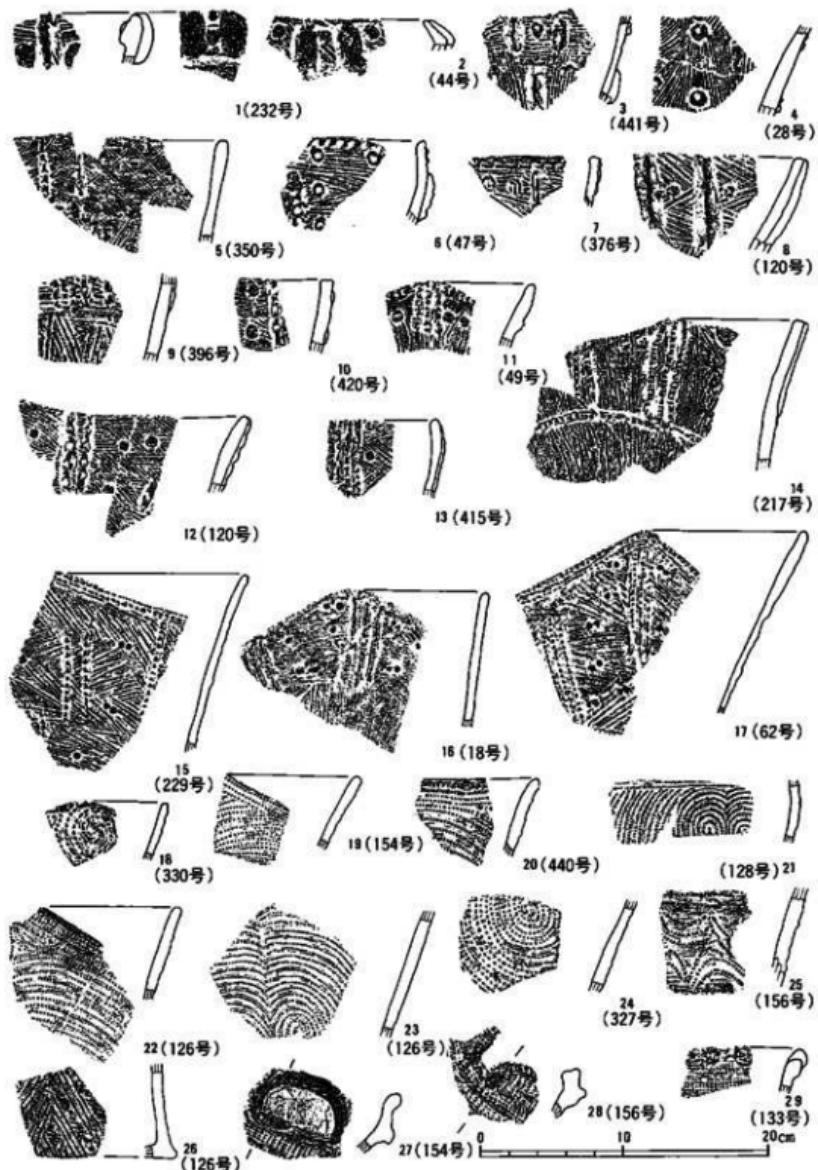
第157図 土器実測図（土壤出土）（1/5）



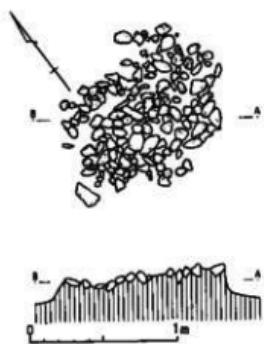
第158図 土器実測図（土壤出土）(1/5)



第159圖 土器拓本（土壤出土）(1/4)

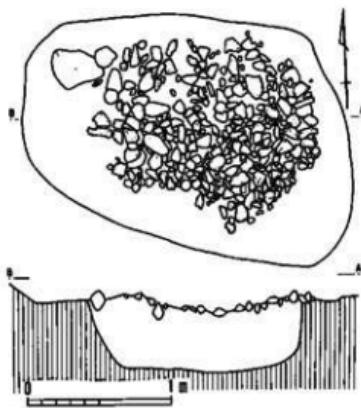


第160圖 土器拓本（土壤出土）(1/4)



161

第161図 第2号集石 (1/40)



第162図 第6号集石 (1/40)

の土壙群（諸磲式期）を切っているが土器は出土していない。以上の事実から言えることは、第6号は特殊な例とすれば集石遺構は諸磲式期より新しい時期のもので五領ヶ台式期より新しいものもあるという点以外に明確な情報は存在しないことになる。

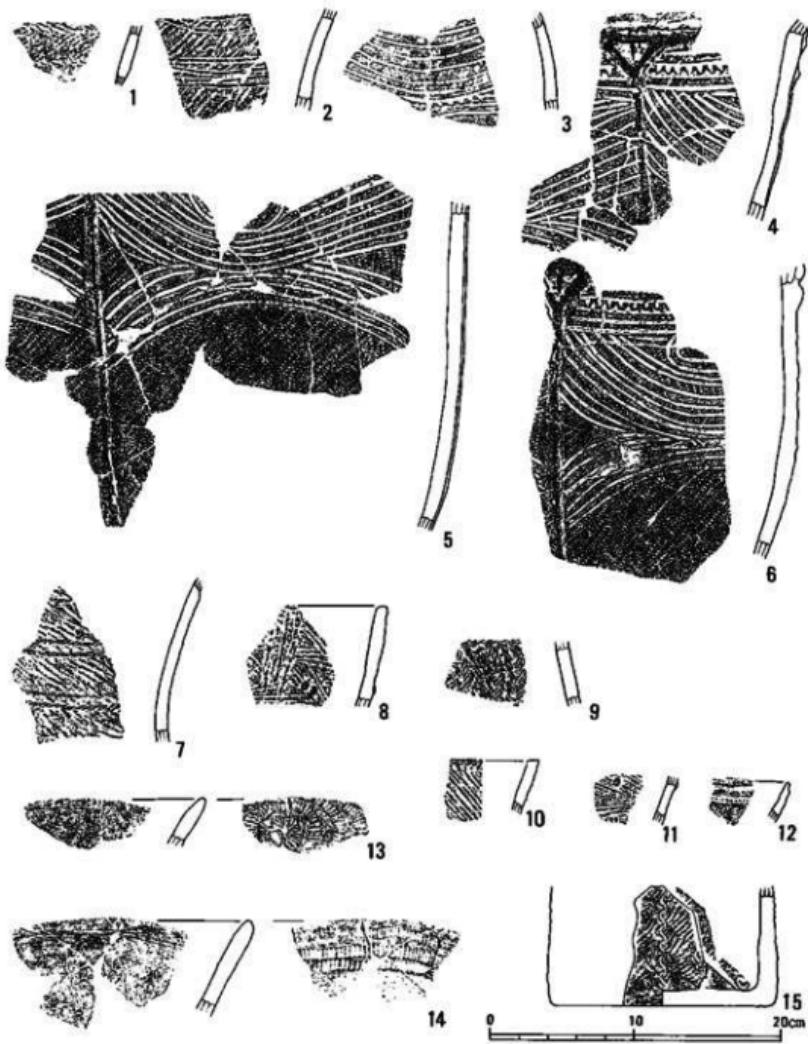
**出土土器** 第163図 1は1号集石、2は3号集石出土。いずれも諸磲式土器。3～6は5号集石出土の五領ヶ台式土器。特に4～6は同一個体とみられる。7～9は8号集石出土。10～12は7号集石。特に12は口縁部に爪形文がめぐる。13～15は9号集石出土の五領ヶ台式土器。13、14は浅鉢形土器。

#### 4 溝状遺構（付図1・2）

本遺跡では3条の溝状遺構が確認されているが、すべて比較的新しい時代のものと思われる。それは溝を覆う覆土が漆黒で柔らかくしまりがないことからも推測される。

第1号溝状遺構は平安時代の第8号住居址を切っているし、第2号・第3号も諸磲式期の遺構群を切っている。出土遺物はない。それぞれ平安時代以降の水路に関係する溝と思われる。

（新津・米田）



第163図 土器拓本 (集石出土) (1/4)

表4 土壌一覧

土壌No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	図
1号	不 整 形	1.10	1.09	55		I ~ III	105
2号	円 形	1.45		32		I ~ II	106
3号	不 整 形	2.41	1.41	73	II、III、V - 6		107
4号	不 整 形	2.72		34	土製垂飾 1	II、III	109
5号	円 形	1.25	1.08	50		II ~ III	36
6号	不 整 形	1.23	1.10	40		玉領ヶ台	108
7号	円 形	0.85	0.70	28		II	35
8号	隅 丸 方 形	1.40	1.20	30		V - 5	
9号	不 整 形	1.45	1.40	45		II ~ III	
10号	不 整 形	1.26	1.20	32			35
11号	椭 圆 形	1.20	1.12	75	有孔土器 1	I ~ II	108
12号	不 整 形	1.87	1.50	74		I ~ III	107
13号	不 整 形	2.40	1.45	58		I ~ II	109
14号	椭 圆 形	1.30	1.10	35		I ~ II	109
15号	不 整 形	2.65	1.11	41		II ~ III	110
16号	不 整 形		1.63	58		II ~ III	109
17号	椭 圆 形	1.80	0.97	61		II ~ III	108
18号	椭 圆 形	1.50	1.38	38		V - 5	109
19号	円 形	1.29	1.26	65		III	111
20号	椭 圆 形	1.32	1.10	36		I ~ II、V - 5	112
21号	椭 圆 形	1.59	1.26	65	土製块状耳飾 1	II ~ III	111
22号	不 整 形		1.51	48		II ~ III	111
23号	椭 圆 形	1.37	1.33	39		II ~ III	111
24号	不 整 形		1.13	36		II ~ III	111
25号	不 整 形		1.87	43		I ~ III、V - 5	111
26号	不 整 形	(2.20)	—	50	29号と重複	II ~ III	113
27号	円 形	1.43	1.34	51		III	112
28号	椭 圆 形	1.20	1.02	58		IV - 1 ~ 2	111
29号	不 整 形	(3.65)	—	56		II ~ III	113
30号	椭 圆 形	0.69	0.60	48		II ~ III	113
31号	円 形	1.28	1.20	60		I ~ III、V - 5、6	113
32号	椭 圆 形	1.77	1.15	30	深鉢底 2	II、V - 5	112
33号	円 形	0.87	0.80	35		II ~ III	112
34号	椭 圆 形	1.10	1.08	27		III	112
35号	椭 圆 形	0.98	0.90	24		III	112
36号	円 形	0.78	0.77	32		V - 4	112
37号	円 形	1.14	1.03	69		V - 5	106
38号	椭 圆 形	0.94	0.93	48		II、V - 5、6	109
39号	不 整 形	1.60	1.20	40	深鉢 1	IV - 1	41
40号	円 形	1.41	1.24	49		I ~ II、V - 5	106
41号	椭 圆 形	1.85	1.56	49	深鉢 1	II	114
42号	不 整 形	1.1		32		V - 5	114
43号	不 整 形	1.27	1.13	46		II ~ III	114
44号	円 形	1.17	1.11	53	深鉢 1	IV - 1、V - 5、6	114
45号	不 整 形	1.44	1.07	50	深鉢 1、有孔土器 1	I ~ III	
46号	椭 圆 形	1.06	0.85	44		II ~ III、V - 5	114
47号	円 形	1.37	1.15	36		IV - 2、V - 5	115
48号	円 形	1.39	1.27	52		V - 5	115
49号	円 形	2.10	1.90	43	深鉢 1、浅鉢 1	II	116
50号	円 形	1.30	1.14	23		III	115
51号	円 形	1.28	1.20	58	土製块状耳飾 1	II ~ III	114
52号	円 形	1.40	1.25	38		II ~ III	114
53号	円 形	1.00	0.97	28		II	116
54号	円 形	0.87	0.80	36		II ~ III	117
55号	円 形	1.39	1.30	38		II	117
56号	椭 圆 形	1.50	1.25	22		II	117
57号	椭 圆 形	1.57	1.29	20		II ~ IV	117
58号	不 整 形	2.13	1.53	56		I ~ III	118
59号	円 形	1.20	1.25	53		II	47
60号	椭 圆 形	1.13	0.96	43	深鉢 1	II ~ III	121

土器No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	図
61号	不 整 形	3.02		58			119
62号	円 形	1.96	1.86	33		II～IV、V-5	120
63号	椭 円 形	1.46	1.16	46		II～III	120
64号	円 形	0.97	0.89	28		I～III	120
65号	円 形	1.26	1.09	30		I～III	120
66号	不 整 形	0.87	0.81	39	土製円盤1	I～III	119
67号	椭 円 形	1.43	1.12	65		III	122
68号	不 整 形	2.18		42		II	121
69号	( 円 形 )	(1.55)		35		II～III、V-5	99
70号	円 形	1.18	1.18	68	深鉢1	I～III	121
71号	不 整 形	1.07	0.90	59			122
72号	不 整 形	1.10	1.01	33		I～III	121
73号	不 整 形	1.0		40		II～III	116
74号	不 整 形	1.53	1.22	60		五領ヶ台	118
75号	不 整 形	4.60	—	64		II～III	118
76号	不 整 形	1.21	0.95	45			119
77号	不整椭円形	1.25	0.95	20		I～III	120
78号	不 整 形	1.78	1.30	46		II～III	122
79号	椭 円 形	1.10	0.94	59		II～III	122
80号	円 形	1.17	1.12	23		II	120
81号	椭 円 形	1.39	1.2	44		II	48
82号	不 整 形	3.00		18			118
83号	円 形	0.77	0.7	37			47
84号	円 形	0.98	0.95	30			110
85号	不 整 形	1.59		35			110
86号	不 整 形	1.56	1.12	56		II～III	123
87号	不 整 形	2.00	1.20	56		II～III	123
88号	椭 円 形	1.23	0.98	22			122
89号	不 整 形		0.96	32		II～III	121
90号	椭 円 形	1.16	0.90	56	深鉢1	II	93
91号	椭 円 形	1.20	0.90	—		II、V-5	
92号	椭 円 形	1.32	1.03	33		II～III	123
93号	円 形	0.76	0.70	40		I～III	106
94号	椭 円 形	1.66	1.40	65		II～III	124
95号	円 形	1.12	1.00	21		II～III	
96号	不 整 形	2.52	0.89	48		I	
97号	椭 円 形	0.96	0.80	38		II～III	50
98号	不 整 形	1.88	1.20	40			50
99号	椭 円 形	0.98	0.79	40		I～II	54
100号	椭 円 形	1.14	0.90	16	深鉢1	五領ヶ台	51
101号	椭 円 形	1.51	1.26	54			106
102号	椭 円 形	0.80	0.60	19		II～III	
103号	椭 円 形	1.15	0.83	19			124
104号	不 整 形	2.72	2.16	55		II	124
105号	椭 円 形	2.28	1.59	63			124
106号	椭 円 形	0.72	0.63	46			117
107号	( 円 形 )	(1.72)		33			58
108号	円 形	0.91	0.88	19		II～III	106
109号	椭 円 形	1.23	1.09	22			125
110号	円 形	1.20	1.10				
111号	不 整 形	1.80	1.30	50			126
112号	椭 円 形	1.70	1.09	20			126
113号	長 方 形	3.82	1.20	56			126
114号	不 整 形	1.22	1.04	80			127
115号	椭 円 形	1.36	0.84	34			57
116号	円 形	1.22	1.04	64			94
117号	椭 円 形	1.69	1.18	21			58
118号	椭 円 形	1.53	1.24	42		I～II	58
119号	円 形	1.50	1.34	68		I～III	58
120号	円 形	0.95	0.94	36		V-4	110
121号	円 形	1.13	1.11	35		V-5	113
122号	円 形	1.42	1.35	53		II	125

土器No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	図
123号	円 形	0.90	0.87	60		V - 6	128
124号	不 整 形	1.32	1.21	55			128
125号	不 整 形	1.15	1.05	55		V - 5	127
126号	不 整 形	1.30		43		V - 6	129
127号	精 円 形	1.01	0.86	25		V - 6	129
128号	不 整 形	1.80		45		V - 5、 6	129
129号	不 整 形	2.21	1.10	70		V - 5、 6	130
130号	精 円 形	2.30	0.97	47			130
131号	精 円 形	1.32	1.05	27		II~III	130
132号	不 整 形	2.77	2.30	35	深鉢 1	V - 6	127
133号	精 円 形	1.42	1.11	45		十三菩提	120
134号	円 形	1.10	1.03	29		IV - 2	120
135号	不 整 精 円 形	1.26	0.95	31		IV - 1	120
136号	精 円 形	1.86	1.15	30	有孔土器 1	II~III	119
137号	円 形	0.73	0.61	47		II~III	119
138号	不 整 形	3.40		76		III	128
139号	不 整 形	1.40	0.78	58			128
140号	不 整 形	0.98	0.87	35		II~III、 V - 6	128
141号	精 円 形	1.15		45		I ~ II	129
142号	不 整 形	4.11		32			129
143号	精 円 形		1.33	30		II~III、 V - 5	129
144号	不 整 形	4.11		26			
145号	不 整 形	2.66	1.02	45		II、 V - 5	130
146号	不 整 形		1.33	47		II~III	130
147号	不 整 形	1.46		58			129
148号	不 整 形	4.31	1.46	73		I ~ II	130
149号	不 整 形		0.95	62	深鉢、 有孔土器	V - 6	131
150号	不 整 形		1.60	53			131
151号	不 整 形	2.08		60		V - 5	130
152号	不 整 形	2.72		60			131
153号	不 整 形		1.43	68		II~III	131
154号	不 整 形		2.00	37		V - 6、 十三菩提	131
155号	不 整 形		1.29	59			131
156号	精 円 形	2.51	1.90	72		V - 6、 十三菩提	120
157号	精 円 形		1.50	41			120
158号	精 円 形	1.22	1.06	50			120
159号	不 整 形	1.30	0.68	50			127
160号	不 整 形	2.30	1.80	44	有孔土器 1	II	119
161号	不 整 形	1.40		53			119
162号	不 整 形	1.77		35		IV - 1	119
163号	不 整 形	2.08		73		II~III	132
164号	精 円 形	1.43		56		II~III	132
165号	不 整 形	1.30	0.70	68			119
166号	精 円 形	0.63	0.52	35		II~III、 V - 5	132
167号	円 形	0.76	0.74	45			132
168号	不 整 形	2.93	1.64	67		II~III	123
169号	精 円 形	1.19	1.03	69		II	123
170号	不 整 形		1.07	45		II~III	133
171号	精 円 形	1.35	1.20	30		II~III、 V - 5	95
172号	不 整 形		1.82	45			133
173号	不 整 形	3.60		30	深鉢 1	I ~ III	125
174号	不 整 形	1.70	1.14	32			105
175号	精 円 形	1.17	1.04	60		IV~V	105
176号	不 整 形	1.40	1.15	30		I ~ II	105
177号	不 整 形	2.40	0.82	74			134
178号	精 円 形	1.35	1.11	29		V - 5	105
179号	精 円 形	1.20	0.77	18			95
180号	(不 整 形)			27			95
181号	不 整 形	4.61		43			133
182号	円 形	1.21	0.95	45			95
183号	円 形	1.40	1.28	26		III、 V - 6	134
184号	円 形	1.00	0.96	46		b、 c	134

土器No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	図
185号	円 形	0.74	0.70	33		V - 5	134
186号	不 整 形		1.02	63		b, c	105
187号	不 整 形		1.38	30	土製円盤 1	II~III	105
188号	椭 圆 形	0.77	0.67	29			134
189号	椭 圆 形	0.66	0.58	25			134
190号	不 整 形	1.18	0.93	22			135
191号	不 整 形		1.73	38			135
192号	椭 圆 形	1.15	0.96	46			134
193号	円 形	0.82	0.76	16			134
194号	椭 圆 形	1.37	0.98	40			134
195号	椭 圆 形	1.80	1.47	42			135
196号	円 形	0.94	0.85	33			135
197号	椭 圆 形	1.21	0.89	31			135
198号	円 形	1.10	1.10				
199号	椭 圆 形	0.98	0.91	35			118
200号	椭 圆 形	1.57	1.23	39		IV - 1	112
201号	円 形	1.06	0.96	27		II	132
202号	円 形	0.73	0.71	30		II	132
203号	椭 圆 形	1.22	0.88	38	石製尖状耳飾 1	II、 V - 5	132
204号	円 形	0.93	0.90	32			118
205号	椭 圆 形	1.03	0.98	66			118
206号	椭 圆 形	1.39	1.20	28			112
207号	円 形	1.06	0.94	34			63
208号	不 整 形	0.98	0.88	57		II、 V - 5	132
209号	円 形	0.90	0.80	21			65
210号	不 整 形	1.40	1.40	10			65
211号	円 形	1.10	1.10	68	深鉢 1	I ~ II、 V - 5	136
212号	不 整 形	2.16	1.33	46		I ~ II	122
213号	円 形	1.00	0.95	65		II、 III	137
214号	円 形	1.26	1.24	42		II ~ III	137
215号	不 整 形	(1.62)		64	深鉢 1	I ~ II	116
216号	椭 圆 形	1.85	1.58	87		II ~ III、 V - 6	108
217号	不 整 形	3.50		50	集石	V - 5、 6	136
218号	円 形	1.14	1.10	60		II	137
219号	椭 圆 形	1.20	1.11	55		II ~ III	122
220号	椭 圆 形	1.50	1.22	70		II ~ III	70
221号	椭 圆 形	1.90	1.42	55		II ~ III	137
222号	椭 圆 形	1.56	1.25	74		II	137
223号	不 整 形	1.77	1.03	78		III	138
224号	円 形	1.42	1.30	58		II ~ III、 V	136
225号	不 整 形	0.95	0.70	8			67
226号	円 形	1.20	1.14	33			69
227号	不 整 形	1.46	1.00	48		II	137
228号	不 整 形		1.48	54		II	136
229号	円 形	1.18	1.18	51		III、 V - 5	136
230号	椭 圆 形	1.74	1.32	38		b	138
231号	円 形	0.96	0.96	48			70
232号	円 形	1.55	1.47	48	深鉢 1	IV - 1, 2	116
233号	不 整 形	2.10	1.70	63		II、 V - 5	137
234号	椭 圆 形	1.70	1.53	25			116
235号	椭 圆 形	1.77	1.25	51		IV - 2	139
236号	不 整 形		1.25	37		II ~ III、 V - 5	139
237号	椭 圆 形	1.50	1.25	57		II ~ III	139
238号	不 整 形		1.30	33			139
239号	椭 圆 形	1.32	1.24	38		III	
240号	不 整 形		1.69	67		b	116
241号	不 整 形	1.07	1.00	40			116
242号	不 整 形		1.68	44			116
243号	円 形	1.40	1.20	55			69
244号	円 形	1.14	1.10	24			136
245号	不 整 形	2.46		63			136
246号	椭 圆 形	0.86	0.80	39			69

土器No.	形 状	長辺(m)	短辺(m)	壁高(cm)	遺 物	土器の時期	図
247号	不 整 形	1.31	1.07	58	大型深鉢 1	V - 5	136
248号	不 整 形	1.88	1.09	34		II ~ III	139
249号	椭 圆 形	1.40	1.18	57		II ~ III	139
250号	椭 圆 形	1.20	1.05	63		I ~ III	139
251号	(椭 圆 形)	(1.35)		35		I	136
252号	不 整 形	1.80		16		II	139
253号	円 形	1.11	1.07	49		b	139
254号	円 形	1.10	1.00			II ~ III	136
255号	不 整 形	1.45		28		I ~ II	139
256号	不 整 形	4.07	3.17	36			108
257号	円 形	1.07	1.06	64		I ~ II	141
258号	円 形	1.64	1.56	50		I ~ III	74
259号	椭 圆 形	1.14	0.90	70		I ~ II	73
260号	椭 圆 形	2.53	1.64	45		I, I ~ II	133
261号	円 形	1.13	1.11	40		IV - 3	135
262号	椭 圆 形	1.41	1.22	47		I ~ II	107
263号	円 形	1.35	1.30	48		III	107
264号	円 形	0.86	0.78	38			140
265号	椭 圆 形	1.50	0.90	50		II ~ III	133
266号	円 形	1.62	1.62	44		I ~ II	140
267号	不 整 形	1.70	1.53	30			140
268号	椭 圆 形	1.13	0.93	45		III, V - 5	107
269号	円 形	1.07	1.06	40		I ~ II	107
270号	円 形	0.80	0.75	27		II ~ III	107
271号	椭 圆 形	1.41	1.28	53		II ~ III	107
272号	不 整 形	2.42	0.90	69		II ~ III	140
273号	椭 圆 形	1.18	1.03	55			140
274号	不 整 形	1.27		35		b	140
275号	椭 圆 形	1.20	0.95	53		II ~ III	133
276号	円 形	1.00	0.94	45		I ~ II	135
277号	円 形	0.94	0.94	27		II	107
278号	円 形	1.33	1.32	32			107
279号	不 整 形	0.97	0.81	62		I ~ II	140
280号	円 形	1.00	0.80	39			72
281号	不 整 形	0.65	0.50	42			76
282号	円 形	1.31	1.10	29			135
283号	不 整 形	1.33	1.05	26			135
284号	不 整 形	1.57	1.26	53	集石	V - 5	106
285号	円 形	1.06	0.94	52		V - 5, 6	74
286号	椭 圆 形		1.34	51		III	110
287号	円 形	1.02	0.90	28			110
288号	円 形	9.04	9.00	20			79
289号	鷹 丸 方 形	1.10	1.04	40			79
290号	不 整 形	2.17		50		V - 5	113
291号	円 形	1.38	1.25	31		b, IV - 2	80
292号	不 整 形	1.45	1.43	50		V - 5	80
293号	椭 圆 形	1.26	1.02	64		I ~ II	142
294号	椭 圆 形	1.75	1.55	55		II	142
295号	不 整 形	1.63	1.17	80		I ~ II	142
296号	椭 圆 形	2.00	1.55	40		II	
297号	円 形	1.00	0.99	67		I ~ II	115
298号	不 整 形	1.04	1.00	12		V - 5	97
299号	不 整 形	1.32	1.10	54			97
300号	円 形	0.93	0.84	30		I ~ II	143
301号	不 整 形		1.17	23		II	143
302号	不 整 形		1.00	27			143
303号	不 整 形		1.28	35		II ~ III, V - 5	143
304号	不 整 形		1.07	43		I ~ II, IV - 2	143
305号	不 整 形		1.30	58			143
306号	不 整 形		1.16	53		II ~ III	143
307号	不 整 形		1.23	50	深鉢 1	I ~ III	143
308号	椭 圆 形	1.25	1.10	70	有孔土器 2	III	80

土器No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	回
309号	円 形	0.98	0.93	40			113
310号	不 整 形		0.78	17		II、 V - 6	113
311号	不 整 形	(1.44)		44		V - 5	113
312号	円 形	1.02	0.90	68		V - 6	80
313号	椭 圆 形	0.85	0.63	13		II	
314号	円 形		0.78	32		I ~ II、 V - 5	144
315号	円 形	0.78	0.77	25		b	144
316号	不 整 形		1.28	45		V - 5	144
317号	椭 圆 形	1.03	0.92	54		II	80
318号	椭 圆 形	0.94	0.75	46		I ~ II、 V - 6	145
319号	不 整 形	1.47	0.93	55	鉢 1	II	152
320号	円 形	1.21	1.09	76		II ~ III	149
321号	不 整 形		1.33	35	石製块状耳飾 1	II ~ III	142
322号	円 形	0.92	0.88	48			144
323号	不 整 形		0.21	65			144
324号	不 整 形	(3.72)		26		V - 4、 5	146
325号	椭 圆 形	1.08	0.93	31			146
326号	円 形	0.78	0.67	21	深鉢 1	II ~ III	146
327号	椭 圆 形	1.88	1.67	58	深鉢 1	V - 5	138
328号	椭 圆 形	0.97	0.80	55		II、 V - 5	146
329号	椭 圆 形	1.50	1.12	90		V - 5	145
330号	不 整 形		(1.80)	18		I ~ III、 V - 6	145
331号	円 形	1.32	1.15	55		II、 V - 5	145
332号	不 整 形		(1.80)	39		II、 III	145
333号	不 整 形		(1.03)	68		II ~ III	145
334号	円 形	1.02	1.00	54		V - 5	145
335号	円 形	0.75	0.66	51			145
336号	円 形	0.95		63			145
337号	椭 圆 形	1.56	1.24	43		I ~ II	149
338号	円 形	0.76	0.72	45	深鉢銅立	II	149
339号	不 整 形	1.00	0.95	44		V - 6	149
340号	台 形	1.25	0.94	38	石製块状耳飾 1	II ~ III	80
341号	円 形	1.13	1.10	76			
342号	不 整 形		1.20	51	b		143
343号	不 整 形	1.15		35			147
344号	椭 圆 形	0.93	0.85	57		II	147
345号	不 整 形	0.85	0.72	40		II	147
346号	円 形	1.25	1.10	73			147
347号	椭 圆 形	1.30	1.12	43			147
348号	円 形	1.08	1.03	83		II	147
349号	円 形	1.36	1.23	47	深鉢 1	V - 5	
350号	椭 圆 形	1.00	0.87	71		N - 2	
351号	不 整 形	1.34	1.20	52			97
352号	不 整 形		1.93	82	深鉢 1	III	141
353号	円 形	0.88	0.85	55		V - 5	148
354号	椭 圆 形	1.28	1.06	30		I ~ II	148
355号	円 形		1.15	33	有孔土器 1	II	142
356号	円 形	0.92	0.86	27	土製円盤 1	III	142
357号	椭 圆 形	1.61	1.31	64	深鉢 1	II ~ III	142
358号	円 形	0.75	0.70			V - 5	142
359号	不 整 形		1.30	42			
360号	椭 圆 形	0.40	0.29	52		I ~ II	149
361号	円 形	1.00	0.93	64		II ~ III	149
362号	不 整 形	2.20	1.07	46		V - 5	115
363号	不 整 形		1.27	58		II	125
364号	不 整 形	2.10	1.76	62		II、 III	125
365号	不 整 形	1.10		65		II、 V - 5	145
366号	椭 圆 形	1.02	0.92	31			148
367号	円 形	0.82		38			148
368号	円 形	1.12	1.06	30		II	148
369号	椭 圆 形	0.96	0.87	55		II ~ III	148
370号	円 形	0.95		39		II	148

土器No.	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	図
371号	精 円 形	1.39	1.17	30		II	141
372号	不 整 形		1.67	43		V - 5	141
373号	不 整 形	(2.50)	1.70	19		II, V - 5	141
374号	精 円 形	1.03	0.70	39			
375号	不 整 形	(2.05)	1.50	37		c	141
376号	円 形	1.17	1.07	39		IV - 3	
377号	円 形	0.84	0.80	58		II	
378号	円 形	1.10	0.90	36		II - III	
379号	不 整 形		1.05	35	深鉢 1	I	147
380号	円 形	0.94	0.93	43		II	147
381号	不 整 形		1.20	41		V - 5	143
382号	不 整 形	(1.30)		53		II	143
383号	不 整 形		1.10	55		II	143
384号	円 形	1.20	1.07	62			146
385号	長 方 形	1.33	1.00	27			146
386号	精 円 形	1.30	1.11	39			125
387号	精 円 形	1.84	1.17	48			125
388号	円 形	1.36	1.18	37		I ~ II, V - 5	125
389号	精 円 形	2.32	1.45	51		V - 4	138
390号	不 整 形		1.16	36		I	115
391号	精 円 形	1.67	1.58	75		II - III	113
392号	円 形	0.90	0.80	41		II - III	145
393号	四 角 形	1.35	1.32	61		V - 5	152
394号	不 整 形		2.62	54		V - 5	149
395号	不 整 形		0.99	42			149
396号	不 整 形		0.98	45		V - 3	150
397号	不 整 形		2.27	40		V - 5	150
398号	不 整 形		1.45	23		II	150
399号	不 整 形		0.95	50			150
400号	円 形	0.77	0.76	23	深鉢 1	II	138
401号	精 円 形	1.36	1.16	51		II - III	149
402号	不 整 形	1.96	0.97	37	深鉢 1	五頭ヶ台	125
403号	精 円 形	1.00	0.71	43	深鉢 1	III	146
404号	円 形	0.79	0.78	25			146
405号	円 形	0.75	0.70	40	深鉢 1	五頭ヶ台	146
406号	不 整 形	1.08		47		II	143
407号	精 円 形	1.56	1.20	30		V - 5	151
408号	不 整 形	(1.60)	(1.90)	35			149
409号	精 円 形	1.94	1.10	43		II, V - 5	149
410号	不 整 形	4.20	1.60	39		II - III, V - 6	149
411号	精 円 形	2.39	1.79	44		V - 5	148
412号	精 円 形	2.12	1.85	39	深鉢 2	V - 5	148
413号	不 整 形		1.34	44		V - 5	149
414号	精 円 形	1.00	0.84	38		II	
415号	円 形	0.89	0.82	44		II - III, V - 5	142
416号	円 形	1.14	1.33	55		c	147
417号	円 形	0.75	0.83	41			144
418号	不 整 形	4.44		71	有孔土器 1	III	121
419号	不 整 形		1.60	26		II	151
420号	不 整 形		1.27	33		V - 4	149
421号	精 円 形	1.67	1.44	41	硬玉製大珠 1 深鉢	V - 5	138
422号	円 形	0.82	0.80	21		II - III	148
423号	円 形	1.10	0.98	21			148
424号	精 円 形	1.25	1.10	23			148
425号	円 形	0.82	0.77	20			148
426号	円 形	0.68	0.64	25			148
427号	円 形	1.14	1.08	42			138
428号	不 整 形		1.03	23		I	138
429号	円 形	1.12	0.99	33		V - 5	138
430号	不 整 形	1.30	0.85	33			150
431号	円 形	0.83	0.81	21			144
432号	円 形	0.78	0.70	27			144

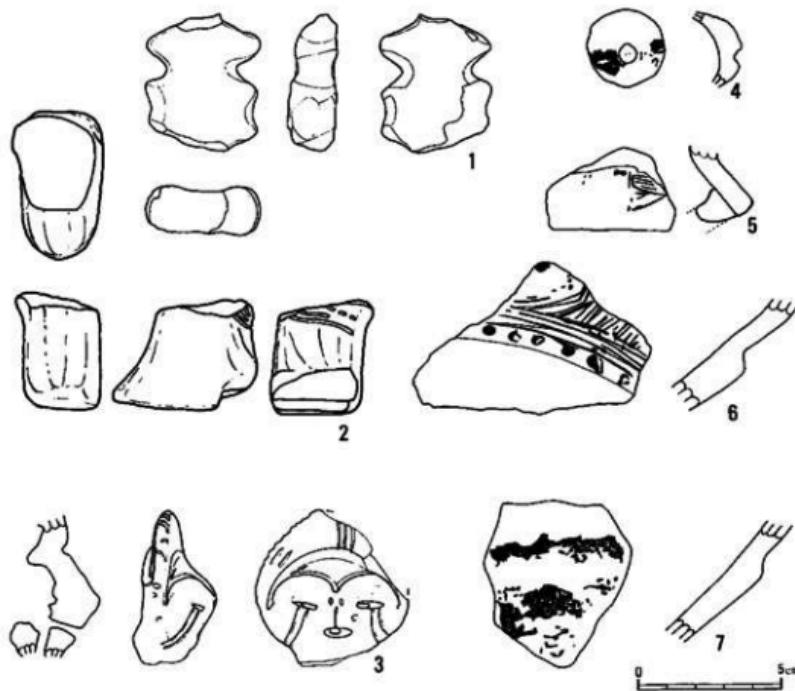
土器No	形 状	長辺 (m)	短辺 (m)	壁高 (cm)	遺 物	土器の時期	回
433号	不 整 形		1.10	29		II~III	144
434号	不 整 形	1.18	1.00	34		II~III	144
435号	円 形	1.20	1.07	25		II~III	144
436号	椭 圆 形	1.00	0.88	13			147
437号	不 整 形	1.55	1.18	53		V - 5	147
438号	円 形	0.84	0.83	37		V - 5	121
439号	円 形	1.09	1.04	55		II	147
440号	不 整 形	1.96	1.27	37		V - 6	
441号	椭 圆 形	0.94	0.88	77		III、IV-1、V-4	143
442号	椭 圆 形	1.05	0.93	48	集石		147
443号	円 形	0.92	0.91	32			146
444号	円 形	1.95	1.84	30		III	151
445号	不 整 形		1.20	32			151
446号	不 整 形	1.80	1.56	35		V - 4	151
447号	椭 圆 形	0.81	0.74	47		V - 5	146
448号	不 整 形	0.74	0.64	22			97
449号	不 整 形	0.54	0.54	60			97
450号	円 形	1.25	1.22	56			97
451号	不 整 形	(8.5 )		17		V - 5	145
452号	不 整 形	1.07		58	深鉢 2	III	150
453号	不 整 形		1.20	25			150
454号	不 整 形	1.32		34			150
455号	不 整 形		0.96	49		II	150
456号	不 整 形	2.43	0.86	58			121
457号	椭 圆 形	0.87	0.80	23			146
458号	椭 圆 形	0.86	0.69	10			146
459号	不 整 形	1.14	1.04	34		II	83
460号	椭 圆 形	1.14	0.92	42		五箇ヶ台	83
461号	椭 圆 形	1.46	1.30	70			83
462号	椭 圆 形	1.10	1.02	55		I ~ II	83
463号	椭 圆 形	1.10	0.84	30		II	83
464号	不 整 形	1.40	1.15	73		II~III	111
465号	椭 圆 形	1.40	1.25	45		II	67
466号	円 形	0.90	0.80	53		V - 5	150
467号	不 整 形	2.04	1.30	52		I ~ II	
468号	円 形	0.91	0.90	12		I ~ II	83
469号	不 整 形	1.46	0.98	58		I ~ II	67
470号	円 形	1.36	1.30	35		I ~ II	67
471号	不 整 形	1.13	1.00	36			67
472号	円 形	0.85	0.84	42		II	67
473号						II、III	
474号	円 形	1.20	1.08	66		II	82
475号	円 形	1.56	1.54	58		I、II	82
476号	不 整 形	1.34	1.10	68			87
477号	円 形	1.18	1.16	40			87
478号	不 整 形	1.62	0.96	30			84
479号	椭 圆 形	1.00	0.84	46			83
480号	円 形	0.78	0.56	21			82
481号	椭 圆 形	1.82	1.14	80			87
482号	椭 圆 形	1.10	0.75	45			67
483号	円 形	1.16	1.10	22			86
484号	不 整 形	1.50	0.94	54			84
485号	不 整 形	1.35	0.72	40			111
486号	不 整 形	1.10	0.75	28			
487号	椭 圆 形	1.30	1.25	10			84
488号	円 形	1.20	1.18	16			84

## 5 土製品 (表5、表6、表13)

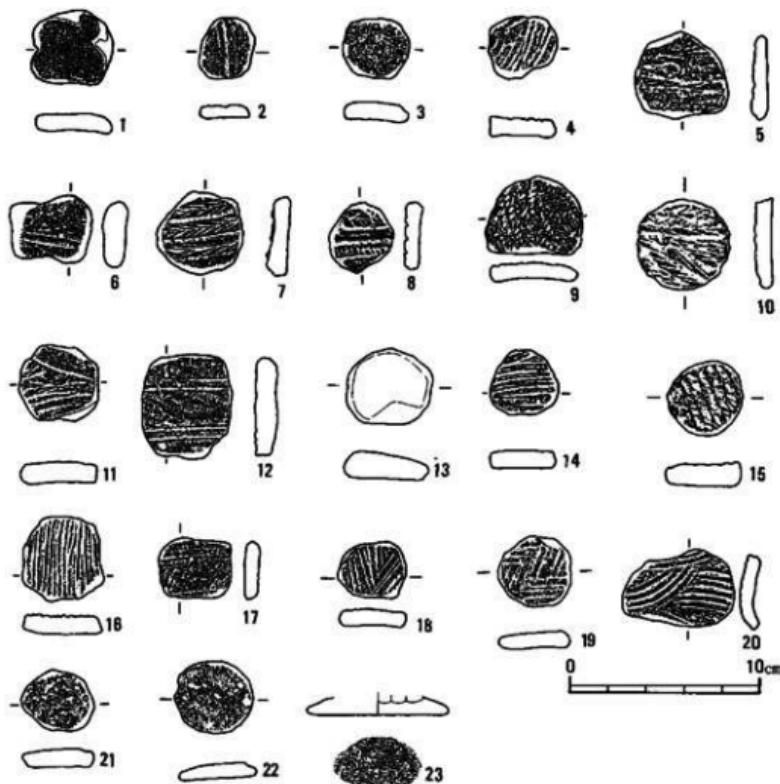
①土偶 (第164図) 1は第4B号住居覆土から出土したもの。胸部を中心とした破片である。塩山市獅子之前遺跡出土に類例があり、小野正文氏が獅子之前Bタイプとした(註1)類型に入るものとみられ、欠損しているものの下部の破損は僅かであり、丸みを帯びながら収束するものとみられる。両腕は短く水平に表現されているが、頭部は欠損。濃い茶褐色を呈し脆い。高さ4.8cm、幅4.0cm、厚さ1.8cmを測る。2はトレンチから出土した足の破片。後側に沈線がみられる。長さ5.2cm、幅2.8cm、高さ4.0cm。3は第33号住居覚乱層から出土した頭部破片。顔面中央部は中空。割れ口は磨滅しており、転落してきたことが考えられる。堅い焼き。高さ幅ともに5.4cm。1は諸戦b式期、2・3は中期の土偶である。

②玉 (第164図) 4は土製の玉とみられる破片。中空で一端に縫みがある。黒い付着物が残るが漆かもしれない。

③彩文土器 (第164図) 5~7は漆により文様の描かれたいわゆる彩文土器の破片。5と6とは赤漆を地に黒漆で線を描いている。7は黒漆のみ。いずれも漫鉢形の土器とみられるが、6・7は特に有孔土器の胸下半部破片であろう。5は第22号土壤、6が第5号集石、7が第312号



第164図 土製品実測図 (1/2)



第165図 土製円盤実測図 (1/3)

土壤出土のもので、5と6とは諸磽b式であろう。

④土製円盤（第165図） 土器の胸部破片を中心に、縁を打ち欠いたり擦ったりして整形したもので、23点出土した。諸磽b式の浮線文系（7・8・10など）・沈線文系（11・12・20ほか）・繩文系（9・15ほか）の深鉢形土器や諸磽c式の集合沈線土器（16・18・19ほか）などの破片がみられる。住居を中心出土したが特に50号住居からは5点が多い。23は底部破片。重さは20g付近が多い（表6）。

⑤块状耳飾他 装身具類として石製品とともに第189図にまとめた。このうち10～12の3点が土製块状耳飾。15は胸部中位がくびれる偏平な形状の土製品。上下のそれぞれ両端を欠くが、上辺に貫通孔があることから、紐を通して首などにかける垂饰品と考えたもの。

## 6 石器（遺構別石器分類は表14、遺物出土地点一覧は表15参照）

- ①石鏃（第166図～第170図）（表7） 総数289点が出土。このうち形態のよく分かるものを中心に217点を図示した。6種に分類したが、その種類および数量は次のとおり。
- I類 無茎（長さより幅があり、抉りが大きい） 第166図1～20、30。総数22点。
  - II類 無茎（先端が突出し輪郭に丸み） 第166図21～29。総数9点
  - III類 無茎（縦長で裾が広がる） 第166図31～48。総数18点
  - IV類 無茎（縦長あるいは三角状で均整のとれた形態） 第167図1～55、第169図1～42、第170図1～10。総数111点
  - V類 無茎（縦長で抉りが浅い） 第168図1～27。総数36点
  - VI類 平形（三角形） 第168図28～45。総数19点
  - VII類 長さ3cm以上の大型 第170図11～13。総数3点
  - VIII類 有茎 第170図14。総数2点
  - IX類 破損品 第169図43～53、第170図15・16。総数69点

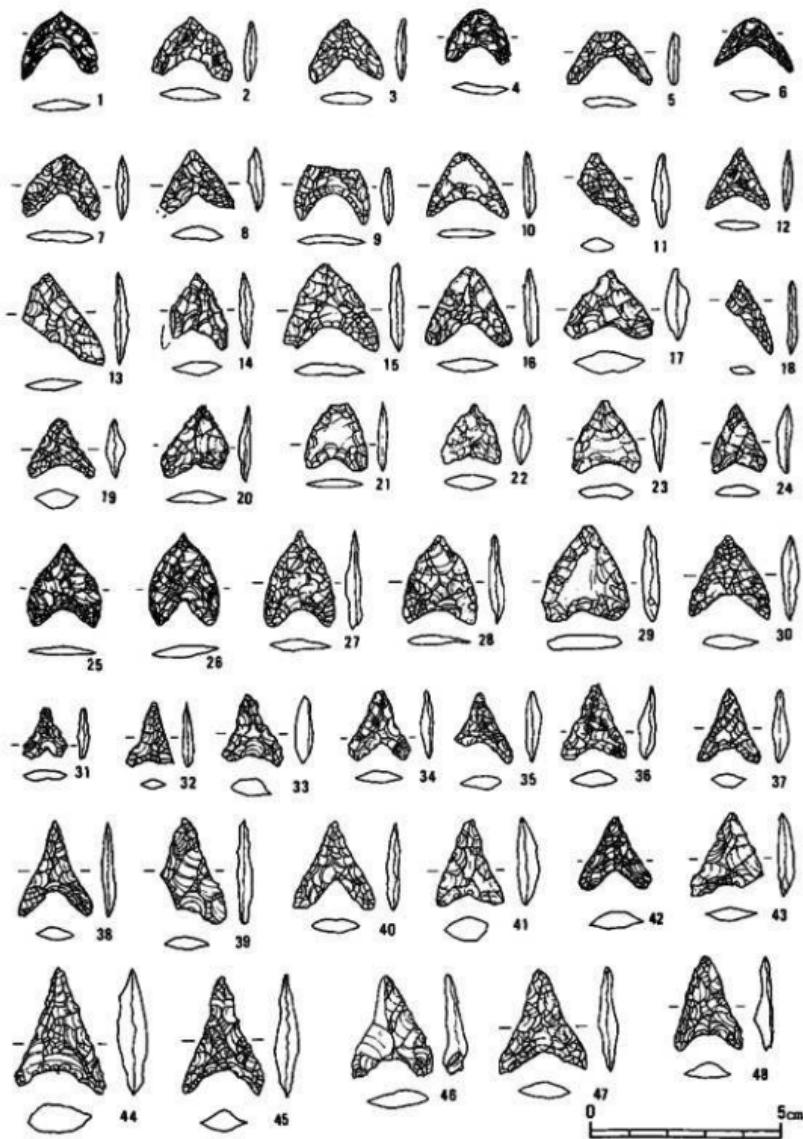
このように無茎が圧倒的に多く、有茎はわずか2点しかないことから、有茎はむしろ違う時期の混入品かと思われる。IV類が最も多いがこのなかには二等辺三角形から正三角形までいくつかのヴァラエティを一括したことにも起因しよう。このタイプは時期を越えてかなり普遍的に作られたものであろう。IからIII類はかなり特徴的な形態であり、諸磯式期の性格を表しているものと思われる。石材については圧倒的に黒曜石が多く、チャート・頁岩が僅かに用いられている。出土地点についてはほぼ全体からまばらに発見されているが、住居では特に47号から27点と非常に多く、次いで19号から12点、50号から8点となっている。この3軒は大型住居であることから注意したい。

### ②石匙（第171図～第175図）（表8）

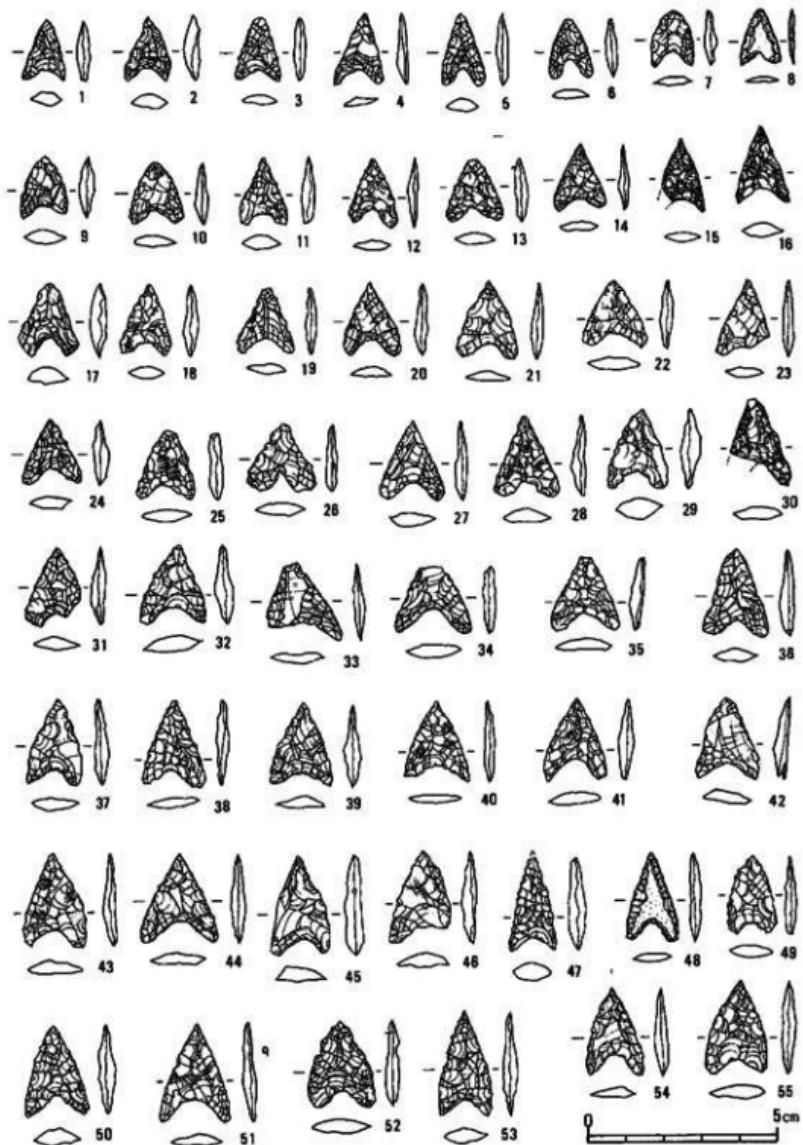
明確なものは98点出土。84点を図示したがこの内16点が縦型で、8割以上が横型ということになる。第172図12のような黒曜石製で薄く精巧なものもみられる。石質は黒曜石、チャート、頁岩などである。出土地点では住居から48点、土壇20点、集石1点、遺構外17点である。住居では47号からは7点も出土しており、次いで19号から5点、4A号から4点出土している。土壇では98号、327号、391号、392号から2点づつ出土している。

### ③石錐（第174図・第175図）（表8）

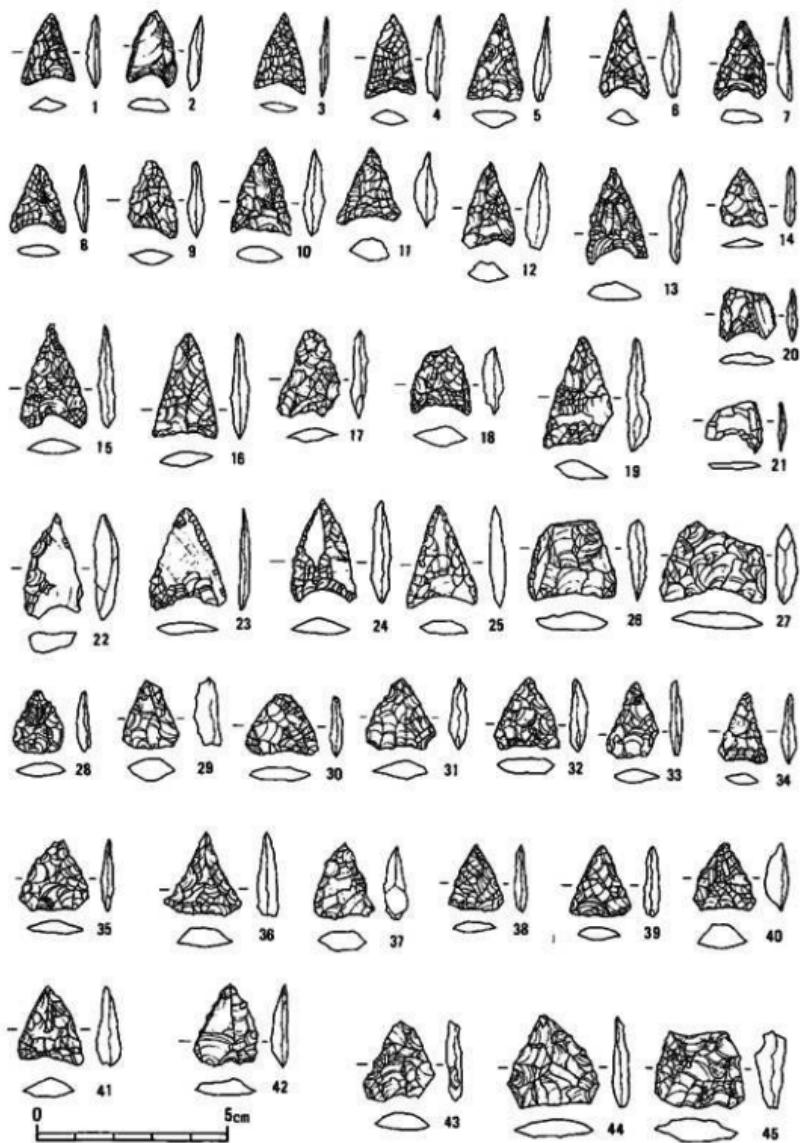
破片も含め132点が石錐と判断できるもの。この内66点を図示した。石質は黒曜石が多く、次いでチャートであり、頁岩も僅かながら認められる。出土地点については住居から74点、土壇から25点が出土している。特に47号住居からは12点と最も多い。



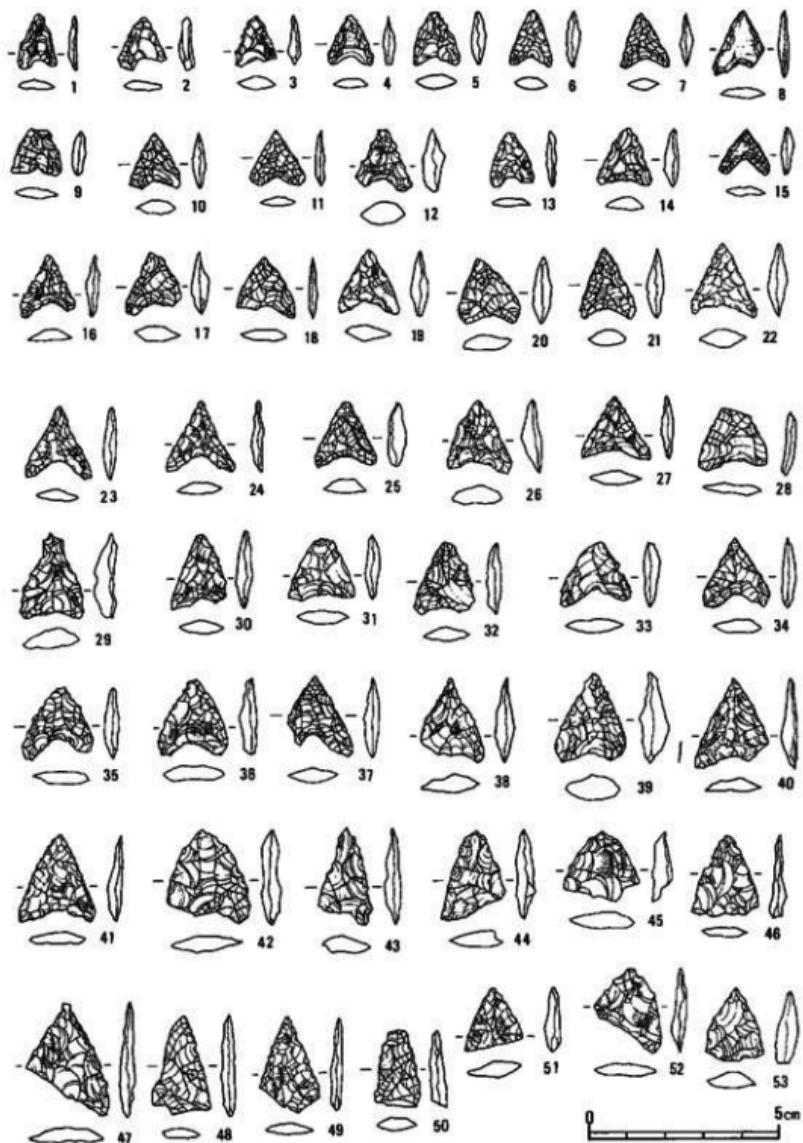
第166図 石炭実測図① (1/1.5)



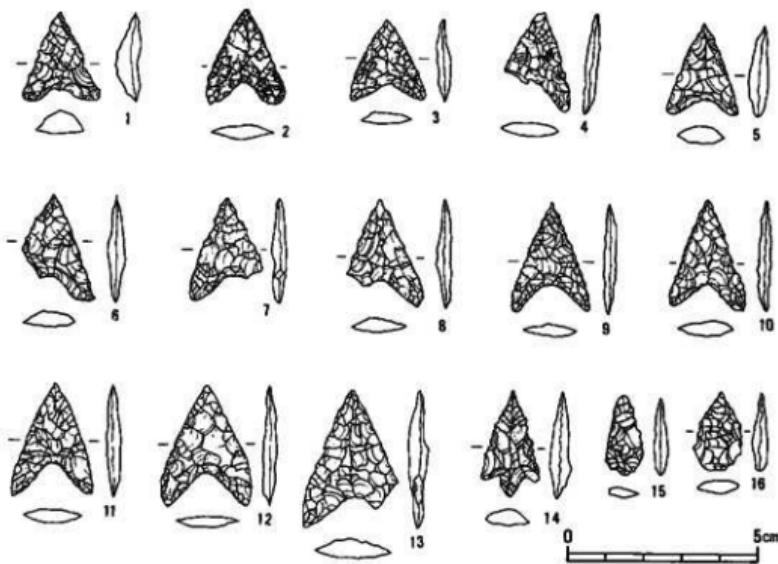
第167図 石鏃実測図② (1/1.5)



第168図 石器実測図③ (1/1.5)



第169図 石鑑実測図④ (1/1.5)



第170図 石器実測図⑤ (1/1.5)

④磨製石斧（第176図・第177図）（表9）

22点出土。全て図示した。14が長さ9cmを測る定角式である他は、9に代表されるような乳棒状石斧を主体とする。ただ16のような幅広のものや22のような小型偏平の石斧もみられる。14については遺構外出土でもあり時期の下ったものかもしれない。住居から11点、土壌から7点出土しているが量的には少なくまばらである。ただし石器の出土量がすぐれている47号住居からは磨製石斧も2点出土している。

⑤打製石斧（第178図～第182図）（表10）

破片を含め打製石斧と認められるものは267点出土した。このうち原形をよくとどめるもの9点を図示した。これらは形態から次のように分類できる。

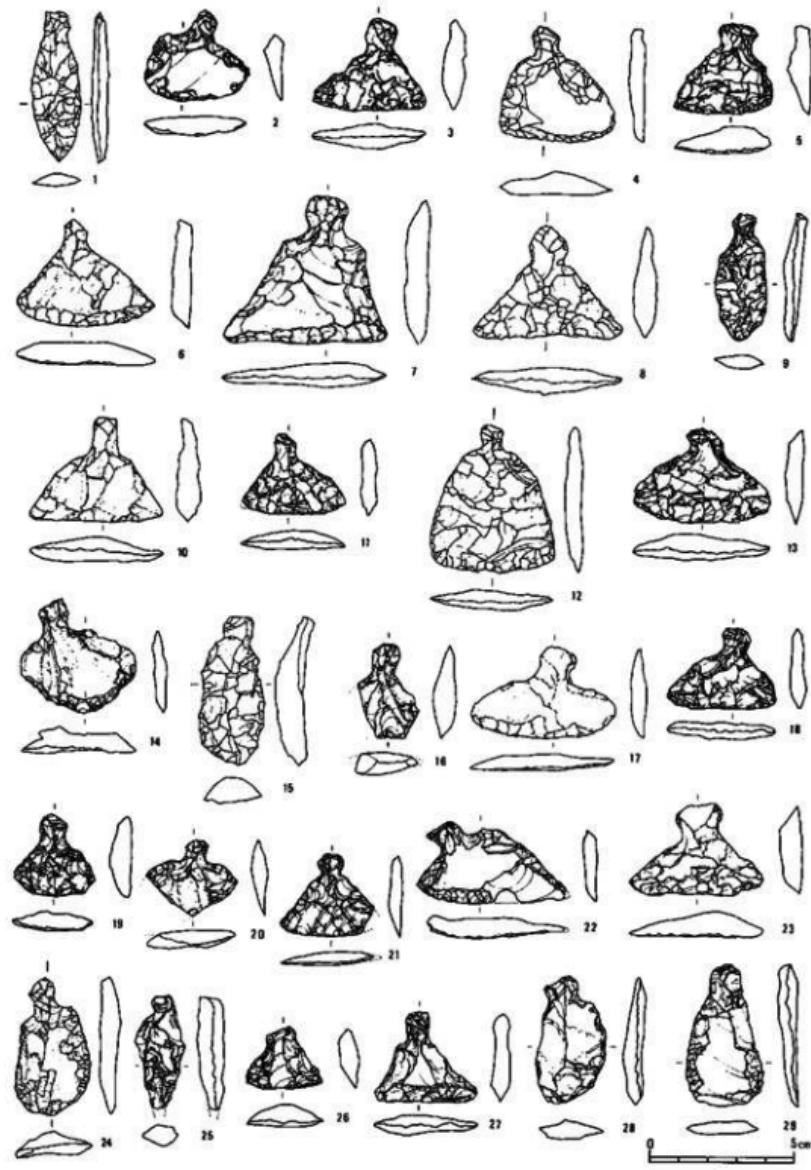
I類 短冊型 II類 扇型 III類 斜刃型 IV類 尖頭型  
加えて I類の短冊型については、次の細分が可能である。

- 1 標準型（長さと幅の比率が2.4以下：1）、2 細身型（同比率が2.5以上：1）、
  - 3 類扇型（扇型に類似）、4 反型（側面からみたとき身が反っている）
- これらの分類に基づく数量は以下の通りである。

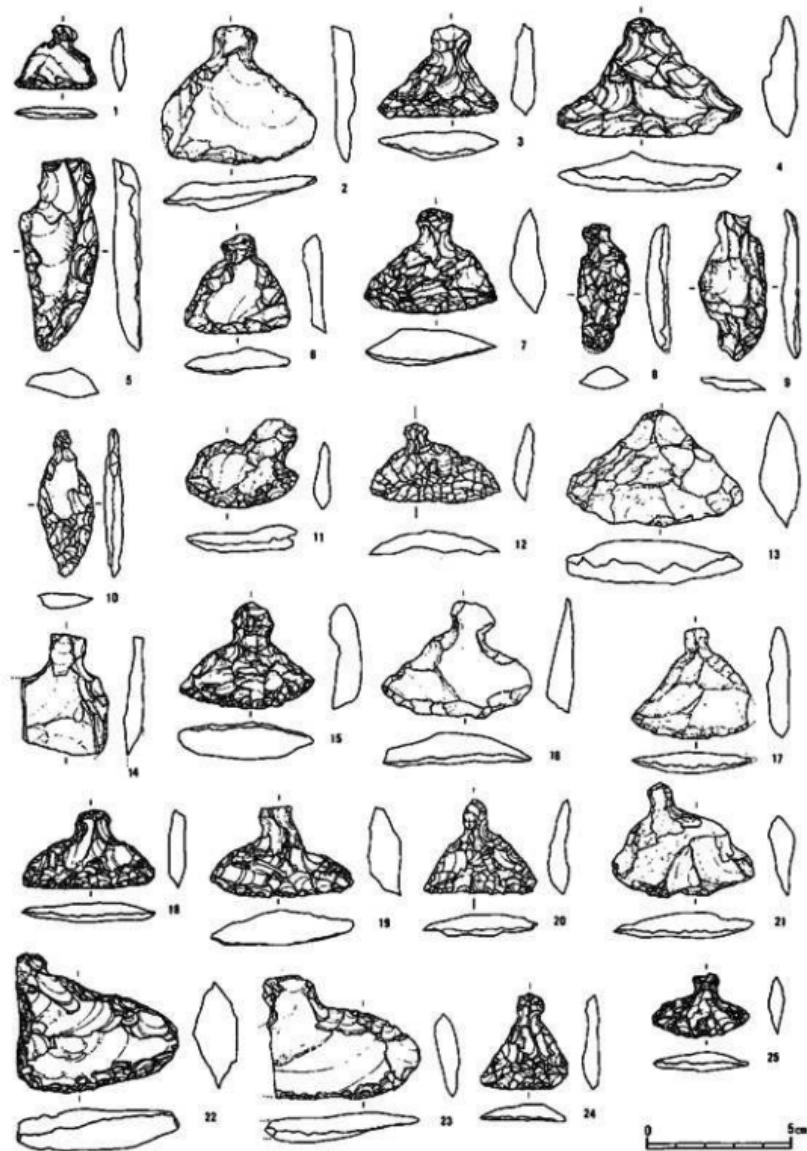
I類 71点（1-47点、2-12点、3-4点、4-8点）



第171図 石匙実測図① (1/2)



第172図 石匙実測図② (1/2)



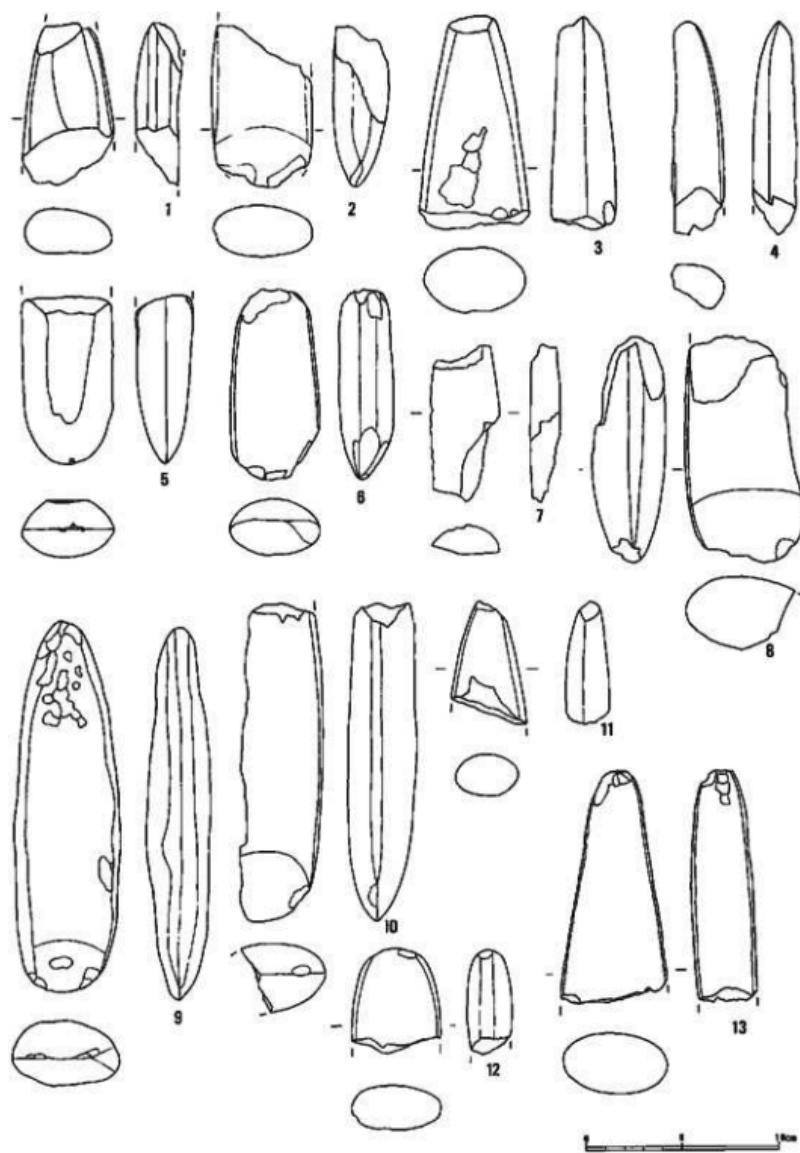
第173図 石匙実測図③ (1/2)



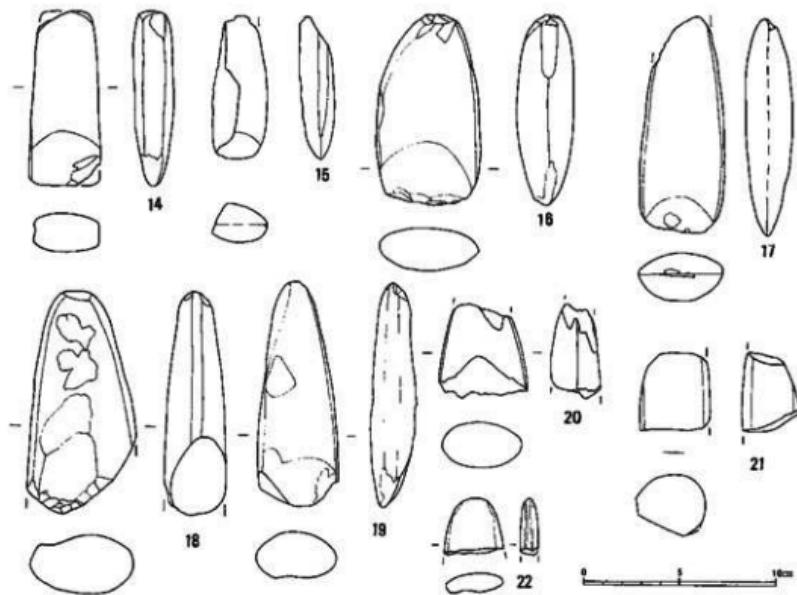
第174図 石匙・石錐実測図 (1/2)



第175図 石錐・他実測図 (1/2)



第176図 磨製石斧実測図① (1/3)



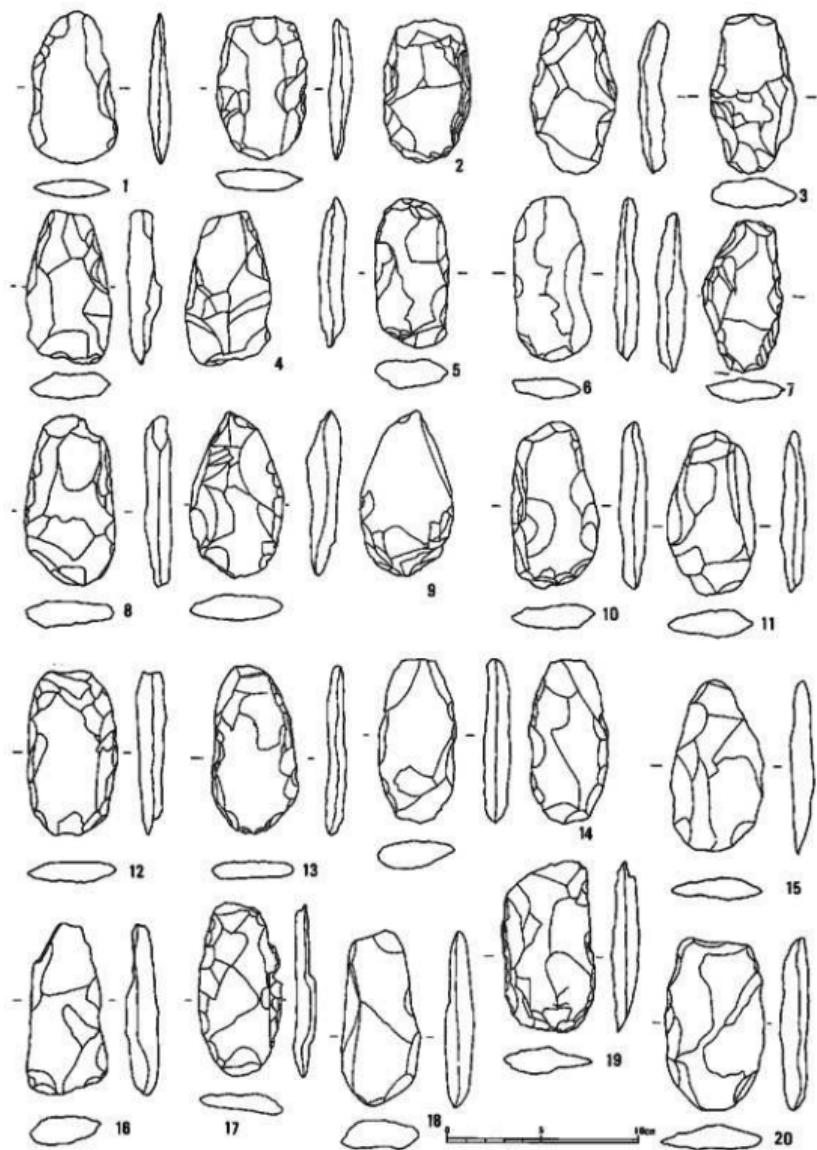
第177図 磨製石斧実測図② (1/3)

II類 8点 III類 7点 IV類 4点 破片177 未成品1

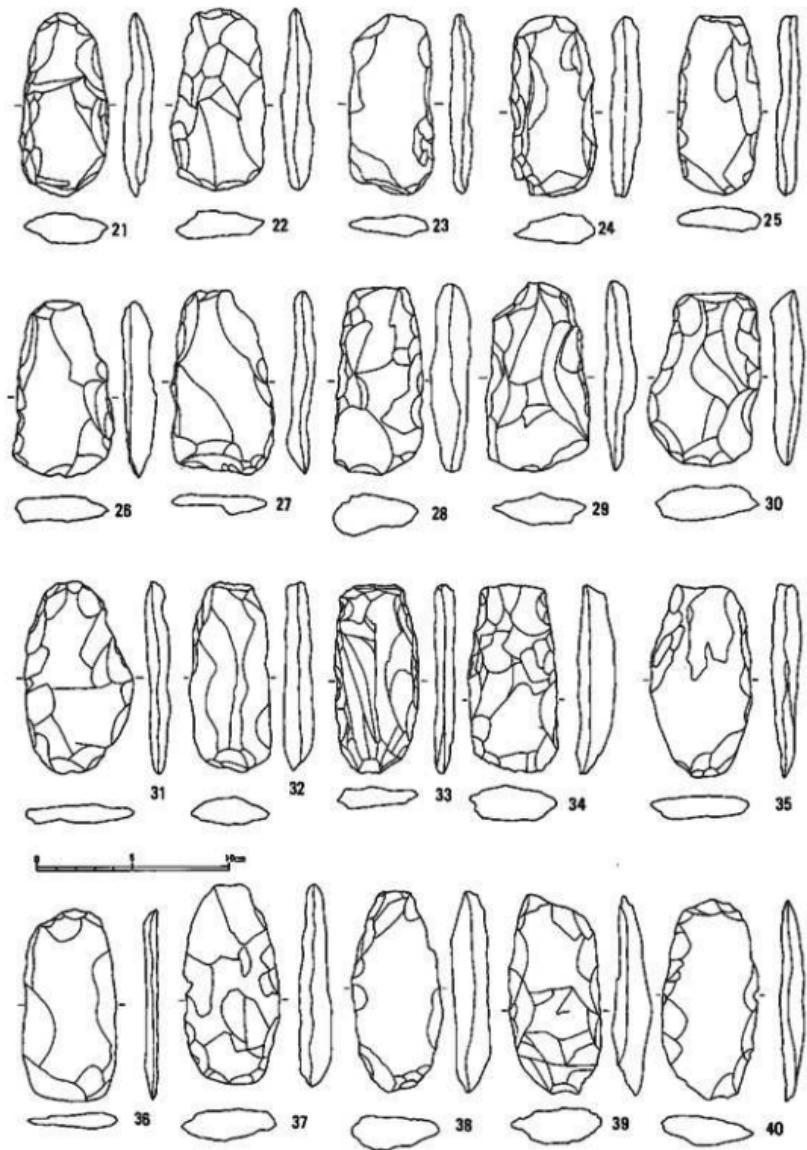
破片が非常に多いが、類型ではやはりI類とした短冊型が最も多い。この短冊型の中では1の標準型が最も多く、細身型、反型と続く。反型については第181図64・65・68でも顕著なように背面は石の自然面が残っている場合が多く、原石との関係もある。特に同図72は未製品であり、礫を割ったまま片面に自然面を残す。小林公明氏らが解説した(註2)制作過程のよくわかる事例である。ただしこのような反型は打製石斧の用途の一端を担う機能的な形態とも考えられる。特に同図71からもわかるように自然面を下にして用いることが効果的な石器とすることができよう。

他の類型では、II類の撥型は第181図80に代表されるように刃部が幅広いことを特徴とする。同図74・75も小型ながら刃部が発達している。またIII類の斜刃型(第182図81~87)も意図的に形作られた特徴的な石器であろう。凸面あるいは自然面を下にして使用したとすると、図面上向かって右側に斜刃部分がくる場合が多いが、第182図87および84は左側である(84は凸面を上にして図示してある)。やはり小林氏が想定された使用方法(註3)を参考にしたい。数は少ないがIV類とした尖頭型も一つの機能に基づいた類型として独立できる道具であろう。

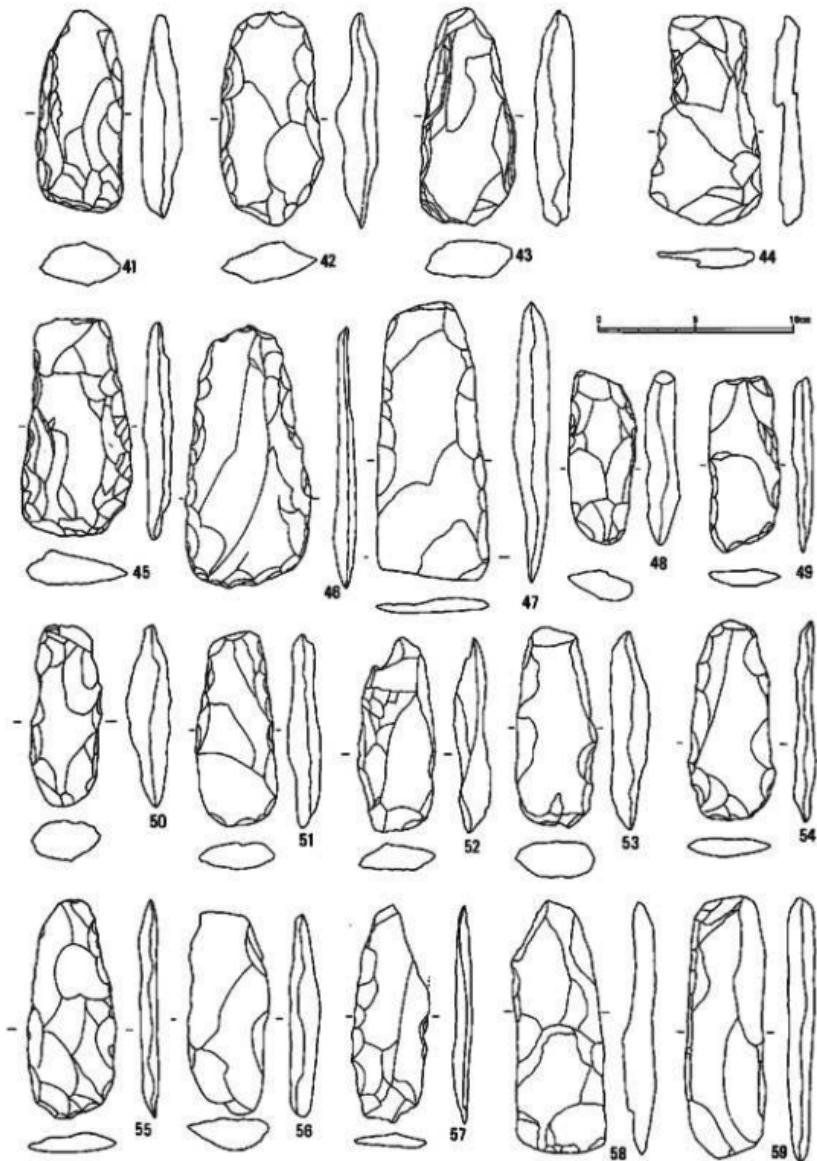
以上の類型に加え、大きさによる分類も可能である。打製石斧の大きさ(縦横比)をグラフに表すと、特に長さから次のグループにまとまる傾向が窺える。



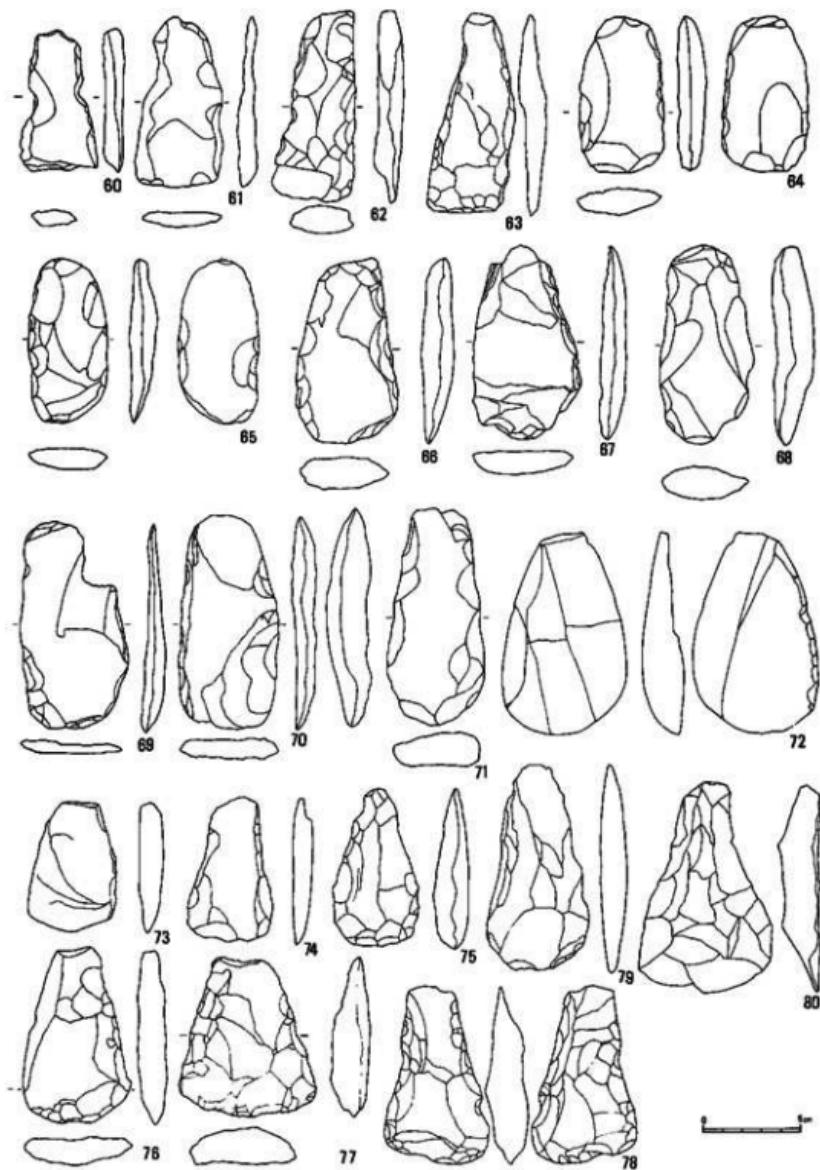
第178図 打製石斧実測図① (1/3)



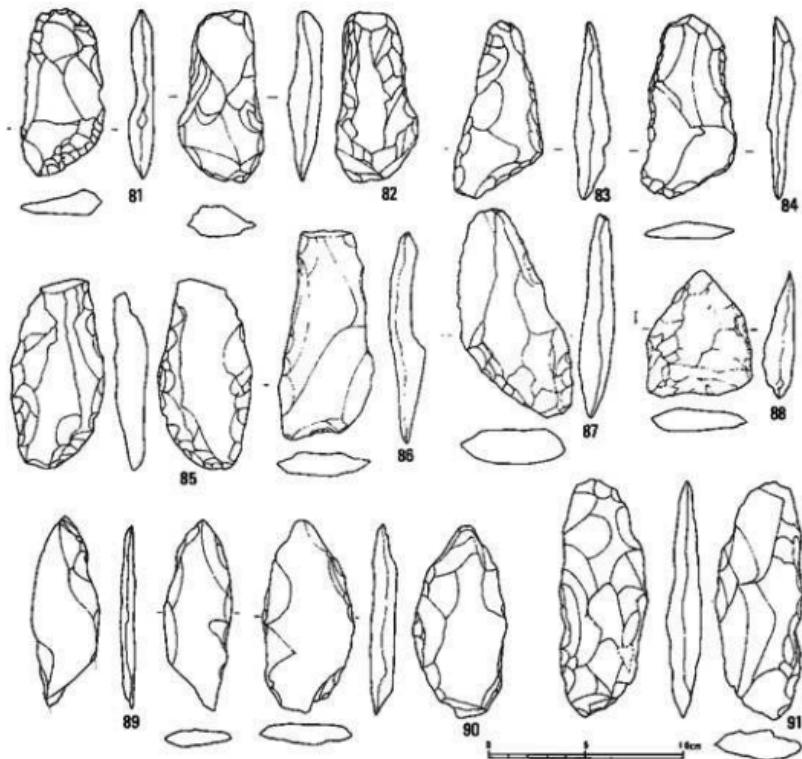
第179図 打製石斧実測図② (1/3)



第180圖 打製石器實測圖③ (1/3)



第181図 打製石斧実測図④ (1/3)



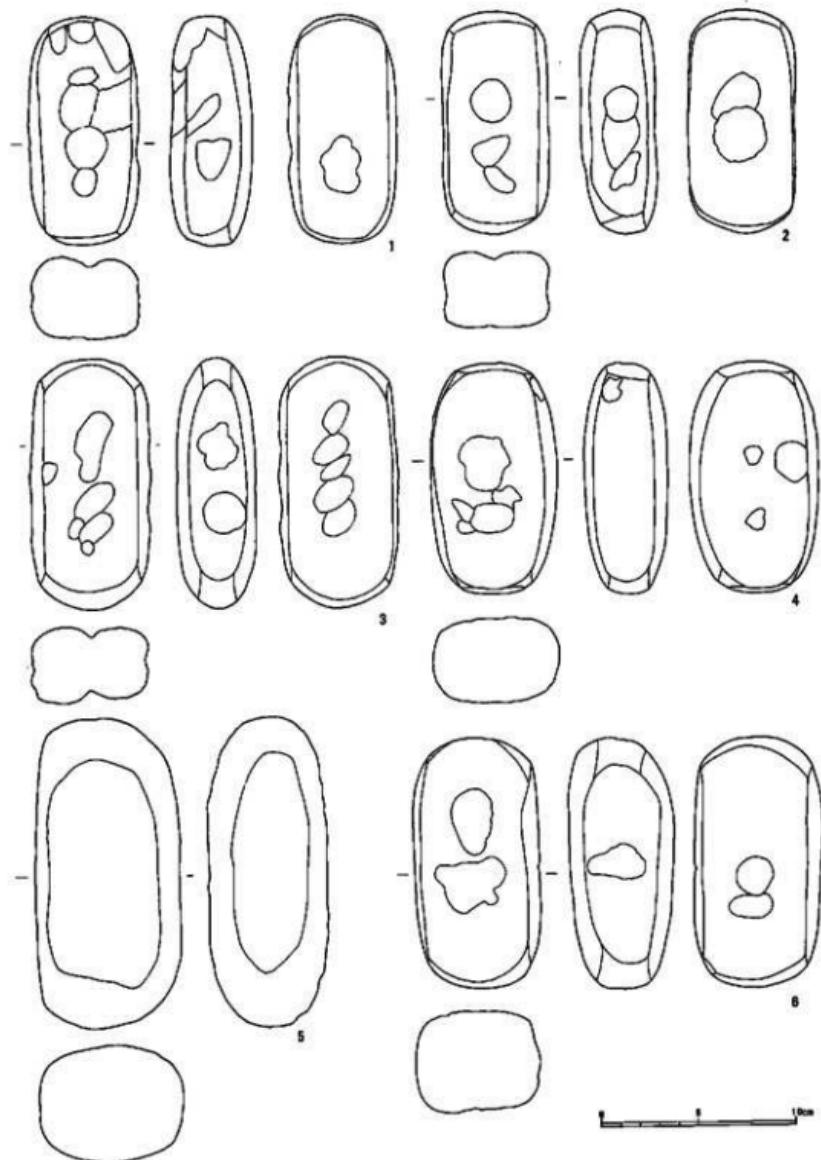
第182図 打製石斧実測図⑤ (1/3)

①8.2cm以下 ②8.3cm~9.2cm ③9.3cm~10.2cm ④10.3cm~11.4cm ⑤11.5cm以上

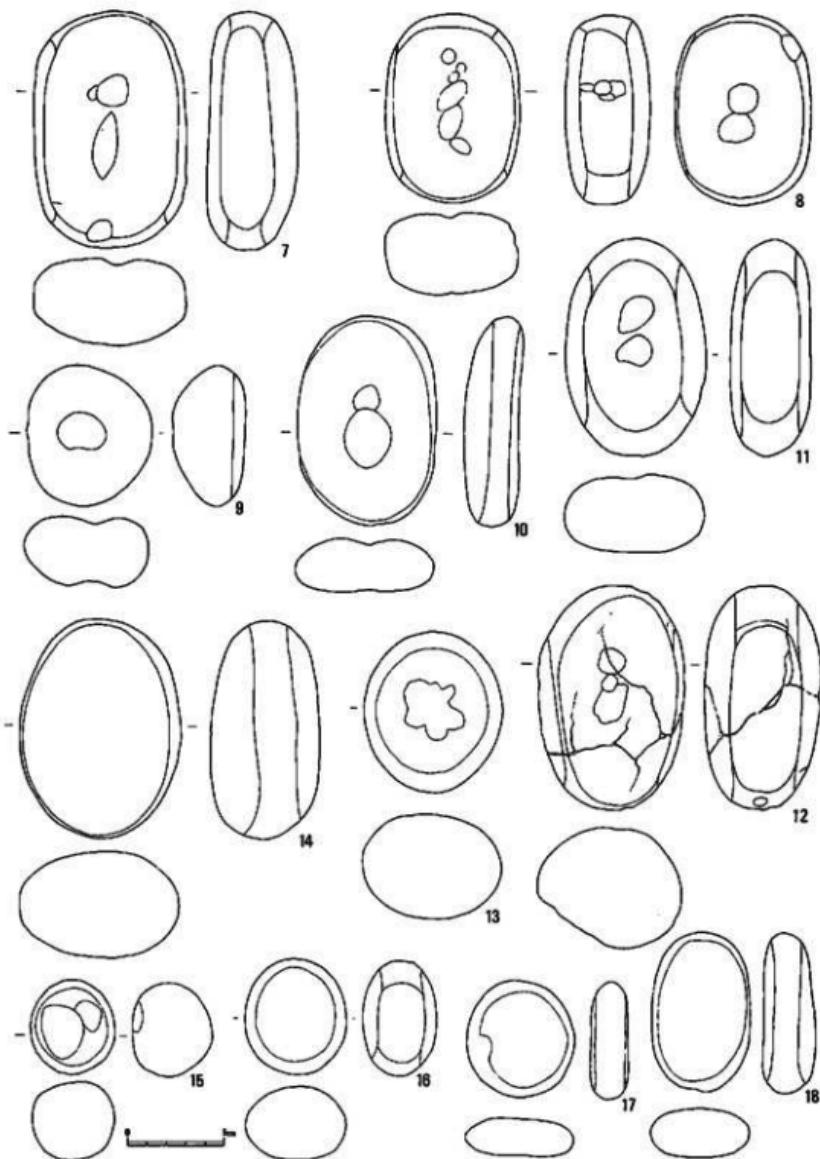
図示した91点については、全体では①14点、②24点、③24点、④23点、⑤5点となり、②~④すなわち長さ8.3cm~11.4cmに8割近くが含まれることになる。この数値はI類(短冊型)を中心に、III類(斜刃型)・IV類(尖頭型)にも共通する傾向があるが、II類の撥型では8.2cm以下が卓越するといった違いがある。最大は第180図47の14.4cm(I-1-⑤)、最小が第181図73の6.6cm(II-①)、第182図88の6.2cm(IV-①)である。

なお破片が多いことは、この種の道具の使用頻度の高さを表すものであろう。

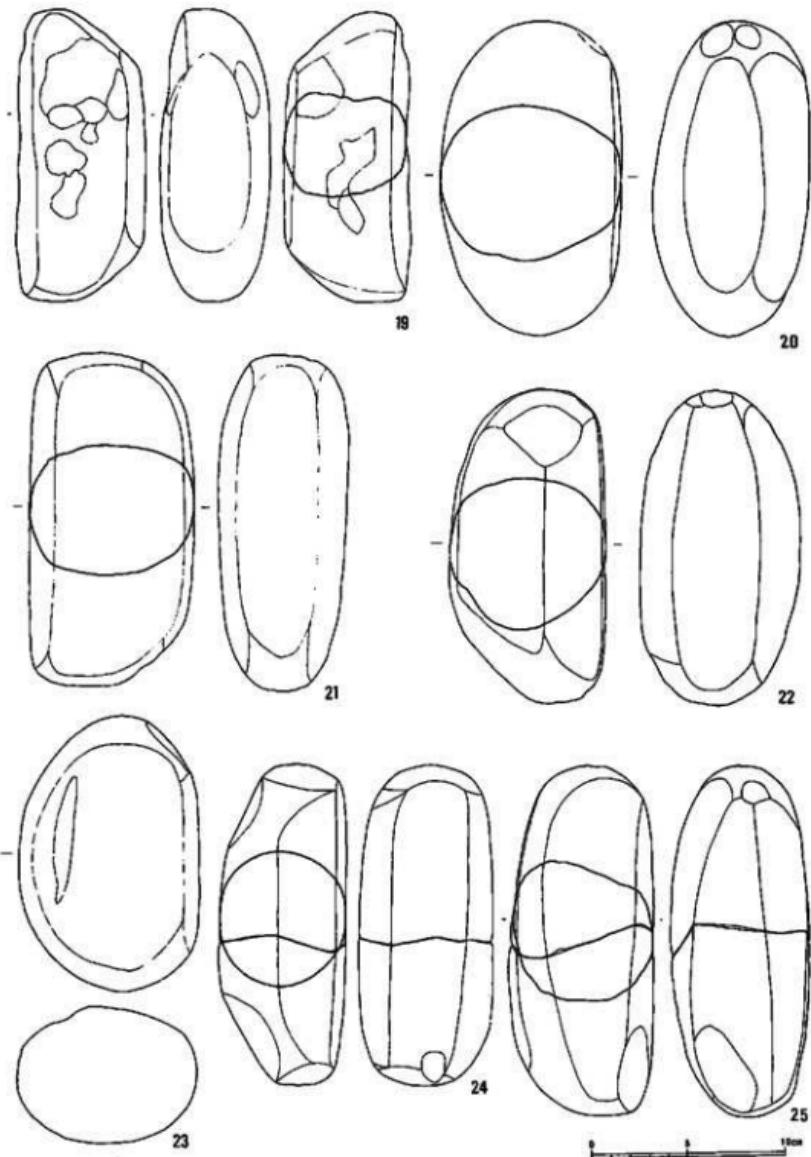
出土地点については、住居から139点、土壤から68点、集石から1点、遺構外他57点である。各住居から出土する石器であるが、特に4号全体では13点、21号で9点、25号で8点、29号で10点、47号で9点と多く出土する住居がある。



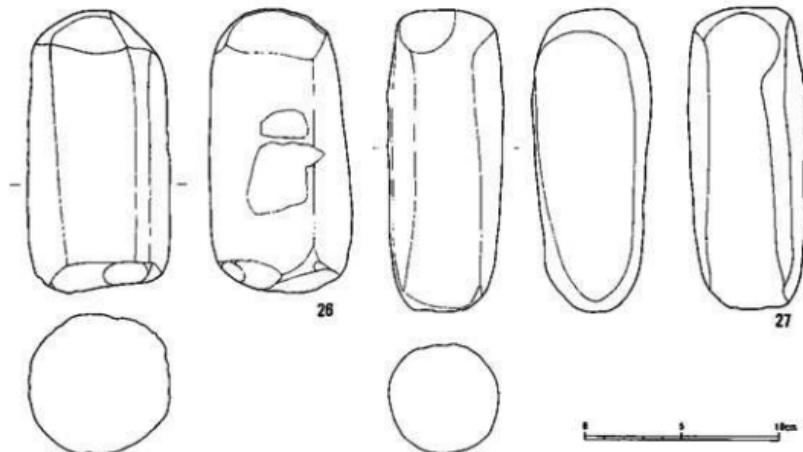
第183図 磨石実測図① (1/3)



第184図 磨石実測図② (1/3)



第185圖 唐石実測圖③ (1/3)



第186図 磨石実測図① (1/3)

#### ⑥磨石（第183図～第186図）（表11）

288点出土。形態から以下のように分類し、このうち代表的なもの27点を図示した。

I類 隅丸長方形ないし長円形 ①凹みがあるもの（第183図1～3）

②敲打痕があるもの（第183図4・6）

③磨減痕があるもの（第183図5）

II類 円形ないし梢円形

①凹みがあるもの（第184図7～10）

②敲打痕があるもの（第184図11・12）

③磨減痕があるもの（第184図13・14・18）

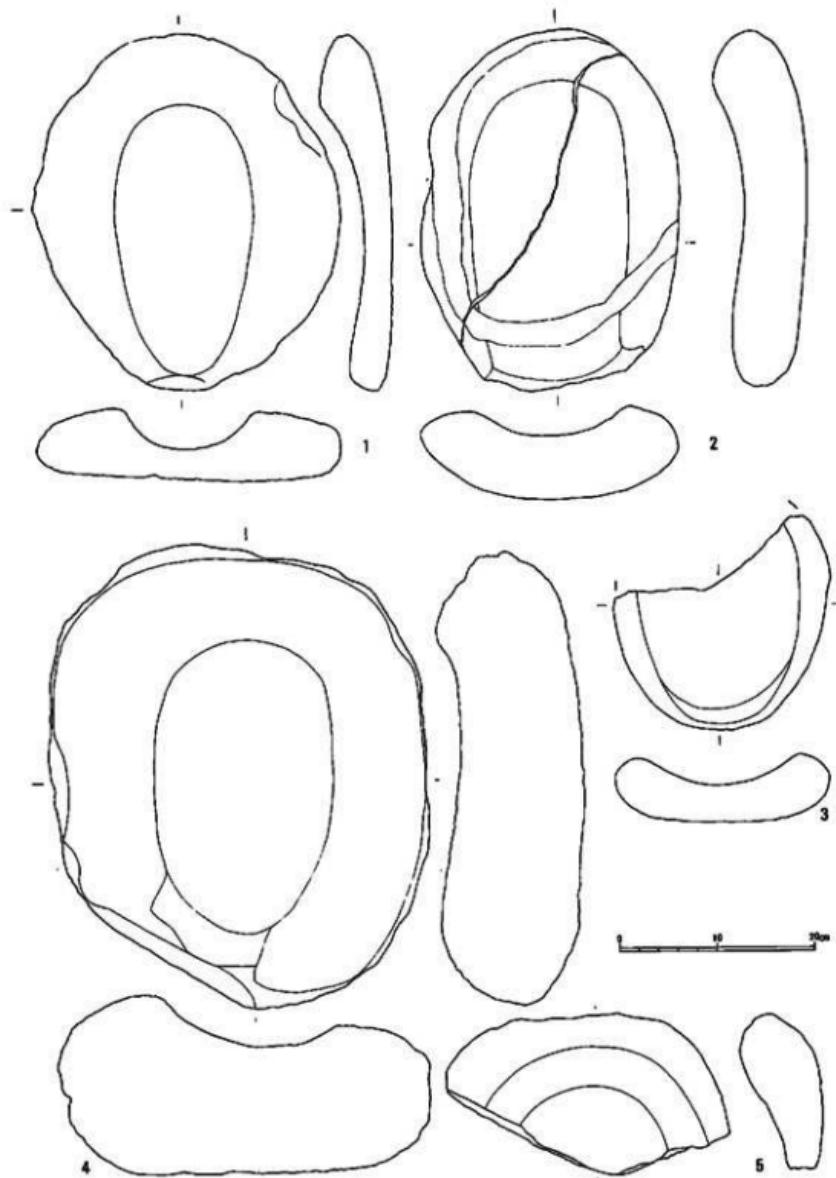
III類 小丸形（第184図15～17）

IV類 台形状（第185図19～25）

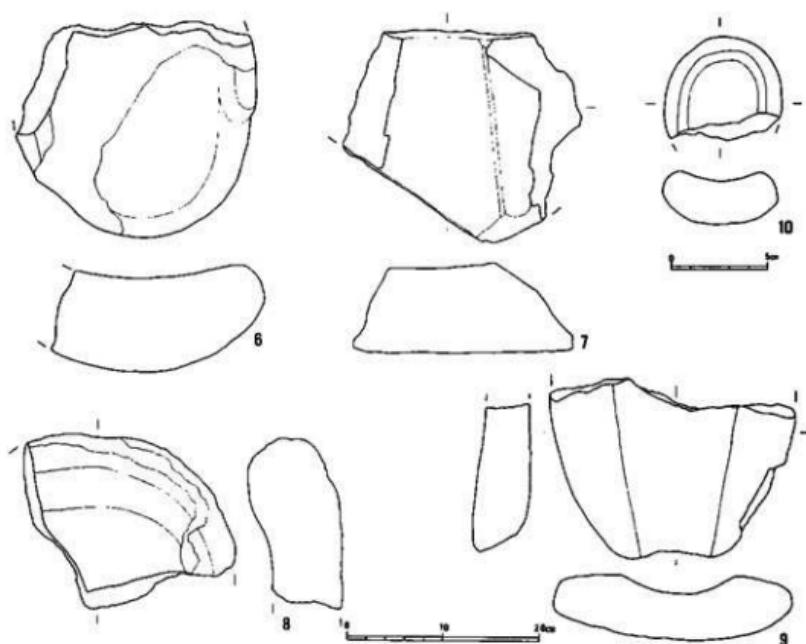
V類 棒状（第186図26・27）

I類32点、II類210点、III類17点、IV類24点、V類4点であり、II類が7割以上を占めている。使用痕からみるとII類では①121点、②69点、③20点というように凹み痕をもつものが6割近くみられる。この傾向はI類にも共通し7割5分が①に該当している。これに対してIII類～V類では磨減により形が成り立っているものと思われ、とくにIV類・V類は擦ることにより形態が形成された道具ということができる。

次ぎにII類の②③タイプに媒状の炭化物が付着するとともに、細かいヒビが入るものを見られることに注意したい。第184図11・12・14にも示したが、火を受けたことに起因するものと思われ、この種の石器の意味を考える点で重要であろう。



第187圖 石皿實測圖① (1/6)



第188図 石皿実測図② (1/6・1/3)

出土地点については住居から168点、土壤から84点、遺構外から36点と、6割近くが住居である。特に19号からは14点出土した他、5～7点出土する住居も多い（表14）。

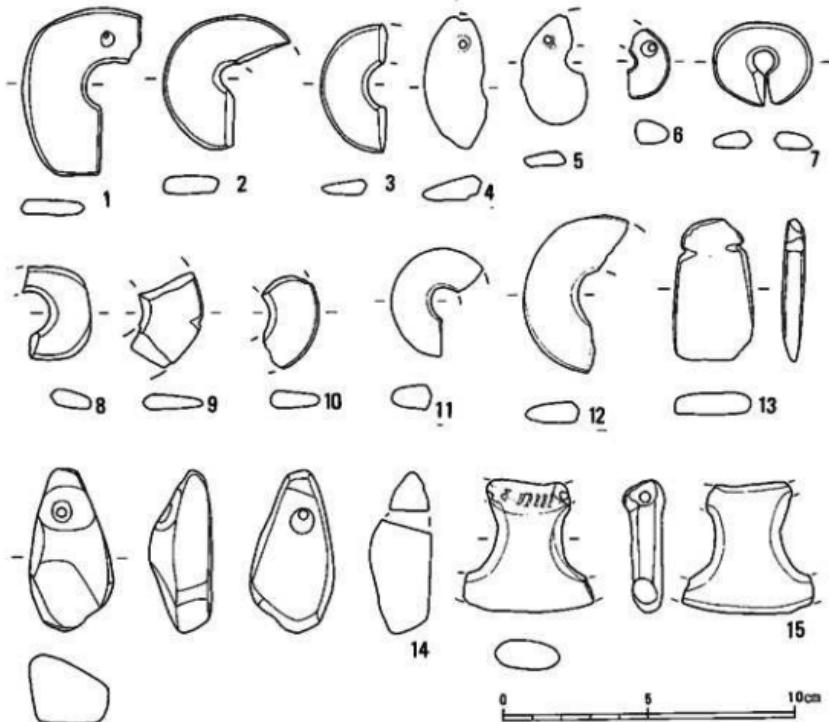
#### ⑦石皿（第187図・第188図）（表12）

住居から3点、土壤から8点、遺構外1点の合計12点が出土した。第187図1・2・4が完形の他は破片である。4が463号土壤から出土したものは長さ48cm、幅39cm、重さ42kgを測る大型の石皿。1が長さ36cm、2が長さ36.5cmであることを考えると相当の大型であることが分かる。一方第188図10は半欠品ではあるが長さ8cm前後、幅6cmと推測される超小型のものである。形態的には石皿の様相を呈するが、機能的に他のものと同一かは問題である。

#### 7 石製品（第189図1～9、13、14）（表13）

①块状耳飾 住居から5点、土壤から3点、遺構外から1点の合計9点出土。321号土壤から出土した7が完形である他は破片である。1・4～6の4点には孔が貫通する。

②硬玉製大珠（第189図14） 第421号土壤の底面からやや浮いた状態で出土。この土壤の壁寄りには諸器c式新段階の深鉢形土器が倒立していた。埋葬にかかる施設とするならば、死者の頭部に深鉢形土器が被せられ、胸のあたりに硬玉製大珠が置かれ（さげられ）ていたとも



第189図 装身具類実測図 (1/2)

推測される。5.5cm×3cm、厚さ2.2cmのもの。貫通孔の直径は片面側が8mm、反対側が4mmと  
だいぶ異なっているが、孔内には穿孔の際につけたと思われる筋がめぐらしていることも含め管  
切りの可能性がある。自然縫の面を残しながらも、磨き削られた製品であり、寺村光晴先生の  
ご教示では時期の分かるものとしては、最も古い部類に入る大珠とされる。（新津 健）

註

- ① 小野正文「縄文時代の土偶について」『御子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会 1991
- ② 小林公明「石製農工具」『曾利』富士見町教育委員会 1978
- ③ 註②に同じ

表5 土製品一覧表

図	番号	種類	遺存	出土地点
164	1	土偶	胴部	4B住居
	2	土偶	足	トレンチ
	3	土偶	顔面	33住搅乱層
	4	玉?	欠	3溝
	5	彩文土器片	破片	22号土壤
	6	彩文土器片	破片	5号集石
	7	彩文土器片	破片	312号土壤

表6 土製円盤一覧表

図	番号	重量(g)	出土地点	図	番号	重量(g)	出土地点
165	1	17.5	21号住居		13	29.0	50号住居
	2	7.3	22号住居		14	15.2	50号住居
	3	12.3	31号住居		15	21.3	50号住居
	4	14.2	37号住居		16	22.6	53号住居
	5	21.6	39号住居		17	11.3	66号土壤
	6	19.4	38号住居		18	12.7	307号土壤
	7	23.6	40号住居		19	13.8	356号土壤
	8	13.3	47号住居		20	20.2	187号土壤
	9	22.9	48号住居		21	11.9	U-14
	10	26.3	50号住居		22	14.8	U-7
	11	22.0	50号住居		23	—	47号住居
	12	36.4	53号住居				

表7 石器一覧表

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
166	1	I	完	0.6	黒煙石	7号集石
	2	I	完	0.6	黒煙石	32号住居
	3	I	完	0.5	黒煙石	18号住居
	4	I	完	0.5	黒煙石	5号住居
	5	I	欠	0.4	黒煙石	35号住居
	6	I	欠	0.3	黒煙石	21土壤
	7	I	完	0.7	チャート	D-3
	8	I	欠	0.6	チャート	表採
	9	I	欠	0.5	黒煙石	47号住居
	10	I	完	0.5	黒煙石	55号住居
	11	I	欠	0.7	黒煙石	401土壤
	12	I	完	0.3	黒煙石	3土壤
	13	I	欠	0.7	黒煙石	50号住居
	14	I	(?)	0.6	黒煙石	18号住居
	15	I	欠	1.3	チャート	16土壤
	16	I	完	1.0	黒煙石	24号住居
	17	I	完	1.4	黒煙石	50号住居
	18	I	欠	0.2	黒煙石	4号住居
	19	I	完	0.6	黒煙石	21号住居
	20	I	欠	0.6	黒煙石	257土壤
	21	II	欠	0.5	黒煙石	表採
	22	II	完	0.6	黒煙石	40号住居
	23	II	完	0.9	黒煙石	45号住居
	24	II	完	0.5	黒煙石	E-11
	25	II	完	0.8	黒煙石	434土壤

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
166	26	II	完	1.1	黒曜石	表採
	27	II	完	1.0	黒曜石	5号住居
	28	II	完	0.9	黒曜石	J-14
	29	II	完	2.3	黒曜石	31号住居
	30	I	完	0.9	黒曜石	X-16
	31	III	欠	0.2	黒曜石	D-3
	32	III	欠	0.2	黒曜石	G-7
	33	III	完	0.9	黒曜石	X-8
	34	III	完	0.5	黒曜石	表採
	35	III	欠	0.4	黒曜石	表採
	36	III	完	0.7	黒曜石	19号住居
	37	III	完	0.5	黒曜石	4号住居
	38	III	完	0.6	黒曜石	19号住居
	39	III	欠	0.9	黒曜石	37号住居
	40	III	完	0.8	黒曜石	50号住居
	41	III	完	1.4	黒曜石	表採
	42	III	完	1.0	黒曜石	G-10
	43	III	欠	0.9	黒曜石	W-17
	44	III	完	0.6	黒曜石	4A住居
	45	III	完	1.7	黒曜石	表採
	46	III	完	1.5	黒曜石	47号住居
	47	III	完	1.2	黒曜石	J-18
	48	III	完	1.0	チャート	42号住居
167	1	N	完	0.3	黒曜石	19号住居
	2	N	欠	0.5	黒曜石	47号住居
	3	N	完	0.4	黒曜石	D-14
	4	N	完	0.2	黒曜石	40号住居
	5	N	完	0.4	黒曜石	W-11
	6	N	完	0.3	黒曜石	36号住居
	7	N	完	0.3	黒曜石	34号住居
	8	N	完	0.1	黒曜石	4A住居
	9	N	欠	0.4	黒曜石	47号住居
	10	N	完	0.5	黒曜石	51号住居
	11	N	完	0.4	黒曜石	G-5
	12	N	欠	0.3	黒曜石	X-5
	13	N	完	0.6	黒曜石	18号住居
	14	N	完	0.3	黒曜石	49号住居
	15	N	欠	0.4	黒曜石	W-6
	16	N	完	0.6	チャート	W-8
	17	N	欠	0.8	黒曜石	表採
	18	N	完	0.5	黒曜石	31号住居
	19	N	完	0.3	黒曜石	3-G
	20	N	完	0.5	黒曜石	X-16
	21	N	完	0.7	黒曜石	211土壤
	22	N	完	0.6	黒曜石	50号住居
	23	N	欠	0.4	黒曜石	22号土壤
	24	N	完	0.4	黒曜石	50号住居
	25	N	欠	0.6	黒曜石	14号住居
	26	N	完	0.5	黒曜石	W-17
	27	N	完	0.5	黒曜石	47号住居
	28	N	完	0.6	黒曜石	263土壤
	29	N	完	0.9	黒曜石	36B住居
	30	N	欠	0.7	黒曜石	10号住居
	31	N	欠	0.6	黒曜石	32号住居
	32	N	完	0.9	黒曜石	50号住居
	33	N	欠	0.6	黒曜石	表採
	34	N	欠	0.7	黒曜石	295土壤
	35	N	欠	0.6	黒曜石	55号住居
	36	N	完	0.7	黒曜石	211土壤
	37	N	完	0.6	黒曜石	9号集石
	38	N	完	3.0	黒曜石	4A住居
	39	N	完	1.1	黒曜石	38号住居
	40	N	欠	0.5	黒曜石	341号土壤
	41	N	欠	0.7	黒曜石	表採

圖	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
167	42	N	完	0.6	黒煙石	44号住居
	43	N	完	0.7	黒煙石	c
	44	N	完	0.8	黒煙石	341号土壙
	45	N	完	1.3	黒煙石	15号土壙
	46	N	欠	0.9	黒煙石	A - 8
	47	N	欠	0.9	黒煙石	I - 16
	48	N	完	0.5	黒煙石	69号土壙
	49	N	欠	0.6	黒煙石	5号住居
	50	N	完	0.9	黒煙石	J - 18
	51	N	完	0.7	黒煙石	47号住居
	52	N	完	0.9	黒煙石	41号住居
	53	N	完	0.8	黒煙石	S - 17
	54	N	完	0.6	黒煙石	32号住居
	55	N	完	1.1	黒煙石	38号住居
168	1	V	完	0.5	黒煙石	S - 17
	2	V	完	0.6	黒煙石	19号住居
	3	V	完	0.4	黒煙石	328号土壙
	4	V	完	0.7	黒煙石	J - 18
	5	V	完	0.7	黒煙石	U - 12
	6	V	完	0.7	黒煙石	表採
	7	V	欠	0.8	黒煙石	44号住居
	8	V	完	0.5	黒煙石	E - 11
	9	V	欠	0.6	黒煙石	32号住居
	10	V	完	1.2	黒煙石	1号住居
	11	V	完	1.1	黒煙石	37号住居
	12	V	完	1.2	黒煙石	C - 13
	13	V	欠	1.1	黒煙石	4 A 住居
	14	V	完(?)	0.3	黒煙石	47号住居
	15	V	完	1.2	黒煙石	19号土壙
	16	V	完	1.2	黒煙石	16号住居
	17	V	欠	1.0	黒煙石	3号住居
	18	V	欠	1.1	黒煙石	G - 8
	19	V	欠	2.0	チャート	S - 18
	20	V	欠	0.5	黒煙石	9号土壙
	21	V	欠	0.3	圭賀岩	43号住居
	22	V	完	1.8	黒煙石	表採
	23	V	完	1.0	黒煙石	47号住居
	24	V	完	1.7	黒煙石	20号住居
	25	V	完	1.2	チャート	35号住居
	26	V	欠	1.9	黒煙石	48号住居
	27	V	欠	2.2	黒煙石	4 A 住居
	28	VI	完	0.6	黒煙石	1号住居
	29	VI	欠	1.2	黒煙石	34号住居
	30	VI	欠	0.8	黒煙石	Y - 6
	31	VI	欠	0.9	黒煙石	X - 16
	32	VI	完	1.0	黒煙石	47号住居
	33	VI	欠	0.6	黒煙石	4 A 住居
	34	VI	完	0.5	黒煙石	表採
	35	VI	欠	0.8	黒煙石	表採
	36	VI	完	1.4	黒煙石	D - 4
	37	VI	完	1.4	黒煙石	45号土壙
	38	VI	欠	0.5	黒煙石	259号土壙
	39	VI	完	0.7	黒煙石	47号住居
	40	VI	完	1.2	黒煙石	446号土壙
	41	VI	完	1.3	黒煙石	9号住居
	42	VI	完	1.2	黒煙石	11号住居
	43	VI	欠	1.2	黒煙石	47号住居
	44	VI	完	2.0	黒煙石	212号土壙
	45	VI	欠	2.6	黒煙石	表採
169	1	N	完	0.2	黒煙石	34号住居
	2	N	欠	0.3	黒煙石	40号住居
	3	N	欠	0.2	黒煙石	表採
	4	N	完	0.2	黒煙石	D - 3
	5	N	完	0.4	黒煙石	B - 16

圖	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
169	6	N	完	0.3	黑煙石	U-13
	7	V	完	0.2	黑煙石	表採
	8	V	欠	0.4	黑煙石	S-17
	9	V	欠	0.3	黑煙石	U-14
	10	V	欠	0.4	黑煙石	V-9
	11	N	完	0.3	黑煙石	47号住居
	12	N	欠	0.7	黑煙石	C-12
	13	N	完	0.3	黑煙石	V-11
	14	N	完	0.5	黑煙石	I-16
	15	N	完	0.2	黑煙石	U-9
	16	N	完	0.4	黑煙石	E-2
	17	N	欠	0.6	黑煙石	32号住居
	18	N	欠	0.4	黑煙石	4A住居
	19	N	完	0.6	黑煙石	14号住居
	20	N	完	0.8	黑煙石	X-9
	21	N	完	0.7	黑煙石	S-16
	22	N	完	0.8	頁石	32号住居
	23	N	完	0.5	黑煙石	49号住居
	24	V	完	0.8	黑煙石	47号住居
	25	V	完	0.4	黑煙石	47号住居
	26	V	完	0.9	黑煙石	X-9
	27	V	完	0.5	黑煙石	W-17
	28	N	欠	0.6	黑煙石	3号住居
	29	N	完	1.4	黑煙石	23号住居
	30	N	欠	0.6	黑煙石	41号住居
	31	N	完	0.8	黑煙石	272土壤
	32	N	完	0.7	黑煙石	4号住居
	33	N	欠	0.7	黑煙石	X-4
	34	N	完	0.7	黑煙石	47号住居
	35	N	完	0.8	黑煙石	47号住居
	36	N	完	1.0	黑煙石	19号住居
	37	N	欠	0.8	黑煙石	50号住居
	38	N	欠	1.0	黑煙石	19号住居
	39	N	完	1.9	黑煙石	50号土壤
	40	N	欠	1.0	黑煙石	8号住居
	41	N	完	1.0	黑煙石	9号住居
	42	N	欠	1.9	黑煙石	43号住居
	43	破片	欠	0.8	黑煙石	4号住居
	44	破片	欠	1.2	黑煙石	Y-7
	45	破片	欠	1.0	黑煙石	4号住居
	46	破片	欠	0.8	黑煙石	18号住居
	47	破片	欠	1.4	黑煙石	54号住居
	48	破片	欠	0.8	黑煙石	40号住居
	49	破片	欠	0.7	黑煙石	X-9
	50	破片	欠	0.9	黑煙石	42号住居
	51	破片	欠	0.6	黑煙石	47号住居
	52	破片	欠	1.0	黑煙石	表採
	53	破片	完	1.1	黑煙石	Y-6
170	1	V	完	1.4	黑煙石	52号住居
	2	V	完	1.3	黑煙石	21号住居
	3	V	完	0.8	黑煙石	19号住居
	4	V	欠	0.7	黑煙石	40号住居
	5	V	完	1.3	黑煙石	10号住居
	6	V	欠	1.0	黑煙石	46号住居
	7	V	欠	1.0	黑煙石	324土壤
	8	V	欠	1.0	黑煙石	257土壤
	9	V	完	1.0	黑煙石	47号住居
	10	V	完	1.1	黑煙石	256土壤
	11	VII	完	1.0	黑煙石	U-9
	12	VII	完	1.5	黑煙石	6号住居
	13	VII	欠	2.1	黑煙石	26号住居
	14	VII	完	1.1	黑煙石	M-16
	15	破片	欠	0.4	黑煙石	47号住居
	16	破片	完	0.6	黑煙石	表採

表8 石匙・石鋸他一覧表

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
171	1	石匙	完	6.3	チャート	4号住居
	2	石匙	欠	1.1	黒曜石	4号住居
	3	石匙	欠	5.1	黒曜石	4号住居
	4	石匙	完	6.3	チャート	4号住居
	5	石匙	完	12.6	粘板岩	5号住居
	6	石匙	完	22.6	粘板岩	6号住居
	7	石匙	完	7.2	チャート	18号住居
	8	石匙	欠	7.9	圭質頁岩	19号住居
	9	石匙	欠	2.6	頁岩	19号住居
	10	石匙	完	22.7	粘板岩	26号住居
	11	石匙	完	6.4	チャート	19号住居
	12	石匙	完	6.3	黒曜石	19号住居
	13	石匙	完	3.5	チャート	19号住居
	14	石匙	完	10.8	粘板岩	26号住居
	15	石匙	完	4.7	黒曜石	23号住居
	16	石匙	完	4.5	黒曜石	27号住居
	17	石匙	完	2.7	黒曜石	31号住居
	18	石匙	完	52.1	粘板岩	31号住居
	19	石匙	完	17.9	頁岩	31号住居
	20	石匙	欠	5.7	粘板岩	31号住居
	21	石匙	欠	2.8	黒曜石	34号住居
	22	石匙	完	22.4	粘板岩	35号住居
	23	石匙	完	11.8	チャート	35号住居
	24	石匙	完	8.6	頁岩	35号住居
172	1	石匙	完	4.3	チャート	39号住居
	2	石匙	完	5.3	黒曜石	36号住居
	3	石匙	完	6.1	黒曜石	36号住居
	4	石匙	完	9.4	チャート	40号住居
	5	石匙	完	6.5	黒曜石	42号住居
	6	石匙	完	11.1	黒色纖密安山岩	43号住居
	7	石匙	完	21.1	粘板岩	44号住居
	8	石匙	完	9.9	チャート	47号住居
	9	石匙	完	5.0	黒曜石	47号住居
	10	石匙	完	10.7	粘板岩	47号住居
	11	石匙	完	4.3	黒曜石	47号住居
	12	石匙	完	11.1	黒曜石	47号住居
	13	石匙	完	8.8	黒曜石	49号住居
	14	石匙	完	7.6	圭質頁岩	50号住居
	15	石匙	完	10.0	黒曜石	50号住居
	16	石匙	欠	4.5	黒曜石	52号住居
	17	石匙	完	7.2	粘板岩	55号住居
	18	石匙	完	4.9	黒曜石	51号住居
	19	石匙	完	3.9	黒曜石	51号住居
	20	石匙	欠	3.7	メノウ	9号集石
	21	石匙	欠	3.4	メノウ	8号土壤
	22	石匙	欠	6.7	粘板岩	6号土壤
	23	石匙	完	9.9	圭質頁岩	13号土壤
	24	石匙	完	8.3	黒曜石	26号土壤
	25	石匙	欠	5.2	黒曜石	54号住居
	26	石匙	完	3.2	黒曜石	40号土壤
	27	石匙	完	5.8	粘板岩	48号土壤
	28	石匙	完	7.4	黒色纖密安山岩	98号土壤
	29	石匙	完	7.3	頁岩	167号土壤
173	1	石匙	完	2.5	チャート	211号土壤
	2	石匙	欠	19.2	粘板岩	211号土壤
	3	石匙	完	9.2	圭質頁岩	315号土壤
	4	石匙	完	26.0	粘板岩	442号土壤
	5	石匙	完	19.5	粘板岩	248号土壤
	6	石匙	完	8.1	圭質頁岩	325号土壤
	7	石匙	完	14.9	チャート	327号土壤
	8	石匙	欠	5.6	黒曜石	327号土壤

國	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
173	9	石匙	先	6.0	圭質頁岩	319号土壤
	10	石匙	先	4.3	黑煙石	312号土壤
	11	石匙	先	8.2	チャート	356号土壤
	12	石匙	先	6.8	チャート	357号土壤
	13	石匙	先	30.0	圭質頁岩	391号土壤
	14	石匙	欠	9.2	粘板岩	392号土壤
	15	石匙	先	12.5	黑煙石	319号土壤
	16	石匙	先	17.5	粘板岩	X-8
	17	石匙	欠	10.0	ホルンフェルス	W-6
	18	石匙	先	5.7	黑煙石	Y-11
	19	石匙	先	11.8	黑煙石	V-8
	20	石匙	先	5.9	黑煙石	V-14
	21	石匙	先	12.1	粘板岩	W-8
	22	石匙	先	37.4	チャート	X Y-16
	23	石匙	欠	19.1	頁岩	T-14
	24	石匙	先	5.1	圭質頁岩	X-10
	25	石匙	先	3.0	黑煙石	D-4
174	1	石匙	先	3.6	黑煙石	W-17
	2	石匙	欠	2.0	チャート	Y-7
	3	石匙	先	10.2	黑煙石	U-13
	4	石匙	欠	11.4	圭質頁岩	J-14
	5	石匙	欠	13.7	頁岩	H-6
	6	石匙	先	13.8	圭質頁岩	V-17
	7	石錐	先	1.0	黑煙石	1号住居
	8	石錐	欠	2.8	黑煙石	3号住居
	9	石錐	欠	4.8	黑煙石	3号住居
	10	石錐	先	3.4	黑煙石	4A住居
	11	石錐	欠	1.2	黑煙石	4A住居
	12	石錐	欠	3.1	黑煙石	4住居
	13	石錐	欠	6.4	黑煙石	4住居
	14	石錐	先	3.6	黑煙石	4住居
	15	石錐	欠	0.9	黑煙石	18号住居
	16	石錐	先	1.6	黑煙石	19号住居
	17	石錐	先	3.1	黑煙石	20号住居
	18	石錐	欠	2.4	チャート	20号住居
	19	石錐	先	0.9	黑煙石	20号住居
	20	石錐	欠	4.1	黑煙石	48号住居
	21	石錐	先	1.2	黑煙石	32号住居
	22	石錐	欠	2.6	黑煙石	31号住居
	23	石錐	先	1.9	黑煙石	34号住居
	24	石錐	先	1.2	チャート	36号住居
	25	石錐	欠	4.1	頁岩	40号住居
	26	石錐	先	3.2	チャート	40号住居
	27	石錐	欠	2.7	黑煙石	40号住居
	28	石錐	欠	1.6	チャート	42号住居
	29	石錐	欠	1.6	黑煙石	44号住居
	30	石錐	先	1.5	黑煙石	48号住居
	31	石匙	先	7.6	圭質頁岩	25号住居
	32	石錐	欠	1.6	黑煙石	48号住居
	33	石錐	先	1.2	黑煙石	47号住居
	34	石錐	先	3.2	黑煙石	47号住居
	35	石錐	欠	4.3	黑煙石	47号住居
	36	石錐	先	1.8	黑煙石	47号住居
	37	石錐	先	2.4	黑煙石	47号住居
	38	石錐	欠	0.4	黑煙石	47号住居
	39	石錐	欠	1.6	黑煙石	47号住居
	40	石錐	欠	0.3	黑煙石	41号住居
175	1	石錐	欠	1.2	チャート	50号住居
	2	石錐	先	1.5	黑煙石	54号住居
	3	石錐	先	1.4	黑煙石	54号住居
	4	石錐	先	4.7	チャート	329号土壤
	5	石錐	欠	4.3	黑煙石	26号土壤
	6	石錐	欠	7.3	圭質頁岩	26号土壤

國	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
175	7	石錐	完	1.9	黒煙石	40号土壤
	8	石錐	欠	2.3	黒煙石	290号土壤
	9	石錐	完	1.4	黒煙石	表採
	10	石錐	完	2.0	黒煙石	54号住居
	11	石錐	欠	1.4	黒煙石	426号土壤
	12	石錐	完	3.0	黒煙石	溝
	13	石錐	完	2.0	黒煙石	X-5
	14	石錐	欠	3.3	黒煙石	I-18
	15	石錐	完	3.9	チャート	J-14
	16	石錐	完	1.9	チャート	R-14
	17	石錐	完	4.5	チャート	X-9
	18	石錐	完	5.1	黒煙石	H-4
	19	石錐	完	3.1	黒煙石	Y-16
	20	石錐	完	0.6	黒煙石	X-10
	21	石錐	完	1.1	黒煙石	E-4
	22	石錐	完	0.9	黒煙石	M-15
	23	石錐	欠	4.9	黒煙石	表採
	24	石錐	欠	3.6	黒煙石	表採
	25	石錐	完	3.4	圭質頁岩	表採
	26	石錐	完	3.0	黒煙石	不明
	27	石錐	完	7.4	チャート	表採
	28	石錐	欠	6.6	黒煙石	表採
	29	石匙?	完	2.1	黒煙石	5号住居
	30	石錐	完	0.6	黒煙石	320号土壤
	31	石錐	欠	0.5	粘板岩	表採
	32	石錐	完	1.1	黒煙石	T-9
	33	石匙?	欠	6.1	黒煙石	4A号住居
	34	石錐	完	2.0	黒煙石	不明
	35	?	完	7.7	黒煙石	21号土壤
	36	石匙	欠	0.6	黒煙石	40号住居
	37	石匙	欠	1.0	黒煙石	44号住居
	38	石匙	完	3.7	圭質頁岩	42号住居
	39	?	完	6.0	黒煙石	42号住居
	40	?	完	4.3	黒煙石	47号住居
	41	?	完	1.7	黒煙石	299号土壤

表9 磨製石斧一覧表

國	番号	遺存	重量(g)	石質	出土地点
176	1	刃・基部欠	130	緑色岩	176号土壤
	2	刃・基部欠	140	緑色岩	19号住居
	3	刃・基部欠	310	緑色岩	37号住居
	4	欠	100	緑色片岩	3号住居
	5	基部欠	200	緑色岩	3号住居
	6	刃・基部欠	220	緑色岩	121号土壤
	7	欠	62	緑色岩	表採
	8	刃・基部欠	380	緑色板灰岩	26号土壤
	9	完	540	緑色岩	26号住居
	10	欠	380	緑色岩	21号住居
	11	刃・基部欠	87	緑色岩	358号土壤
	12	半欠	114	蛇紋岩類	T-14
	13	半欠	337	緑色岩	40号住居
	14	欠	142	蛇紋岩類	W-10
	15	欠	51	緑色岩	41号土壤
	16	欠	284	緑色岩	53号住居
	17	刃部欠	189	緑色岩	348号土壤
177	18	基部欠	334	緑色岩	47号住居
	19	基部欠	188	緑色岩	5号住居
	20	欠	92	緑色岩	48号住居
	21	欠	62	デイサイト	4号土壤
	22	欠	14	蛇紋岩類	表採

表10 打製石斧一覧表

固	番号	出土地点	長さ	巾	基部巾	刃部巾	厚さ	重量	刃型	刃磨滅	石質	型式
178	1	61号土塗	8.0	4.5	( 1.8 )	( 3.8 )	1.1	53	丸 均	一	ホルソフェルス	I 1-①
	2	34号住居	7.5	4.6	3.4	( 2.8 )	1.2	48	丸 均	一	粘板岩	I 1-①
	3	2号住居	7.9	4.2	2.0	1.8	1.3	64	直 細 均	一	粘板岩	I 1-①
	4	220号土塗	7.8	4.4	2.2	3.5	1.7	73	直 左	一	ホルソフェルス	I 1-①
	5	G-16	7.8	3.9	( 2.9 )	( 3.5 )	1.3	76	斜 欠 左 カケ	一	粘板岩	I 1-①
	6	20号住居	8.5	3.9	2.0	( 2.8 )	1.2	50	丸 均	一	ホルソフェルス	I 1-②
	7	33号住居	8.3	4.5	2.5	( 2.6 )	1.5	48	丸 欠 右 カケ	一	粘板岩	I 1-②
	8	X-10	8.9	4.7	3.0	( 4.3 )	1.3	76	丸 右	一	粘板岩	I 1-②
	9	36号土塗	8.6	4.8	( 1.5 )	( 3.5 )	1.8	80	丸 均	一	粘板岩	I 1-②
	10	29号住居	8.7	4.6	( 2.8 )	( 4.0 )	1.4	76	丸 右	一	粘板岩	I 1-②
	11	11号住居	8.6	4.5	( 2.4 )	( 2.5 )	1.2	72	丸 均	一	粘板岩	I 1-②
	12	58号土塗	8.5	4.6	( 2.0 )	( 3.5 )	1.5	83	丸 均	一	砂岩	I 1-②
	13	6号住居	8.8	4.5	( 1.6 )	( 3.8 )	1.6	64	丸 均	一	粘板岩	I 1-②
	14	15号住居	8.5	4.1	1.8	( 2.6 )	1.4	70	丸 均	一	ホルソフェルス	I 1-②
	15	S-12	8.9	4.8	( 1.7 )	( 4.2 )	1.2	58	丸 均	一	砂岩	I 1-②
	16	290号土塗	9.0	4.2	1.5	4.2	1.6	75	斜 直	右	ホルソフェルス	I 1-②
	17	54号住居	9.1	4.4	2.4	( 2.0 )	1.0	46	丸 左	一	粘板岩	I 1-②
	18	R-18	9.2	4.2	2.5	( 3.8 )	1.6	70	丸 や や 右	一	ホルソフェルス	I 1-②
	19	22号土塗	( 9.2 )	4.7	( 4.0 )	( 4.0 )	1.4	72	丸 や や 左	一	粘板岩	I 1-②
	20	T-14	9.0	5.2	3.5	( 3.8 )	1.4	88	丸 均	一	粘板岩	I 1-②
179	21	47号住居	9.5	4.6	( 2.7 )	( 3.4 )	1.5	84	丸 や や 右	一	粘板岩	I 1-③
	22	106号土塗	9.5	4.9	3.3	4.2	1.5	87	や や 丸 均	一	粘板岩	I 1-③
	23	30号土塗	9.4	4.5	3.8	4.2	1.2	82	斜 直	左	ホルソフェルス	I 1-③
	24	J-9	9.5	4.4	3.3	3.9	1.6	88	平 均	一	ホルソフェルス	I 1-③
	25	133号土塗	9.3	4.4	2.2	3.3	1.1	70	丸 均	一	粘板岩	I 1-③
	26	19号土塗	9.2	5.0	2.5	4.8	1.6	96	や や 丸 や や 右	砂岩	I 1-②	
	27	51号住居	9.6	5.4	2.4	4.0	1.1	76	平 均	一	ホルソフェルス	I 1-③
	28	X-13	9.7	4.6	2.8	4.5	2.0	122	右 平 右	一	ホルソフェルス	I 1-③
	29	48号住居	9.7	5.4	( 3.8 )	5.2	1.6	98	丸 右	一	粘板岩	I 1-③
	30	32号住居	9.1	5.6	3.8	( 5.1 )	1.5	138	丸 や や 左	一	ホルソフェルス	I 1-②
	31	47号住居	9.9	5.6	2.8	( 4.1 )	1.2	78	丸 均	一	粘板岩	I 1-③
	32	8号住居	9.9	4.1	2.2	3.8	1.5	94	や や 丸 や や 丸	一	ホルソフェルス	I 1-③
	33	6号住居	9.8	4.4	3.3	( 3.2 )	1.0	72	丸 右	一	粘板岩	I 1-③
	34	21号住居	( 9.8 )	4.6	( 3.3 )	4.4	1.9	118	斜 直 や や 左	一	粘板岩	I 1-③
	35	12号住居	10.0	5.3	2.8	( 2.8 )	1.4	100	丸 均	一	ホルソフェルス	I 1-③
	36	304号土塗	10.0	4.8	3.4	3.8	0.7	55	平 均	一	粘板岩	I 1-③
	37	W-14	10.5	5.0	1.8	( 3.4 )	1.6	119	丸 均	一	砂岩	I 1-④
	38	44号住居	10.5	4.7	1.8	( 3.8 )	1.8	124	丸 均	一	ホルソフェルス	I 1-④
	39	表掛	( 10.4 )	4.7	( 3.0 )	( 3.5 )	2.0	116	丸 横均	一	粘板岩	I 1-④
	40	355号土塗	10.5	4.9	2.8	( 3.5 )	1.2	104	丸 左	一	ホルソフェルス	I 1-④
180	41	22号住居	10.4	4.4	( 1.2 )	3.8	2.1	114	斜 直 左	一	粘板岩	I 1-④
	42	表掛	11.0	5.4	3.3	( 4.4 )	2.0	156	丸 や や 右	一	ホルソフェルス	I 1-④
	43	表掛	11.2	4.9	1.4	( 4.5 )	1.9	160	丸 や や 左	一	粘板岩	I 1-④
	44	X-10	10.7	5.8	3.7	5.8	1.2	85	や や 丸 均	一	粘板岩	I 1-④

器	番号	出土地点	長さ	巾	基部巾	刃部巾	厚さ	重量	刃型	刃磨滅	石質	型式	
	45	21号住居	11.2	5.7	3.4	5.3	1.5	126	やや平	右	砂岩	I 1-④	
	46	V-10	13.7	6.5	3.0	5.5	1.2	124	やや平	やや右	粘板岩	I 1-⑤	
	47	N-10	14.4	5.8	3.2	5.0	1.8	222	平	やや左	カルソフェルス	I 1-⑤	
	48	31号住居	8.9	3.4	(2)	2.4	1.6	65	丸	片側	粘板岩	I 2-②	
	49	41号土壤	9.0	3.6	2.5	3.2	1.1	50	斜直(折)	片側	粘板岩	I 2-②	
	50	49号住居	9.4	3.6	2.4	(3)	2.3	88	丸	均一	砂岩	I 2-③	
	51	4号住居	10.1	4.0	2.6	(3.5)	1.7	76	丸	均一	カルソフェルス	I 2-③	
	52	25号土壤	10.1	4.0	(23)	3.0	1.6	80	平	均一	粘板岩	I 2-③	
	53	24号住居	10.3	4.1	2.2	3.5	1.9	102	やや丸	均一	カルソフェルス	I 2-④	
	54	47号住居	10.4	4.4	(2)	(3.5)	1.0	66	やや丸	均一	カルソフェルス	I 2-④	
	55	42号住居	11.4	4.6	(1.3)	(3.8)	1.0	74	丸	やや右	カルソフェルス	I 2-④	
	56	4号住居	(10.5)	4.2	2.1	(2.5)	1.5	73	丸		カルソフェルス	I 2-④	
	57	4号住居	(11.2)	3.9	(2)	2.8	0.8	42	一部欠		粘板岩	I 2-④	
	58	5号住居	13.1	4.6	(1.5)	4.4	1.6	128	平	均一	カルソフェルス	I 2-⑤	
	59	21号住居	13.6	4.1	3.2	(3.4)	1.4	111	一部欠	均一	粘板岩	I 2-⑤	
181	60	50号住居	(7.1)	(4)	2.1	?	1.1	31			粘板岩	I 3-?	
	61	21号住居	8.7	4.4	(2.7)	4.1	1.0	52	直	均一	粘板岩	I 3-②	
	62	B-10	9.8	4.2	2.2	3.9	1.4	87	直	均一	粘板岩	I 3-③	
	63	42号住居	10.7	4.1	1.8	3.7	1.4	72	直	やや右	頁岩	I 3-④	
	64	125号土壤	8.0	4.3	(2.3)	3.5	1.4	70	やや丸	均一	粘板岩	I 4-①	
	65	29号住居	8.4	4.1	(2.2)	(3.5)	1.4	54	丸	右(自然)	粘板岩	I 4-②	
	66	4A住居	9.5	5.3	2.4	(4.6)	1.7	114	丸	やや右	粘板岩	I 4-③	
	67	27号住居	10.0	5.5	(3)	(4.5)	1.3	86	丸	欠	粘板岩	I 4-③	
	68	15号住居	10.3	4.8	2.9	(3.6)	(2.0)	103	丸	右欠	砂岩	I 4-④	
	69	U-15	10.7	5.4	(2.8)	(4.0)	(1.0)	61	丸	均一	粘板岩	I 4-④	
	70	22号住居	10.9	5.0	(2.8)	4.1	1.2	103	やや丸	やや左	粘板岩	I 4-④	
	71	37号住居	11.1	5.2	2.8	(4.0)	2.1	159	丸	均一	カルソフェルス	I 4-④	
	72	X-16	10.3	6.4	(2.5)	(5.0)	2.1	142			砂岩	未成品	
	73	S-12	6.6	4.5	1.9	4.2	1.2	54	丸	均一	砂岩	II ①	
	74	11号住居	7.5	4.4	2.1	3.9	1.6(?)	50	平	均一	粘板岩	II ①	
	75	3号住居	8.1	4.5	1.1尖	(4.0)	1.8	70	やや丸	均一	砂岩	II ①	
	76	9号住居	9.2	5.6	1.7	(5.0)	1.5	110	丸	均一	頁岩	II ①	
	77	50号住居	8.1	7.2	2.5	(7.0)	1.9	117	丸	均一	主頁岩	II ①	
	78	49号住居	9.2	5.5	2.4	(5.0)	2.0	112	やや丸	やや左	頁岩	II ②	
	79	54号住居	10.6	5.3	(1.8)	(4.8)	1.3	85	丸	均一	粘板岩	II ④	
	80	51号住居	10.8	6.7	2.3	(6.5)	2.0	140	丸	均一	頁岩	II ④	
182	81	258土壤	8.6	4.2	(2.3)	(4.2)	1.3	58	丸	斜右	斜	粘板岩	III ②
	82	W-9	8.9	4.4	2.2	4.5	1.3	74	丸	斜左	斜	粘板岩	III ②
	83	12号住居	9.1	4.5	1.5	5.0	1.8	60	斜	右	斜	粘板岩	III ②
	84	T-14	9.5	4.5	(2.8)	4.6	1.1	64	斜	左	斜	粘板岩	III ③
	85	52号住居	9.7	4.8	(2.5)	5.2	1.6	110	丸	斜右	斜	頁岩	III ③
	86	W-9	10.8	4.7	2.6	(6.0)	1.6	110	丸	斜右	斜	カルソフェルス	III ④
	87	W-13	10.7	5.3	1.5	6.2	1.6	134	斜	左	斜	砂岩	III ④
	88	163土壤	6.2	5.3	1.0	5.1	1.5	60	平		頁岩	IV ①	
	89	3号	(9.8)	3.5	尖	欠	0.8	40	均一	欠	粘板岩	IV ③以上	
	90	382土壤	(9.9)	4.7	尖	欠	1.3	86	均一	欠	カルソフェルス	IV ③以上	
	91	50号住居	12.2	4.5	尖	欠	1.8	90	尖	欠	粘板岩	IV ⑤	

表11 磨石一覧表

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点	備考
183	1	I - 1	欠	1,240	輝石安山岩	S - 2	
	2	I - 1	完	400	輝石安山岩	J - 18	
	3	I - 1	完	490	輝石安山岩	435土壤	
	4	I - 2	完	450	輝石安山岩	30土壤	
	5	I - 3	完	1,263	輝石安山岩	203土壤	
	6	I - 2	完	740	輝石安山岩	31B住居	
184	7	II - 1	完	740	輝石安山岩	4号住居	
	8	II - 1	完	470	輝石安山岩	100土壤	
	9	II - 1	完	194	輝石安山岩	382土壤	
	10	II - 1	完	354	輝石安山岩	21号住居	
	11	II - 2	完	500	輝石安山岩	32号住居	ヒビ
	12	II - 2	欠	630	輝石安山岩	478土壤	煤、ヒビ
	13	II - 3	完	460	輝石安山岩	19号住居	
	14	II - 3	欠	760	花崗岩類	48号住居	煤、ヒビ
	15	III	完	113	輝石安山岩	54号住居	
	16	III	完	177	花崗岩類	329土壤	赤彩
	17	III	完	100	輝石安山岩	40号住居	
	18	II - 3	完	157	輝石安山岩	50号住居	
	185	IV	完	780	輝石安山岩	48号住居	
	20	IV	完	1,780	輝石安山岩	337土壤	
	21	IV	完	1,460	輝石安山岩	18号住居	
	22	IV	完	1,540	輝石安山岩	18号住居	
	23	IV	完	1,420	輝石安山岩	19号住居	
	24	IV	完	1,140	輝石安山岩	51号住居	467号土壤と接合
	25	IV	完	1,330	輝石安山岩	25号住居	
186	26	V	欠	1,240	輝石安山岩	4A住居	
	27	V	完	800	輝石安山岩	21号住居	

表12 石皿一覧表

図	番号	遺存	重量(g)	石質	出土地点
187	1	完	8,700	輝石安山岩	46号住居
	2	完	11,900	輝石安山岩	416号土壤
	3	欠	( 2,840)	輝石安山岩	240号土壤
	4	完	42,000	輝石安山岩	463号土壤
	5	欠	( 4,840)	輝石安山岩	218号土壤
188	6	欠	( 7,820)	輝石安山岩	表採
	7	欠	( 7,080)	輝石安山岩	49号住居
	8	欠	( 4,220)	輝石安山岩	368号土壤
	9	半欠	( 4,000)	輝石安山岩	45号住居
	10	半欠	( 86.1)	輝石安山岩	121号土壤

表13 装身具類一覽表

図	番号	分類	遺存	重量(g)	石質	出土地点
189	1	块状耳飾	半欠	15.8	蛇紋岩類	1号住居
	2	块状耳飾	一部欠	14.3	砂岩	21号住居
	3	块状耳飾	半欠	5.7	蛇紋岩類	49号住居
	4	块状耳飾	欠	9.3	蛇紋岩類	14号住居
	5	块状耳飾	半欠	4.8	蛇紋岩類	340号土壤
	6	块状耳飾	欠	3.3	蛇紋岩類	W-9
	7	块状耳飾	完	7.4	蛇紋岩類	321号土壤
	8	块状耳飾	半欠	5.4	蛇紋岩類	47号住居
	9	块状耳飾	欠	4.3	蛇紋岩類	203号土壤
	10	块状耳飾	欠	3.4	土製	1号住居
	11	块状耳飾	一部欠	7.0	土製	51号土壤
	12	块状耳飾	半欠	10.6	土製	21号土壤
	13	垂飾品	完	18.1	蛇紋岩類	W-5
	14	垂飾品	完	48.2	硬玉	421号土壤
	15	垂飾品	一部欠	17.2	土製	4号土壤

表14 造構別石器分類表

化層	石 器								打 磨 石 片					磨 石							
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII	その他	合	
	①	②	③	④	⑤	⑥					①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧			
1		1	1			2					2	2					1				1
2		1				1	1				3	4									
3		2	1			1	4			1	4	5	1		2	1	1			5	
4A		1	3	2	1		7		1		1	2			5			1		6	
4B																					
4	1	1	1			3	6	3			8	11	1		2	2				5	
5	1	1	1			3	1				2	3			2	1				3	
6				1		1	2				2	4	1		3		1			5	
7																					
8		1	1			2	1				2	3									
9		1	1			2			1		1				1	1	1		2		
10		1	1			2												1		1	
11			1		1	2	1		1		2				4					4	
12						1			1		2				1					1	
13															2					2	
14	2			1	3						1		1	2		1				5	
15						1		1			2				3		1			4	
16	1		1		1	3															
17		1			1	2						1		1						2	
18	2	1		1	4						1	1		1	3		2			6	
19	2	4	2		4	12					3	3		5	4	3	1	3		14	
20		1		1	2	1					2	3									
21	1	1		2	4	2	1	1			5	9	2	1	3		2	1		9	
22	1			1	1			1			3	5		3	2					5	
23	2			2											2					2	
24	1			2	3	1					2	3									
25			1	1							8	8	1	3	1	1	1			7	
26															2					2	
27											1		1								
28											1	1		8	10						
29																					
30A																					
30B																					
31	1	1				2	1				1	2						1		2	
32	1	3	1			1	7	1				1			2					2	
33	1				1	2	1				3	4			1	1		1		2	
34	1	2	1		3	1					1	2			1					1	
35	1		1		2										2					2	
36A																					
36B		1				1															

	石 庫							打 破 石 斧							磨 石								
	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	VII	I	II	III	IV	V	VI	VII	その他	合
								①	②	③	④				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
3			1					1							1		1					2	
7		1	1					2		1					1	2	3		1	3		7	
8		2						2											1	2	2		5
9															1	1		1	2			3	
10	1	2	1		1	5			1						1			1		1		2	
11		2						2										1	1	1		3	
12		1						1	2	1	1				2	1		1				2	
13		1	1		1	3									1	1		1				1	
14		1	1					2	1						1			1				1	
15	1							1	2						6	6		2	1			3	
16		1						1	2									1				1	
17		1						1	2									1				1	
18	1	1	12	3	4		7	28	2	1					6	9	1	3	1	1	1	7	
19		3	1		1	5	1								2	3	1			1	1	3	
20		2					2	1							1			1	3			4	
21	2	1	5				8		1	1					1	4	7	1	1			2	
22		1					1	1							1	3		2	3		2	7	
23	1						1	2							1	2	3						
24							1	1										1	1	2		4	
25							3	3	1						1		2	4	1	1	1	3	
26	1	1					2											1	1			2	
27							3	3							1	1		2				2	
28																							
29	その他																		2			2	
30	少計	13	4	8	64	22	9	2	1	41	164	21	10	3	6	7	2	1	88	138	14	4	38
31															①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	38	
32	上塗														①	②	③	④	⑤	⑥	⑦		
33	3	1							1						1	1							
34								1	1											1		1	
35															1	1							
36	9						1		1														
37	15						1		1														
38	16	1						1	2						3	3							
39							1		1						1								
40															2	2							
41	21	1					2	3															
42			1					1	1						1								
43															1	1							
44	25							1							1								
45								1							1								
46								1							1								
47									1						1								

行	石 墓					打 破 石 扇					瓦 石					
	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V	その他
						①	②	③	④		①	②	③	④	⑤	行
4											1	1				
5			1		1											
6												1				1
7												1				1
8											1	1				
9																
10		1			1											1
11											1					
12											1	2				
13												1				
14																
15			1													
16																
17												1				
18													1			
19											1	1				
20														1		1
21																
22		2			2						1	1		1		1
23											1	1				
24													1			1
25														1		1
26														1		1
27														1		1
28											1	2				
29											4	4		2		
30											1	1				
31																



	石盤							打替石井							替石										
	I	II	III	V	VII	IX	XI	總	I	II	III	V	XI	總	I	II	III	V	その他	II					
	①	②	③	④					①	②	③	④	⑤	計	①	②	③	④	⑤						
44																					1				
45																					1				
47																					1				
48	1																								
49																					1				
50																									
51																					1				
52																					1				
53																									
54																					1				
55																					1				
56																					2				
57																									
58																					1				
59																					1				
60																					2				
61																					1				
7集	1																								
9集																									
その他																									
小計	6	2	36	3	4		8	39	12	2	1	1	1	3	50	6	8	1	2	17	4	5	4	1	84
G97F																									
A-8																									
B-10																									
B-12																									
B-13																									
D-3	1	1	1																						
D-4																									
D-14																									
E-2																								1	
E-11	1		1																						
F-4																					1				
F-15																					1	2			
G-3																									
G-5																									
G-7																									
G-8																									
G-10																									
G-16																					1	2			
G-18																									
H-4																					1				
I-39																					1				
I-36																									

	六 番						打 番 石 番						七 番					
	I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	その他の
						合計	①	②	③	④		合計	①	②	③	④	⑤	合計
J-9						1						1	2					
J-10	1	1	2			3	7						1					1
K-14						2	2											
M-9														1				1
M-16						1	1											
N-10							1						1					
P-7													1	1				
Q-9															1		1	
R-5						1	1						2	2				
R-9													1	1				
R-12															1			1
R-18						1							1	2		1		1
S-2													1	1				
S-12							1						3	5				
S-14													1	1		1		1
S-16	1					1												
S-17	1	1				2												
S-18		1				3										1		1
T-12						1	1						2	2				
T-14							1						1	1	3		1	
T-17															2			2
T-18													1	1		1		1
U-9	1					2							1	1				
U-12		1				1												
U-13		1				1							1	1				
U-14		1				1							2	2	1		1	1
U-15													1		1		1	1
V-8						2	2											
V-9		1				1							1	1				
V-10							1							1				
V-11	1	1				2									1	1		2
V-13															1	2		3
W-5													1	1	1			1
W-9		1				1												
W-7													1	1				
W-8		1				1												
W-9													2	6	8			
W-11		1				1												
W-13													1		1		2	
W-14							1							1				
W-17		1	2			3										1	1	2
WXSS, 17																		

	石 墓							打 槌 石 墓							墓 石															
	I	II	III	IV	V	VI	VII	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI						①	②	③	④	⑤	⑥	その他	計			
								總計	①	②	③	④	⑤	⑥						①	②	③	④	⑤	⑥	その他	計			
WX																				1	1				1		1			
X-4					1																									
X-5					1																									
X-8				1																1	1									
X-9				2																							1			
X-10																				2		5	7							
X-13																				1		2	3							
X-14																				1	1						1			
X-15																											1			
X-16	1				1																						1			
XY-16				1																										
Y-6																				2	2									
Y-7																				1	1						1			
Y-16																											2			
表 準	1	1	4	3	2	4			1	16	3									3										
小 計	3	3	30	31	11	6	1	1	20	25	34	1	1	1	4	39	65	2	1	21	5	2	4		1	35				
總 計	22	9	30	111	36	19	3	2	60	26	67	12	4	5	8	7	4	177	267	24	6	2	121	69	20	17	24	4	1	266

表15 遺物出土地点一覧表

	土製円盤	9. 状耳飾		石鎌	石錐	石匙	剥片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
住居											
1		1	1	2	1				2	1	
2				1					4		
3				4	2			2	5	5	
4 A				7	3	4			2	6	
4 B											
4				6	3		1		11	5	
5				3	1	1	1	1	3	3	
6				1		1	1		4	5	
7							1				
8				2					3		
9				2					1	2	
10				2						1	
11				2	1		2		2	4	
12									2	1	
13										2	
14		1	3							5	
15									2		
16				3			1			4	
17				2			1			2	
18				4	2	1			1	6	
19				12	4	5		1	3	14	
20				2	4					3	
21	1		1	4	4			1	9	9	
22	1			1	2				5	5	
23				2		1	2			2	
24				3	1		1		3		
25					1				8	7	
26				1		3		1		2	
27						1			1		
28											
29									10		
30											
31A											
31B										2	
31	1			2	2	4	2		2		
32				7	2	1			1	2	
33				2	1				4	2	
34				3	1	1			2	1	
35				2	1	3				2	
36A						1					
36B				1		2					

	土製円盤	9. 状耳飾		石鏃	石錐	石匙	剝片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
36				1						2	
37	1			2			1	1	2	7	
38	1			2			1			5	
39	1				1				1	3	
40	1			5	4	1	2	1	1	2	
41				2	1		1			3	
42				2	3	1			2	2	
43				3	2	1			1	1	
44				2	2	1			1	1	
45				2					6	3	1
46				2						1	1
47A、B			1							2	
47		2	1	27	12	7	2	1	9	6	
48		1		5	4		1	1	3	3	
49			1	2	3	1			1	4	1
50		5		8	1	2			7	2	
51				1		2			3	7	
52				2		1			3		
53		2		1				1		4	
54				3	2	1	1		4	3	
55				2		1				2	
56				3					1	2	
57											
58					2					1	
その他										2	
小計	17	1	5	164	74	48	22	11	138	168	3
土壤											
3				1					1		
4								1			
6				1	1	1				1	
8					1				1		
9				1							
13					1						
15				1							
16				2					3		
19				1					1		
20								2			
21		1		3	1						
22				1					1		
23									1		
25							1		1		
26					2	1		1			

	土製圓盤	狀狀耳飾		石鑽	石錐	石匙	剝片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
30									1		
36									1		
40				2	1						
41								1	1		
43										1	
45			1		1						
46										1	
47										1	
48						1				1	
50			1								
51		1									
54					1					1	
55					3						
58									2		
59										1	
61										1	
66	1										
69			1								
75									2		
78										1	
79									1		
81										1	
97										1	
98				2							
100										1	
103										1	
106									1		
121							1				1
125									1		
127			1								
130						1					
132										1	
133						1			1		
137										1	
139									1		
141						1			1		
143										1	
146				2							
150										1	
163						1			3	3	
167					1				1	1	
170										1	
173										1	

	土製円盤	灰状耳飾		石鎌	石錐	石匙	剝片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
175									1		
176								1			
187	1										
191										2	
203		1								1	
211			2	2	2				1	1	
212			1						1		
213						1				1	
215											
216										1	
217										1	
218											1
220									2		
224									4	2	
228									1		
230											
232										1	
233										1	
235										3	
236		1								2	
239		1							1		
240				1	1						1
243											1
248				1							
257		2									
258									1	1	
259		1									
271			1								
272		1									
284										1	
286									1		
290			1		1				1	5	
291										2	
293									1		
295		3									
299						1			1	3	
304									2		
312			1	1							
315				1					3		
316										1	
318		1									
319				4	2						
320				1							

	土製円盤	夾状耳飾		石鏃	石錐	石匙	剝片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
321			1							2	
324			1								
325					1						
327					2				1		
328			1								
329					1						
332									3	1	
334										1	
336									1		
337										2	
339			2								
340			1								
341			2								
343					1						
348								1	1	1	
349										1	
355									2		
356	1				1						
357					1						
358								1			
368							1				1
373										1	
377										1	
382									1		
383									1		
390									1		
391				2							1
392				2							
393										1	
396										1	
401			1							2	
403							1				
404										1	
406									1	1	
412										1	
416											1
426				1							
434			1								
435										1	
437									1		
442						1					
446				1							
447							2				

	土製円盤	尖状耳飾		石鎌	石錐	石匙	剝片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
456				1							
463											1
467									1	12	
473									2		
475										1	
478										2	2
487										1	
3集				1							
9集				1		1					
その他					1					1	
小計	4	2	3	39	26	30	12	7	69	84	8
グリッド											
A-8				1							
B-10										1	
B-13				1	1						
B-16				1							
C-12				1							
C-13				1							
D-3				3	1						
D-4				1		1					
D-14				1							
E-2				1							1
E-4					1						
E-11				2							
E-12											
F-4										1	
F-10				2	2						
G-3				1							
G-5				1							
G-7				1							
G-8				1							
G-10				1							
G-16										2	
G-18				1							
H-4					1						1
H-6						1					
I-10											1
I-16				2							
I-18					1						
J-9										2	
J-14						1	1				
J-18				7							1

	土製円盤	块状耳飾		石鑿	石錐	石匙	剥片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
K-14				2							
M-9										1	
M-15				1							
M-16			1								
N-10									1		
P-7									1		
Q-9										1	
R-5				1							
R-6			1						2		
R-9									1		
R-12										1	
R-18					1				2	1	
S-2									1		
S-12									5		
S-14									1	1	
S-16			1								
S-17			2								
S-18			1							1	
T-9				1							
T-12			1						2		
T-14					1			1	3	1	
T-17										2	
T-18									1	1	
U-7	1										
U-9			2						1		
U-12			1								
U-13			1		1				1		
U-14	1			1		1			2	3	
U-15									1	1	
V-8			2	1	1						
V-9			1						1		
V-10									1		
V-11			2		1					2	
V-13					1					3	
V-17						1					
W-1				1							
W-5									1	1	
W-6				1		2					
W-7									1		
W-8				1		2					
W-9			1				1			8	
W-11				1	1						
W-10								1			

	土製円盤	疣状耳飾		石鎌	石錐	石匙	剥片石器	磨製石斧	打製石斧	磨石	石皿
		土製	石製								
W-12					1						
W-13									1	2	
W-14									1		
W-17			3		1						
WX15										2	
W・X									1	1	
X-4			1								
X-5			2	1							
X-8			1	1	1				1		
X-9			4	1						1	
X-10				1	1				7		
X-13									3		
X-14			1	1						1	
X-15										1	
X-16			2							1	
XY-16			1		1						
Y-6			2								
Y-7			1		1					1	
Y-8				1							
Y-11					1						
Y-16				2						2	
表採				16	9			2			1
小計	2		1	86	32	20	2	4	60	36	1
總計	23	3	9	289	132	98	36	22	267	288	12

## 第4章 遺物と遺構の検討

### 1 天神遺跡の諸磯式土器について

天神遺跡の主体は諸磯式期の集落であり、ここからは多量の土器が出土している。これらの土器については第3章でふれたように、諸磯b式の後半部分からc式期を中心としている。ここではこれらの土器の検討をとおして天神遺跡の諸磯式土器の特徴を抽出してみたい。

#### (1) 諸磯b式土器

諸磯b式土器については最近3ないし4段階に区分されてきている。今村啓爾氏は「古」・「中」・「新」の3区分を示し(註1)、さらに谷口康浩氏は中段階を二分することによりb式を四分している(註2)。また山梨の例では長沢宏昌氏は花鳥山遺跡の資料について沈線文系の新段階を二分し、b(古)、b(新)、b(新)とした(註3)。これらを参考に天神遺跡の土器を分類してみる。

##### ①深鉢形土器

浮線文・沈線文・繩文の三種類が主な文様となっている。特に浮線文と沈線文の土器については、文様構成上それぞれの展開をたどることができることから、ここでは浮線文系土器・沈線文系土器と呼び、さらに繩文のみの土器についても繩文系土器として、それぞれの系列の中での文様構成や器形の変遷を追ってみた。特に器形の上ではこれら三系列に共通した展開をみることができ、三系列の土器がセットとしてとらえられる資料も確認できる。

これまでにも先学により指摘されているように、諸磯b式になり波状口縁のキャリバー形深鉢形土器が定着するが、この器形の展開が各部位ごとの文様構成の変化に繋がっているとみられる。キャリバー形の口縁部が内湾気味に立ち上がっているものから、内湾の角度が急になり、やがては「く」の字形に強く屈折する器形へと展開していく。同時に口縁部の波状の程度についても、大きいものからゆるやかなものへと変わっていくようである。胴部の膨らみも古い段階の方が強いようである。このような器形の変遷の中で、特に口縁部の屈折による幅の変化が、文様構成に大きい変化をもたらしているものと考えられるが、この傾向は沈線文系土器に非常に顕著である。この沈線文系を主にすると大きく3段階の展開が窺われる(第190図)。

I キャリバー形の口縁部は内湾しており、全体に丸味がつよい。第190図2~4を典型とする。口縁部の小突起はイノシシ突起からの変化を推定させる形態をとっている。口縁部文様帶にはゆとりがある。

II 14に見るように口縁部の内湾が強く、屈折気味になってくる。従って口縁部文様帶もやや窮屈気味である。15・17のように「く」の字形に近く屈折するものもある。これらの口縁部文様帶は屈折部から上の部分に限られており、文様帶がせまくなっていく。

口縁部の小突起は14ではまだ2~3に類似するが15や17では貼付文状になっている。胴部では地文繩文に3~5本を単位とした平行沈線がめぐる。この段階に包括したが14と17とでは型式学上は17の方が新しいものであろう。

III 口縁部の屈折はさらに強い「く」の字形となる。口縁部文様帯につけられる曲線文は前段階の14や15に比べ簡素化し(32・33)、さらに34~36では胴部と同様の平行沈線だけになる。胴部の平行沈線も32では14や15に類するが33~36では集合沈線のようになっている。口縁部の突起も34・35では円形貼付文で表されている。37のような平口縁の土器もこの段階にいれておく。

以上のように沈線文系深鉢形土器では器形および文様構成から三段階に区分できたが、これはさらに浮線文系や纏文系にもあてはめられる。さらに別要素も加えての展開を考えたものが第190図全体である。

浮線文系では11が、沈線文系の14と同じ25号住居からの出土であり、器形も全く同じであることからII段階に設定できよう。12は厳密には浮線文ではなく細かい刻目が連続する沈線系であるが効果としては浮線文が意識されたものと考えられる。頸部に円形刺突文が連続し古い様相が窺われるが、刻目の連続からは浮線文系のII段階に該当するものと考えた。13は11よりさらに屈折が強くなっているが、「く」の字にはなっておらずこの段階にいれておいた。浮線は低く12に共通した刻目であり、古い段階ではない。31は「く」の字形に屈折する短い口縁部で波状もゆるく、沈線文系の32に類似する器形であることからIII段階とした。浮線上の刻目は細かい。I段階については1を入れておいた。残存部の器形は11と類似し古い様相がみられるとともに、同じ18号住居出土の纏文系の6が、器形や羽状纏文からI段階とみられることから1もこの段階とできよう。かくして浮線文系の展開を1→11・12・13→31としておいた。

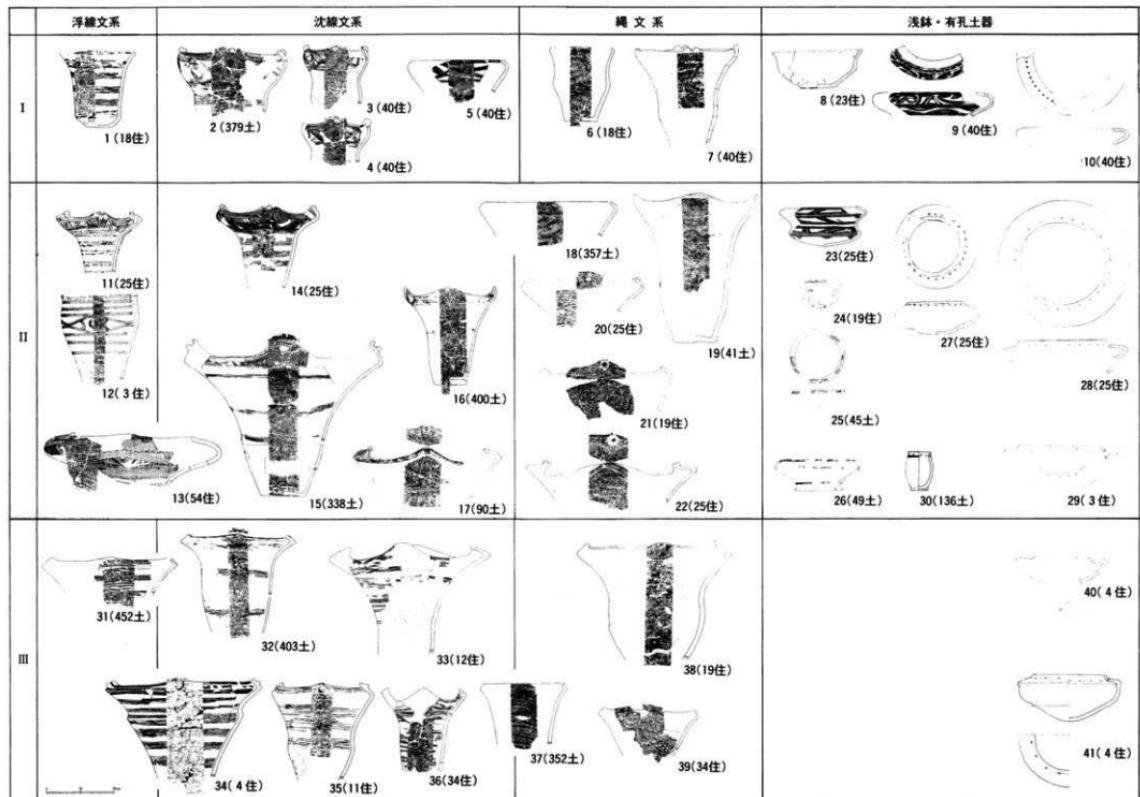
纏文系でも基本的には沈線文系の器形変化が適用でき、18~22をII段階とした。特に19は16に類似し、22は17と共に共通する。また20は11・14と同じ25号住居から出土している。ここでも20~22のように口縁部に円形貼付文がみられる。口縁部の屈折状況から38・39はIII段階であろう。I段階としては6と7がある。6は先に述べた理由から、7は3~5と同じ40号住居出土であるとともにキャリバー形の古い様相とみられる器形であることからこの段階と考えたものである。

なお纏文系に平口縁が多いが、沈線文系の37も器形の上ではこの纏文系から派生しているものかもしれない。6・7→18→37という展開になろうか。

## ②浅鉢形土器・有孔土器（第190図）

浅鉢形土器は量的には少なく、全時期をとおして使用されたかどうかは不明である。まず8の器形は諸磯a式に遡源を求めることができると思われ、I段階とした。この器形は以後に連続せず、諸磯式土器でも古い段階でなくなってしまうものか。23・24は法量は別として、よく似た土器である。ただ23は半截竹管文と爪形文から装飾されており、やや粗雑な沈線（半截竹管文）の24よりは古いものかもしれない。深鉢形土器11・14と同じ25号住居出土であることから23をII段階とした。25には木の葉文に通ずるとみられる文様があることから最新段階までは下がらないと思われる。26は浮線文系土器であるが口縁部の湾曲がII段階の深鉢形土器に共通することから同じ段階とみておく。

有孔土器の時期差は口縁部の立ち上がり方、胴部の膨らみ方、底部の状況などから判断可能



第190図 天神遺跡の諸縫b式土器変遷図

であるが、破片も多く実際には難しい。まず古い段階に置けるものとして9と10がある。どちらも深鉢形土器I段階の3～5・7と同じ40号住居からの出土であり、この段階の特徴を備えているものと思われる。9の有文は諸磯a式からのものであろう。口縁部は全く立ち上がりず内湾したままである。有孔部は浅く窪み、それに伴いその両側が低いながらも浮線状に高まっている。無文ながら10も同様の特徴がある。II段階になると27や28のように口縁部がやや立ってくる。この二つは深鉢形土器11や14と同じ25号住居出土であることからII段階とした。ただし27の胴部が丸味があるのでに対して、28は肩が張ったように屈折している。新しい段階のものが鉢状になっていることを考えると、28が後出であろう。30は壺状の器形の小型土器であるが、頸部に浮線文がめぐる。詳細は分からぬがII段階とした。深鉢形土器12と同じ住居から出土した29もこの段階に入れた。

40と41をIII段階とした。40が深鉢形土器34と同じ4A号住居、41がそれを切る4B号住居からの出土であり、時期的に諸磯b式の最も新しい段階であると考えられる。41は全形の分かれる土器。肩部がややとびだし鉢状になっていること、胴下半部にも段がつくことを特徴とする。底部も尖り気味の丸底である。40にも同様な特徴がみられるが、この方が肩の張りが強い。この段階と断定できるような浅鉢形土器は見受けられなかった。

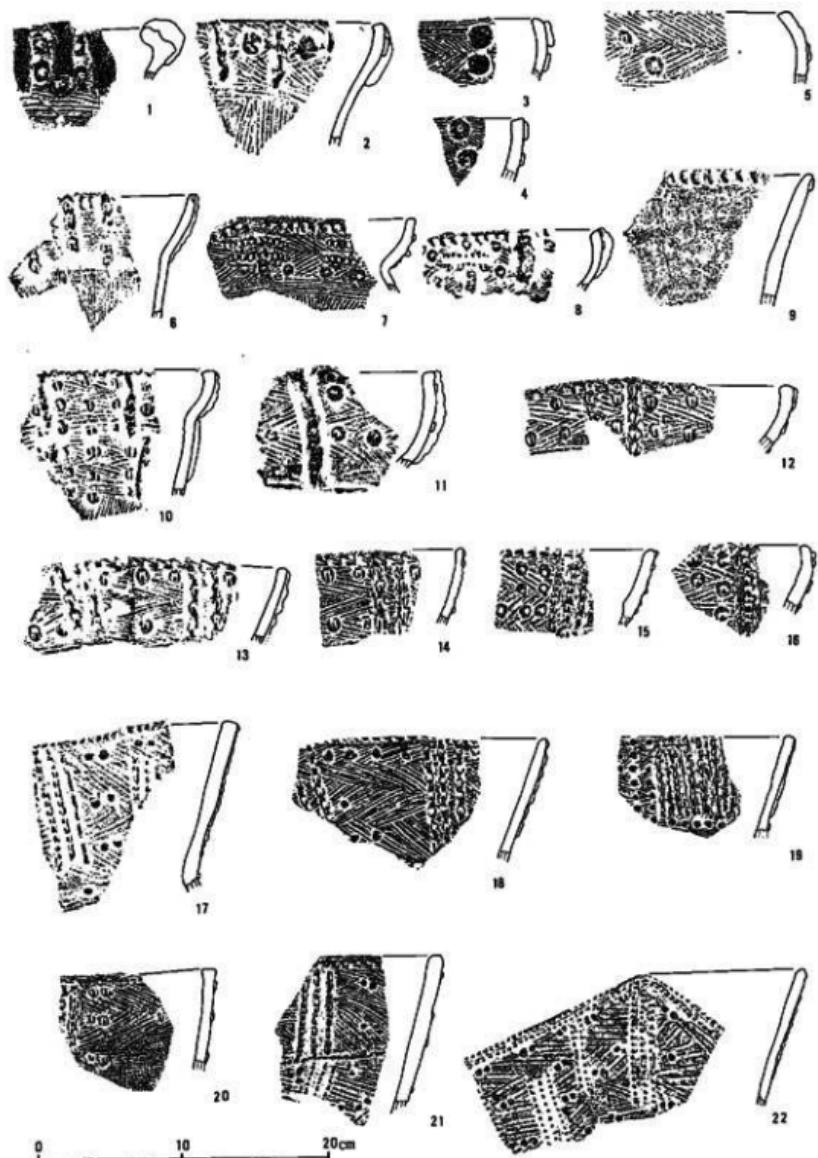
以上のように、大きくI・II・IIIという三つの段階での展開を考えてみた。これらは從来の型式変遷では、全体には諸磯b式の後半に位置づけられるものであろう。谷口康浩氏の変遷(註4)に当てはめてみると天神I段階が谷口氏の第五様式から第六様式、天神II段階が第六様式から第七様式、天神III段階が第七様式となろうか。ここではI段階をb式中段階(新)、II段階をb式新段階(古)、III段階をb式新段階(新)としておきたい。

## (2) 諸磯c式土器

これについても今村啓爾氏や谷口康浩氏は古段階と新段階とに二分している。天神遺跡でも大きくなればこれを参考にしたいが、型式変遷上からはさらに細分できるとともに、それらの展開もたどることができる。ここでは1～6類までの小段階に細分してみたが、このうち1～5については第191図に基本となる破片資料を追加しておいた。ここでは第191図と変遷図第192図とから各類の特徴を見していく。

1類 いわゆる貝殻状貼付文と呼ばれるものや大きな円形貼付文とか棒状貼付文で飾られる土器。第192図に載せた3(39号土壤)や4(37号住居)などを典型とする。第191図1～4も地文の沈線や貼付文の状況からこの類に入る。ボタン状の円形貼付文や棒状貼付文が顕著であるが、貼付文や口縁部には細かく連続するような刻目や刺突文はない。

2類 第191図5～9。大きな貼付文はなくなり、棒状貼付文には半截竹管などによる刻目が連続するようになる。7や8では横方向の棒状貼付文もみられる。最も大きい特徴は口縁部に連続する押圧文である。6～9では特に顕著であるが、これは粘土紐を口縁にめぐらせ、この上から棒状の工具により押圧を加えたものであろう。これにより粘土紐が細かく盛り上がり、



第191図 天神遺跡の諸碳C式土器 (1/4)

縦に短い棒状貼付文の効果を表現しているものと思われる。つまり第192図の1・3・4・6に見る口縁部の棒状貼付文の表現がこのように変化したものと考えたい。これが次の段階では結節文の発達となるが、その萌芽はこの2類の中、第191図5の口縁にみることができる。この5の口縁には半截竹管による爪形文が連続している。

なおこの特徴的な押圧文は第192図11(58号住居)のように頸部にも連続する。同図15(55号住居)では口縁と屈折部とに同様な押圧が連続する。同図16では口縁文様帶に4列がめぐらされている。第192図13・14では棒状貼付文に刻目はないが第191図5とともに円形貼付文や地文の沈線の様子から2類とした。

胴部には15や16にみるよう集合沈線が弧状や羽状に施されているが、ここにはもはや3にみるような円形貼付文はない。なお15の器形は同図3から展開したものであろう。

3類 第191図10～16。口縁部には結節文がめぐらし、棒状貼付文にも同様な半截竹管によると思われる刻目が連続し、結節浮線のような状態になっている。特に口縁にめぐらし結節文は2類の連続押圧文から変化したものと考えているが、15では結節浮線文のようである。棒状貼付文は1本ないし2本単位が多いが、15のように4本単位もある。10では頸部以下にも棒状貼付文がある。

円形貼付文にも半截竹管とみられる刺突文があるのが普通。半截竹管を斜めに刺したり(12～14)、横に押し付けたり(10)している。

4類 第191図17～19でみるように、3類に比べ貼付文が繊細となってくる。棒状貼付文は細目、円形貼付文も小さく2個一対への傾向がでてくる。口縁部には結節浮線文がめぐらし。

5類 口縁部には第191図22のように結節浮線文が2条めぐらるものでてくる。棒状貼付文もここでは完全に結節浮線文となり、全体に繊細な感がある。円形貼付文も4類よりさらに小さく、しかも2個一対として定着する。地文の沈線も3類のような太くしっかりしたものではなく、地文というに相応しくなる。器形では4単位波状口縁の深鉢形土器が発達する。第192図25～28を典型とする整った器形・文様の土器が形成される。同時に同図30のような平口縁の大形深鉢形土器もある。なお、波状口縁の土器については1～3類では見られないが、4類になると第191図17のような波状気味のものが出てくる。

6類 結節浮線文が発達する土器で、第192図31・32を代表とする。31では上半部に渦巻き状の結節浮線文が向き合っている。器形は同図28に類似しており、これとの時期差はないのかもしれないが、結節浮線文の発達という点から後出と考えた。

以上のように天神遺跡の諸磯c式土器にあっては器形の変化とともに、貼付文の大きさ・付けられ方・刻目ないし刺突・結節文・結節浮線文などから1類から6類に向けての変遷がとらえられた。ただし1類～3類、4類～6類はそれぞれ類似性が高く、同時に3類は1類2類の様相を兼ねながらも4類に繋がる要素を生み出している。こうしてみると3類と4類との間に一つの画期を設けることができ、c式を二分するとしたらここで区分して、諸磯b式土器に統き1類～3類をIV段階、4類～6類をV段階とすることができよう。

有孔土器については深鉢形土器のような細分ができなかった。おおむね丸底で深目の器形で

鉄のある第192図33が古い段階のものと思われる。同図35は31と同じ149号土壙出土のものであり、最も新しい段階の有孔土器であろう。34は鉄状の張りだしが強いことからc式に含めた。第192図にはVI段階として36～38をあげておいた。十三菩提式土器である。

以上天神遺跡の諸磯式土器を概観したが、b式の中段階からc式新段階まで含むことになり、各時期の遺構も数に差はあるが見出されている。a式やb式の古い段階の土器は出土しておらず、ここに天神遺跡の特徴の一つが見出される。この傾向はb式～c式期の住居24軒が調査され、たにもかわらずa式期では僅かな土器しか出土しなかった花鳥山遺跡にも共通する。a式からb式古段階の土器や遺構が見出されている遺跡には、天神に近い御所遺跡（註5）、塩山市獅子之前遺跡（註6）、境川村一の沢遺跡（註7）、駿迎堂遺跡群（註8）などがあるが量的にも少なく、天神遺跡や花鳥山遺跡とは異なった小規模の集落であったことも考えられる。ちなみに獅子之前遺跡で7軒の諸磯期住居のうちa式と分けるもの3軒、b式古～中葉3軒の集落である。御所遺跡からは5軒の住居や8基の土壙が見出されているが、b式古～中段階の集落でありa式土器の出土は少ない。駿迎堂遺跡群塚越北A地区では8軒余りの諸磯期のうちa～b古式の住居は6軒程度である。一の沢遺跡からは諸磯b新段階の住居1とa式土器をだす土壙1基が調査されている。

諸磯c式土器では最古である天神IV段階（1類）土器の県内での位置付けが問題となる。この種の土器は、多量の土器を出土ししかもc式古段階も多い花鳥山遺跡では皆無といつてもよい。長沢氏がc式（古）とした土器群は天神分類ではIV段階（2類ないし3類）に該当するものと思われる。つまり花鳥山遺跡では天神IV段階（1類）を欠くことになり、長沢氏が山梨の傾向として指摘したように（註9）北巨摩郡以外では余り類例を見ないものである。だからといって山梨ではこの時期が空白であったことを意味するものではない。IV段階（1類）土器を構成する要素は、長野県諏訪地域を中心とする下島式土器であり、その分布域が八ヶ岳南麓までおよんでいたことを意味するのであって、極めて地域性の強い一群とすることができます。従ってこの時期、花鳥山c（古）段階の土器が、天神IV段階全体と平行するものと考えると、土器型式学上ではIV段階を1～3類に分類できるが、生活時期とすれば一括して良いのかもしれない。他地域の状況を踏まえる中で、県内資料の増加を待って検討すべき今後の課題である。

## 2 集落の検討

天神遺跡C地区の主体は49軒の住居とそれに伴う土壙群とから成る諸磯式期の集落である。住居49軒の内訳は、b式期29軒、c式期10軒、詳細時期不明（b～c式期）10軒である。さらに第1項で検討した土器の段階にあてはめてみると、I段階3軒、II段階7軒、III段階8軒、II～III段階11軒、IV段階（1類）1軒、IV段階（2類）3軒、IV段階（3類）0軒、V段階（5類）5軒、V段階（6類）0軒、V段階（5類～6類）1軒となる。b式が優越しているが特にII・III段階というb式新段階が26軒あり、この時期に最も発達した集落であったことが分かる。これがc式古段階（IV～1類・2類）では4軒と縮小し、c式新段階（V～5類・6

IV	1	1 (53住) 2 (28土)	3 (39土) 4 (37住) 5 (37住)	6 (29住) 7 (45住) 8 (32住)
IV	2	9 (48住) 10 (48住)	11 (58住) 12 (31住) 13 (42住) 14 (52住)	15 (55住) 16 (52住)
IV	3	17 (41住)	18 (42住) 19 (33住)	20 (49住) 21 (33住)
IV	4	22 (R-12)	23 (384土)	24 (271土)
V	5	25 (327土)	26 (412土)	27 (32住) 28 (421土) 29 (421土)
VI	6	31 (149土)	32 (132土)	35 (149土)
VI		36 (154土)	37 (156土)	38 (133土)

第192図 天神遺跡の諸磧C式土器変遷図 (1/12)

類)でも6軒と引き継がれる。それ以降前期終末には住居がつくられていないが、五領ヶ台式土器の時期にはまばらながら再び集落が営まれることになる。

以下に時期別の住居をまとめておく(第193図、第194図参照)。

I段階…18号・23号・40号(以上3軒)

II段階…3号・4B号・5号・14号・25号・50号・54号(以上7軒)

III段階…4A号・11号・12号・19号・34号・51号・56号・57号(以上8軒)

II~III段階…9号・15号・20号・21号・31A号・31B号・36A号・38号・

47号・48号・53号(以上11軒)

IV段階(1類)…27号(以上1軒)

IV段階(2類)…42号・52号・55号(以上3軒)

V段階(5類)…1号・32号・36B号・37号・49号(以上5軒)

■ I段階(3軒)

□ II段階(7軒)

△ III段階(8軒)

△ II~III段階(11軒)

□ III~IV段階(5軒)

□ 諸磯b~c式期(5軒)



第193図 時期別住居配置図(諸磯b式期)(1/1,000)

V段階（5類～6類）…45号（以上1軒）

詳細時期不明 III～IV段階…26号・33号・39号・43号・58号（以上5軒）

b式～c式期…10号・13号・16号・17号・41号（以上5軒）

五領ヶ台式期…2号・6号・22号・24号・28号・29号・35号・44号・46号

（以上9軒）

天神前期集落の形態および規模についてはどうであろうか。まず形態については住居群の内側に土壤が密集する環状集落とみられる。土壤のなかには土器を伴うもの、硬玉製大珠や硃色耳飾りなどの出土するものもあり、墓と考えてもよいものを多く含むことから、住居群の内側は墓域であったと考えられる。従って、天神集落は中央墓域型の環状集落とすることができる。規模については調査区自体が100m幅であることから、当然これよりも広い範囲の居住区画を持っていたことになる。調査区東側は住居の分布もまばらになってきており、31A・B号住

■ IV段階1類(1軒)

■ IV段階段2類(3軒)

■■ V段階5類(45号住は5類～6類)(6軒)

□ III～IV段階(5軒)

□ 諸磯b～c式期(5軒)

■ 五領ヶ台式期(9軒)



第194図 時期別住居配置図（諸磯c式期・五領ヶ台式期）（1/1,000）

居あたりが東端に近い住居であったと思われる。また南側は全て試掘を行なっているが27号、39号、47号住居の外側からは遺構の検出はない。もっともこの南側部分は水田造成の際に著しく削平されていることからこの影響も考えられるが、住居域が相当広がるとは考えられない。西側は谷がせまっており、20mもすすめば傾斜が始まる地形である。北側については大泉村教育委員会により平成5年に道路を隔てた箇所が調査され、諸磯c式期を中心とした住居3軒と土壙60数基が発見されており（註10）、集落が続いていることが確認されている。この調査区は土壙群の北端あるいは北側住居域の南端ということになり、住居域の幅が最低でも20mはあることから、今回の調査区から50mほど北にのびることが推測できる。

以上からすると、東西にやや長い直径150mから170m程の環状集落であり、西側の谷はすぐに谷戸地形になっていることから、この方向（西から北西）に開口する集落であったと考えられる。ただし最大に発達し、なおかつ環状としての形態が確実に窺われるのは、b式期II～III段階であり、c式期になると疎らな住居配置になっている。しかしこの時期の墓とみられる土壙も中央域から多く発見されていることから、居住区と墓域との区画は諸磯式期をとおしてしっ



第195図 時期別土壙分布図（諸磯b式期）(1/1,000)

かりと継続していたと思われる。

次ぎに住居規模の格差をみると数が多いII・III段階に顕著な差がみられることに注意したい。I段階の3軒が直径3~4mの中・小型であるのに対して、II段階では50号、III段階では9号といった長軸7mを越える大型住居がみられるからである。住居の配列からするといくつかの小群にまとまる傾向がみられるが、このような配置の中での大型住居の位置付けを考える必要があろう。ちなみに大型住居での石器の出土量が優れている（表15）ことも検討すべきであろう。19号では石鎌12点、磨石14点、石匙5点、50号では石鎌8点、打製石斧7点と多い。また6m以上の規模である47号住居からも石鎌27点、石錐12点、打製石斧9点が出土していることも加えると、他の中・小規模住居に比べ石器の出土量が多い傾向が認められ、今後の集落構造分析にあたって検討課題となろう。

土壌は488基が発見された。これらの分布については住居域の内側に密集するものと、住居域に散在するものとがみられる。これらが同様の機能を果たしていたのかどうかは不明であるが、中央に密集するものについては、第421号のように硬玉製大珠や土器を作ったり、第321号



第196図 時期別土壌分布図 (諸磯c式期) (1/1,000)

のように完形の状状耳飾りが出土した例もあることから墓壙群と考えている。この中央墓壙の時期については、諸磯 b 式期と諸磯 c 式期とが大半であるが住居数の割には c 式期の土壙が多い傾向がみられる。特に c 式後半期の V-5 段階の時期が目立つとともに、土壙群の東部部分 (R・S・T ~ 5・6・7 区) では最も新しい V-6 段階の遺構が集中する傾向にある。さらにこの区域には十三菩提式土器を混在する土壙が 3 基ある (133 号、154 号、156 号) が、このうち第 133 号は十三菩提式期の可能性が高い。五領ヶ台式期の土壙も 3 基ほど確認された。いずれにしても住居群に囲まれたこの区域は、天神集落の形成期から終末期までとおして墓域であったことが考えられる。

住居域に散在する土壙も時期的には b 式期が多いが、北側にいくに従い c 式期も増加していく。この区域には第 1 号や第 32 号といった c 式期 (V-5 段階) の住居があることにも関係があろう。これらを含め住居域に散在する土壙についても中央墓壙群に類似したものも含まれることから、墓壙も存在していたことが当然考えられる。ただ中央の墓壙と周辺の墓壙との違いがどこにあったのかは検討を要する。また貯蔵機能や他の用途についてもそれぞれの土壙の属性を検討するなかで考える必要があり、これも合わせ今後の課題としたい。なお土壙全体については表 4 (P166~P173) にまとめてあるが、出土した土器から時期の判断できた土壙の数は次のとおりである。

諸磯 b 式期 202 基 (I 段階 5、II 段階 54、III 段階 17、I ~ III 段階 126)

諸磯 c 式期 73 基 (IV 段階 12、V 段階 58、IV ~ V 段階 3)

諸磯 b ~ c 式期 41 基

十三菩提式期 1 基

五領ヶ台式期 6 基

さて、このような天神集落のこの地域における位置付けはどのようなものであったのだろうか。周辺の諸磯式期の遺跡には山崎第四遺跡、御所遺跡、寺所遺跡、原田遺跡、甲ヶ原遺跡などがある。まず天神遺跡と谷を隔てた西隣にある山崎第四遺跡では、諸磯 b 式期の住居 7 軒が調査されている (註 11)。調査担当の伊藤公明氏によると時期的には天神より古い b 式古段階を含むとのことである。山崎遺跡からさらに西 500m には住居 5 軒と土壙 8 基が発見された御所遺跡がある。ここでの主体は b 式であるが a 式や古段階の b 式、さらには北白川下層式土器が出土している。また南 1km にある寺所遺跡からは b 式新段階と c 式新段階の住居がそれぞれ 1 軒づつ発見されている (註 12)。原田遺跡では b 式から c 式の土壙が発見された程度である (註 13)。さらに甲ヶ原遺跡では b 式 5 軒、c 式 7 軒が調査されている (註 14)。この遺跡は広大な面積があり今後の調査によっては相当数の遺構が確認されることは確実である。

このように天神遺跡周辺には多くの諸磯式期の遺跡があり、八ヶ岳南麓全体では相当数にのぼるものと思われる。ただしこれらの多くは山崎遺跡や御所遺跡のように 10 軒以内、極端には寺所のように 1 軒からなる「ムラ」 (註 15) のような小規模な遺跡である可能性が高い。中央墓壙形の環状集落がそろいくつもあったとは思われず、その意味からも天神は極めて拠点性のつよい集落であったと考えたい。また、御所遺跡や山崎遺跡から天神では見られなかった a 式

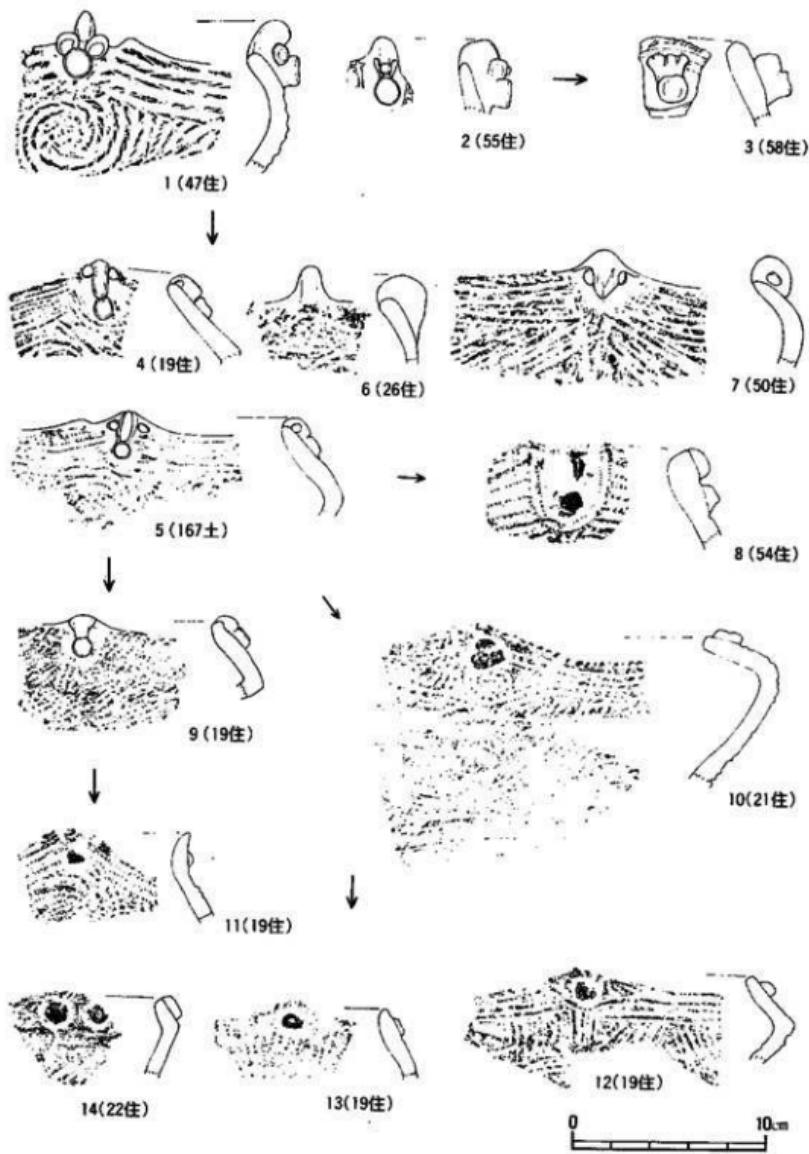
やb式古段階の土器や一部の遺構が発見されていることは重要である。天神集落形成以前の集落がそこで営まれていた可能性がみられるからである。同時にその時期の拠点集落を天神地域以外に求めるうことになろうが、天神集落の時期とは集落間関係の在り方が異なっていたことも考える必要があろう。というのも諸磯式期になると山梨県内でも遺跡数が増加するが（註16）、この現象はb式中段階以降の遺跡数が増加するからではなかろうか。天神集落の形成と小規模遺跡の増加との間に、有機的な関係があったと考えてみたい。

最後に五領ヶ台式期の集落にふれておく。今回の天神遺跡C地区からは9軒が調査されている。これらの配置は、29号・35号・44号・46号の4軒がやや接近しているものの、全体としてはまばらな傾向にある。200m程南に位置する天神遺跡B地区からも埋甕炉3個が発見されており2軒程度の住居の切り合いが考えられている。このように広い地域にあってまばらに点在するのが五領ヶ台式期集落の特徴の一つとも思われる。またここでは22号・24号・28号と3軒の住居の切り合いと報告した遺構についても、複数の埋甕炉から考えたものであり、あるいは1軒で複数の炉をもった可能性もあり、先程のB地区での在り方も含め今後の検討事項としたい。

### 3 イノシシ装飾の変化（第197図）

諸磯b式土器にはイノシシを表現したとみられる突起を持つものがある。獣面把手とも呼ばれるもので、b式の古い段階の深鉢形土器に付けられる場合が多いが、東京都四枚畠貝塚の例では突起状のものだけではなく口縁より下に顔面が表現されているものもある（註17）。天神遺跡はb式後半期以降を中心としていることから、イノシシ装飾の全盛期を過ぎた時期ということになる。しかしながら僅かではあるがイノシシを表現したとみられる装飾やそれから変化したと思われる突起とか貼付文などが認められる。イノシシを土器に付ける本来の意味はその出現期にこそ求めるものであり、b式新段階のような衰退の時期にそのような本来の意味が残っていたのかどうかは疑わしい。このような意味付けについては今後考えていくことになるが、ここでは形態的な変化をたどり問題提示としたい。

第197図1および2に示した土器の突起はいわゆる獣面把手とされるもので、特にイノシシの正面からみた顔を表現しているものと思われる。下の大きな円形部分が鼻、1ではそれにつながる左右の耳が大きく表現されている。中央に高く突出するのが頭部と思われるあるいは背中の盛り上がりということもあるかもしれない。2では耳部分の表現がやや小さい。1・2とも鼻孔は表現されていないが、本来はしっかり表現されていたものと思われ、獅子之前遺跡例（註18）では鼻孔とともに耳もより明確に作り出されている。この点1・2は獅子之前例より降った時期のものであろう。いずれにせよ、天神遺跡では1および2が最も古くしかもイノシシの特徴がよく表わされた土器である。1項で考えた時期にあてはめると、I段階の古い部分に位置づけられる。これは従来のb式中段階の新しい部分に該当するが、あるいは中段階の古い部分まで遡るかもしれない。この1・2から3や4～6へと変わっていくものと思われる。3では鼻の円形部分はあるが、耳と頭部とが一体となり波状に表現されているにすぎない。4



第197図 イノシシ装飾の変化 (1/3)

と5は類似した表現である。鼻・耳・頭部ともに退化し、特に耳は目のような表現となっている。6は突出した頭部表現が伝えられたもので、特に2からの変遷が考えられる。これらの土器はII段階の古い部分に該当しよう。ここではイノシシを表現するといった意識はすでに薄れてしまったものと思われる。7はイノシシよりも鳥類のようであるが、他の動物としても具体性にやや欠けることから1や2より若干新しい時期のものであろう。

9は棒状と円形の貼付文がつながったような形状であり、5を経て変化したものであろう。円形部分に鼻の形を残すのみである。8では円形と棒状部分とが離れている。このような貼付文は波状口縁の波頂上のある箇所に見られる場合もあり、25号住居出土の浮線文系土器2501にも連なるものかもしれない。また10では円形文が三つ合わさっており、これらも変遷上では5などから展開したものであろう。これらはII段階の新しい部分からIII段階にかけての土器とみられる。10はやや古くII段階（古）であろう。

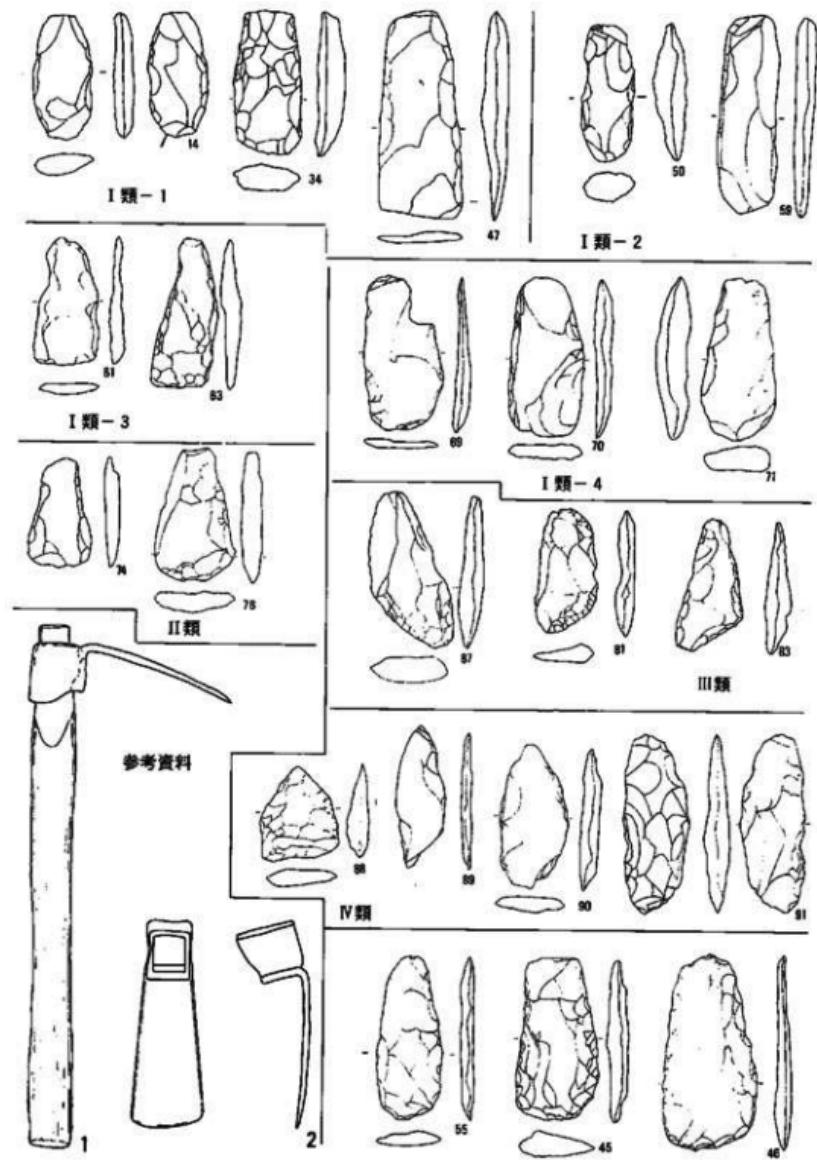
11~14は円形貼付文の土器であり、イノシシ装飾の終末ともいえるものである。変遷からすると鼻の部分が円形貼付として残されてはいるものの本来の形状や意味は全く失われてしまっている。しかしながらII段階（新）以降、深鉢形土器波頂部直下にはこのような貼付文が相当普遍的につけられるのもまた事実である。

以上イノシシ装飾突起の変化をたどってみた。第197図はその変遷図であるが、もちろん典型的な事例からの変化をあげたのであって、細かい時期変化をとらえようとしたものではない。I段階にも第190図2~4のようなイノシシらしからぬ突起があったり、II段階でも第197図4・5のような表現のやや豊かな装飾もみられることは確かである。主に浮線文系深鉢形土器を飾ることから始まったイノシシが変化していく過程をたどってみた訳であり、逆にいえば諸図b式に顕著な口縁部の貼付文をたどればイノシシに行き着くことを確認してみたことになろう。

#### 4 打製石斧の形態と使用の一例

本遺跡からは破片を含め打製石斧とみられるものが267点出土している。これらについては第3章第2節6項で形態分類をおこないその特徴をまとめてみたが、ここでは再度これらについて概観し、さらに使用の一例についてふれてみたい。

第3章では全体的な形と刃の状況によりI類からIV類まで分類した。第198図にそれらの代表的なものをまとめておいた。I類は從来広く短冊形とされていたものであるが、幅と長さとの比率が1:2.4以下の標準型（第198図14・34…この番号は本文第3章に図示した番号と同じ、以下同様）、1:2.5以上の細身型（50・59）、頸腹型（61・63）、反型（69~71）に区分した。これらの大きさについて長さ8.3~10.2cmの間に全体の7割近くが入るが、それでも14の長さが8.5cm、47が14.4cmと大小があることから同じ使用方法であったのかどうかは検討を要する。しかしここでは一括してI類とした。また刃部の状況についても14では丸刃型、47は平刃型といったヴァラエティが認められる。同時に刃の減り方については均一なものが多いながらも34では左が減っており、45・46では右が減っているという観察もできる。これらの事項については表10にまとめておいたが、使用対象や使用方法が微妙に影響していた可能性もある。



第198図 打製石斧の形態 (1/4)

II類は実に定形的な石器であり、使用方法も限られた可能性が高い。74・76に例をあげておいたが、特に76の刃部は湾曲が強い。この類は全部で8点と少ないがI類にくらべ小型が優越する傾向にある。III類も刃が斜めにつく特徴的な石器であり、機能が相当に重要視された形態といえる。81・83・87に代表例をあげたが、刃の方向については87が左、81・83が右とみられる。87では片面が穂の自然面であり丸味があることから、この面を下と考え、81・83では加工による反り方や厚みから図のような向きを考えたものである。IV類は少ないとからこのような形態としてまとまるかは不明であるが、他の類型とは異なることからここに一括した。完全ではないが尖頭部が確実に機能するとみられるものは89・90の2点であろう。88では尖頭部反対側の平刃が機能面としてもでき、その場合はII類と同じ用途も考えられる。91は両側面が薄く加工されていることから、特に湾曲した面を用いる横歯型石器の可能性も考えたい。

以上のように形態分類ができたがその背景に使用方法といった機能の問題が隠されていることは確かであろう。次ぎに刃部の磨滅状況を加え使用の一例を考えてみる。打製石斧の形態や使用痕から、この種の石器の機能を耕作に用いる石鋤としたのは小林公明氏であった（註19）。刃部の磨滅についてはすでに小林氏が曾利遺跡出土の石鋤（打製石斧）の観察により「長細型で均齊刃の歯は深く耕す作業に適し、幅広型で偏刃の歯は片歯を立てたり土寄せをする作業に適する」と指摘された。特に偏刃では右磨減が多いながらも左磨減もみられるることは、利き腕に基づくともされた。

ここで最近の事例から使用方法と磨減の関係について紹介してみる。第198図参考資料1にあげたものは、山梨県埋蔵文化財センターの行う発掘調査で用いる「手鋤」という道具である。特に硬い地面、砂利混入土層、粘土層などで発掘を行う際に有効な道具で、一般には金物店で市販されているものである。これを1年ほど使用すると2の平面図にみると刃部の右側部分がかたよって減ってくる。このような道具を20人程度が用いるのであるが、大体これに似た減り方である。この「手鋤」は柄が36cmで、腰を落とした状態で文字通り手に持つて打ち下ろし土を起こして行く道具であり、右利きの人が多いことからこのようないくつかなるものと考えられる。今後、使用期間・土層面の状態・利き腕などを考慮しながら観察し統計処理を行えば効果的な参考資料になるものと思われる。この手鋤の歯部分は長さ14.3cm（第198図参考資料2）、柄を取り付けるソケット部を除いた長さは10.5cmで、側面ないし断面をみるとやや反っており、打製石斧I類-4タイプに類似している。規模的には細身ながら大きい部類にはいる。さて、このような刃部の磨減に類似した石器も確認できる。45・46・55にあげておいたがこれらは刃部の右部分が磨減している例である。ところで、手鋤のような使用方法をした時の左右を決めるのに、どちらの面が下（土に接する面）か判断する必要がある。これについては石材の自然面が残る面、反りの膨らんだ面などを下面とした。中には判断出来ないものも多く、左右逆にみてしまったものもある。また均一な刃部をもつものについては、別の使用方法であったことも考えられる。ちなみに第178～181図に示したI類で観察すると均一磨減36点、右偏刃19点、左偏刃11点、不明5点となる。半数が均一であるが、左に偏ったものが以外と多い。なお、制作時からすでに斜の刃部が形成されているIII類でも先に見たように81のような右

偏刃と87のような左偏刃とがみられることは何を意味するのであろうか。先の磨滅のしかたを考えると当初からそれぞれの利き腕用の道具が作られていたのであろうか。

小型の石器として小林氏は遠山郷の「テンガ」という道具を曾利遺跡の報告書の中で紹介されている。今回紹介した手鋤もやや大きいかに類似するものである。天神遺跡出土の打製石斧は全体に小型であり、前期の特徴ともいえるものでこれらの中には現在使用される手鋤同様の使用方法にあったものも含まれる可能性があり、今後も注意したい。

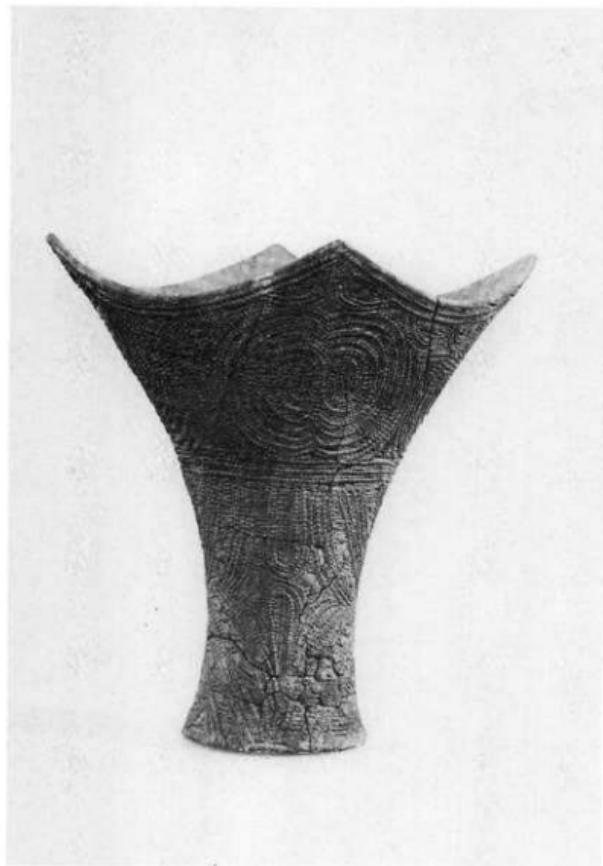
なお、石質については粘板岩が最も多くホルンフェルスがそれに次ぎ、砂岩・頁岩は少ない。特にⅠ類では粘板岩が50%を越えており、この種の石器を形造る上での効果的な石材であったことが分かる。ホルンフェルスについても30%以上あり、Ⅱ類からⅣ類ではこの石材が少ないことと対称的であり、Ⅰ類に適した石材であると思われる。

(新津 健)

## 註

- 1 今村啓爾「諸碳式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器 I 雄山閣 1982
- 2 谷口康浩「諸碳土器様式」『縄文土器大観』1 小学館 1989
- 3 長沢宏昌「花鳥山遺跡の諸問題」『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集 1989
- 4 註2と同じ
- 5 山梨大学考古学研究会『御所遺跡発掘調査報告』山梨大学考古学研究会調査報告第1集 1978、同第2集 1981
- 6 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第61集『獅子之前遺跡発掘調査報告書』 1991
- 7 古谷健一郎『一の沢・金山遺跡』 境川村埋蔵文化財調査報告書第4輯 1989
- 8 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集『駿迎堂』I 1986
- 9 註3と同じ
- 10 平成5年に大泉村教育委員会により調査が行われた。大泉村教育委員会伊藤公明氏ご教示。
- 11 平成元年と4年の2回にわたり調査が行われた。大泉村教育委員会伊藤公明氏ご教示。
- 12 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集『寺所遺跡』 1987
- 13 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第58集『城下・原田遺跡』 1990
- 14 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第71集『甲ヶ原遺跡概報』I 1992、同83集『甲ヶ原遺跡概報』II 1993
- 15 他に第6地点・第7地点の調査が大泉村教育委員会により平成5年度に行われ諸碳b式の住居1軒が発見されている。伊藤公明氏ご教示。
- 16 寺所遺跡では1万件以上が調査されたが諸碳期の住居はb式1軒、c式1軒だけであった。特にb式期の住居では床面から深鉢形土器と浅鉢形土器とが1点ずつ出土しただけであった。覆土から1片の土器も出土しないことは付近に住居がなかったことを意味しよう。
- 17 遺跡数についてはやや古いデータではあるが、前期前半期27カ所から前期後半期65カ所というように遺跡数が増加している。この後半期は黒浜期と諸碳期とを含むが、多くが諸碳期である。日本考古学会昭和59年度大会資料『シンポジウム縄文時代集落の変遷』 1984
- 18 江坂輝弥「歯面把手と人面付土器」『古代史発掘』3 講談社 1974
- 19 註6と同じ
- 20 小林公明「石製農工具」『曾利』富士見町教育委員会 1978

図 版



S 14901

〔天神遺跡 A・B 地区〕

図版 1



1 遺跡遠景（C地区よりA・B地区を望む）



2 遺跡近景（A地区）

図版 2



1 A 地区の住居址群



2 第 2 号住居址

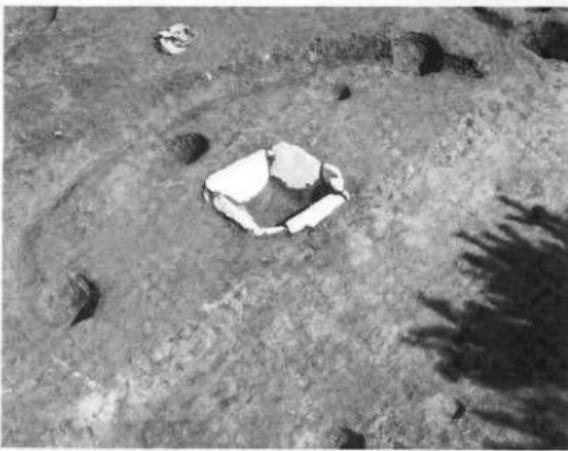


3 第 2 号の土器

図版 3



1 第3号住居址



2 第4号住居址



3 第3号と第6号住居址

## 図版4



1 第7号住居址と埋設土器



2 第9号住居址



図版 5



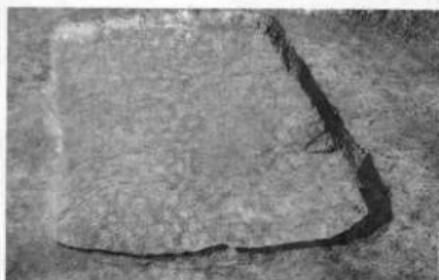
1 第11号住居址



2 第8号住居址



3 第13号住居址



4 第10号住居址

## 図版 6



1 第12号住居址



2 第14号住居址



3 B 地区の土壠群

図版7 土器



0201



0203



0202



0703



0902



0901



0904

図版8 土器・石器



0602



0604



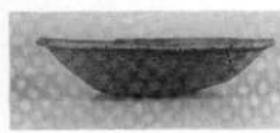
0808



1003



1001



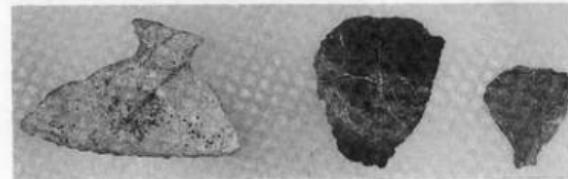
1301



1401



石鎚・石匙



石匙・他



磨製石斧

〔天神遺跡C地区〕

図版9



1 遺跡近景（南より北を望む）



2 遺跡近景（北より南を望む）

図版10



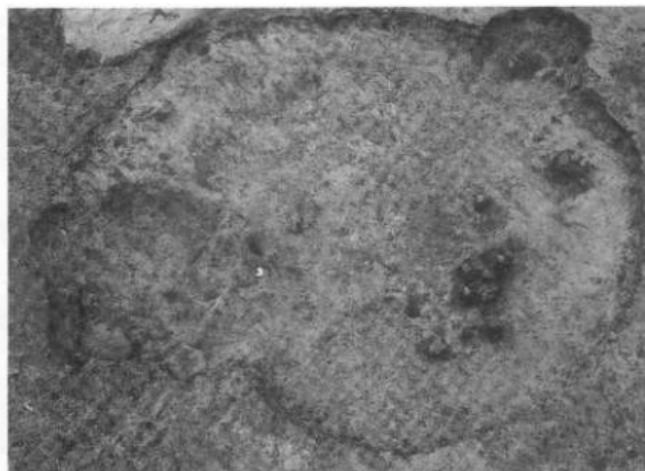
1 遺跡全景



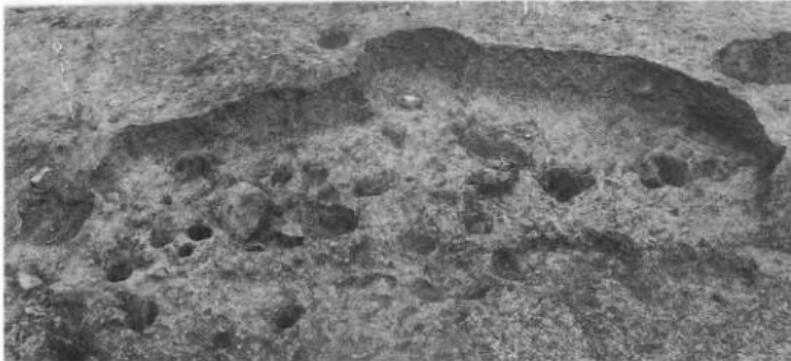
2 遺跡全景

図版11

1 第1号住居址と块状耳飾



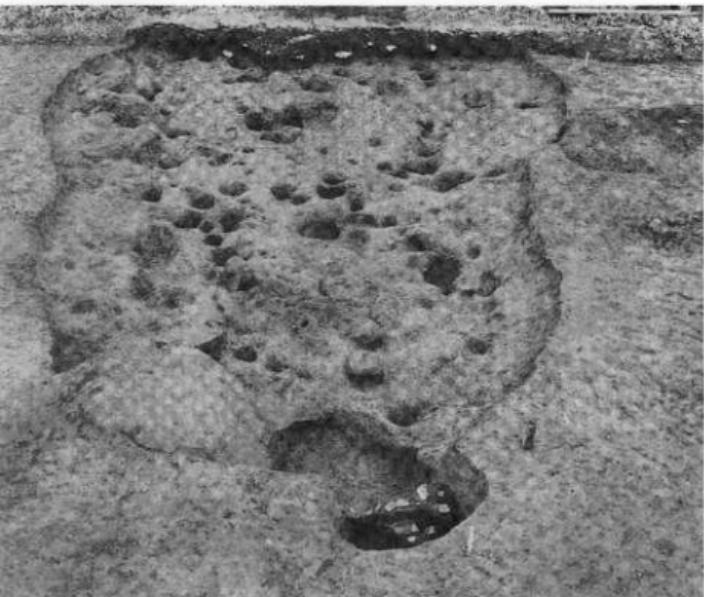
2 第3号住居址



3 第4A号・4B号住居址、  
第5号住居址  
遺景



图版12



1 第4A·4B号  
住居址



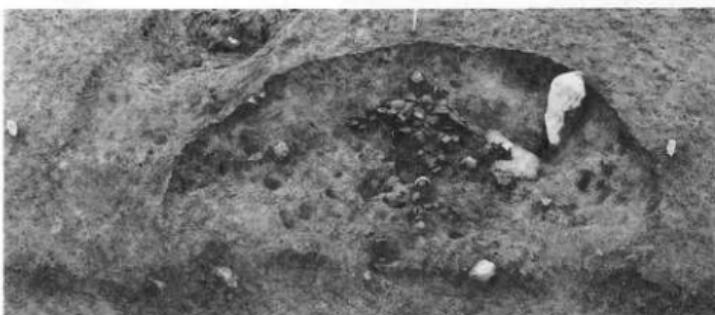
2 第5号住居址

図版13

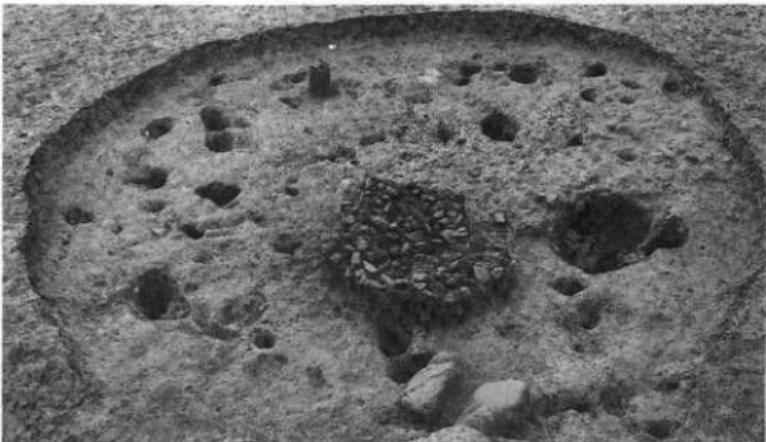
1 第9号住居址



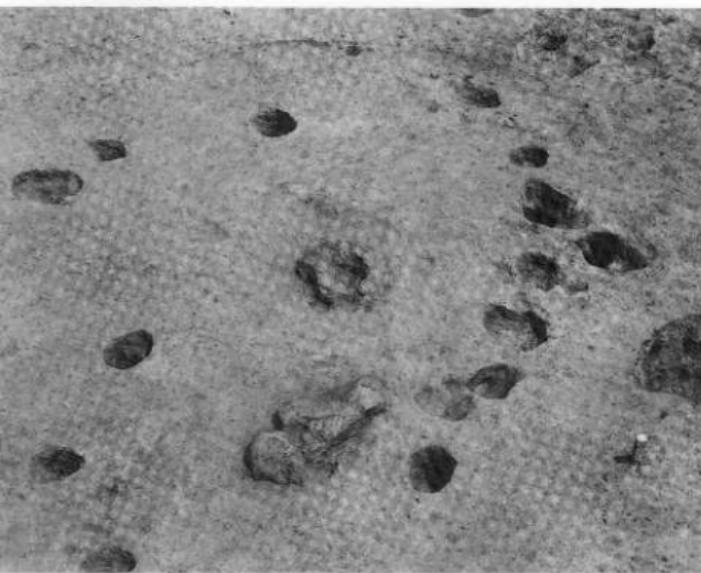
2 第12号住居址



3 第11号住居址



図版14

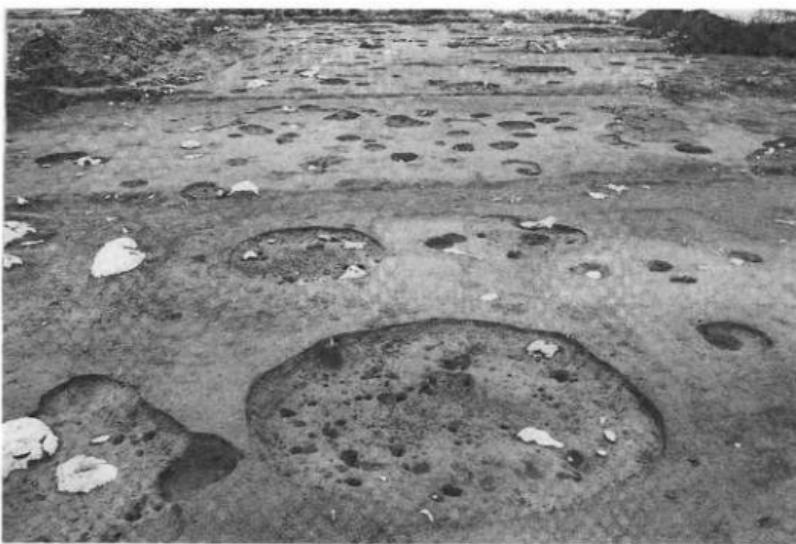


1 第13号住居址



2 第14~16号住居址

図版15



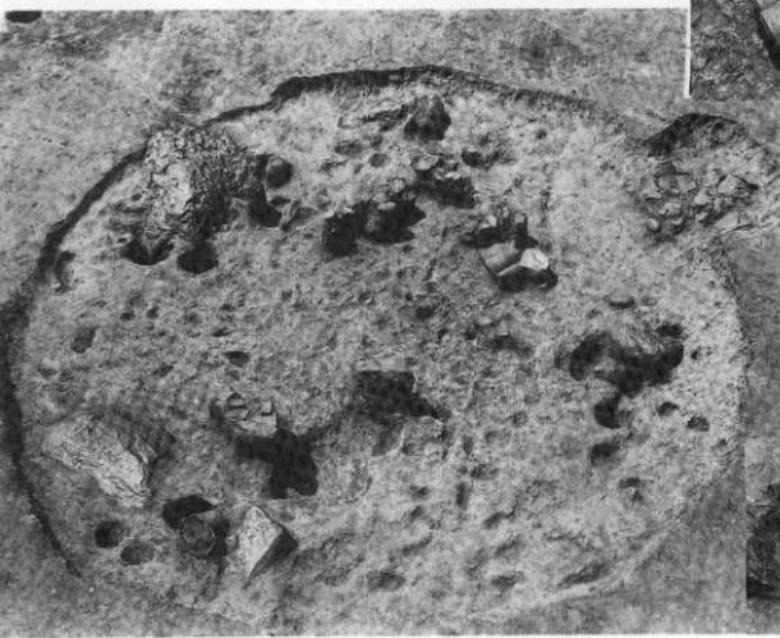
1 住居群（第18～20号・25号）



2 住居群（第18～21号・25号・26号）

図版16

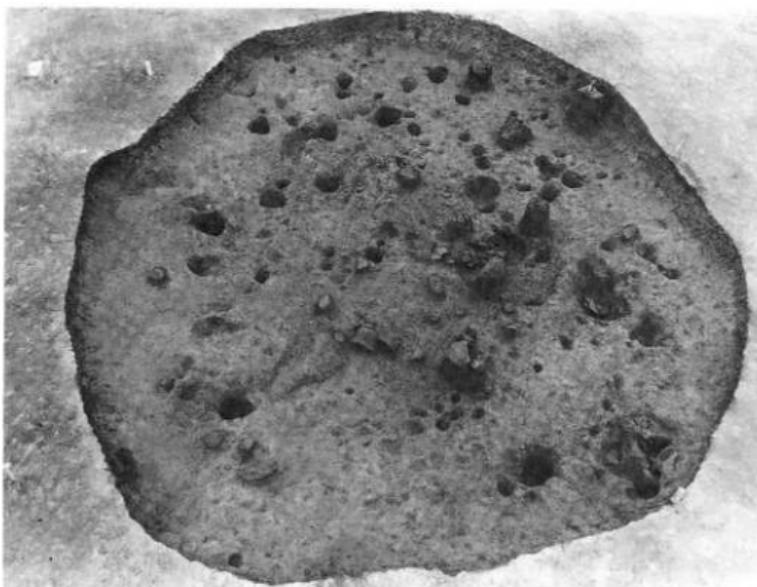
1 第17号住居址



2 第18号住居址と出土土器



図版17



1 第19号住居址

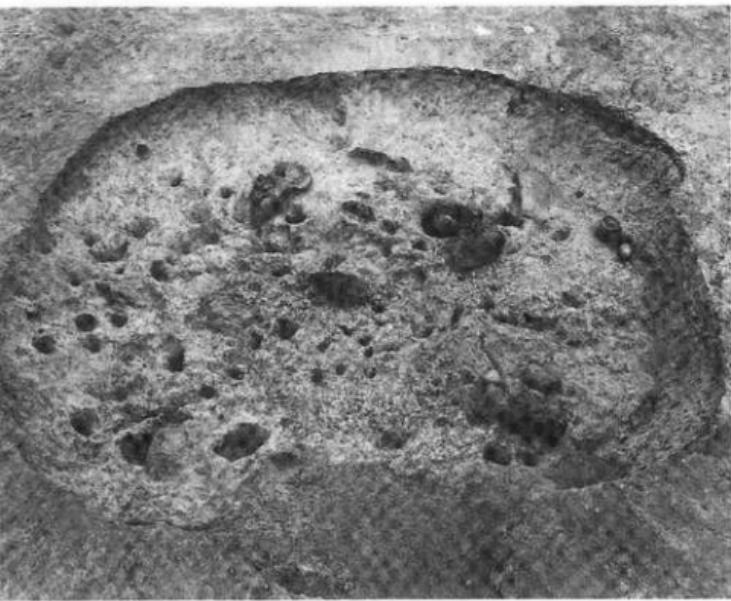


2 第20号住居址

図版18

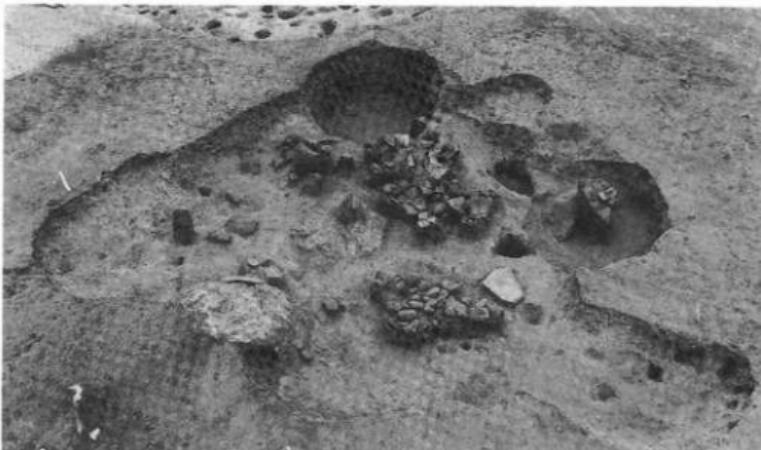


1 第21号住居址

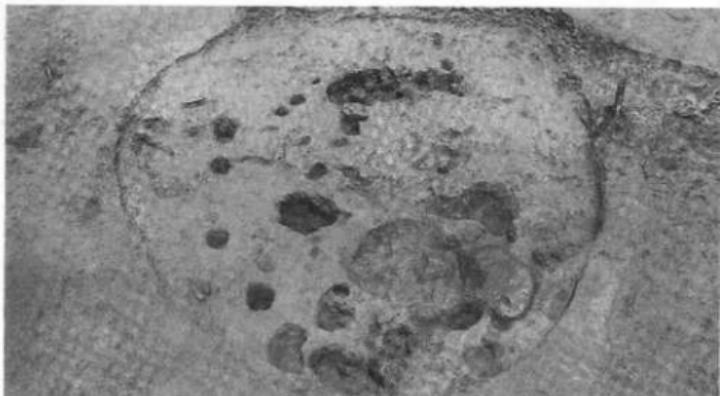


2 第23号住居址

図版19

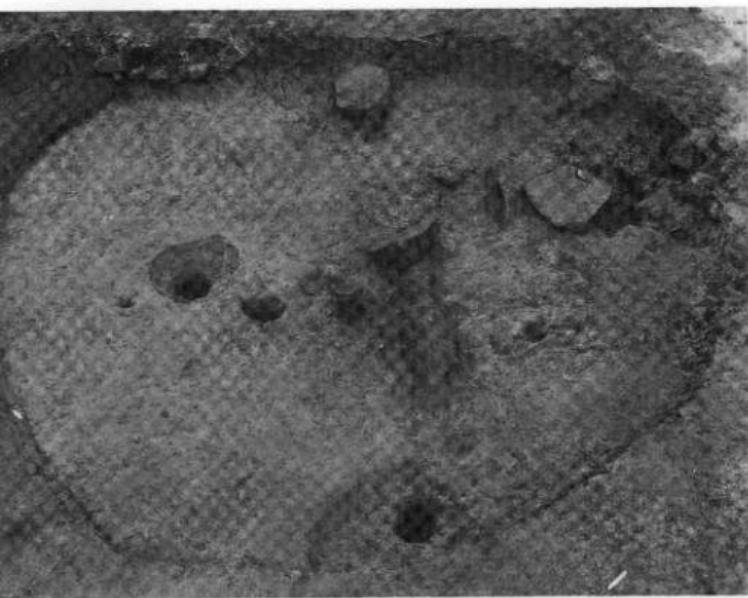


1 第25号住居址と土器出土状況

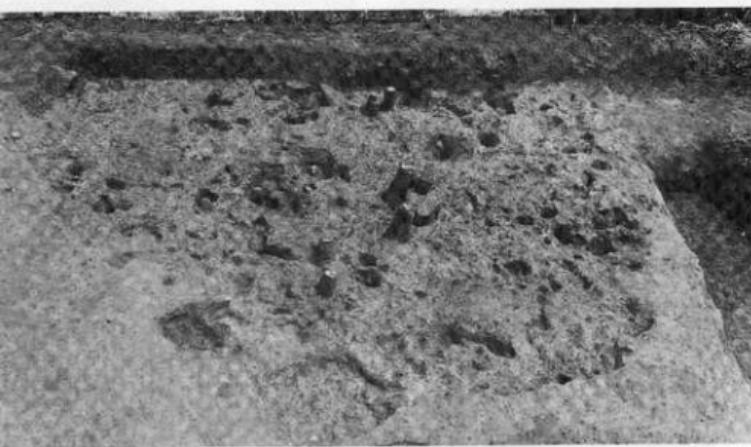


2 第26号住居址

図版20



1 第27号住居址



2 第31A・31B号住居址

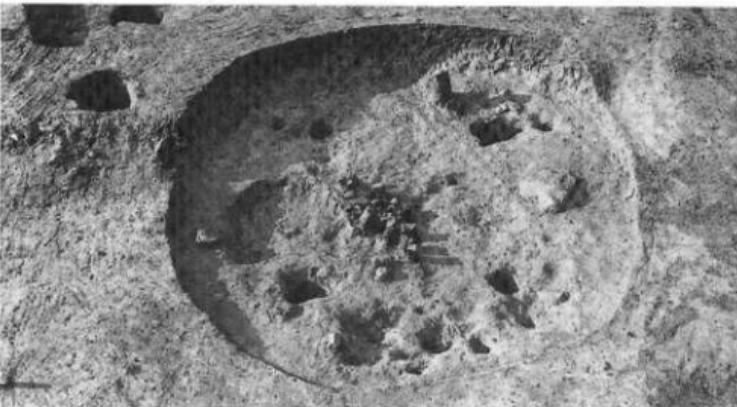
図版21



1 第32号住居址



2 第33号住居址



3 第34号住居址

図版22



第35号炉

1 第35号・36A・36B号住居址

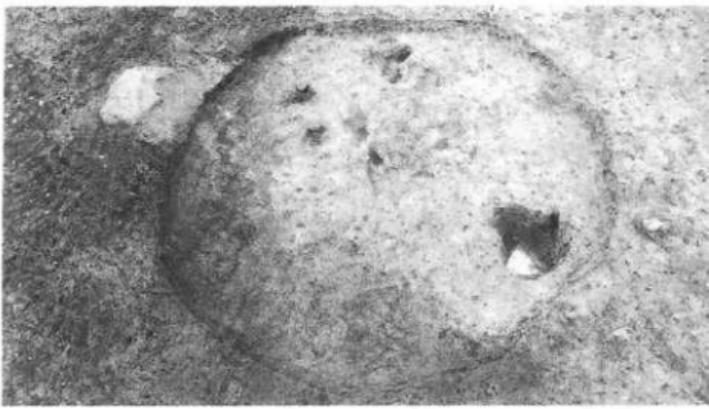


2 第37号住居址

図版23



1 第38号住居址



2 第39号住居址

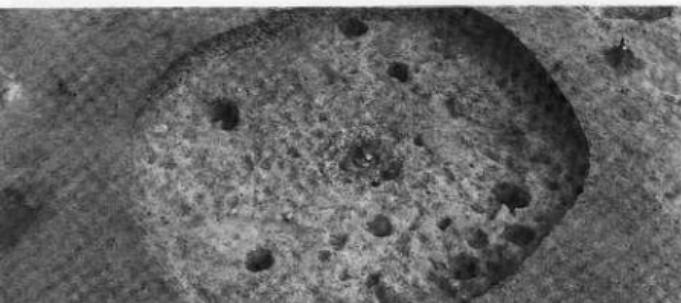


3 第40号住居址

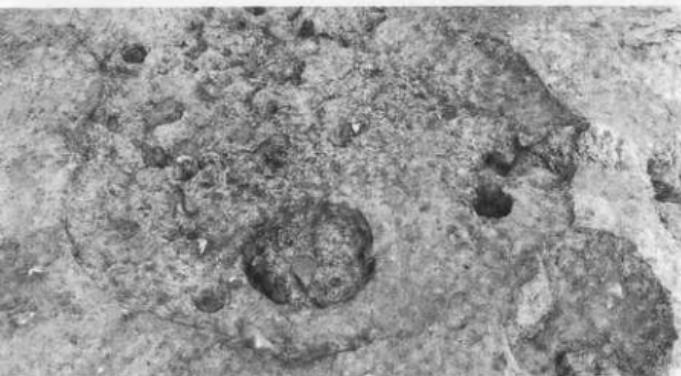
図版24



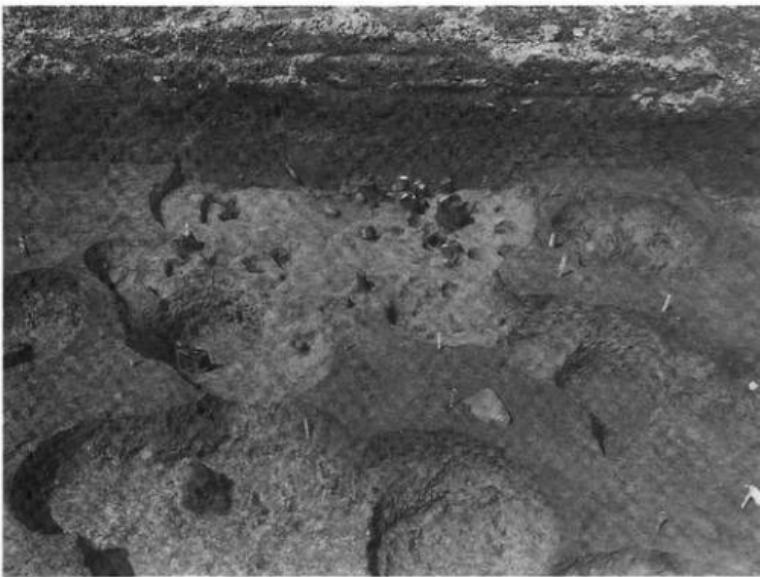
1 第41号住居址



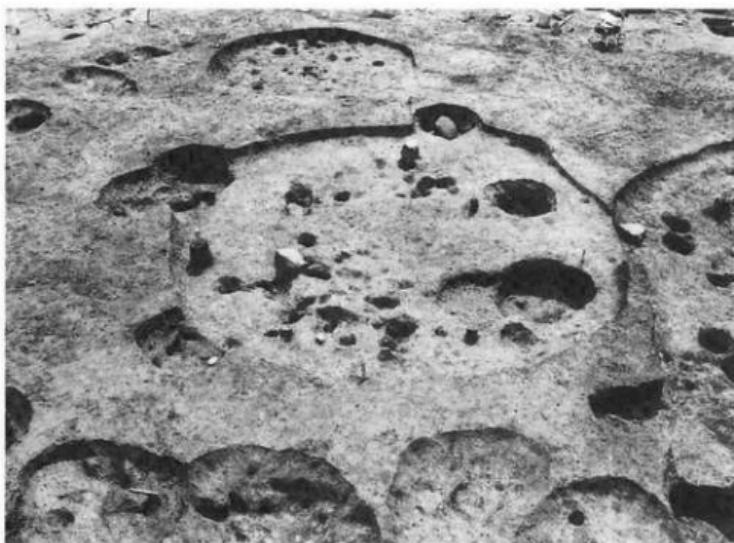
第42号住居址



3 第43号住居址



1 第45号住居址と周辺の土壤



2 第49号住居址

図版26



1 第53号住居址及び周辺の住居群

第52号出土土器

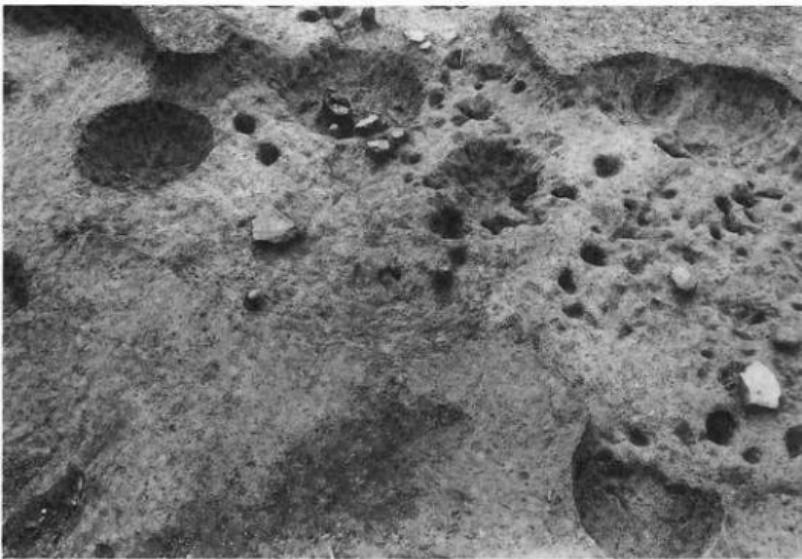


2 第47号・48号・51号・52号・57号住居址及びその周辺

図版27



1 第48号住居址



2 第51号住居址

图版28

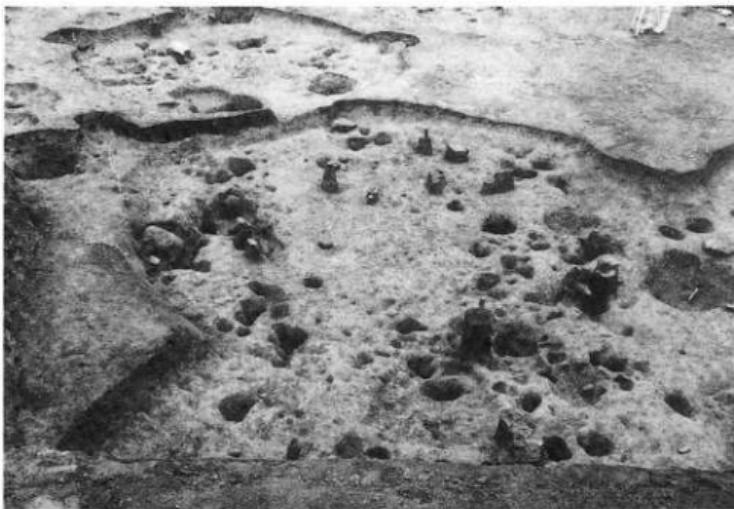
1 第50号～58号住居址



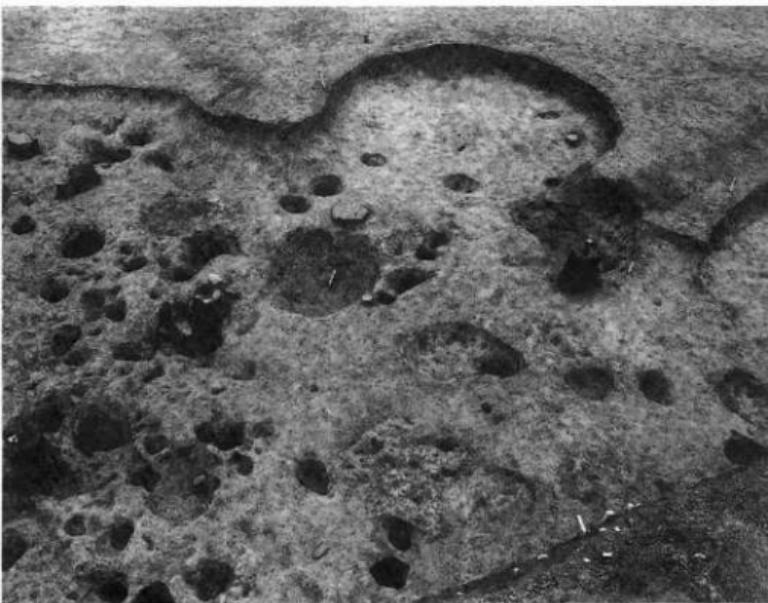
2 第50号～58号住居址発掘風景



図版29

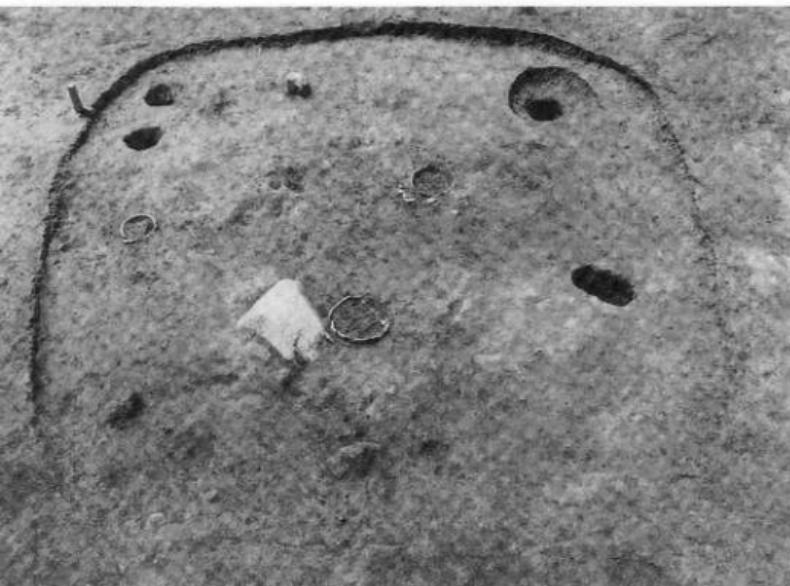


1 第50号・55号住居址



2 第54号住居址・56号住居址

図版30



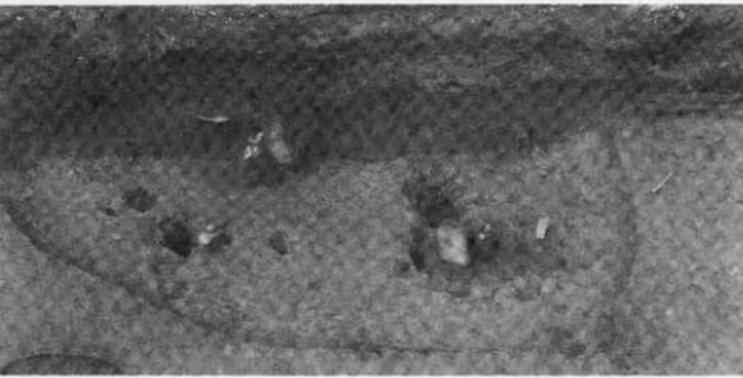
1 第2号住居址



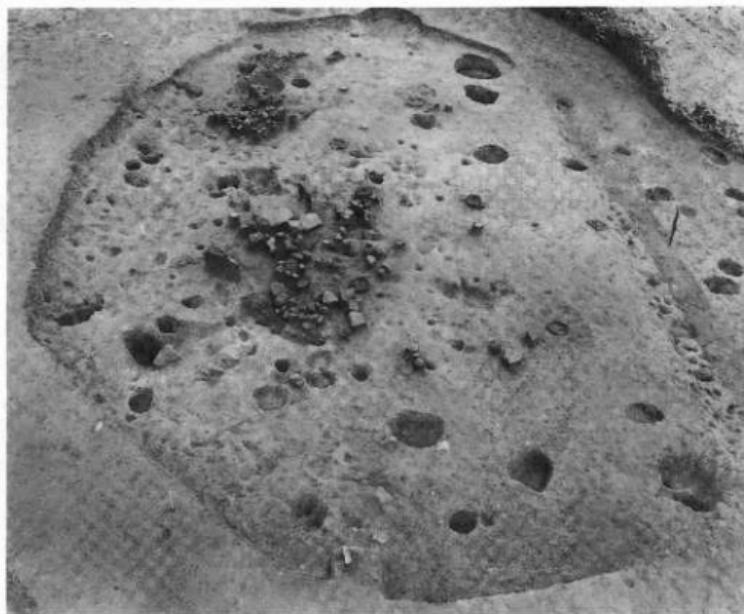
埋設土器



炉土器



2 第44号住居址



第22号・24号・28号住居址



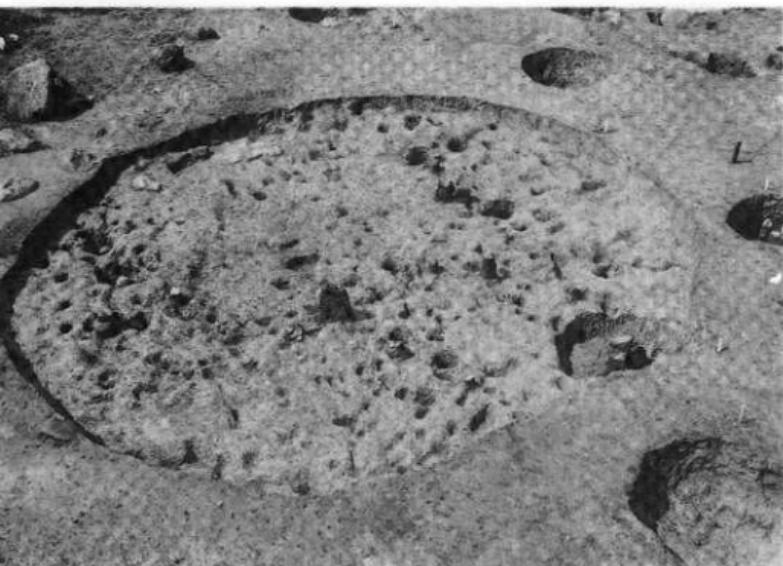
第22号炉



第24号炉



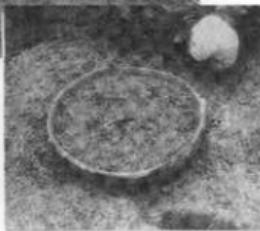
図版32



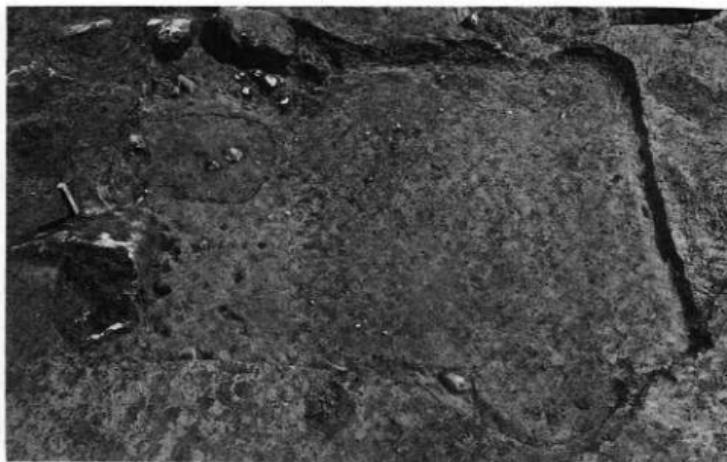
1 第6号住居址



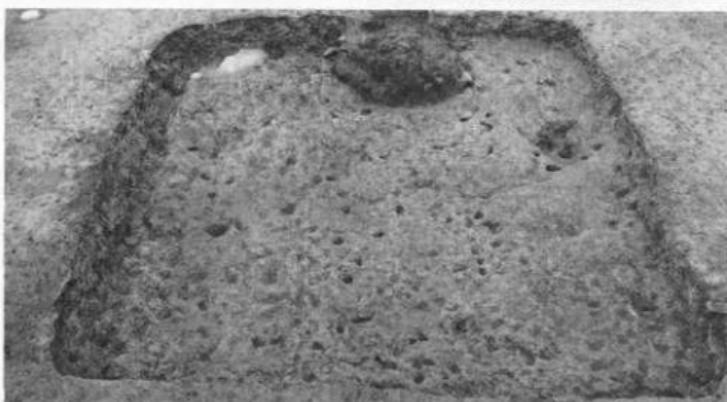
2 第29号住居址と炉土器



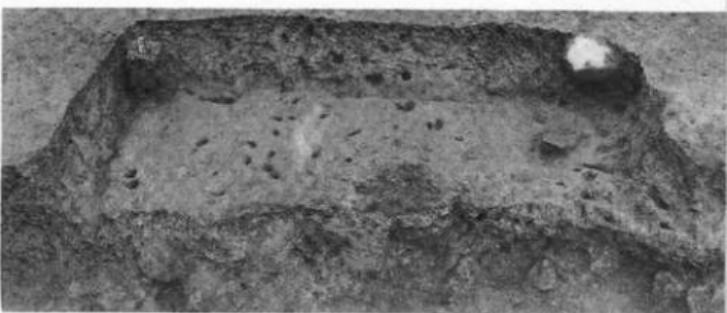
図版33



1 第7号住居址



2 第8号住居址



3 第30号住居址

図版34



1 中央土壤群



2 中央土壤群



1 中央土壤群（南より望む）



2 中央土壤群発掘風景

図版36



1 第421号土壤



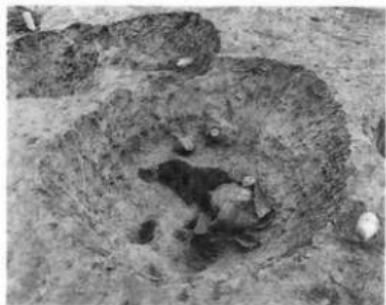
2 第421号土壤の硬玉製大珠と  
土器



3 第338号土壤



4 第400号土壤



1 第41号土壤



2 第49号土壤



3 第136号土壤



4 第136号の土器



5 第149号土壤と土器



6 第160号土壤と土器



7 第247号土壤



8 第351号土壤

図版38 諸磯 b 式土器（浮線文系・縄文系）



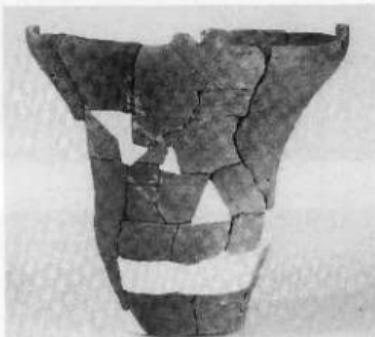
1803



2501



1804



4004

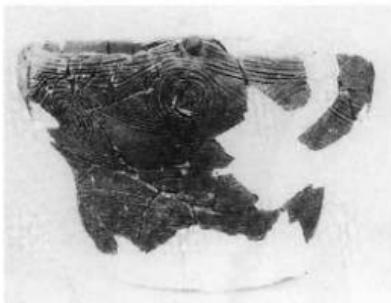


S04101



1903

図版39 諸磯 b 式土器（沈線文系）



S37901



2502



S33801



S40001



0307

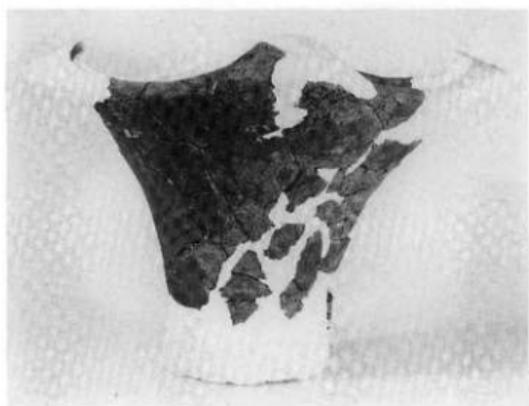
図版40 諸磯 b 式土器（沈線文系）



S40301



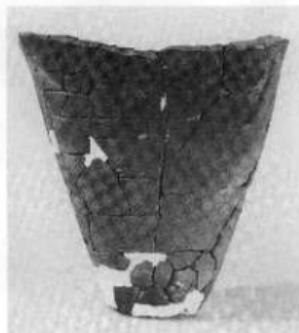
1101



1202

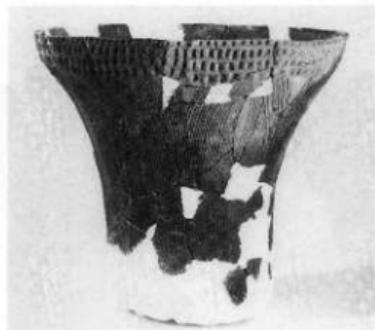


0401(A)



1904

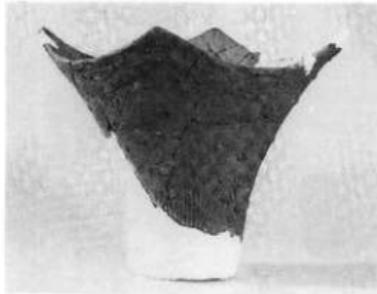
図版41 諸磯 c 式土器



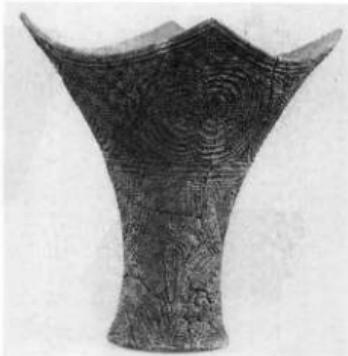
S201



S24701

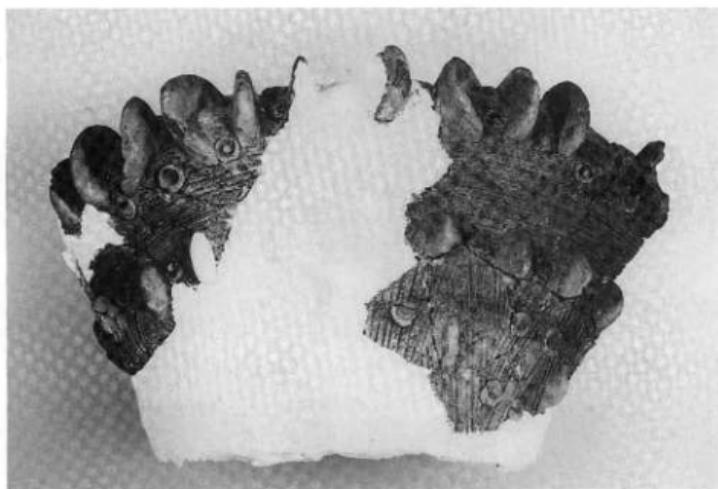


S42101

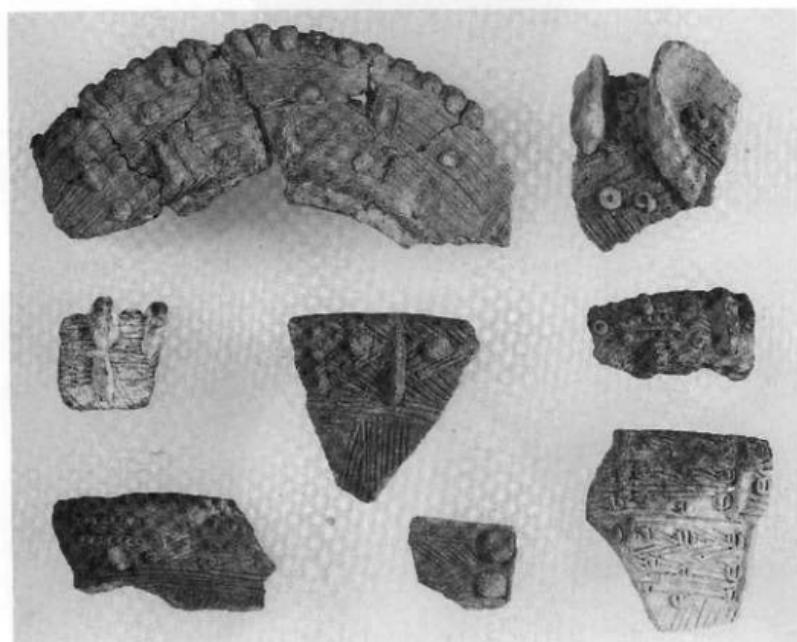


S14901

図版42 諸磯c式土器

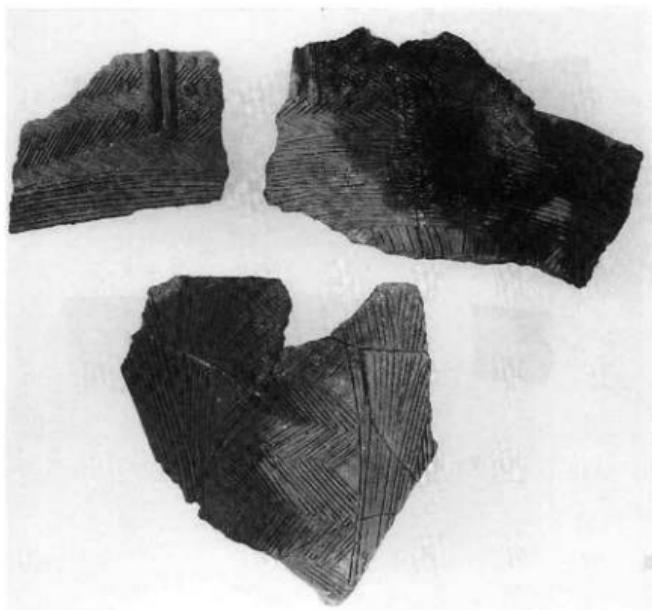


IV-1類 (S03901)

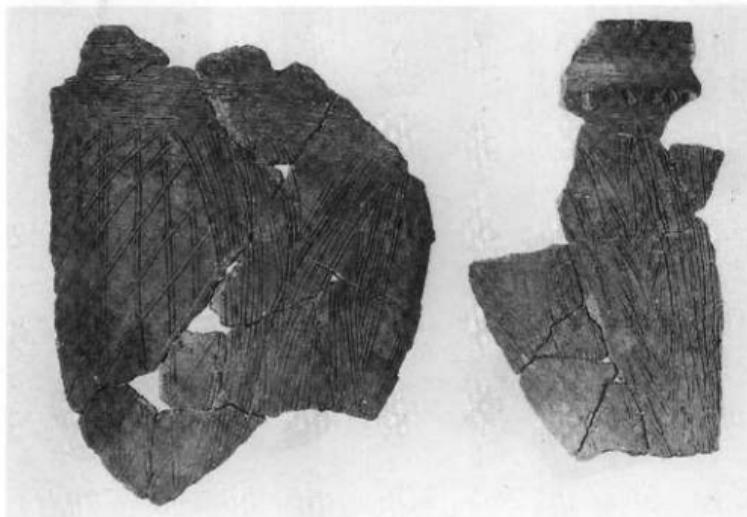


(IV-1~3類) 第37号・46号住居址・他

図版43 諸磯 c 式土器

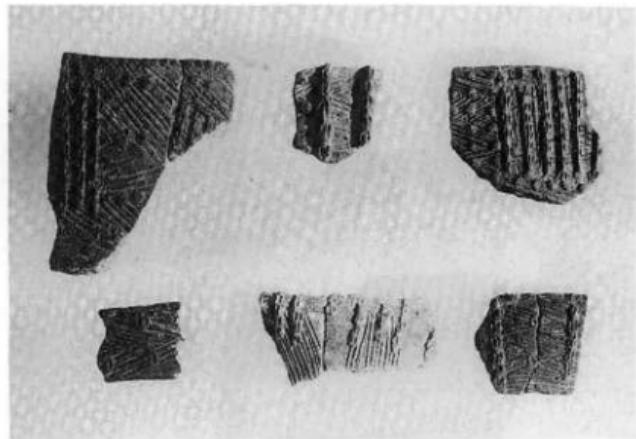


IV-2類（第42号・52号住居址）

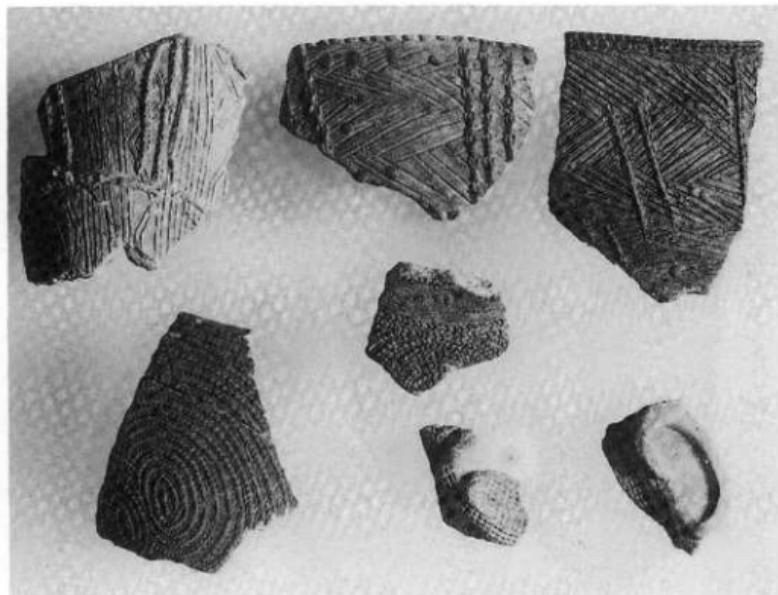


IV-2類（第42号・55号住居址）

図版44 諸磯c式土器・十三菩提式土器



V-4類(第384号土壤・R-12・他)



V-5~6・VI類(第217号・299号土壤・他)

図版45 浅鉢・有孔土器



S04901



2302



2514



2303



2512



S04501

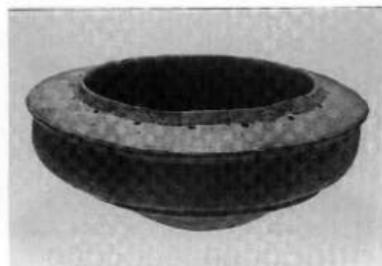


2511



S13601

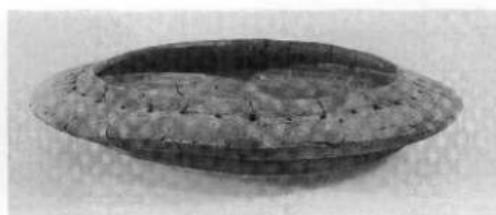
図版46 有孔土器・五領ヶ台式土器



0405



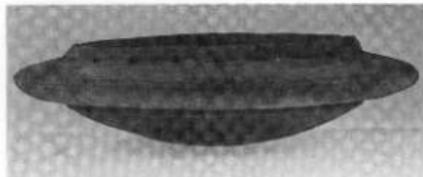
S41801



2513



S16001



S35501



3502

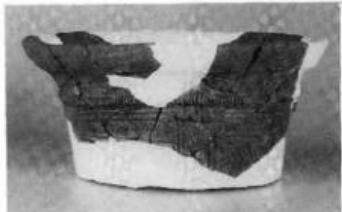


2901

図版47 五領ヶ台式土器



2202



2403



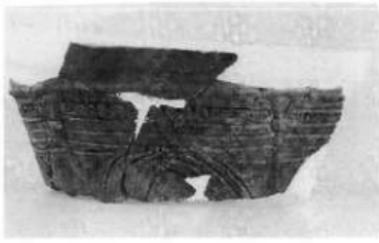
2201



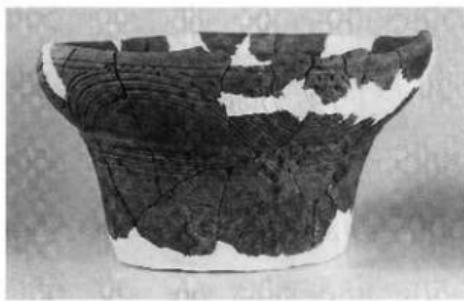
2402



0201



0202



0203



0601

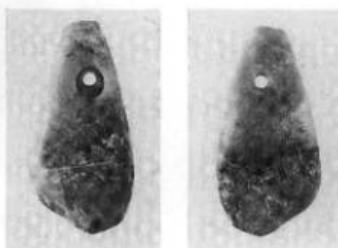
図版48 土偶、硬玉製大珠、イノシシ装飾・他



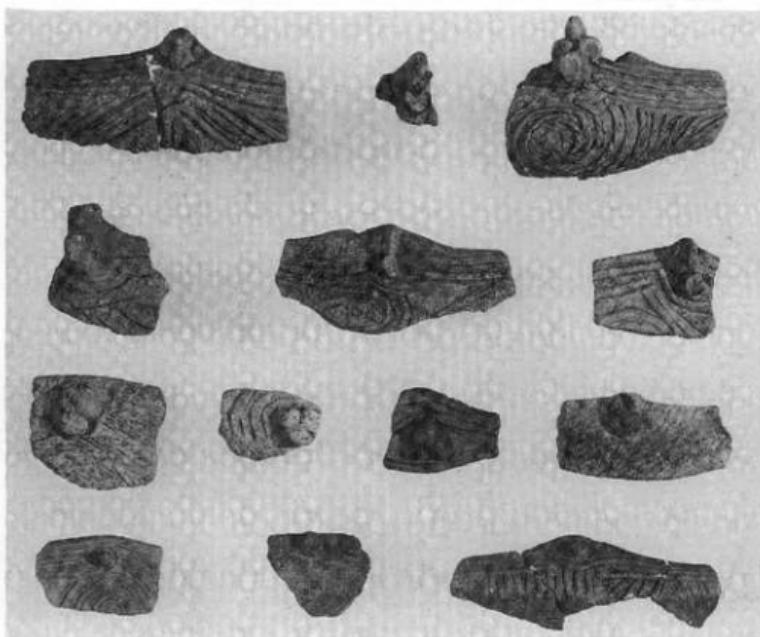
1 中期土偶



2 第4B号住居出土土偶（表裏）

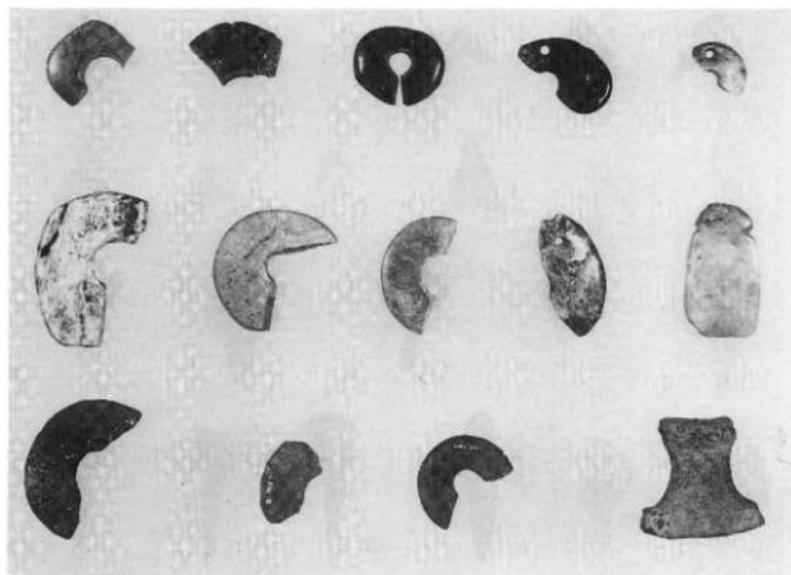
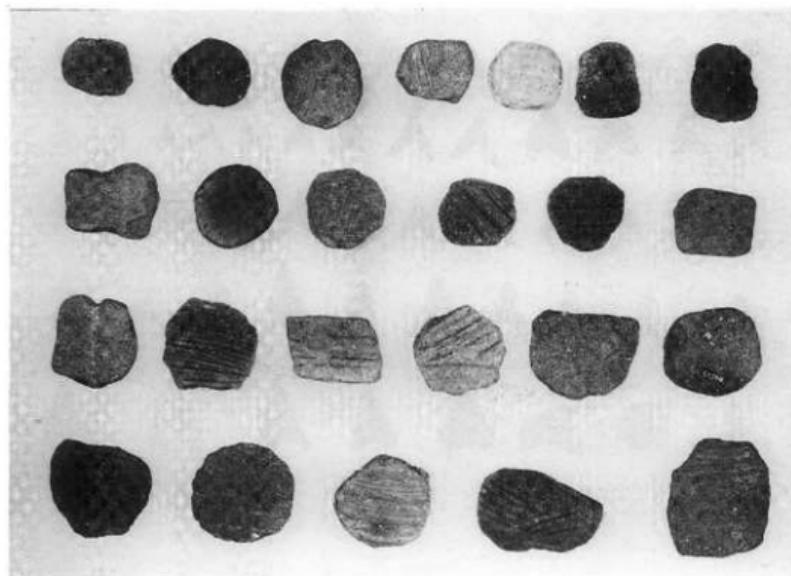


3 第421号土墳出土硬玉製大珠（表裏）

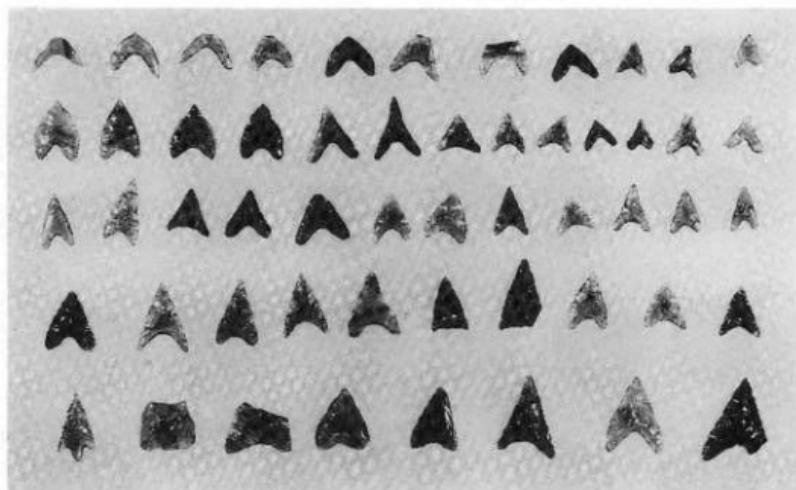


4 イノシシ装飾・他

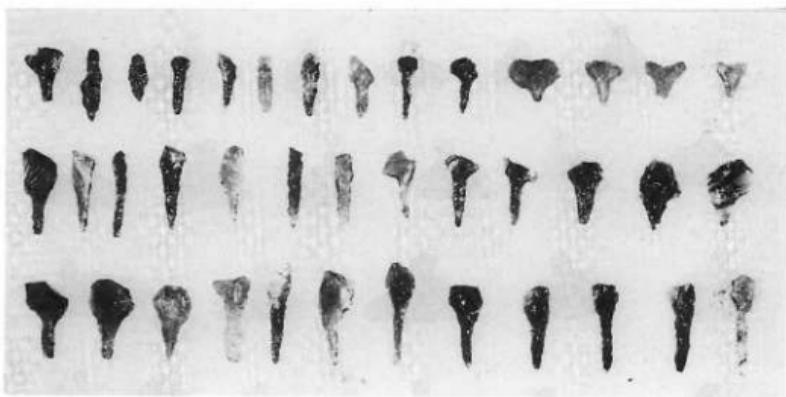
図版49 土製円盤、装飾品



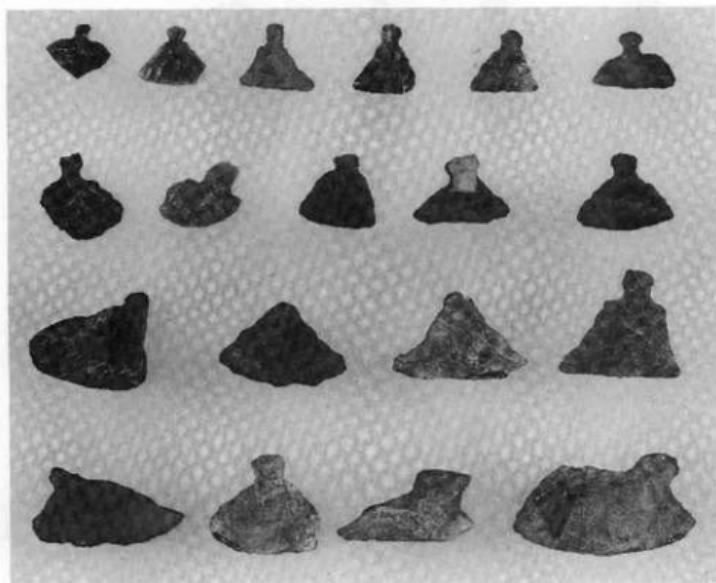
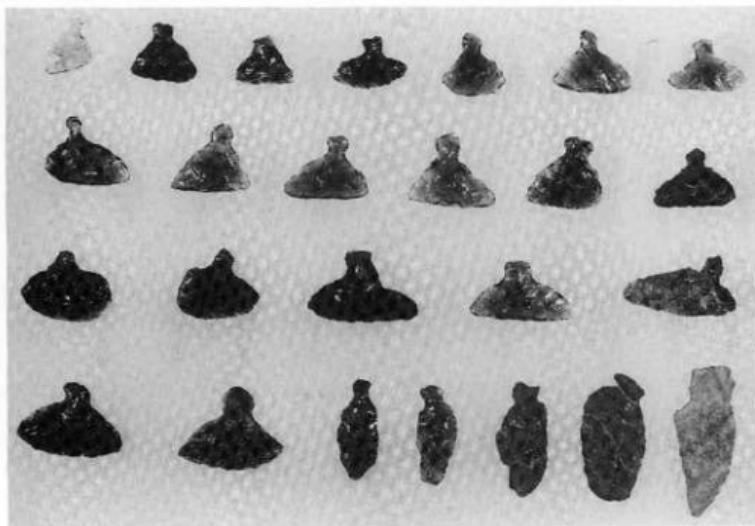
図版50 石鏃、石錐



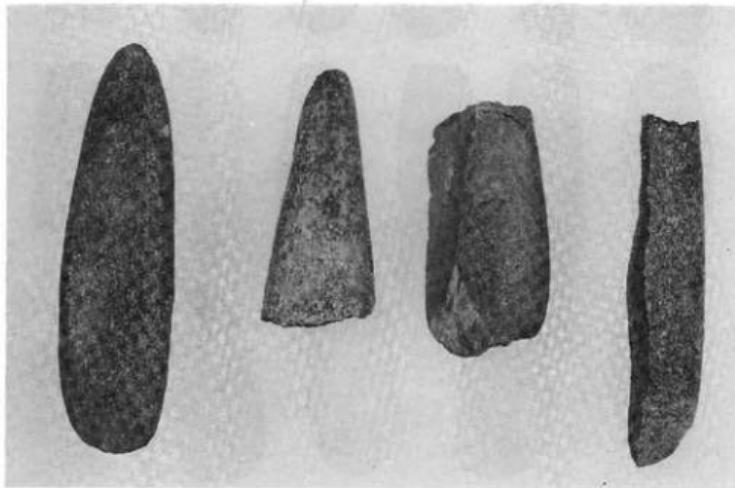
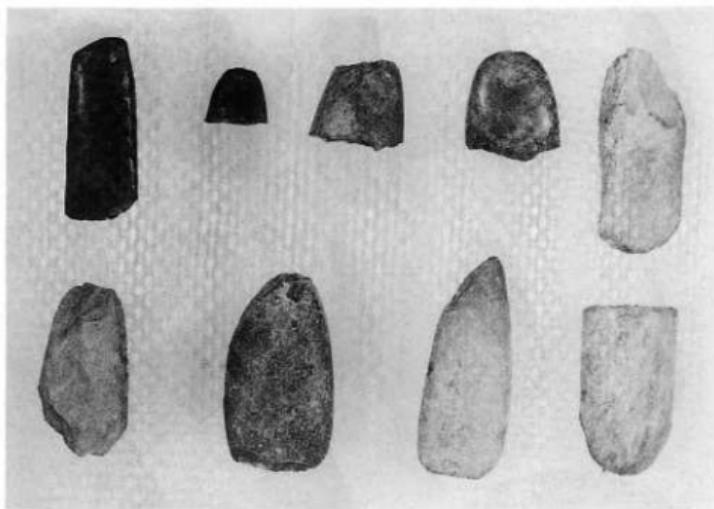
図版51 石錐、石匙



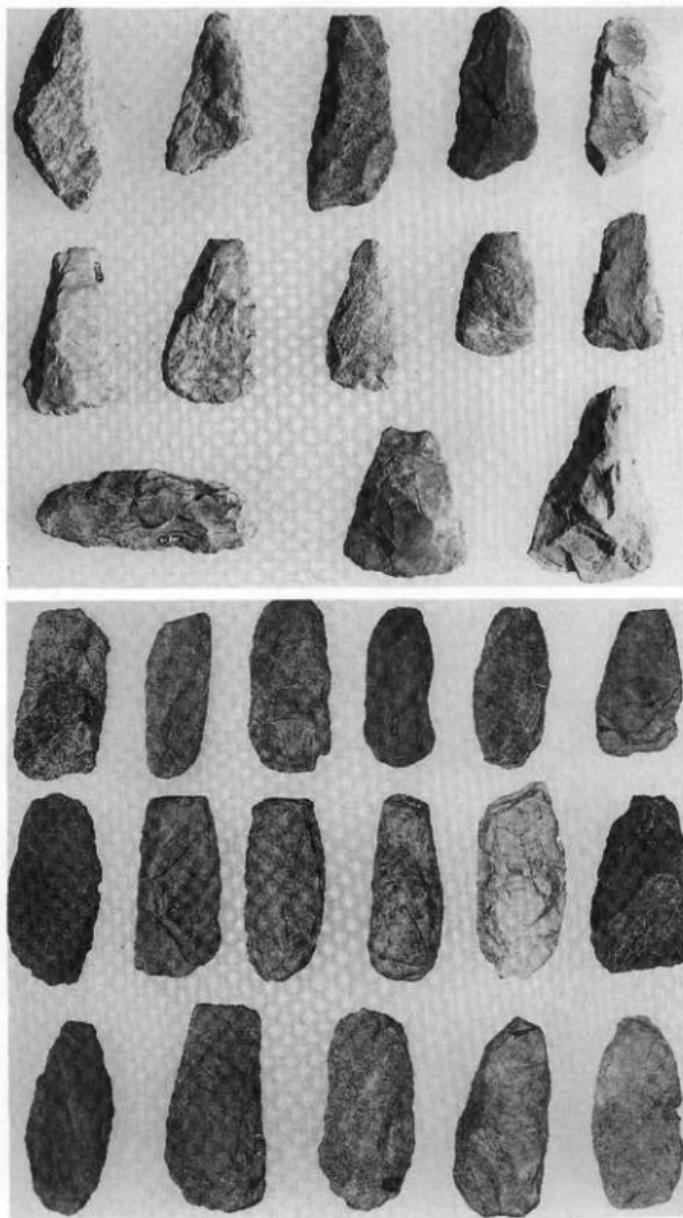
図版52 石匙



図版53 磨製石斧



図版54 打製石斧



## 報告書概要

フリガナ	テンジンイセキ		
書名	天神遺跡		
副題	県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第97集		
著者名	新津 健・米田明訓		
発行者	山梨県教育委員会		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根323 〒400-15 0552-66-3881		
印刷所	(株)少国民社		
印刷日・発行日	平成6年3月25日・平成6年3月30日		
テンジンイセキ	所在地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出字天神	
天神遺跡	25000分の1地図名・位置・標高	若神子	北緯35°51'15"、 東経138°23'40" 標高800m
概要	主な時代	縄文前期・中期・平安時代	
	主な遺構	縄文前期住居49・土塹群・中期住居17・平安住居8	
	主な遺物	縄文前期土器類（深鉢形土器、有孔土器、浅鉢形土器）・石器類	
	特殊遺構	縄文前期の中央墓壇型壇状集落	
	特殊遺物	縄文前期土偶・彩文土器・硬玉製大珠	
	調査期間	A区1981年10月19日～11月10日・C区1982年5月18日～10月28日	

### 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第97集

## 天神遺跡

—県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書—

印刷日 1994年3月25日

発行日 1994年3月30日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 少国民社

